

多賀城市文化財調査報告書第60集

市川橋遺跡

—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ—



平成13年3月

多賀城市教育委員会
多賀城市城南土地区画整理組合

市川橋遺跡

— 城南土地地区画整理事業に係る発掘調査報告書 I —



平成13年3月

多賀城市教育委員会
多賀城市城南土地地区画整理事業組合



绿釉陶器阴刻花文概 (1 : 1) 左 : 14(W) 区、中・右 : 13(S) 区出土

序 文

市川橋遺跡城南地区は特別史跡多賀城跡の南正面に位置しており、「古代都市多賀城」にとって最も重要な部分であります。当教育委員会では区画整理事業に先立ち、平成10年度より4ヵ年計画で発掘調査を進めてまいりました。この調査は全対象面積が約80,000m²と当市始まって以来の規模であることから、調査員を増員するなど体制の強化を図り、目下総力を結集して調査を進めているところであります。これまで3年間、毎年重要な発見が相次ぐなか、「古代都市多賀城」の様々な側面が次第に明らかになっていく様子を目の当たりにし、本遺跡の持つ重要性を改めて認識した次第です。この古代都市の跡は調査終了後すべて埋め戻され、新しい街として生まれ変わることになりますが、先人の残したかけがえのない遺産に学びつつ、美しい自然や誇るべき史跡と融和した素晴らしい街づくりを行われることを心より願うものであります。

本書は、城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書の第1冊目として北東ブロックの成果をまとめたものです。小規模な握立柱建物や井戸で構成される区画の変遷を明らかにし、竈形土器など東北地方では出土例の少ない資料も多数掲載しております。古代史・地方史研究の資料として広くご活用頂ければ幸いと存じます。

最後になりましたが、城南土地区画整理事業には発掘調査の趣旨をご理解頂き、度々ご高配を賜りました。また、発掘調査から報告書の刊行に至るまで文化庁ならびに宮城県教育委員会より多大なるご支援・ご協力を頂きました。心より厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井 茂男

例　　言

- 1 本書は、平成10年度に城南土地区画整理事業に伴う事前調査として実施した市川橋遺跡第25次調査の成果をまとめたものである。同事業に係る調査報告書は各地区ごとに刊行する予定であり、本書はその第一冊目である。
- 2 第25次調査は、同事業における4区画のうちB区全体とA区の一部を対象としているが、本書にはB区の調査成果のみ収録した。
- 3 本書には、平成10年度に実施した第24次調査の内、B区に隣接する調査区の発見遺構・遺物で未報告のものについても併せて収録した。
- 4 第5・7・9・24次調査で出土した文字資料の内、墨書き土器と刻書き土器は「附章2 市川橋遺跡高平地区出土の墨書き土器」にすべて収録した。
- 5 本書の第3図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/50,000地形図「吉岡」「松島」「仙台」「塩竈」を複製して作成したものである（承認番号 平12東復第723号）。
- 6 本書の作成には千葉孝弥、石川俊英、鈴木孝行、武田健市、菊池 豊、車田 敦、堀口和代、相澤正信、生田和宏、平川 南（国立歴史民俗博物館）があたり、次のとおり分担した。

I 千葉

II 武田

III 千葉

IV 武田

V 1・2・3 千葉、4 石川、5・9 菊池、6・8 鈴木、7 堀口・千葉

VI 1・2(1)～(4)(9)～(11) 千葉、(5) 車田、(6) 相澤、(7)(8) 鈴木、3 千葉

VII 千葉

附章1 武田・千葉

附章2 生田

附章3 平川 南

編集は千葉が行った。

なお、資料整理および図版作成に際し、臨時職員柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、浦風志恵子、伊藤美恵子、高橋千賀子、鹿野智子、渡辺奈緒、村上和恵、小野寺雪子、中村千恵子、坂本英美、内海由美子、遠藤友美の協力を得た。

- 7 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関からご指導・ご協力を賜った。

進藤秋輝 佐藤則之 佐久間光平 岩見和泰（宮城県教育庁文化財保護課）、桑原滋郎 高野芳宏
丹羽 茂、手塚 均（東北歴史博物館）、白鳥良一 阿部 恵 後藤秀一 柳澤和明 吾妻俊典 白崎恵介（宮城県多賀城跡調査研究所）、平川 南（国立歴史民俗博物館）、山中敏史 杉山 洋（奈良国立文化財研究所）、松本秀明（東北大学理学部）、松井敏也（東北芸術工科大学）、栗山雄輝 菅沼圭介 大野 悟（平塚市教育委員会）、積山 洋（大阪市文化財協会）、吉川義彦（関西文化財調査会）、平尾政幸 百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、尾野善裕（京都国立博物館） 古川雅清

(創字舎)

文化庁 宮城県教育庁文化財保護課 宮城県多賀城跡調査研究所 東北歴史博物館 大木建設株式会社

8 今回の調査については、確認調査報告書である『多賀城市文化財調査報告書第55集 市川橋遺跡－第23・24次調査報告書－』(1999)、および『多賀城市文化財調査報告書第57集 市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に伴う発掘調査略報－』(1999)が刊行されているが、それらと本書とで見解が異なる場合は、本書の記載内容が優先するものである。

9 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

序 文

例 言

目 次

挿図目次

表 目 次

写真図版目次

調査要項

I 遺跡の位置と環境	1
1 遺跡の位置	1
2 地理的環境	1
3 市川橋遺跡の概要と周辺の歴史的環境	7
4 城外の方格地割りと調査区の位置	8
II 調査に至る経緯	12
III 調査方法	13
1 地区割りと調査区の設定	13
2 発掘基準線の設定	13
IV 調査経過	17
V 発見した遺構と遺物	20
1 凡 例	20
2 B区の層序	21
3 B13(N)区	23
4 B13(S)区	39
5 B14(W)区	58
6 B14(E)・B15区	122
7 B49区	126

8	B63区	143
9	B67区	146
VI	考 察	147
1	遺構の年代	147
2	出土遺物の分析	161
	(1) 陶器 (2) 球 (3) 龜形土器 (4) 製塙土器 (5) 土錐 (6) 土器片製円板 (7) 木製品 (8) 金属製品 (9) 坑堀・鉄滓 (10) 漆紙・漆付着土器・漆書土器 (11) 文字資料	
3	遺構の変遷	180
VII	ま と め	188
附章1	第24次調査発見の遺構と遺物(補遺)	189
附章2	市川橋遺跡高平地区出土の墨書き土器	219
附章3	多賀城市市川橋遺跡(第24・25次)出土木簡	

挿 図 目 次

第 1 図	仙台平野北部の地形と市川橋遺跡	2	第 26 図	B13(S) 区平面図(3)	45
第 2 図	市川橋遺跡の旧地形	3	第 27 図	S D1055断面図	47
第 3 図	遺跡の位置	5	第 28 図	S K1085断面図	48
第 4 図	多賀城外の方格地割り	9	第 29 図	S K1086断面図	48
第 5 図	全体の地区割り	13	第 30 図	S K1090断面図	49
第 6 図	調査区配置図(1)	14	第 31 図	S K1092断面図	49
第 7 図	調査区配置図(2)	15	第 32 図	B13(S) 区出土遺物(1)	50
第 8 図	層序模式図	22	第 33 図	B13(S) 区出土遺物(2)	51
第 9 図	B13(N) 区遺構配置図	24	第 34 図	B13(S) 区出土遺物(3)	52
第 10 図	B13(N) 区東壁土層断面図	25	第 35 図	B13(S) 区出土遺物(4)	53
第 11 図	B13(N) 区西壁土層断面図	26	第 36 図	B13(S) 区出土遺物(5)	54
第 12 図	B13(N) 区平面図(1)	28	第 37 図	B13(S) 区出土遺物(6)	55
第 13 図	B13(N) 区平面図(2)	29	第 38 図	B13(S) 区出土遺物(7)	56
第 14 図	B13(N) 区平面図(3)	30	第 39 図	B14(W) 区遺構配置図	59
第 15 図	S K969断面図	34	第 40 図	S B991・992・993・994・995平面図	61
第 16 図	S K983平面図・断面図	34	第 41 図	B14(W) 区掘立柱建物跡・その他柱穴出土遺物	
第 17 図	B13(N) 区出土遺物(1)	36			64
第 18 図	B13(N) 区出土遺物(2)	37	第 42 図	S E948平面図・断面図	65
第 19 図	B13(S) 区遺構配置図	40	第 43 図	S E948出土遺物(1)	66
第 20 図	S B1081・1082柱穴断面図	41	第 44 図	S E948出土遺物(2)	67
第 21 図	S D1084・1087断面図	41	第 45 図	S E948出土遺物(3)	68
第 22 図	B13(S) 区平面図(1)	42	第 46 図	S E948出土遺物(4)	69
第 23 図	B13(S) 区平面図(2)	43	第 47 図	S D943平面図	70
第 24 図	S D1089断面図	44	第 48 図	S D943出土遺物(1)	71
第 25 図	S D1093断面図	44	第 49 図	S D943出土遺物(2)	72

第 50 図	S E948、S D935・943断面図	73
第 51 図	S D935A 平面図	74
第 52 図	S D935A 出土遺物(1)	75
第 53 図	S D935A 出土遺物(2)	76
第 54 図	S D935A 出土遺物(3)	77
第 55 図	S D935A 出土遺物(4)	78
第 56 図	S D935A 出土遺物(5)	79
第 57 図	S D935A 出土遺物(6)	80
第 58 図	S D935A 出土遺物(7)	81
第 59 図	S D935A 出土遺物(8)	82
第 60 図	S D935A 出土遺物(9)	83
第 61 図	S D935B 平面図	83
第 62 図	S D935B 出土遺物	84
第 63 図	S D935C 平面図	85
第 64 図	S D935C 出土遺物(1)	86
第 65 図	S D935C 出土遺物(2)	87
第 66 図	S D935D 平面図	88
第 67 図	S D935D 出土遺物	89
第 68 図	S D945 平面図	90
第 69 図	S D945 断面図	91
第 70 図	S D945A 出土遺物(1)	92
第 71 図	S D945A 出土遺物(2)	93
第 72 図	S D945A 出土遺物(3)	94
第 73 図	S D945B 出土遺物	95
第 74 図	S D947 断面図	96
第 75 図	S D949 断面図	96
第 76 図	S D949 平面図	97
第 77 図	S D949 出土遺物(1)	98
第 78 図	S D949 出土遺物(2)	99
第 79 図	S D949 出土遺物(3)	100
第 80 図	S K933 断面図	101
第 81 図	S K933 出土遺物	101
第 82 図	B14(W) 区土壤等平面図(1)	102
第 83 図	B14(W) 区土壤等平面図(2)	103
第 84 図	S K934 断面図	104
第 85 図	S K934 出土遺物(1)	104
第 86 図	S K934 出土遺物(2)	105
第 87 図	S K936 断面図	106
第 88 図	S K936 出土遺物	106
第 89 図	S K938 断面図	107
第 90 図	S K959 断面図	107
第 91 図	S K962 断面図	108
第 92 図	S K963 断面図	108
第 93 図	S D941・944 断面図	108
第 94 図	S D951 断面図	109
第 95 図	B14(W) 区その他の溝跡出土遺物	110
第 96 図	B14(W) 区遺構外出土遺物(1)	112
第 97 図	B14(W) 区遺構外出土遺物(2)	113
第 98 図	B14(W) 区遺構外出土遺物(3)	114
第 99 図	B14(W) 区遺構外出土遺物(4)	115
第100図	B14(W) 区出土竈形土器	116
第101図	B14(W) 区出土土窯(1)	117
第102図	B14(W) 区出土土窯(2)	118
第103図	B14(W) 区出土土窯(3)	119
第104図	B14(W) 区出土製塩土器	120
第105図	B14(W) 区出土鏡	120
第106図	B14(E)・15区の層序	122
第107図	S D1050 断面図	122
第108図	S D1050・1051 平面図	123
第109図	B14(E)・15区出土遺物	124
第110図	S D1051 断面図	125
第111図	B15区出土遺物	125
第112図	B49区遺構配置図	127
第113図	B49区北壁西半部断面図	128
第114図	B49区北壁東半部断面図	129
第115図	S B1000 平面図	130
第116図	S B1000 平面図(部分)	131
第117図	S B1000柱穴断面図	132
第118図	S D1060 平面図	133
第119図	B49区中央部溝跡平面図	134
第120図	S D968・1076・1175 断面図	136
第121図	S D945 平面図	137
第122図	S D968・1076・1191・1175 平面図	138
第123図	S D1052 平面図	139
第124図	S K1102 断面図	139
第125図	B49区出土遺物(1)	140
第126図	B49区出土遺物(2)	141
第127図	B49区出土遺物(3)	143
第128図	B63区遺構配置図	144
第129図	S D1065 出土遺物	145
第130図	B67区平面図・土層柱状図	146
第131図	主要遺構出土土器の比較	154
第132図	主要遺構出土土器の底部再調整及び土師器・須恵器の構成	155
第133図	主要遺構出土土器の底口比	156
第134図	第8次調査出土竈形土器	165

第135図	第8・9次調査出土壺形土器	166
第136図	土壺形態分類図	168
第137図	土壺P・L値統計	170
第138図	東北地方出土の有溝土壺	170
第139図	土器片製円板法量分布図	171
第140図	土器片製円板の出土地点	172
第141図	B51区出土土器片製円板(1)	173
第142図	B51区出土土器片製円板(2)	174
第143図	B51区出土土器片製円板(3)	175
第144図	B51区出土土器片製円板(4)	176
第145図	B51区出土土器片製円板(5)	177
第146図	第25次調査発見遺構変遷図	181
第147図	B区発見遺構模式図	185
第148図	B区発見遺構変遷図	186
第149図	第24次調査区配置図	189
第150図	B64区平面図	190
第151図	B64区出土遺物	191
第152図	B50・51区平面図	193
第153図	B51区出土遺物(1)	194
第154図	B51区出土遺物(2)	195
第155図	B51区出土遺物(3)	196
第156図	B51区出土遺物(4)	197
第157図	B50区出土遺物(1)	198
第158図	B50区出土遺物(2)	199
第159図	B52区平面図	200
第160図	B52区出土遺物	200
第161図	B53区平面図	201
第162図	B53区出土遺物	201
第163図	B56区平面図	202
第164図	B56区出土遺物	203
第165図	B59・60区平面図	203
第166図	B60区出土遺物	204
第167図	B59区出土遺物	205
第168図	B61区出土遺物(1)	206
第169図	B61区出土遺物(2)	207
第170図	B61区出土遺物(3)	208
第171図	B58区出土遺物(1)	209
第172図	B58区出土遺物(2)	210
第173図	B58区出土遺物(3)	211
第174図	B58区出土遺物(4)	212
第175図	B55区出土遺物	213
第176図	B57区出土遺物	213
第177図	B55・58区出土遺物	214
第178図	B58区出土遺物(5)	215
第179図	B55区出土遺物	216
第180図	B54区平面図	217
第181図	第24・25次調査出土石製品	218
第182図	第5次調査出土墨書き土器	220
第183図	第7次調査出土墨書き土器(1)	221
第184図	第7次調査出土墨書き土器(2)	222
第185図	第7次調査出土墨書き土器(3)	223
第186図	第7次調査出土墨書き土器(4)	224
第187図	第9次調査出土墨書き土器(1)	225
第188図	第9次調査出土墨書き土器(2)	226
第189図	第24次調査出土墨書き土器	227
第190図	第25次調査出土墨書き土器(1)	230
第191図	第25次調査出土墨書き土器(2)	231
第192図	墨書き土器の出土地点	235

表 目 次

表1	市川橋遺跡発掘調査成果一覧	11
表2	B13(N)区出土遺物集計表	38
表3	B13(S)区出土遺物集計表	57
表4	B14(N)区出土遺物集計表(1)	113
表5	B14(N)区出土遺物集計表(2)	121
表6	B49区出土遺物集計表	142
表7	主要遺構出土土器集計表	148
表8	主要遺構出土土器組成表	149
表9	陶器集計表	161
表10	高平地区出土陶器集計表	162
表11	土器片製円板素材組成表	171
表12	製塙土器・壺形土器・炉壁・竈材・埴輪・鐵滓集計表	179
表13	市川橋遺跡高平地区出土墨書き土器一覧表(1)	232
表14	市川橋遺跡高平地区出土墨書き土器一覧表(2)	233
表15	市川橋遺跡高平地区出土墨書き土器一覧表(3)	234
表16	墨書き土器調査区分別集計表	228
表17	墨書き土器種別集計表	228
表18	墨書き土器記載部位・方向別集計表	229

写真図版目次

図版 1	市川橋遺跡航空写真	図版 8	B15区 S D1050・1051検出状況（南より）
図版 2	B区航空写真		B15区調査区全景
図版 3	B13(N)区 調査区全景（南より） S K969・1036・1037（北より） S K1036・1037（北より） S K983	図版 9	B13(N・S)区出土土器
図版 4	B13(S)区 調査区全景（南より） 遺構検出状況（南より） S X1205検出状況 S X1263須恵系土器高台付皿出土状況	図版10	B14(W)区出土土器(1)
		図版11	B14(W)区出土土器(2)
		図版12	B14(W)区出土土器(3)
		図版13	B14(W)区出土土器(4)
		図版14	B14(W)区出土土器(5)
		図版15	B14(W)区出土土器(6)
		図版16	B14(W)区出土土器(7)
図版 5	B14(W)区 調査区全景（東より） 遺構検出状況（西より） S E948土層堆積状況 S D945A・B	図版17	B49・63区出土土器
図版 6	S D949（南より） S D935A・B・C・D（南より） S D943杭列（南より）	図版18	墨書き土器
図版 7	B49区調査区全景（西より） B49区 S D1052（東より） B63区調査区全景（東より）	図版19	土器片製円板・土錐
		図版20	木製品(1)
		図版21	木製品(2)
		図版22	木製品(3)

調査要項

遺跡名 市川橋遺跡（宮城県遺跡登録番号 18008）

所在地 多賀城市浮島字高平

調査面積 2,650m²（事前調査：2,500m² 確認調査：150m²）

調査期間 平成10年4月22日～10月30日

調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男

調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 長田 幹

調査員 石川俊英 石本 敏（現・文化財課） 千葉孝弥 鈴木孝行 武田健市 高橋圭藏
三浦幸子（平成11年3月退職） 車田 敦 堀口和代（平成12年3月退職） 菊池 豊
佐藤恵子 文屋 亮

調査補助員 高橋 哲（平成11年3月まで）

I 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

本遺跡の所在する多賀城市は、仙台市の中心部から北東約10kmの位置にある。南西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩竈市、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接している。東西約6km、南北約3kmの規模である。

2 地理的環境

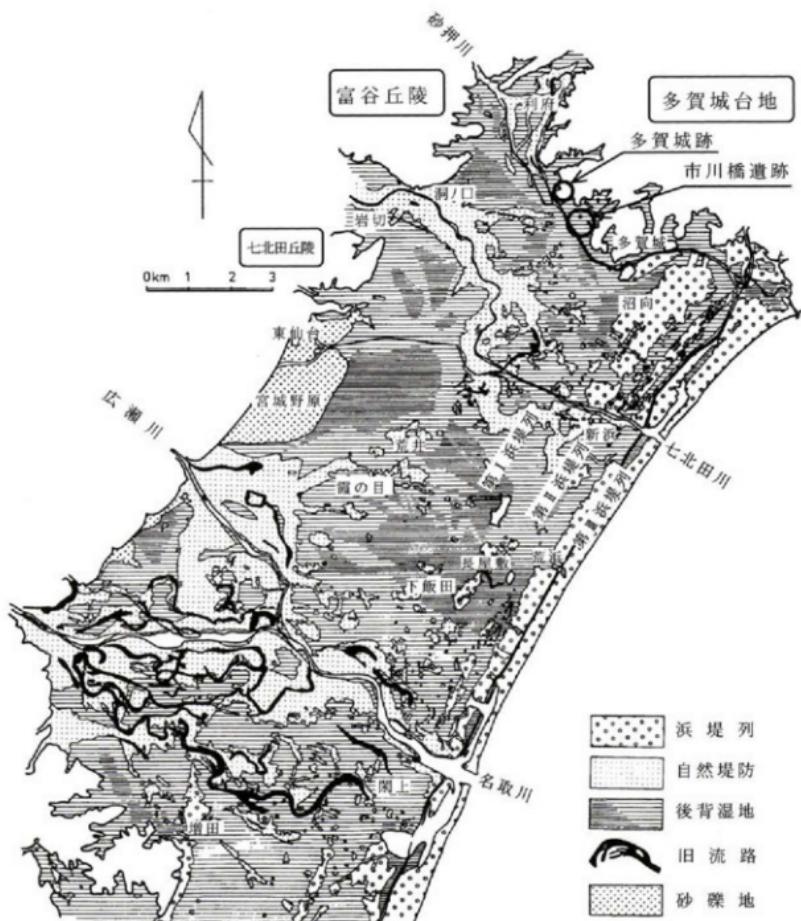
本市の北西から南東にかけて、利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川が貫流しており、本市の地形は東西に大きく二分されている。東半部は、北部が松島丘陵と呼ばれる低丘陵である。大部分は標高40～100mであり、南側に向かって枝葉のように延びている。南部は海岸線に平行して多数の浜堤が発達している。一方、西半部は宮城野海岸平野と呼ばれる広大な沖積平野が広がっており、自然堤防、旧河道、後背湿地などから複雑に分布している。本遺跡はこの沖積平野の東端部にあり、丘陵部と接している。現在標高2～3mとおおよそ平坦な地形である。本遺跡の北東にあたる「浮島」という字名は、点在する五つの小丘陵を海に浮かぶ島になぞらえたことから生じたことが容易に推察される。本遺跡は、現在その大部分が水田であり、地形図上低湿地に分類されているが、発掘調査によって古代の微高地の存在及びその広がりが確認され、起伏に富んだ旧地形の様子が次第に明らかになりつつある。

近年の発掘調査によって、遺構分布とともに旧地形に関する多くの知見が得られるようになった。明治24年の地形図（明治22年測量同年製版「塩塗」第二師団參謀部）および昭和22年撮影の航空写真には城南地区を蛇行しながら南流する砂押川の旧河道が確認され、平成9・10年度に実施した確認調査においても実際にその河道を検出している（多賀城市教育委員会：1999）。それは、現在の流路と東北本線とが交差する付近から南東方向に向かって大臣宮の丘陵に遮られて南下し、一旦現在の流路の西側に出た後再び南東方向に向かって高崎丘陵の南西部に当たり、その南側付近から現在の流路と同じくなっているようである。流路には変化が見られるものの、巨視的に見ればおおよそ同じ流路を踏襲しており、部分的な調査ではあるがそれらの下層に古代まで遡る河川の存在を確認した。微高地は、旧河道の右岸と左岸に形成されており、その沖積作用によって形成された自然堤防の可能性が高いと考えられる。一方、旧河道左岸の微高地と丸山廻古墳が立地する丘陵の間には、東西約80m、南北約120mの沼状の低湿地が形成されており、さらに、その微高地と高崎丘陵に囲まれた東西150～500m、南北約250mの範囲は広い低湿地となっており、亜泥炭層が厚く堆積する脆弱な地盤となっている。

ボーリング調査によると、沖積層形成前の基盤層（岩盤）面は地点によって凹凸があり、更新世（第四紀）には起伏に富んだ地形であったと考えられる（第2図）。古代の基盤層である黄褐色砂質土の下には亜泥炭層（スクモ層）、その下には細・中砂層が堆積し、基盤層が深く落ち込む地点では厚いシルト層の堆積も見られる。このシルト層上および基盤層上には部分的ではあるが貝を多く含む細・中砂層の堆積があり、海水面の上昇による海水の流入が窺われる。第2図の等高線は亜泥炭層など軟弱層の落ち込みを示したものであるが、基盤層のあり方を顕著に反映している。大臣宮の丘陵から東側にかけては急激に落ち込んでおり、城南小学校の付近では現地表より岩盤まで約17m、その東側ではさらに深くなっている。亜泥炭層の堆積は約6mにも及んでいる。B区の地形は、東側から入り込む大きな谷が沖積作用を繰り返して形成

されたことが知られ、古代の基盤層である黄褐色砂質土が堆積した時点でも、かつて谷であった部分は崖みとして残っていたと推定される。

古代における微高地と低湿地の分布については概ね以上の通りであるが、第8次調査区では低湿地に盛土整地して居住域を広げていることを確認しており（多賀城市教育委員会：1990）、小規模な微高地や低湿地が入り組んだ状態で分布する複雑な地形であったと考えられる（第2図）。



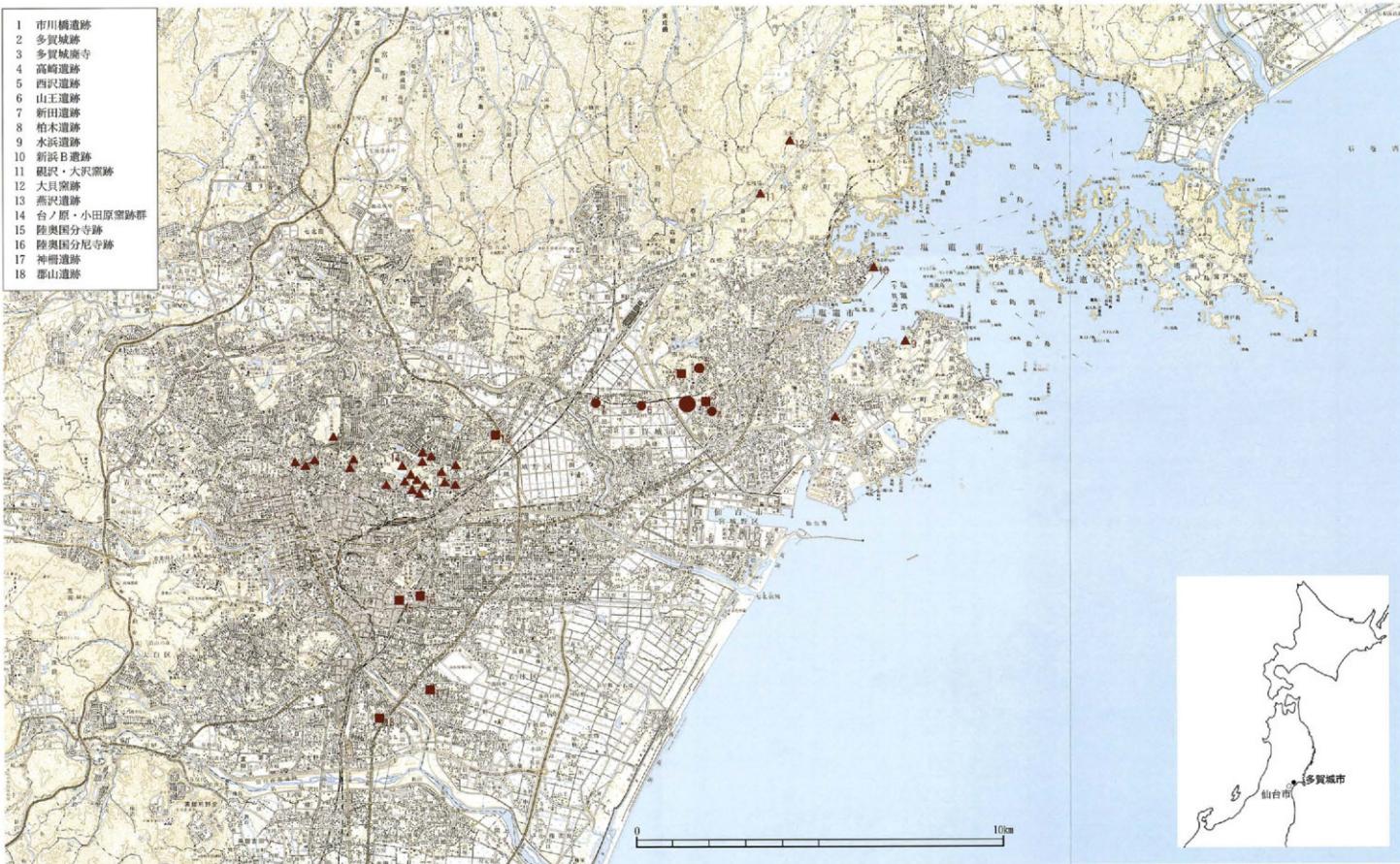
第1図 仙台平野の地形と市川橋遺跡

地形分類は松本(1981)による



第2図 市川橋遺跡城南地区の地形

- 1 市川遺跡
- 2 多賀城跡
- 3 多賀城廢寺
- 4 高崎遺跡
- 5 西沢遺跡
- 6 山王遺跡
- 7 新田遺跡
- 8 柏木遺跡
- 9 水浜遺跡
- 10 新浜B遺跡
- 11 碓沢・大沢遺跡
- 12 大貝窯跡
- 13 燕沢遺跡
- 14 台ノ原・小田原塙跡群
- 15 陸奥国分寺跡
- 16 陸奥国分尼寺跡
- 17 神柵遺跡
- 18 郡山遺跡



第3図 遺跡の位置



3 市川橋遺跡の概要と周辺の歴史的環境

本遺跡は、特別史跡多賀城跡の南側から西側にかけての沖積地上に立地している。旧石器時代から平安時代に至る複合遺跡として登録されているが、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれ、奈良時代には鎮守府も併せ置かれるなど律令政府による東北地方経営の大拠点であった多賀城と密接な関係を持つ古代の遺跡として知られている。

これまで本市教育委員会をはじめ宮城県教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所によって発掘調査が行われ、多くの成果が挙がっている（表1）。館前・鴻ノ池・伏石・高平・水入など多賀城跡南面地区では道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、運河状の大溝跡、区画溝、水田跡など多数の遺構が発見されており、出土遺物についても須恵器や土師器などの土器類をはじめ中国産の陶磁器、東海・畿内産の施釉陶器、木簡、漆紙文書、墨書き土器、石帶、祭祀遺物などが多数出土している。このような本遺跡南部から山王遺跡東部にかけての地域には、遅くとも9世紀には方格地割りが施工され、町並みが形成されていたことが明らかになってきている（第4図）。多賀城南面に形成されたこの町並みについては、考古学と文献史学両者の研究によって古代地方都市と位置付けられており、「古代都市多賀城」と呼んでいる（千葉・菅原：1994、平川：1999）。城外の二大幹線道路である南北大路と東西大路が建設された本遺跡の南半部はその最も重要な地域と考えられる。

一方、本遺跡の周辺にも多数の遺跡が知られている（第4図）。東側の丘陵部には多賀城の附属寺院である多賀城廃寺（高崎廃寺）があり、それを取り巻くように高崎遺跡がある。高崎遺跡では中世以降の遺構も確認されているが古代集落跡が広く展開しており、廃寺に近接した地点では工房を含む竪穴住居群が発見されている。多賀城と廃寺の中間の小丘陵には館前遺跡（特別史跡多賀城跡に追加指定）があり、国司館あるいは格の高い城外官衙と考えられている。本遺跡西側には東西方向に微高地が続いており、山王遺跡と新田遺跡が接して連なっている。両遺跡とも大規模な複合遺跡であり、山王遺跡では弥生時代から近世にかけて、新田遺跡では縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されている。古代の遺構についてみると、奈良時代には竪穴住居跡や溝跡、土壙などが点在するのみであるが、平安時代になると本遺跡から山王遺跡にかけて方格地割りが形成され、遺構密度が急激に増加している（次項参照）。方格地割りの基準となった東西大路の延長部分は新田遺跡北東部でも検出しており、周辺からは掘立柱建物跡や井戸跡が発見され、中国産の陶磁器、東海・畿内産の施釉陶器、石帶などが出土していることから一般集落とは異なる要素も指摘できる。このような遺跡の広がりは多賀城市内にとどまらず、塩竈市、利府町、七ヶ浜町など隣接市町村にも及んでいる。多賀城跡の北側の郷糞遺跡（利府町）は掘立柱建物と竪穴住居で構成され、掘立柱建物の中には大規模な柱穴を持つものがあることなどから一般集落とは異なるものと考えられている。さらに、多賀城跡北部の丘陵部には政庁第III・IV期の瓦を焼成した大沢・硯沢窯跡群（利府町）があり、海岸部には製鉄遺跡である柏木遺跡、製塩遺跡である新浜B遺跡（塩竈市）・水浜遺跡（七ヶ浜町）などが知られている。また、仙台市東部には多賀城政府第II期以降の瓦窯を中心とする台ノ原・小田原窯跡群がある。これらの遺跡は多賀城を中心とした半径約10km圏内に存在し、多賀城関連施設の広がりを示している。

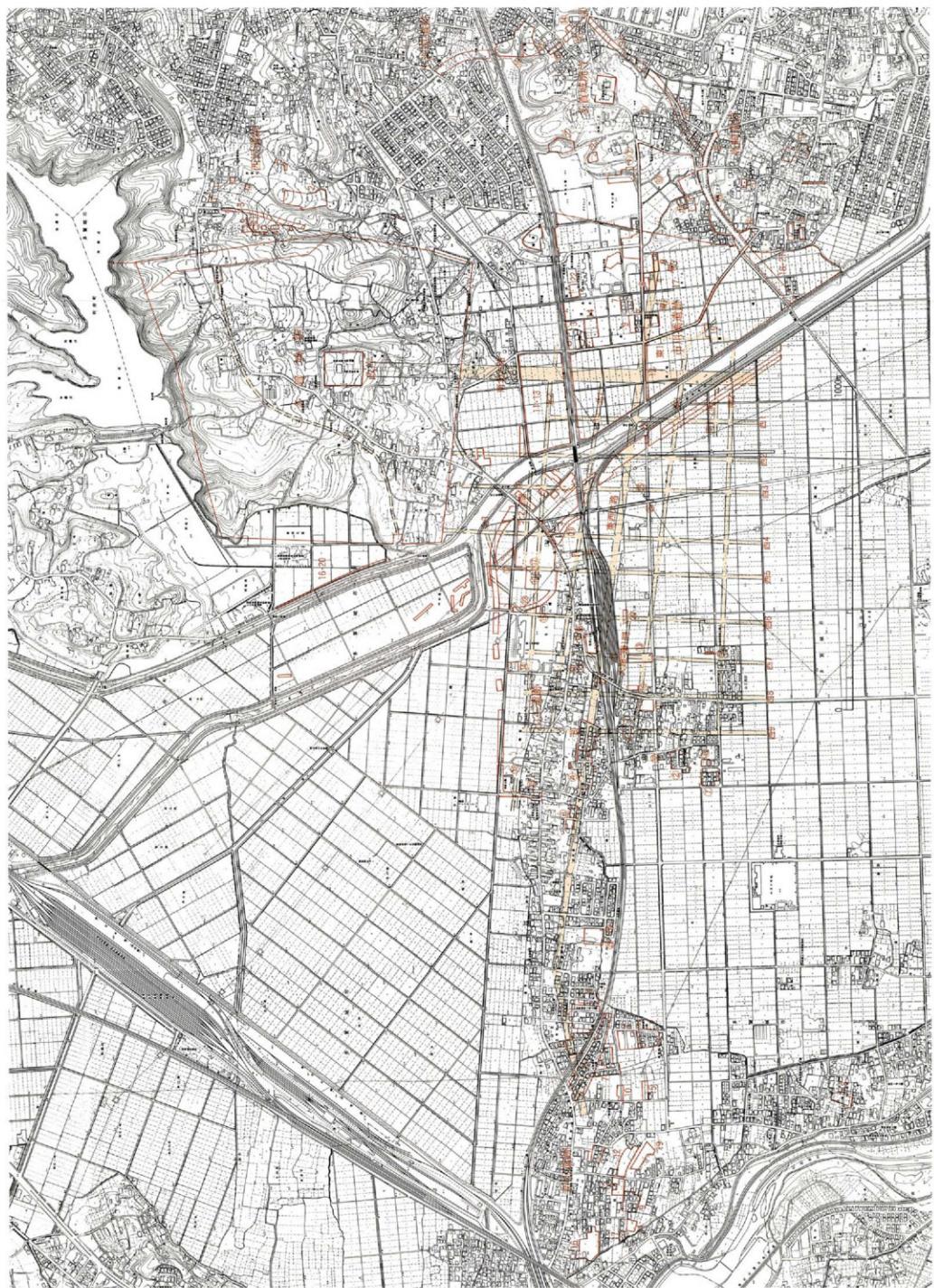
4 城外の方格地割りと調査区の位置

はじめに多賀城外の方格地割りについて概要を説明しておきたい。

多賀城外の方格地割りは多賀城南面の市川橋遺跡から山王遺跡にかけて施行されている。その施行に先立ち、政府中軸線上に南北大路、南辺築地の約5町(550m)南にはそれと平行する東西大路が建設され、多賀城の強い規制の下に成立したという性格が明確に表れている。この南北・東西の大路を基準線とし、小路となる直線道路をおおよそ100m間隔で建設して、約1町四方の区画を形成している。各道路の方向について見ると、南北道路は西1～西9、東1が南北大路と平行しているのに対し、東2・3は東西大路と直交している。一方東西道路は、北1、南1が東西大路と平行するのに対し、北2・2～3間、南2は南北大路と直交するというように統一性が窺えない(註)。南北大路と東西大路という厳密には直交しない二つの基準線に依っていることが、各区画の平面形を規定し、台形や平行四辺形など歪な区画を形成する原因になったといえる。これらの道路については、大路から近い順に西1・西2…、南1・南2…と便宜的な名称を付している。南北道路は南北大路の西側では西9道路まで、東側では東3道路まで発見している(西8道路については未確認)。一方、東西道路は東西大路の北側では北3道路まで、南側は南2道路まで発見している。この西9～東3道路間の1,420～1,440m、南辺築地～南2道路間の800～900mを狭義の街並と見ることができる。

方格地割り上における第25次調査区の位置は、南北大路と東西大路の交差点に面した北東の区画に相当する(第4図)。この地区については、北1東西道路と東1・東2南北道路の延長線上に位置するが、確認調査(第24次)の結果、それらに相当する道路は存在しないことが判明し、1町半四方の広い区画であつた可能性がある(多賀城市教育委員会:1999)。その原因としては、北東部が湿地になっているなどの地形上の制約も考慮せねばならないが、大型建物群の存在に注目するならば、一般的な宅地とは異なり、官衙的な性格を帯びた一角として機能していたことが挙げられよう。

(註) 方格地割りの成立については、①南北・東西大路の建設、②西1～9道路と北1・南1道路の建設、③北2・南2道路の建設という3段階の工程を想定する考えがある(高野・菅原:1997)。



第4図 多賀城外の方舟地圖

番号	調査主体・次数	調査年次	調査地区	発見遺構
1	多賀城市教育委員会 (下水道埋設工事)	昭和54年度	浮島字高平	掘立柱建物、溝
2	多賀城市教育委員会 (第1次調査)	昭和56年度	市川字伏石	西3道路、溝、水田
3	多賀城市教育委員会 (第2次調査)	昭和57年度	市川字伏石	溝、水田
4	多賀城市教育委員会 (第3次調査)	昭和58年度	浮島字高平	掘立柱建物
5	多賀城市教育委員会 (第4次調査)	昭和58年度	高崎字水入	東西大路、溝
6	多賀城市教育委員会 (第5次調査)	昭和59年度	浮島字高平	掘立柱建物、廻、溝、水田
7	多賀城市教育委員会 (第6次調査)	昭和61年度	高崎字水入	溝、土壤
8	多賀城市教育委員会 (第7次調査)	平成元年度	浮島字高平	井戸、溝、土壤
9	多賀城市教育委員会 (第8次調査)	平成元年度	高崎字水入	掘立柱建物、溝
10	多賀城市教育委員会 (第9次調査)	平成元年度	浮島字高平	掘立柱建物、溝
11	多賀城市教育委員会 (第10次調査)	平成4年度	市川字伏石	北2~3間道路、掘立柱建物、竪穴住居、廻、井戸、土礫、溝
12	多賀城市教育委員会 (第11次調査)	平成4年度	市川字館前	南北大路、北2道路、西1道路、掘立柱建物、竪穴住居、井戸、溝、土壤
13	多賀城市教育委員会 (第12次調査)	平成5年度	市川字鴻ノ池	東西大路、掘立柱建物、竪穴住居、河川
14	多賀城市教育委員会 (第13次調査)	平成5年度	市川字館前	南北大路、掘立柱建物、竪穴住居
15	多賀城市教育委員会 (第14次調査)	平成5年度	浮島字高平	掘立柱建物、溝、土壤
16	多賀城市教育委員会 (立会い)	平成5年度	高崎字水入	なし
17	多賀城市教育委員会 (第15次調査)	平成6年度	市川字鴻ノ池	河川
18	多賀城市教育委員会 (第16次調査)	平成6年度	市川字新西久保	溝
19	多賀城市教育委員会 (第17次調査)	平成6年度	高崎字水入	東西大路
20	多賀城市教育委員会 (第18次調査)	平成7年度	高崎字橋の口	溝
21	多賀城市教育委員会 (第19次調査)	平成7年度	高崎字水入	東西道路、土壤
22	多賀城市教育委員会 (第20次調査)	平成8年度	市川字新西久保	柱穴、溝
23	多賀城市教育委員会 (第21次調査)	平成8年度	高崎字橋の口	竪穴住居、溝、土壤
24	多賀城市教育委員会 (第22次調査)	平成8年度	浮島字高平	なし
25	多賀城市教育委員会 (第23次調査)	平成9年度	市川字鴻の池 高崎字橋の口	東1道路、南1道路、竪穴住居、掘立柱建物跡、溝、井戸
26	多賀城市教育委員会 (第24次調査)	平成10年度	市川字鴻の池 高崎字橋の口	南北大路、東西大路、掘立柱建物跡、井戸、廻跡
27	宮城県教育委員会 (仙塩地域下水道事業)	昭和53年度	市川字伏石・館前	溝、土壤
28	宮城県教育委員会 (第二塩電電話交換局工事)	昭和54年度	高崎字水入	東西大路、掘立柱建物、井戸、区画溝
29	宮城県教育委員会 (岩切玉川線建設工事)	平成7~10年度	市川字館前	南北大路、河川
30	宮城県多賀城跡調査研究所 (第22次調査)	昭和48年度	浮島字高平	掘立柱建物、竪穴住居
31	宮城県多賀城跡調査研究所 (第37次調査)	昭和55年度	市川字館前	西2道路、掘立柱建物、廻、井戸、大溝

表1 市川橋遺跡発掘調査成果一覧

II 調査に至る経緯

本市のほぼ中心部に位置する城南地区は、東北本線陸前山王駅や仙石線多賀城駅から近距離にあり、周辺においては北部の浮島団地や南部の志引団地などの宅地開発が行われてきた。近年、宮城県の中核都市である仙台市の発展に呼応し、本地区においても住宅需要に伴う小規模な宅地開発が進展してきた。しかし、これらの開発は本地区を体系的に整備し得るものではないことから、無秩序な市街地の形成が懸念されていた。そこで、都市計画道路の整備による交通体系の整備促進、区画道路・公園・水路等の公共施設の整備改善を行うといった土地区画整理事業への着手が具体化してきた。一方、城南地区および周辺の埋蔵文化財についてみると、北側に位置する特別史跡多賀城跡と密接に関係する遺構の存在が徐々に明らかになりつつあった。昭和54年に調査を実施した館前遺跡では整然と配置された建物跡が発見され、昭和55年に特別史跡として追加指定を受けた。また、平成元年から開始された仙塩道路関連の発掘調査では城外における方格地割りの存在が明らかとなり、平成4年度に実地した中央公園建設に伴う調査では多賀城南門に向う幅23mの南北大路が確認されるなど、古代地方都市を理解する上で貴重な発見が相次いだ。このような成果を踏まえて、平成5年から区画整理事業に係る発掘調査の期間、面積、費用等について打ち合わせが行われることとなった。区画整理事業の計画面積については32.3haであり、このうち発掘調査面積については確認調査と事前調査を合わせると約95,000m²（その後、約80,000m²に変更）と広範な面積であった。現在の職員体制でこのような広大な面積を調査した場合、事前調査に8～10年、確認調査に2～3年という調査期間を有し、かつ膨大な費用がかかるものと推測された。そこで発掘調査は事前対象となる計画道路のみとし、具体的な調査期間等に関しては事業地内の試掘調査を実施してから検討するという方針が示された。一方、平成7年11月に開かれた第1回特別史跡多賀城跡建物復元管理活用計画委員会において、多賀城跡の管理活用と同時に周辺地区の整備についても検討が必要であるという見解が示された。このなかで城南地区に関しては南門に向って延びる南北大路を生かした景観が必要であるとされ、以後城南地区に関しては南北大路の復元という方針で協議が進められることになった。平成8年、調査期間の短縮、調査面積の縮小、報告書の作成期間、調査費用の削減等について行政内部でのヒアリングが実施され、このなかで発掘調査期間については平成10年度～13年度の4年間で終了すること、事前の試掘調査を平成9年度に計画することが提示された。これをうけて平成8年12月、区画整理事業地に係る埋蔵文化財発掘調査について文化庁との打ち合わせを行い、平成9・10年度の2年間で城南地区的遺跡発掘調査事前総合調査事業（国庫補助事業）を実施することが決定した。平成9年6月、事前調査についての最終的な協議が行われ、調査期間を4年、整理期間を2年とすることが確定した。平成9年10月、城南地区に関する発掘調査が本格的に開始した。事業地内を北東、南東、北西、南西の4ブロックに分割して調査した結果、遺構の分布や密度、調査面積等を考慮し、北東部を10年度、南東部を11年度、北西部を11・12年度、南西部を12・13年度に事前調査する旨を事業者側に報告した。北東ブロックの調査は約2,650m²を対象として実施し、そのうち事前調査が約2,500m²、確認調査が約150m²である。

III 調査方法

1 地区割りと調査区の設定

今回の調査対象地区は東西約700m、南北約900mの広大な範囲に及んでおり、総面積は約80,000m²に達している。この内、埋蔵文化財に影響が及ぶ可能性が高いのは街路及び大型店舗予定地であり、これら全てを実際の調査区とした。調査の方法としては基本的に事前調査で対応するが、埋設管等を設置しない街路（緑道）部分については確認調査にとどめることとした。

ところで、調査対象地区は南北方向の市道水入線及び東西方向の市道新田・上野線によって四分割されている。対象地区が広範囲に及ぶことから、北西ブロックをA区、北東ブロックをB区、南東ブロックをC区、南西ブロックをD区として全体を四つの地区に区分した（第5図）。個々の調査区には1番から通し番号を付し、地区名を冠してA○○区、B○○区とした（同一ブロックにおいて繰り返し使用する場合は単に○○区、○○区とした）。また、調査区が細長く、広範囲に及ぶものについては東西・南北に分割し、C○○(N)区、D○○(S)区とした（第6図）。

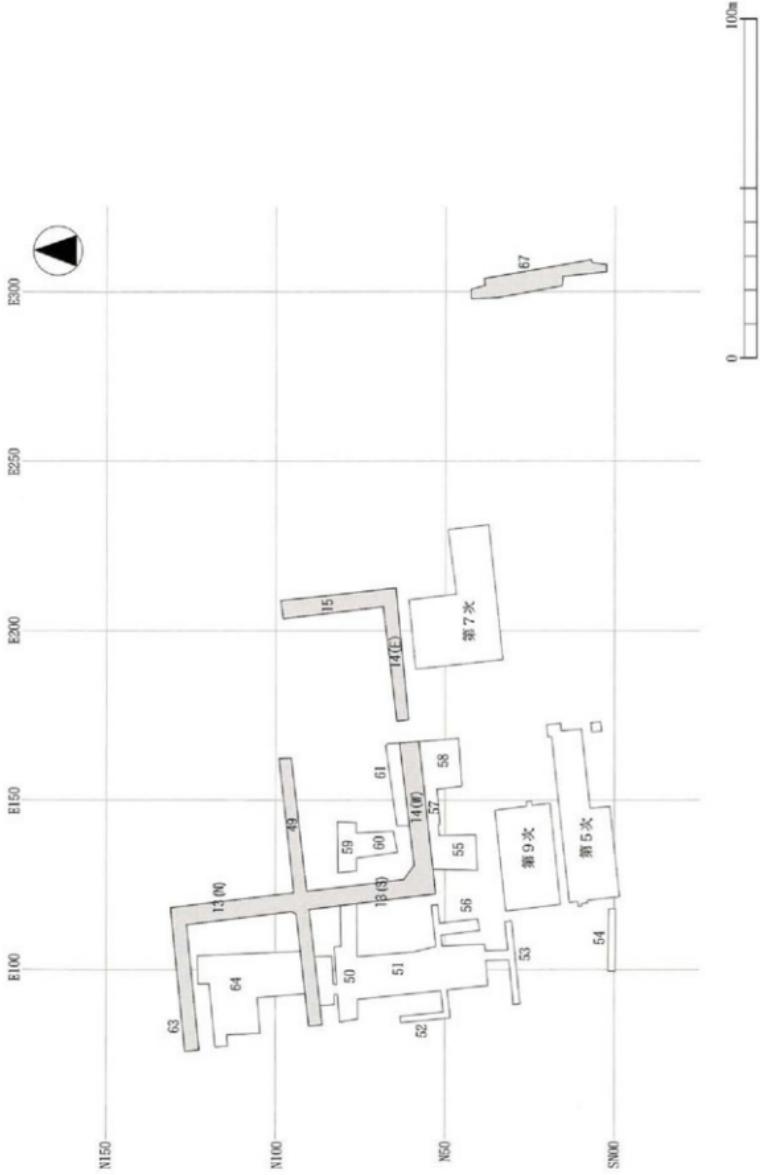
なお、各調査区は、城南地区確認調査（第23・24次）のトレンチと複雑に入り組んでいることから、煩雑になることを避けて一連番号とした。

2 発掘基準線の設定

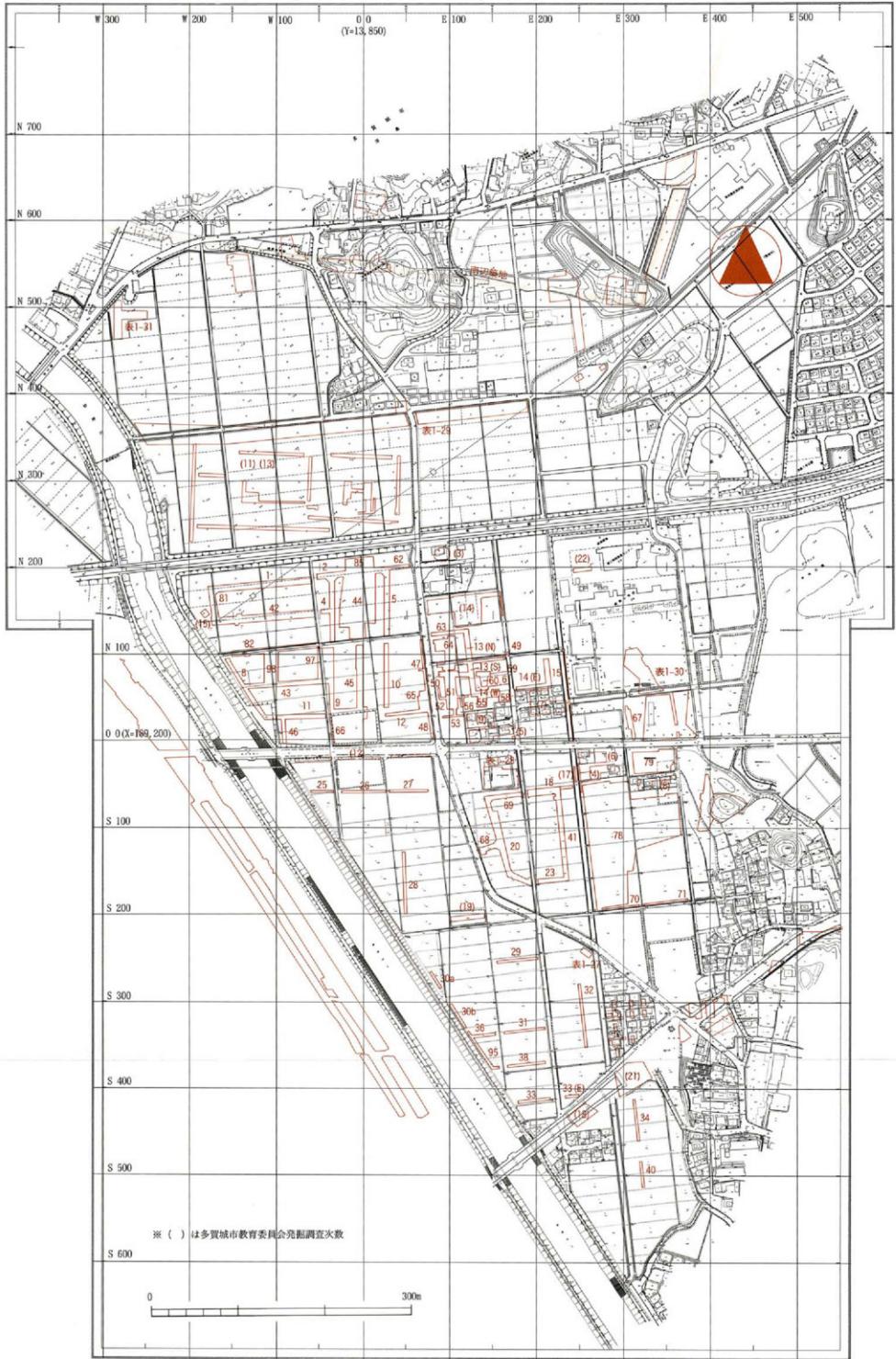
発掘基準線は、国土座標「平面直角座標系X」を使用して設定した。 $X = -189,200.000$ $Y = 13,850.000$ の交点は、方格地割りの基準線である南北・東西大路交差点のおおよそ中央に位置するところから、この点を今回の調査の原点とした。さらに、この原点を通る東西・南北方向の直線をそれぞれ東西・南北の基準線とし、原点から1m離れるごとに、東西方向はE1・E2・E3……、W1・W2・W3……と表示し、南北方向についても同様に表示した（第6図）。



第5図 全体の地区割り



第6圖 調查區配置圖(1)



第7図 調査区配図(2)

IV 調査経過

今回の調査は城南土地区画整理事業に係る発掘調査の1年目であり、東北本線、市道水入線、新田上野線に囲まれたB区（北東ブロック）を対象とした。本地区は将来宅地として盛土造成される区画であることから、街路部分の事前調査と縁道部分の確認調査に限定して発掘調査を実施することとした。

調査経過については以下のとおりである。

13(S)区

- 4.22 重機による表土除去（～23日）。
- 4.28 排水溝を兼ねたサブトレンチを設定し、基本層序の確認を行う。その結果、南半部では黒褐色及び褐灰色土が厚く堆積しており、多くの遺構を覆っていることが判明。
- 5.12 黒褐色土および褐灰色土を重機で除去（～14日）。
- 5.15 南半部の遺構検出作業（～26日）。
- 5.21 平面図作成用の基準点（ $3 \times 3\text{ m}$ ）を設定。
- 5.22 縮尺1/100で遺構配置図作成開始。部分的に縮尺1/20平面図作成にも着手。
- 5.27 遺構検出状況写真撮影。この段階で遺構確認作業終了。
- 6.2 本日より遺構の本格的な調査開始。SD1151溝跡の堆積土除去。
- 6.4 SD1055・1084溝跡の堆積土除去。
- 6.8 柱穴群の精査。柱痕跡、抜取穴の再確認。断削り調査開始。
- 6.17 SD1089溝跡堆積土除去。
- 6.23 SD1084・1087の新旧関係検討。灰白色火山灰が粒状に混入するSD1087が新しいことを確認。
- 6.30 14(W)区との境で検出したSD945溝跡の精査。2時期の重複があり、新しい段階には上層に灰白色火山灰が自然堆積していることを確認。
 - 7.1 SD945溝跡堆積土除去（～2日）。
 - 7.8 北半部の小柱穴群の精査。建物としての組み合わせが困難。SD968堆積土除去開始。
 - 7.10 北半部の小柱穴断削り作業開始。
 - 7.27 調査区内の土層堆積状況の写真撮影、断面図作成。
 - 7.30 柱穴埋土の掘り上げ作業開始。
 - 9.7 調査区全体写真撮影。調査終了。

13(N)区

- 4.24 重機により表土除去。
- 5.6 排水溝を兼ねたサブトレンチを設定し、基本層序の確認を行う。
- 5.11 古代以降の水田面を検出。多くの遺構がこの層に覆われることから、写真撮影後直ちに除去。
- 5.19 第VI層上面において灰白色火山灰の自然堆積層が帶状に分布していることを確認（後日、古代以降の水田に関わる擬似畦畔と判断）。
- 5.26 黒色粘土上面（第VIIa層）での遺構検出作業。SD1019溝跡や小柱穴など確認。
- 5.27 遺構検出状況写真撮影。縮尺1/100で遺構配置図作成（～6.1）。
- 5.28 土層堆積状況の検討。
(調査中断)
- 6.22 柱穴の柱痕跡、抜取穴などの確認作業開始。確認したものから縮尺1/20平面図を作成。
- 6.25 黒色粘土上面検出遺構の調査終了。
(調査中断)
- 7.13 調査再開。部分的に残る第VI層を除去し、柱穴や溝跡を検出。13(S)区で検出したSD968が本調査区まで直線的に伸びていることが判明。
- 7.14 SK1028堆積土除去。柱穴埋土の一段掘り下げ。

- 7.15 S K969検出。検出当初2基の土壤の切り合いと見ていたが、重複のない不整形の土壤と判断し、埋土を掘り上げる。
馬の歯が多く出土。
- 7.16 S D1019・1025、S K998堆積土除去。
- 8.5 平面図作成のための基準点（ 3×3 m）設置。縮尺1/20で平面図作成開始。
- 9.2 調査区内の土層堆積状況の線引き。
- 9.7 全景写真撮影。
- 9.14 最も古い堆積層である第VIIa層と、南半部で最も古いS D968を直接覆う第VIb層を除去。下層遺構の検出を行い、平面図作成。
- 9.16 台風により調査区水没。
- 9.17 復旧作業。
- 9.18 第VIIa層を除去し、その下層でS K1036・1037など検出。いずれからも馬の歯が出土。
- 9.21 第VIIb層（地山）上面で遺構検出作業。小ピットなど数基発見。実測図作成。
- 9.28 実測終了。
- 9.29 SBI118建物跡柱穴の断割り調査。全景写真撮影。調査終了。

14(W)区

- 4.22 重機による表土除去。
- 5.13 調査区内に排水溝を兼ねたトレーニングを入れる。基本順序を検討した結果、B13(N)区南端部に認められた黒褐色土および褐灰色土の堆積土（Ⅲ層）は、西端部にのみ認められることが判明。
- 5.15 遺構検出状況写真撮影。
- 5.21 実測図作成用の基準点（ 3×3 m）設定。
- 5.26 西半部の遺構検出作業。VIa層、地山上面で多数の柱穴を確認。以後、柱穴を一段掘り下げ、柱痕跡等の確認作業を継続する。
- 6.4 東半部の遺構検出作業。VIb層、溝跡を確認。
- 6.5 遺構検出状況写真撮影。1/100平面図作成開始。
- 6.9 1/20平面図作成開始。
- 6.11 東半部の溝跡とVIb層およびその他の遺構との新旧関係の検討。その結果、S E948が最も古く、溝跡はほぼ同位置においてS D943→S D935（A～D）の変遷があることを確認。
- 6.23 東半部溝跡の堆積土除去開始（～7.1）。
- 7.2 東壁土層堆積状況写真撮影。S E948の堆積土除去開始。第6号木簡出土。
- 7.6 S E948は上層を残して埋土の大部分が崩落。
- 7.10 柱穴の断割り調査開始。
- 7.15 東半部の溝群の断面図作成。
- 8.6 南壁の土層堆積状況線引き。写真撮影。北壁土層堆積状況線引き。
- 9.7 全景写真撮影。調査終了。

B49区

- 6.25 重機による表土除去。
- 7.15 調査区内に排水溝を巡らせる。
- 7.24 遺構検出作業開始。柱穴、溝跡一段掘り下げ。
- 7.31 遺構検出状況写真撮影。溝の堆積土除去開始。
- 8.3 S D945に2時期の変遷があることを確認。B13(S)区における状況と同一であることが判明。
- 8.5 実測図作成用の基準点（ 3×3 m）の設定。
- 8.20 実測図作成開始。
- 9.7 全景写真撮影。その後、柱穴・土壤の断割り調査を行う。
- 9.17 大型建物S B1000の調査開始。西側柱列南より2間目柱穴を精査し、抜取穴の底面において建物の礎盤を発見。
- 9.27 大型建物周辺における遺構検出作業。建物は旧河川の堆積土上面より掘り込んでいることを確認。
- 10.9 調査区内的レベルを記入。調査終了。

B15区

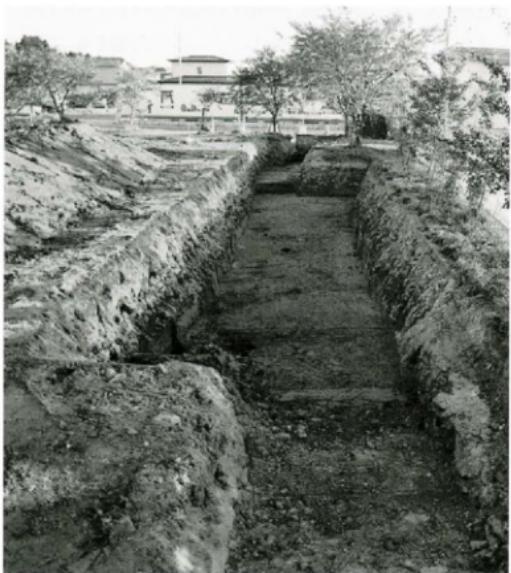
- 4.22 重機により表土除去。
5.6 調査区内にトレーニングを兼ねて排水溝を入れる。
5.11 調査区内の土層堆積状況の検討。
(現場中断)
8.4 南端部精査。SD1050・1051溝跡検出。写真撮影。
8.6 SD1050の堆積土除去。田下駄、馬形が出土。
9.17 平面図および東壁の断面図作成。
9.18 調査終了。

B67区

- 10.27 重機により表土除去。
10.28 灰白色火山灰ブロックが入る層を検出。
10.29 土層柱状図を作成。
10.30 調査終了。

B14(E)区

- 4.22 重機により表土除去。
5.6 調査区内にトレーニングを兼ねて排水溝を入れる。
5.11 調査区内の土層堆積状況確認開始。
(現場中断)
8.4 調査区内精査。写真撮影。
9.17 平面図作成。
9.18 南壁断面図作成。調査終了。



PL. 1 B67区調査風景 (左:北より 右:土層堆積状況)

V 発見した遺構と遺物

1 凡 例

発見した遺構と遺物について記載するにあたり、いくつかの凡例を示しておきたい。

(1) 遺 構

①発見した遺構については第1次調査からの一連番号を付した。遺構の種類を示す記号は以下のとおりである。

建物跡：S B	堅穴住居跡：S I	解 跡・柱列跡：S A	井戸跡：S E
溝 跡：S D	土 壤：S K	道路跡・その他：S X	

②挿図中の高さはすべて標高値である。

③土色については『新版標準土色帖』(小山・竹原：1973)を参考にした。

④掘立柱建物跡の柱間は、柱痕跡を確認できたものについては小数点以下第3位で四捨五入し、第2位の単位まで記載する(例：○. ○○m)。柱痕跡を確認できなかったものについては、柱穴の中心に柱位置を想定し、小数点以下第2位で四捨五入し、第1位の単位まで記載する(例：○. ○m)。

⑤掘立柱建物跡の方向は、対象とする柱列の両端で柱痕跡を確認できたものについては30秒以下は切り捨て、31秒以上を切り上げて分の単位まで記載する(例：○度○分)。柱痕跡を確認できなかったものについては、柱穴の中心に柱位置を想定し、30分以下は切り捨て、31分以上は切り上げて記載する(例：約○度)。

(2) 遺 物

①瓦の分類番号は『多賀城跡 政庁跡 本文編』(宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所：1982)に従った。

②本書で使用した土器・陶磁器類の名称及び器種名(形式)については次のとおりである。

土 師 器：古墳時代以降の酸化炎焼成による軟質の土器。東北地方においては古墳時代後期以降内面にヘラミガキを施し、黒色処理するものが一般的となる。さらに、8世紀末頃からロクロ調整するものが出現し、9世紀以降一般化する。

須 恵 器：還元炎焼成による硬質の土器。多賀城跡及びその周辺遺跡では、量的には少ないが稜枕、高杯、高台付杯など一部の器種にヘラミガキが施されるものがあり、特に「ミガキの須恵器」と呼ばれている(宮城県多賀城跡調査研究所：1977)。

須恵系土器：平安時代に出現する酸化炎焼成の土器。器種としては供膳形態を中心として一部の甕を含み、灰釉陶器や緑釉陶器など瓷器の器形を寫したものもある。供膳形態では内面のヘラミガキ・黒色処理を一切行わないことから土師器とは明確に区別すべきであるとし、酸化炎焼成に転じた須恵器という位置付けがなされた(桑原：1976)。その後出現年代については10世紀前葉頃と理解されている。しかし、一方で内面を再調整しない土師器の一形態と捉える考えがあり、その性格をめぐって未だ対立している。東北地方に限っても赤焼土器、赤焼き土器、赤褐色土器など様々な名称で呼ばれており、

使用する名称によってその概念および年代観にも微妙な相違が生じている（註1）。

灰釉陶器：灰釉を施した硬質の陶器。

綠釉陶器：緑色に発色する鉛釉を施した硬質・軟質の陶器。

③出土遺物については、a：土器・陶磁器・瓦壇類・石製品、b：木製品（漆器を含む）、c：金属製品の3種類に大別し、それぞれに登録番号を付した。ただし、木簡については市川橋遺跡としての通し番号も合わせて使用した。

2 B区の地形と層序

各層の詳細については各調査区ごとに後述することとし、ここではB区全体の層序について概要を示しておきたい。

本地区は、全体に東側に向かって緩やかに傾斜している。細かく見ると、大臣宮と呼ばれる北側の低丘陵、さらには南側の市道新田・上野線周辺を東西方向に延びる微高地などによって狭いながらも起伏に富んだ地形となっている。調査区内には多数の堆積層や整地層が複雑に分布しており、各調査区内においても新旧関係を把握できないものがある。特に、第VI層として一括した層は本来16層に細分されるべきものであり、遺構と複雑に重複し、分布範囲が狭いことも原因して調査区を越えて対応関係を知ることが困難である。しかし、遺構のほとんどは10世紀前葉に降下したという特徴的な灰白色火山灰（註2）やそれ以降の黒褐色土などによって完全に覆われており、遺構が集中する時期を除くならば、各調査区における層序は比較的単純に対応し、第I～VII層まで大きく8時期に区分することが可能である（第8図）。その内第V層は新旧2時期に区分し、唯一複雑な第VI層については各調査区ごとに細分することとした。新旧関係が把握できたものはVI・VIなどのように新しい順に算用数字を付して上下関係を表し、不明なものについてはアルファベットを用いて並列関係であることを示している。各層の概要を示すと次のとおりである。

第I層 表土。現代の水田層

第II層 中世以降の水田層

第III層 古代以降の堆積層

第IV層 10世紀前葉以降の堆積層

第V層 10世紀前葉の灰白色火山灰層及びその2次堆積層

第VI層 各区において遺構に関わる整地層及び部分的な堆積層を便宜的に一括した。16層に細分され、上面がそれぞれ遺構面となっている。

第VII層 第VII層上に堆積した最も古い自然堆積層。上面は遺構面となっている。

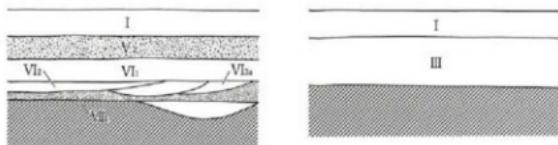
第VIII層 周辺一帯の基盤層となっている砂質土層。古代の遺構にとっては最終的な遺構面という意味

（註1） この種の土器について、当教育委員会ではこれまで「赤挽き土器」の名称を使用してきた。しかし、当該土器が出現する10世紀前葉頃城外は多賀城と密接に関わる都市空間となっており、城内と城外とで土器群の在り方に相違点がみられないことから、多賀城跡調査研究所が使用している「須恵系土器」の名称を用いることにとした。近年、多賀城跡調査研究所では、従来のものより古い段階から須恵系土器が出現するとし、須恵系土器の年代観及び土器そのものの属性について一部修正を行った（宮城県多賀城跡調査研究所：1992）。しかし、その初現形態とされる須恵系土器は須恵器の基礎で理解できるものであり、高台付鉢や耳皿など特殊な器種で構成される資料をもって古い須恵系土器とする考えにはいたがたい。本書では、桑原監郎が示した当初の概念に従うこととする（桑原：1976）。

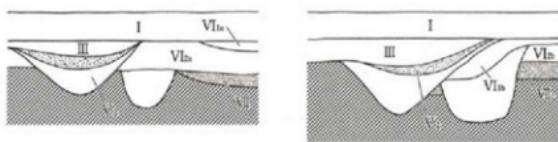
（註2） 灰白色火山灰については、その起源を宮城県北西部に求める説もあったが（山田・庄子：1980）、近年では十和田山火山灰と同一であるとする考えに多くの人が多く見られる。しかし、降下年代についてみると、前者は『日本紀略』承平4（934）年閏正月15日条にある陸奥国分寺の塔消失の記事と発掘所見から10世紀前半としている（白鳥：1980）のに対し、後者は『扶桑略記』延喜15（915）年7月13日条にある「出羽國言上郡灰高二寸諾御桑枯抜之由」の記事から15年説を採っている。その後多賀城跡調査研究所では白鳥氏の年代観を若干修正して10世紀前葉としているが（宮城県多賀城跡調査研究所：1992）、依然として両者の間には10数年の違いがある。噴出断の問題についてはおくとして、名称と年代観については研究所の見解に従っておきたい。

で「地山」と呼んでいる。標高2.2~2.5m。古墳時代以降に形成されたものである。

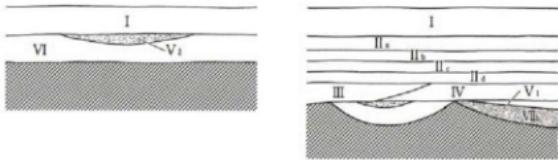
なお、14(E)区や15区では第Ⅰ層の下に造構を覆って黒褐色粘質土がある。第Ⅱ~Ⅶ層との関係は不明であるが、土性・色調などから第Ⅱ層に相当すると推定しておきたい。



B13 (N) 区



B14 (W) 区

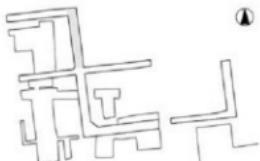


B49区

第8図 層序模式図

3 B13(N)区

掘立柱建物跡1棟、柱列跡1条、溝跡25条、土壙10基などを発見した。それらは調査区のほぼ全域に分布しているが、中央部から南半部にかけて比較的多い。また、本調査区には多くの堆積層が存在しており、その内いくつかの層の上面が遺構確認面となっている。以下、層序と主な遺構について説明する。



(1) 層序

本地区の地形は、北側から南側にかけて、そして西側から東側にかけて緩やかに傾斜している。北西隅では、表土を除去すると直ちに古代の基盤層である黄褐色砂質土（第VII層）が現れたが、それ以外では第III・V₂・VI₁・VI₂・VI₃a・VI₃b・VII層が認められた。第III層は10世紀前葉以降のものであり、古代の範疇に収まるかどうかは明らかでない。古代の層として確実なものは第V₂層より下層であり、第VI₃a層、第VII層、第VII層の各上面がそれぞれ遺構確認面となっている。古代の遺構のはほとんどは第VI₁層によって覆われている。

各層の概要は以下のとおりである。

第I層 表土。現代の水田層

第III層 東壁南端部付近に堆積している黒褐色土。この層は地山である第VII層上に直接堆積していることから、第V～VII層がある時期に削平され、その後に堆積したことが推定される。

第V₂層 10世紀前葉に降下した灰白色火山灰の自然堆積層である。北半部に分布しており、古代以降の水田耕作により著しく攪乱を受けている。北西部では約5cmの厚さで自然堆積している部分がある。

第VI₁層 褐灰色土。北端部及び南東部をのぞいてほぼ全域に分布している。北半部ではやや粘性を帯びているが、大部分は砂質土である。北西部では第V₂層に直接覆われている部分があり、上面からクラックを通して火山灰粒が染み込んでいる部分もある。

第VI₂層 炭化物を含む黒褐色砂質土。南東部に部分的に堆積している。

第VI₃a層 中央部で検出した整地層。地山である黄褐色土を主体とし、第VIIa層上のくぼみを埋めている。上面はSD968溝跡などの確認面となっている。

第VI₃b層 西壁土層断面で確認したオリーブ黄色砂質土。

第VIIa層 北半部に見られる黒褐色粘質土。第VII層（地山）上に直接堆積しており、第VIIa層から掘り込まれた遺構を直接覆っている。

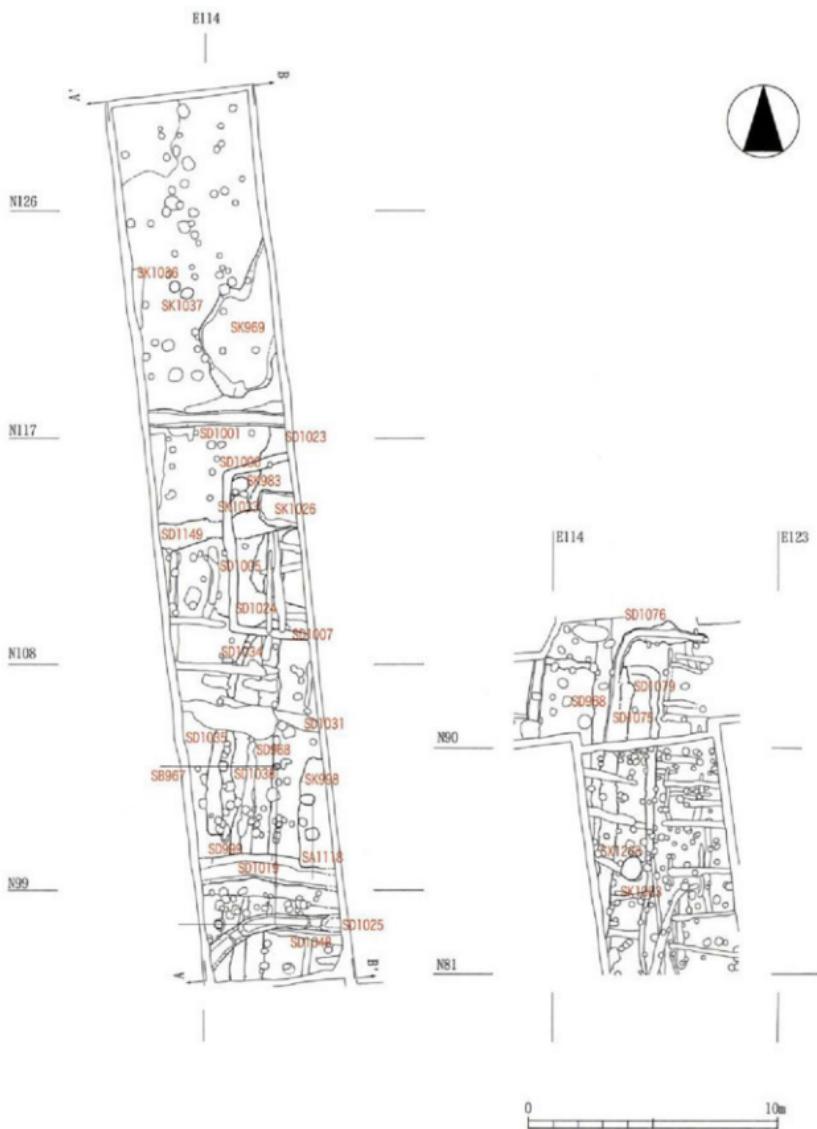
第VII層 黄褐色砂質土層。古代の遺構の基盤層となっている。

(2) 掘立柱建物跡・柱列跡

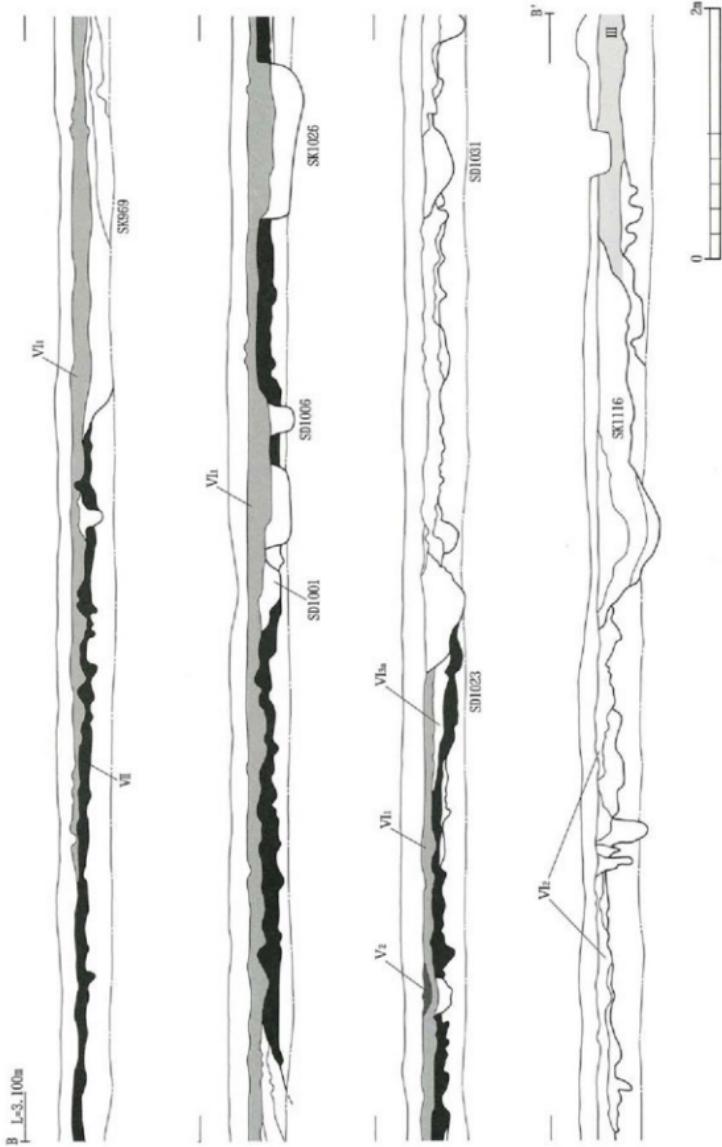
調査区南半部において掘立柱建物跡1棟と柱列跡1条を発見した。この他、建物跡や柱列跡として組み合わない柱穴は南半部に多く見られる。

S B967建物跡（第14図）

南半部の第VII層上で発見した掘立柱建物跡である。4基の柱穴を検出したのみであるが、それらを北妻・南妻及び東側柱列の一部と見て桁行3間、梁行2間以上の南北棟と想定しておきたい。SD968・999・1035・1019・1025・1038と重複しており、SD999・1035より新しく、SD1019・1025より古い。SD968・1038

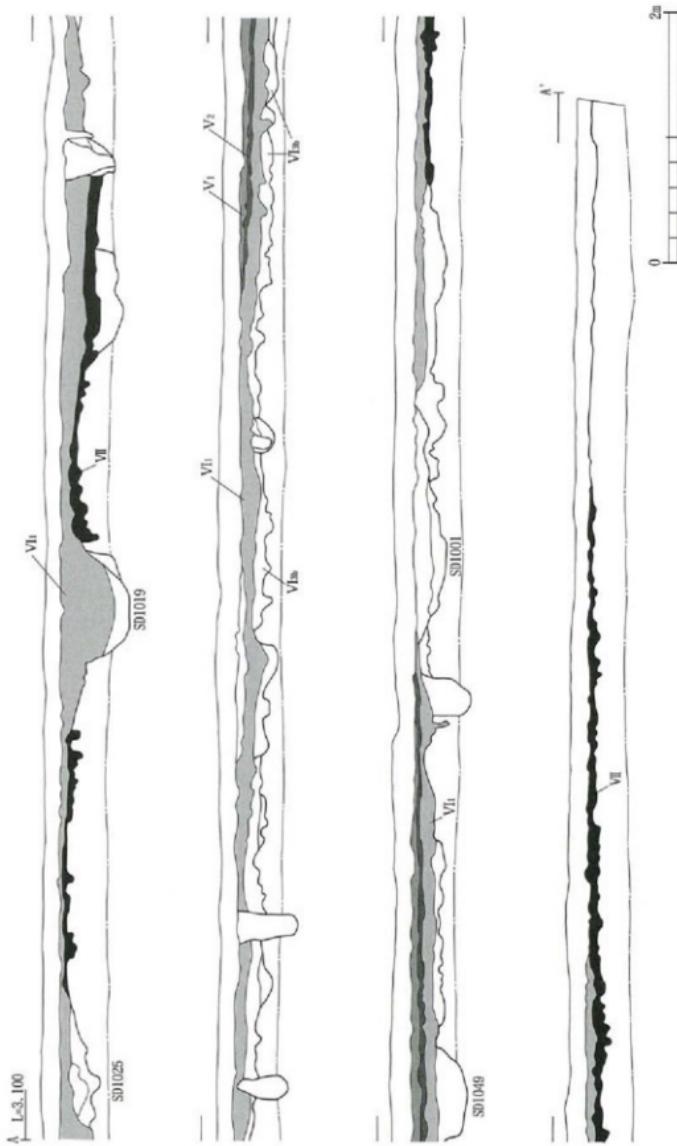


第9図 B13(N)区遺構配図



第10图 B13(N)区夹壁土层断面图

第11图 B13(N)区西壁土层断面



との関係は不明である。方向は、棟通り下の柱穴で見ると北で0度38分東に偏している。桁行については、棟通りで総長6.30m、柱間は東側柱列で2.33mである。梁行柱間は北妻で2.21mである。柱穴は、平面形が方形であり、規模は最大で35×40cm、最小で22×23cmである。掘り方埋土は黒褐色粘質土である。柱痕跡は径12~16cmの円形である。

遺物は、掘り方埋土から土師器杯・甕、須恵器杯の破片が出土している。

S A1118柱列跡（第14図）

南半部のS K998埋土上で発見した柱列跡である。南北に並ぶ2基の柱穴を確認したのみである。方向は南北発掘基準線と一致している。柱間は1.46mである。柱穴の平面形は方形と梢円形であり、規模は前者が45×55cm、後者が長軸60cm、短軸40cmである。掘り方埋土は黒褐色土である。柱痕跡は径12cmの円形である。

遺物は出土していない。

③溝 跡

S D968溝跡（第13・14・118・120図）

調査区中央部からB13(S)区北端部にかけて検出した南北溝跡である。第VII層（地山）上面から掘り込まれており、第VIIa層に覆われている。N113付近において東側へほぼ直角に屈曲しており、南側はB13(N)区北半部を通って調査区外に延びている。S B967、S D1007・1019・1024・1025・1031・1032・1038、S K1028、S X1027と重複している。S B967との関係は不明であるが、他のすべての遺構より古い。方向は、N89.70~113.00で見ると北で約2度東に偏している。規模は、全長30m以上であり、上幅0.6~0.8m、下幅約0.5m、深さ約10cmである。なお、最も良好に遺存する部分では上幅がさらに浅く広がっており（N98~99）、幅約1.4mである。壁面は直立気味に立ち上がりがっている。底面は、北端部コーナー付近とB13(S)区北端部付近とでは約7cmの比高差があり、南側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色砂質土である。

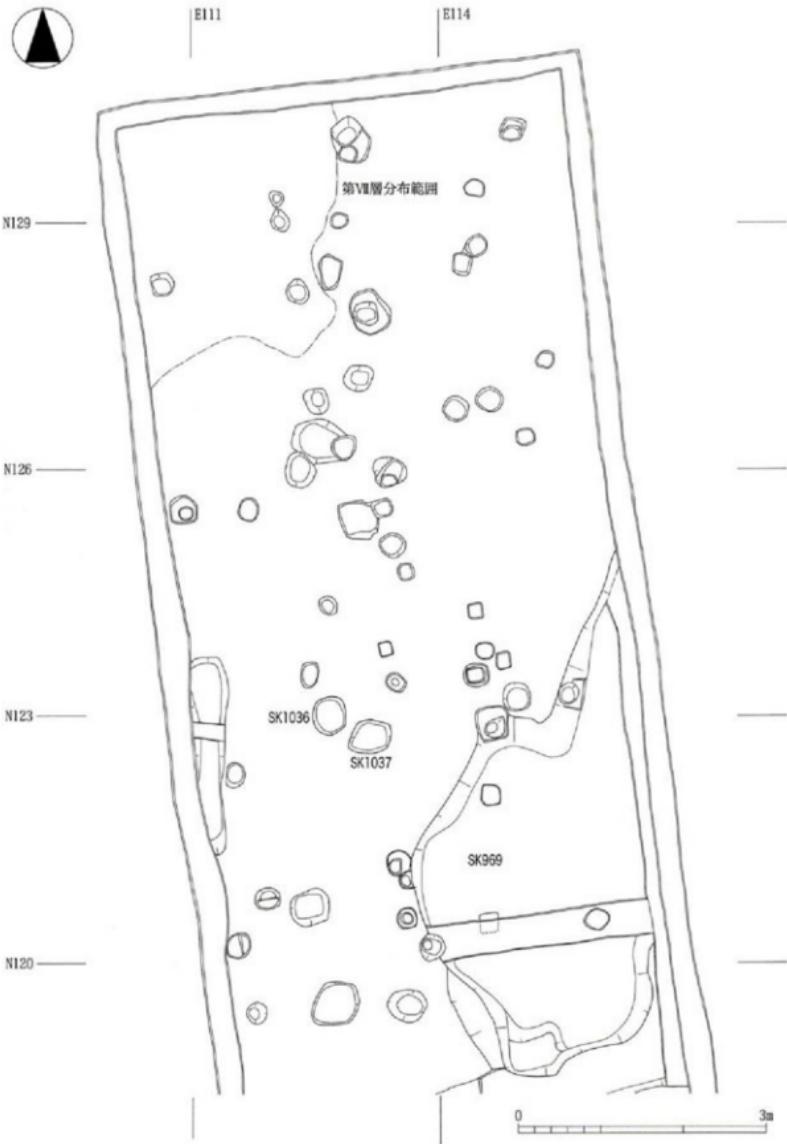
遺物は、土器の小片がわずかに出土しているのみである。

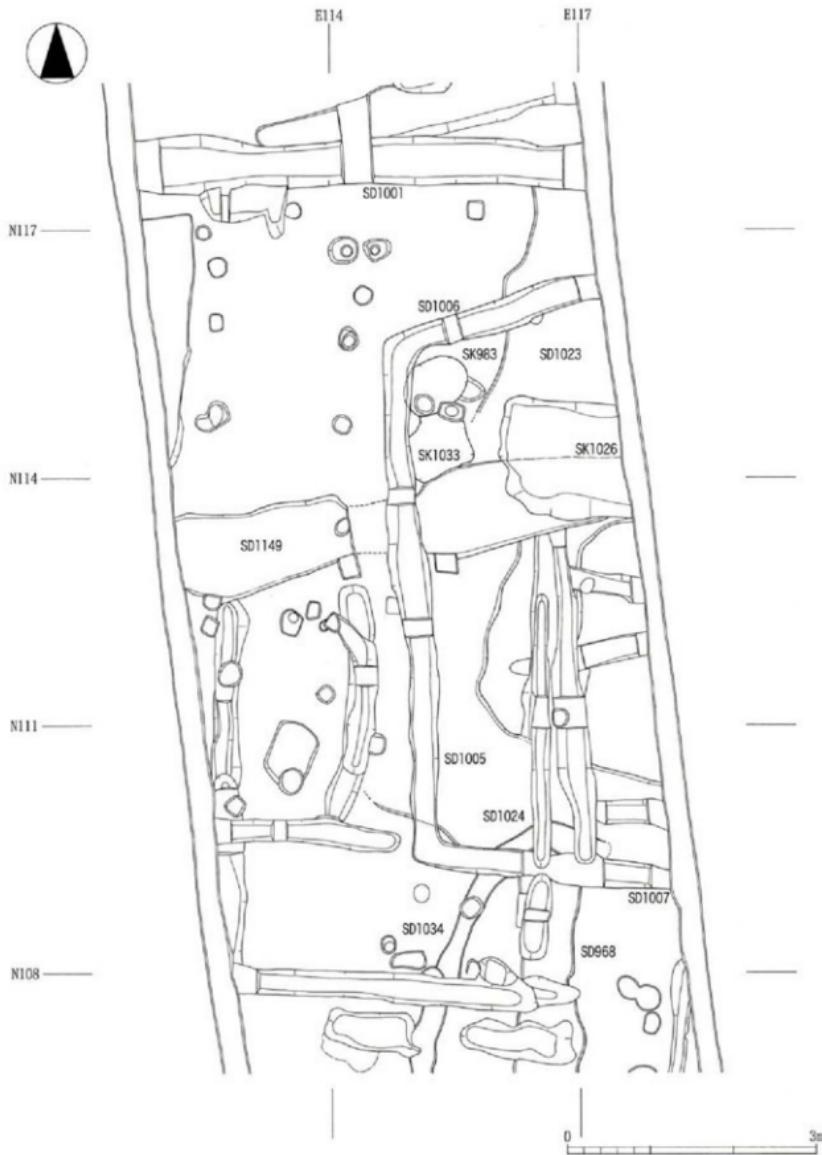
S D1023・1024溝跡（第13図）

中央部で検出した東西・南北溝跡である。第VII層（地山）から掘り込まれており、第VIIa層に覆われている。南北溝（S D1023）と東西溝（S D1024）によって「L」字状になっており、S D1023は約8m、S D1024は約4m検出した。それぞれ調査区外に延びている。S D968・1005・1006・1007・1034、S K1026、S X1027と重複しており、S D968より新しく、他のすべてのものより古い。S K1033とも重複しているが新旧関係は不明である。S D1023の西壁南北部は著しく削平されている。方向は、S D1023が北で約16度東に、S D1024が東で約18度南に偏している。規模は、S D1023が上幅1.1m以上、深さ6cm、S D1024が上幅約1.5m、下幅約1.0m、深さ16cmである。壁面の立ち上がりはいずれも緩やかであり、底面はほぼ平坦でほとんど比高差はない。埋土は黒褐色粘質土（第VIIa層）が直接堆積している。なお、第VIIa層堆積後わずかに壅みが生じた部分は整地層である第VIa層によって埋められている。

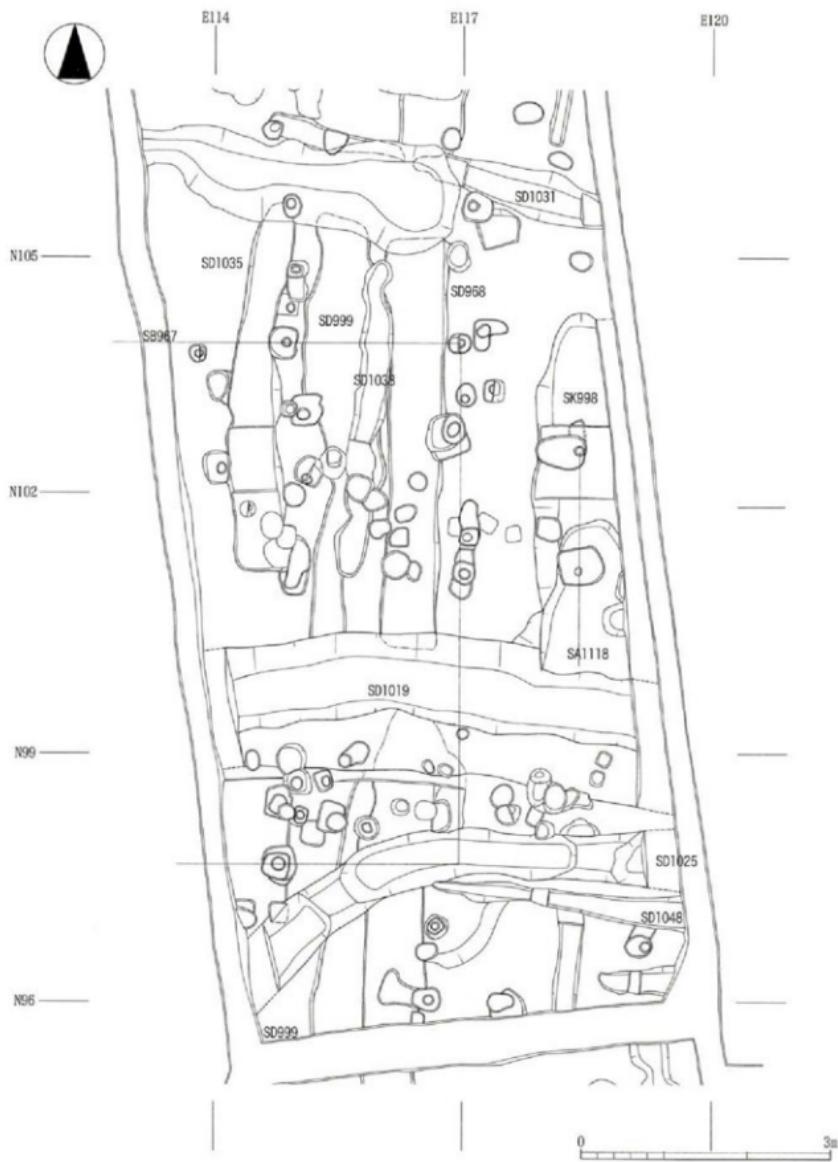
遺物は出土していない。







第13図 B13(N)区平面図(2)



第14図 B13(N)区平面図(3)

S D999溝跡（第14図）

南半部で検出した南北溝跡である。第VII層から掘り込まれており、第VIIa層に覆われている。約10mにわたって検出した。S B967、S D1019・1025・1038、S K1028と重複しており、いずれのものよりも古い。方向は、北半部は北で約4度西に、南半部は北で約4度東に偏しており一定しない。規模は、上幅0.4～1.0mと不規則であり、深さは8cmである。壁面の立ち上がりは緩やかであり、底面はおおよそ平坦である。埋土は、黒褐色および黄褐色の粘質土である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕の破片が出土している。土師器杯・甕はいずれもロクロ調整を行ったものであり、杯底部に糸切痕のあるものが1点ある。

S D1049溝跡（第13図）

中央部で検出した東西溝跡である。第VIIa層上面から掘り込んでおり、第VIa層に覆われている。西壁から東壁にかけて約6m検出し、さらに調査区外に延びている。S D698・1023・1005、S K1026と重複しており、S D698・1023より新しく、S D1005とS K1026より古い。方向は東西発掘基準線におおよそ一致している。規模は、上幅0.7～1.1m、下幅約0.3m、深さ約20cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物は、土師器杯・甕、蓋付壺、須恵器瓶・甕、平瓦などが出土している。土師器蓋付壺は、蓋と身がそれぞれ破片の状態で埋土中に散在していたものがほとんど接合し、ほぼ完全に復元できた（第18図3・4）。焼成・色調は同様であり、寸法から見て組み合うものと考えて問題はない。身の体部は、ロクロ調整後底部に手持ちヘラケズリを施している。体部下半では器壁が1cmを超える部分があり、大きさの割りには厚手である。部分的に黒斑が観察できる。蓋はロクロ調整後天井部を回転ヘラケズリし、リング状のつまみを貼付してロクロナデを施している。その他の出土遺物はいずれも破片資料であり、点数も少ない。土師器杯にはロクロ調整を行ったものがあり、甕には非ロクロ調整で底部に木葉痕の見られるものがある。

S D1031溝跡（第14図）

中央部で検出した東西溝跡である。第VII層上面から掘り込んでおり、第VI₁層に覆われている。東壁から西へ約4.4m検出し、東側はさらに調査区外に延びている。S K1028と重複しており、それより古い。方向は、東で約16度南に偏している。規模は、上幅0.3～0.6m、深さ3～16cmである。底面は、西端部と東壁付近でみると約14cmの比高差があり、東側へ傾斜している。埋土は黒褐色土であり、黄色土が粗く層状に堆積している。

遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕、平瓦（II B類）などが出土している。土師器甕はロクロ調整を行ったものが出土している。

S D1019溝跡（第14図）

南半部で発見した東西溝跡である。第VII層上面から掘りこまれており、第VI₁層に覆われている。約6m検出し、さらに調査区外に延びている。S B967、S D968・999、S K998と重複しており、いずれのものよりも新しい。方向は、直線的な東半分で見ると東で約8度南に偏している。規模は、上幅1.0m、下幅0.5m、深さ40cmである。底面は、東壁際が西壁際より約6cm低く、わずかに東に傾斜している。埋土は、半ばまで第VI₁層が落ち込んでおり、その下から底面まで約15cm黒褐色粘質土が堆積している。第VI₁層が堆積するまでのある時期まで開口状態であったことが推定される。

遺物は、2層から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、平瓦（II B類）などが出土している。土師器杯・

壺はロクロ調整を行ったものが主体を占めており、須恵器杯も切り離しがわかるものは回転糸切り（糸切り）である。土師器杯では両面黒色処理を行ったものが1点出土している。

S D1032溝跡（第13図）

中央部で発見した東西溝跡である。第VII層上面から掘り込んでおり、第VI_b層に覆われている。西壁から東へ約4.5m検出した。S D968・1034と重複しており、それより新しい。方向は、東で約4度南に偏している。規模は、上幅0.3～0.4m、深さ10cmである。底面は、東端部が西壁際より約9cm低くなっている。埋土は、褐灰色粘質土である。

遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯が出土している。土師器杯はすべてロクロ調整を行ったものであり、土師器壺にもロクロ調整を行ったものや内面を黒色処理したものなどがある。須恵器杯は底部の切離しがわかるものが3点あり、すべてヘラ切りである。

S D1001溝跡（第13図）

北半部で発見した東西溝跡である。第24次調査区における大型建物（S B1000）の北辺雨落ち溝（S D1001）の東側延長部分である。第VII_a層上面から掘り込んでおり、第VI_b層に覆われている。約6mにわたって検出し、さらに調査区外に延びている。S D1023と重複しており、それより新しい。方向は、東西基準線とほぼ一致している。規模は、西壁断面を参考にすると約1.0m、最も狭い部分で0.5mであり、深さは30～50cmである。底面の標高値についてみると、西壁断面で2.58m、東壁断面で2.47mである。S B1000建物跡北東隅柱付近と比較すると、西壁付近ではほとんど差がないが、東壁付近では約10cm高くなっている。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物は出土していない。

S D1005・1006・1007溝跡（第13図）

中央部で発見した方形の区画溝である。S D1005が西辺であり、S D1006とS D1007はそれぞれ北辺と南辺の一部である。調査区外東側にさらに延びている。第VII_a層上面から掘り込んでおり、第VI_b層に覆われている。S D968・1023・1024・1034、S K983、S X1027と重複しており、S X1027より古く、そのほかのすべてのものより新しい。方向についてみると、S D1005（西辺）は途中わずかに屈曲しているがおよそ南北基準線と一致しており、S D1006（北辺）は東で約18度北に、S D1007（南辺）は東で約6度南にそれぞれ偏している。規模は、S D1005が長さ約6.2m、上幅0.3～0.5m、深さ10～17cm、S D1006が長さ2.9m以上、上幅0.3～0.4m、深さ約14cm、S D1007が長さ3.1m以上、上幅0.3～0.4m、深さ10～19cmである。

遺物は土師器杯・壺、須恵器杯などが少量出土している。土師器杯・壺はロクロ調整を施したものであり、壺には内面をヘラミガキ・黒色処理したものもある。須恵器杯は底部破片が1点あり、ヘラ切り無調整である。

S D1025溝跡（第14図）

南半部で発見した東西溝である。西半部が大きく南側に屈曲しており、その延長部分はB49区で検出した。第VI_b層上面から掘り込んでおり、第VI_b層に覆われている。S B967、S D968・999・1048、S K1116と重複しており、S K1116より古く、他のものより新しい。方向についてみると、直線的な東半分はおよそ東西発掘基準線に一致している。規模は、上幅0.5～0.7m、下幅0.3～0.4mであり、深さは最も深い部分で約30cm、最も浅い部分で約20cmである。底面にはブリッジ状に掘り残した部分が2カ所あり、段差

がある。埋土は1・2層に区分され、いずれも黒褐色粘質土を主体としている。

遺物は、1・2層からそれぞれ土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、丸瓦が出土している。1層では、土師器杯・甕とともにロクロ調整を行っているものが大部分を占めている。土師器杯についてみると、ロクロからの切離し方法が明らかな資料15点の内、回転ヘラケズリが1点、手持ちヘラケズリが7点、回転糸切りが7点である。同様に、須恵器杯では4点あるうちのすべてが回転糸切りである。2層でも土師器杯・甕とともにロクロ調整を行っているものが大部分を占めている。土師器杯についてみると、ロクロからの切離し方法が明らかな資料3点の内、回転糸切りが2点、手持ちヘラケズリが1点であり、須恵器杯では2点の内ヘラ切りが1点、回転糸切りが1点である。

S D1038溝跡（第14図）

南半部の第VIIa層上面で検出した南北溝である。S B967、S D968・999と重複しており、S D968・999より新しい。方向についてみると、北で約6度東に偏している。規模は、全長約3.9m、上幅0.3~0.4mであり、深さは5cmである。底面の比高差はほとんどない。埋土は、黒褐色粘質土である。

遺物は土師器甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯が少量出土している。

S D1034溝跡（第13図）

中央部の第VII層上で検出した南北溝である。北半部は大きく東側に屈曲している。南北約3.2m、東西約0.8mにわたって検出した。S D1007・1032・1024と重複しており、S D1024より新しく、S D1007・1032より古い。方向についてみると、南半部の直線的な部分では北で約22度東に偏している。規模は、上幅0.2~0.4m、深さは最も深い部分でも7cmである。埋土は地山である黄褐色砂質土ブロックを含む黒褐色粘質土である。

遺物は、土師器甕等の破片が少量出土している。

S D1035溝跡（第14図）

南半部の第VII層上で検出した南北溝である。約4.4mにわたって検出した。S B967・S K1028と重複しており、それより古い。方向についてみると、北半部は北で約12度東に偏しており、南半部は北でわずかに西に偏している。規模は、上幅0.5~0.7mであり、深さは9cmである。底面はおよそ平坦であり、比高差はほとんどない。埋土は黒色粘質土である。なお、本遺構の北側に位置するS D1034とは一連の遺構の可能性がある。

遺物は土師器杯・須恵器杯の破片少量と転用甕が1点出土している。転用甕は須恵器杯（ヘラ切り）の底部及び体部を利用したものである。底面全体に使用痕が観察され、特に中央部は著しく磨耗している（第18図7）。土師器杯ではロクロ調整を行ったものが出土している。

S D1048溝跡（第14図）

南半部の第VII層上で検出した東西溝である。3.5m検出し、東側はさらに調査区外に延びている。S D1025と重複しており、それより古い。方向についてみると、東で約7度南に偏している。規模は、上幅0.2~0.5m、深さ5cmである。底面はほぼ平坦であり、比高差はほとんどない。埋土は黒褐色粘質土である。

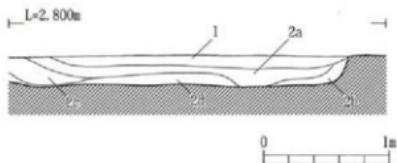
遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕の破片が出土している。土師器杯は、非ロクロ調整のものもあるが、ロクロ調整を行ったものがほとんどである。土師器甕もロクロ調整を行ったものが出土している。須恵器杯は底部を回転糸切りしたものが1点出土している。

(4) 土 壤

S K969土壤 (第12・15図)

北西部で検出した不整形の土壤である。第VIIa層上から掘り込まれており、第VIb層に覆われている。規模は長軸7.0m以上、短軸約3.4mであり、深さ約30cmである。壁面はおおよそ緩やかに立ち上がりっている。埋土はおおよそ2層に区分され、1層は地山である黄褐色砂質土ブロックを多量に含む黒褐色粘質土であり、2層は同じく黄褐色砂質土を多く含む褐灰色土である。これらは南側から北側に傾斜して堆積しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、1層からは須恵器杯・瓶・甕、平瓦、丸瓦などの破片が少量とウマの歯が出土している。2層からは土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、ヘラ描き土器、平瓦などが出土している。2層の土師器高台付杯はロクロ調整を行ったものである。土師器甕には体部を叩きの後ロクロ調整したもの、非ロクロ・ハケメ調整のものなどみられる。須恵器杯はロクロからの切離しが明らかかなものが6点出土している。すべてヘラ切りであり、その内手持ちヘラケズギが施されたもの1点、底部にヘラ描きがあるもの1点がある。平瓦は一枚作りによるII B類が1点出土している。

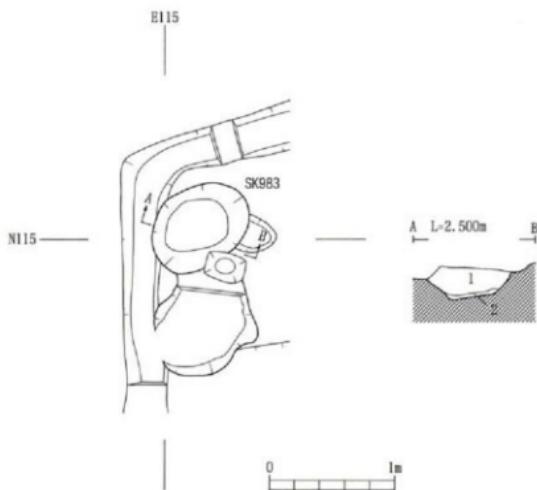


第15図 S K969断面図

S K983土壤 (第13・16図)

中央部で検出した梢円形の土壤である。第VII層（地山）から掘り込まれており、第VIIa層に覆われている。S D1005、S K1033と重複しており、後者より新しく前者より古い。規模は、長径0.9m、短径0.6m、深さ30cmである。壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は、2層に区分することができ、1層は黒褐色粘質土を含む厚い黄褐色土であり、2層は厚さ約5cmの炭化物層で底面全体に広がっている。1層は人為的に埋め戻した土層と見られる。

遺物は、2層から須恵器甕体部破片が1点出土している。



第16図 S K983平面図・断面図

S K1033土壙（第13図）

中央部で検出した円形の土壙である。第VII層（地山）から掘り込まれており、第VIIa層に覆われている。S D1005、S K983と重複しており、それより古い。S D1023とも重複しているが新旧関係は不明である。規模は、長径0.9m以上、短径0.8m以上、深さ3～7cmである。壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土である。

遺物は出土していない。

S K1036土壙（第12図、図版3-3）

北半部で検出した円形の土壙である。第VII層（地山）から掘り込まれており、第VIIa層に覆われている。規模は直径0.4～0.5mであり、深さは40cm以上である。壁面の立ち上がりは急である。埋土は黒褐色土である。

遺物は上層からウマが出土している。上顎骨のみ左右揃った状態であり、頭部を下にして出土した。

S K1037土壙（第12図、図版3-3）

北半部 S K1036の東側で検出した円形の土壙である。第VII層（地山）から掘り込まれており、第VIIa層に覆われている。規模は直径約0.6mである。埋土は黒褐色土である。

遺物はウマが出土している。右下顎骨の一部である。

S K1026土壙（第13図）

中央部で発見した方形の土壙である。第VIIa層上面で検出し、第IV層に覆われている。第IV層は検出面より約10cmの深さまで落ち込んでいる。S D1024と重複しており、それより新しい。規模は長辺1.6m以上、短辺1.4mであり、深さは40cmである。壁面はやや急に立ち上がっており、底面はおおよそ平坦であるが、全体に南側に傾斜している。埋土は、黒褐色粘質土であり、地山である黄褐色土が混入している。黄褐色土は北半部では粗い層状であり、南半部ではブロック状である。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・瓶、丸瓦、ヘラ描き土器が出土している。土師器杯には底部破片が4点あり、その内2点が手持ちヘラケズリしたものである。甕にはロクロ調整を行ったものがある。須恵器杯にはおおよそ完形が1点、底部が残存する破片が4点あり、ロクロからの切離しはいずれもヘラ切りである。

S K998土壙（第14図）

南半部の第VII層（地山）上面で検出した南北に長い長方形の土壙である。S B1118、S D1019と重複しており、それより古い。南半部が一段深くなっているが、西壁が一致し、埋土の変化も認められないことから同一の遺構と考えられる。規模は、長辺4.4m以上、短辺1.3m以上（1.5m未満）であり、深さは北半部の最も浅い部分で6cm、南半部の最も深い部分で18cmである。埋土は黒褐色粘質土である。

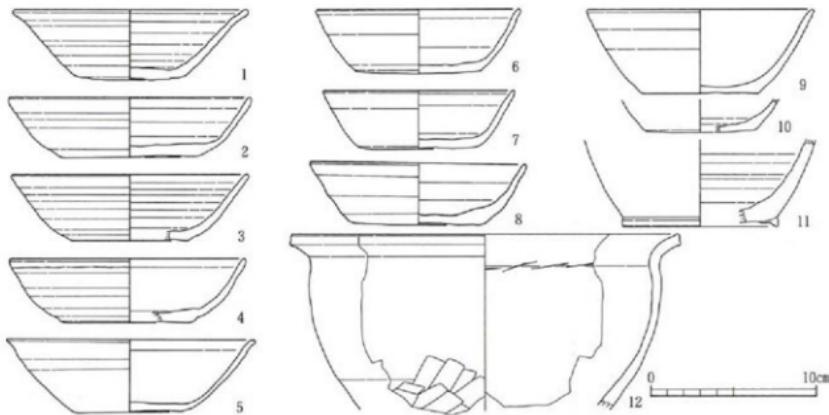
遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、平瓦、丸瓦が出土している。土師器杯は識別不能な破片を除きすべてロクロ調整を行ったものである。ロクロからの切離しが明らかなもの4点の内、回転糸切り1点、回転糸切り（糸切り）後手持ちヘラケズリ3点である。土師器甕もロクロ調整を行ったものがほとんどであり、ロクロからの切離しが回転糸切りのものが1点ある。また、内面黒色処理を施したものが1点ある。須恵器杯は底部破片4点の内、回転糸切りが3点、手持ちヘラケズリが1点である。

⑤ 遺構外出土遺物

第I層及び遺構検出作業時に土師器、須恵器、須恵系土器などの土器類をはじめ、製塩土器、砥石など

が出土している。

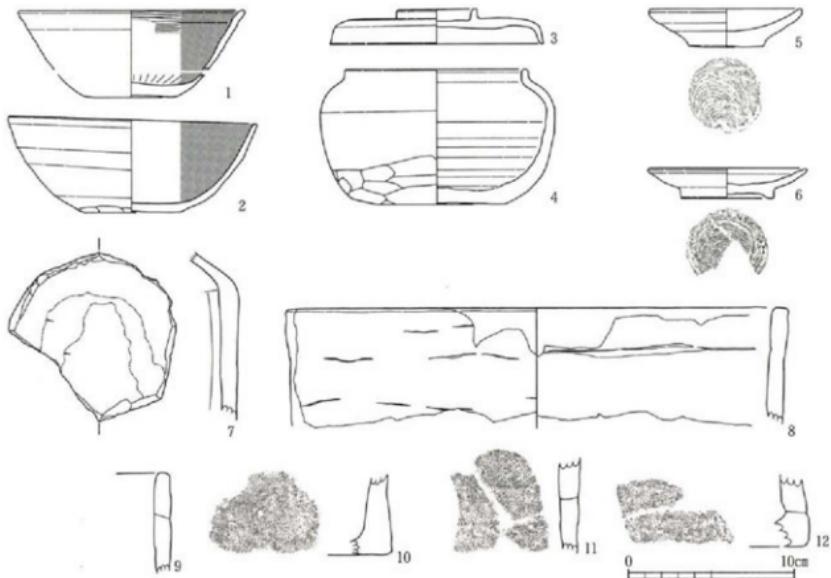
第18図5・6はS D1019埋没後のくぼみから出土した須恵系土器小型杯と高台付皿である。基本層位との関係は明確にできなかった。製塙土器は第I層及び第IV層から小片が出土している。比較的大きな口縁部破片資料が1点あり、復元すると口径約28cmである（第18図12）。



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S K998-1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.3) 8/24	6.2 24/24	4.3	R-1746	
2	須恵器・杯	S K1026-2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.8) 7/24	8.0 24/24	3.7	R-1759	
3	須恵器・杯	S K998-1層	【外面】ロクロナデ 底部：糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.4) 2/24	(7.0) 8/24	4.0	R-1749	
4	須恵器・杯	S D1149-1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.4) 7/24	7.9 24/24	3.9	R-1760	
5	須恵系土器 ・杯	S K998- 焼出面	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	15.1 15/24	6.4 24/24	4.4	R-1748	
6	須恵器・杯	S K999-2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.4) 3/24	7.7 21/24	3.9	R-1747	
7	須恵器・杯	S D1005-1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(11.6) 8/24	7.2 24/24	3.6	R-1728	
8	須恵器・杯	S K969-2層	【外面】ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ、線刻「×」 【内面】ロクロナデ	13.1 16/24	8.0 24/24	3.8	R-1739	図版9-1
9	土師器・杯	S K998-1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.7) 9/24	7.1 24/24	5.1	R-1726	
10	須恵器・杯	S K969-2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	- 19/24	(6.6) -	-	R-1722	
11	須恵器・杯	S K1026-2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、ヘラ描き「II」 【内面】ロクロナデ	14.1 12/24	8.3 24/24	4.4	R-22	図版9-2
12	須恵器・甕	S K1026-2層	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(23.5) 4/24	-	-	R-1729	

第17図 B13(N)区出土遺物(1)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S K998・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.8) 4/24	5.8 24/24	5.3	R-1725	
2	土師器・杯	S K998・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下端) 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	15.1 17/24	5.9 24/24	5.9	R-28	図版9-3
3	土師器・蓋付壺蓋	S D1149・1層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(12.9) 9/24	7.4mm径 4.9	2.1	R-123	図版9-4
4	土師器・蓋付壺	S D1149・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下端~底部) 【内面】ロクロナデ	11.1 23/24	7.6 24/24	8.2	R-124	図版9-5
5	須恵系土器 小型杯	S D1019・ 横出面	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(9.3) 6/24	4.5 24/24	2.4	R-1731	
6	須恵系土器 高台付皿	S D1019・ 横出面	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(9.6) 4/24	(5.6) 13/24	1.8	R-1730	
7	須恵器・杯 (瓶用硯)	S D1035・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ、磨耗痕	-	-	-	R-401	
8	製塙土器	水田層		(30.4) 2/24	-	-	R-125	
9	製塙土器	第II層		-	-	-	R-130	
10	製塙土器	水田層		-	-	-	R-126	
11	製塙土器	水田層		-	-	-	R-135	
12	製塙土器	水田層		-	-	-	R-127	

第18図 B13(N)区出土遺物(2)

土 壤 種 種	標 名	深 底 层	不 明 杯	土壤系土層					日 本 土	亞 洲 土	歐 洲 土	非 機 動 土	不 明 瓦	平 施 瓦	野 土 瓦	不 明 石	不 明 土	不 明 不 明	計		
				無 植 物	草 菜	高 台	低 台														
口 口 口	口 口 口	口 口 口	その他の 種	6		8		2	2	1											18
高 杯		高 杯		1	1	14															21
回 櫻 根 + 土 壤		回 櫻 根 + 土 壤		6		3		1													10
高 台 和 木		高 台 和 木		1 4	26	3	3	45	1	2	5	5			5 4	1	1				131
S01009		S01009		9	111	14	2	4	155	33	1	5	26								410
S01007		S01007						1	4		1										4 10
S01025		S01025						4													11
S01031		S01031						2													3 5
S01032		S01032						1													6
S01034		S01034						2													30
S01035		S01035						1			1										12
S01036		S01036						12	10		1	3									5
S01046		S01046						2			2										6
S01049		S01049						2			1	1									3
S01060		S01060						3	1		1	13	1	6	12	6	1	1			52
S01066		S01066						1	31	4	1	25	4	3	7	10	2	1	1		97
S01066		S01066						2			18		5	3				1	1		40
S01026		S01026						4			1				1	2	1				14
S01028		S01028						18 0 188 219 0 0 6 0 1 7 124 51 0 1	0 0 0 0 0 0 2 0	3 17 11	0 45 55	37 0 0 0 0 0 0 0 0 6 5 1 1 1 0	0 0 0 0 0 0 0 0 0 3 23 10 0 0 0 0 0	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 18 872							
計	6 6 6 0 1 18 0 188 219 0 0 6 0 1 7 124 51 0 1	0 0 0 0 0 0 2 0	3 17 11	0 45 55	37 0 0 0 0 0 0 0 0 6 5 1 1 1 0	0 0 0 0 0 0 0 0 0 3 23 10 0 0 0 0 0	0 18 872														

表 2 B13(N)区出土遺物集計表

4 B13(S)区

掘立柱建物跡2棟、溝跡13条、土壙9基の他多数の柱穴、小溝を発見した。

本調査区では、第I層(表土)下に厚さ10~30cmの黒褐色粘質土(第III層)が堆積しており、灰白色火山灰が自然堆積する遺構を覆っている。この層は、特に南西隅付近に厚く堆積しており、層中には古代の土器類を多量に含んでいる。断面観察によるとこの層の上面から掘り込んでいる小溝、柱穴なども少數確認しているが、ほとんどの遺構はこの層によって覆われている。第III層と地山である第VII層との間にいくつかの堆積層が存在するが詳細を明らかにすることはできなかった。遺構の検出面はすべて第VII層(地山)上面である。

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区南側で2棟発見した。しかし、調査区北半部と南半部では組み合わせが不明な柱穴を多数発見していることから、さらに多くの建物跡の存在が考えられる。

S B1081建物跡(第20・22図)

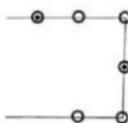
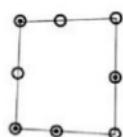
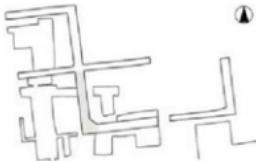
調査区南側で発見した掘立柱建物跡である。桁行・梁行ともに2間の南北棟である。柱穴は8個すべてを検出し、その内4個で柱痕跡を確認した。SK1081・1095と重複しているが、新旧関係は不明である。方向についてみると、北妻は東で北へ、南妻は東で南へそれぞれ偏しているが、東西両側柱はおおよそ発掘基準線の方向と一致している。桁行については、西側柱列で総長4.23m、柱間は南より約2.1m、約2.1mである。梁行については南妻で総長約4.0m、柱間は西より1.62m、約2.4mである。柱穴の平面形は円形と方形があり、規模は前者が直径21~26cm、後者が一辺27~35cmである。掘り方埋土は黒褐色砂質土である。柱痕跡は直径11~15cmの円形である。

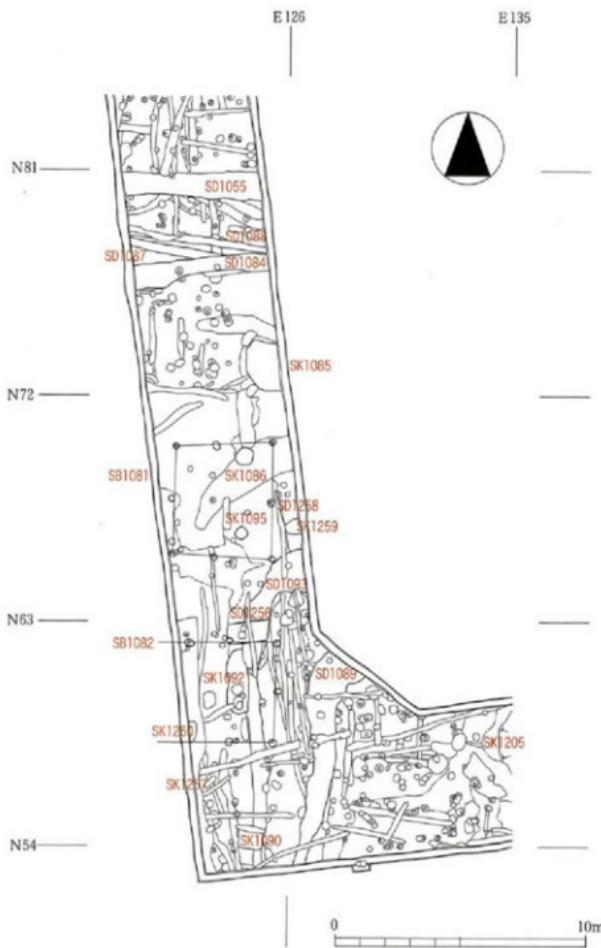
遺物は出土していない。

S B1082建物跡(第20・24図)

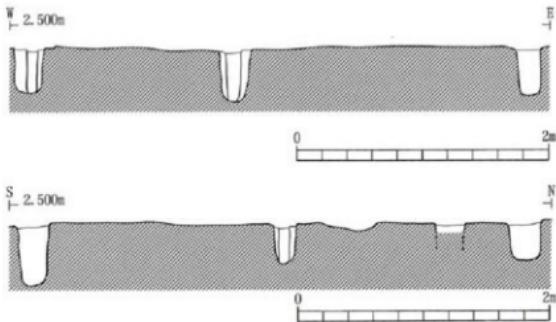
調査区南側で発見した掘立柱建物跡である。6個の柱穴を検出したにすぎないが、それらの配置から西側にのびる桁行3間以上、梁行2間の東西棟と推定した。柱痕跡はわずか2個の柱穴で確認したのみである。本建物跡は、SD1089・1093・1153、SK1092、小溝跡などと重複しており、一部の小溝より古く、SD1089より新しい。方向は、北側柱列でみるとおおよそ東西発掘基準線と一致している。桁行については、北側柱列で総長約3.5m以上、柱間は東より約1.9m、約1.6m、南側柱列で東妻より1間分が約1.8mである。梁行については、東妻が総長約4.0m、柱間は南より約2.0m、約2.0mである。柱穴の平面形は円形と方形があり、規模は前者が直径28~31cm、後者が一辺22~38cmである。掘り方埋土は黒褐色砂質土及び黒色粘質土である。柱痕跡は直径8~12cmの円形である。

遺物は出土していない。





第19図 B13 (S) 区遺構配置図



第20図 SB1081・1082柱穴断面図

(2) 溝 跡

S D1084溝跡（第23図）

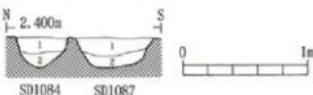
調査区南側で発見した東西溝である。SD1087と重複しており、それより新しい。方向は東で約6度北に偏している。規模は上幅0.6~1.1m、下幅0.2~0.3m、深さは20cmである。底面はおよそ平坦であり、水平である。埋土は黄灰色粘土を主体とし2層に区分できる。1層は炭化物粒、2層には炭化物粒と地山ブロックが含まれている。

遺物は土師器杯・壺、須恵器杯、灰釉陶器瓶、土器片製円板、鼈形土器などが出土している。土器片製円板は土師器・須恵器壺の破片を転用したものである。

S D1087溝跡（第21・23図）

調査区北側で発見した東西溝である。SD1084と重複しており、それより古い。方向は東で約11度南に偏している。規模は上幅0.3~0.4m、下幅約0.2m、深さ30cmである。底面はおよそ水平である。埋土は黒褐色粘土である。

遺物は土師器杯、須恵器杯が出土している。土師器杯は回転糸切り無調整のものが多く、手持ちヘラケズリしたものも少数ある。須恵器杯は回転糸切り無調整のものである。

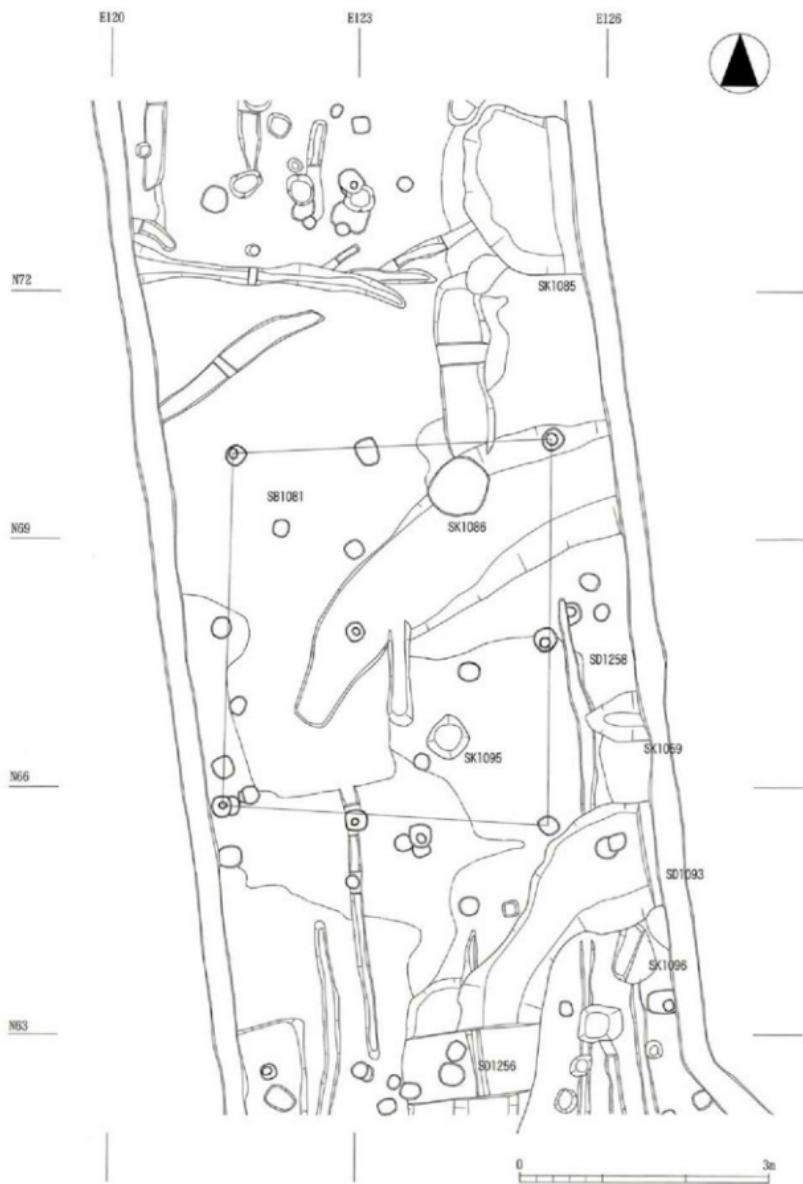


第21図 SD1084・1087断面図

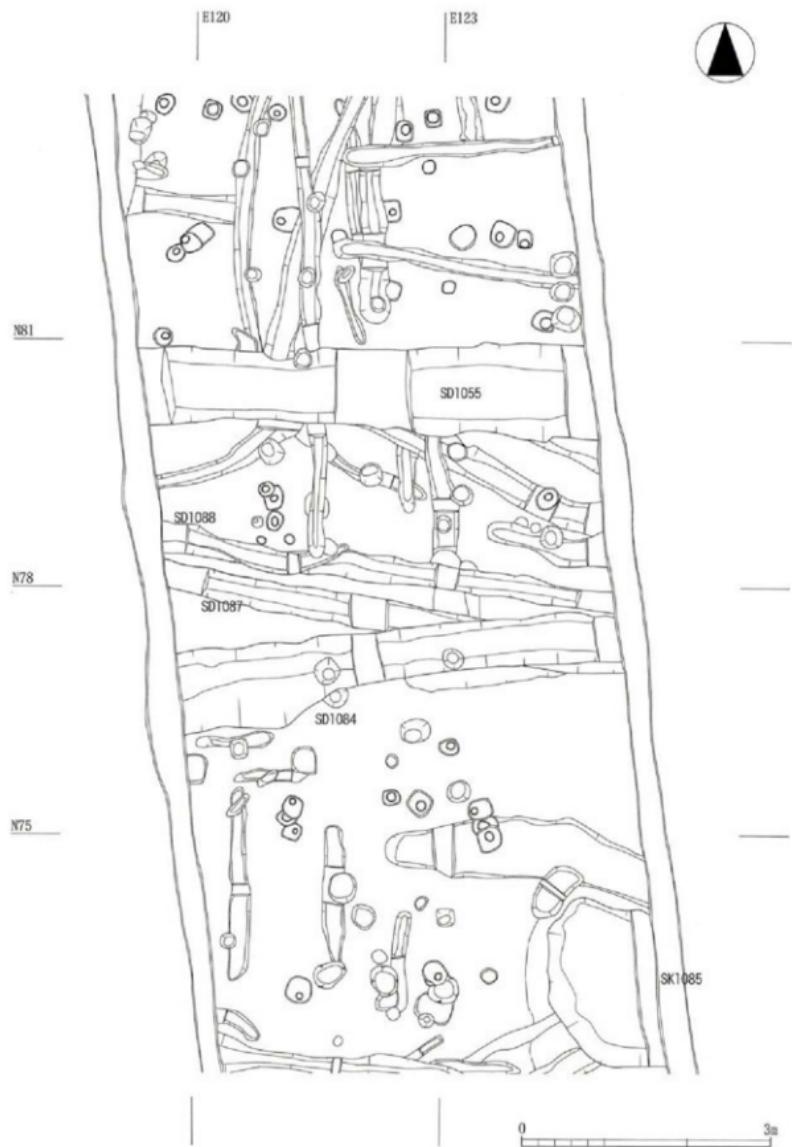
S D1088溝跡（第23図）

調査区北側で発見した東西溝である。小溝と重複しており、それより古い。方向は東で約7度南に偏しており、SD1087とはほぼ平行している。規模は上幅約0.3m、下幅約0.1m、深さ約30cmである。底面はおよそ水平である。埋土は黒褐色土を主体とし、2層に区分できる。1層には炭化物粒と砂、2層には地山ブロックが含まれている。

遺物は土師器杯・壺が出土している。杯は糸切り後手持ちヘラケズリしたものである。



第22図 B13(S)区平面図(1)

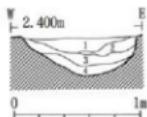


第23図 B13 (S) 区平面図(2)

S D1089溝跡（第24・25図）

調査区南端部で発見した南北溝である。S B1082、小溝と重複しており、それより古い。方向は、北で約5度東に偏しており、N61付近で東側に屈曲している。規模は上幅0.2~0.5m、下幅約0.2m、深さ約40cmである。底面は北側から南側に向かって傾斜しており、比高差は12cmである。埋土は4層に区分でき、1層は黒褐色、2層は暗灰黄色、3層は黄褐色土のブロックを主体としていることから人為的に埋め戻したものと考えられる。4層は地山である黄褐色土を層状に含む自然堆積層である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶などが出土している。土師器杯は回転糸切りしたものや手持ちヘラケズリしたものがある。甕はすべてロクロ調整を行ったものである。須恵器杯はロクロからの切り離しがヘラ切りと回転糸切りとがあり、前者が圧倒的に多い。



第24図 S D1089断面図

S D1079溝跡（第122図）

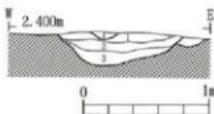
調査区北側中央部で発見した南北溝である。S D1055と重複しており、それより古い。方向は、北で約2度東に偏している。規模は、上幅0.2~0.4m、下幅約0.1m、深さ約10cmである。底面は北側から南側に向かって傾斜しており、比高差は12cmである。埋土は褐灰色粘土の単一層であり、炭化物粒を含んでいる。なお、本溝跡は北側の49区中央部においてもその延長部分を検出している。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶などが出土している。

S D1093溝跡（第22・26図）

調査区南端部で発見した南北溝である。S B1082、SK1093と重複しており、SK1093より古い。S B1082との関係は不明である。方向は南北発掘基準線とおおよそ一致しており、N65付近で東側に屈曲している。規模は、上幅0.3~0.7m、下幅0.2~0.5m、深さは最も残存状況が良好な部分で20cmである。底面はおおよそ水平である。埋土は黒褐色土であり、砂や炭化物粒をわずかに含んでいる。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯、製塙土器などが出土している。土師器杯はロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものであり、甕は非ロクロ調整で、底部に木葉痕の見られるものがある。須恵器杯はヘラ切り無調整のもの、ヘラ切り後手持ちヘラケズリしたもの、回転ヘラケズリしたものなどがある。



第25図 S D1093断面図

S D1094溝跡

調査区北西隅で発見した南北溝である。S D1151と重複しており、それより古い。方向は北で約6度東に偏している。規模は、上幅0.5m、下幅0.5m、深さ25cmである。埋土は黒色砂質土、黒色粘質土、黒褐色土など4層に区分できるが、いずれも地山ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻されたような状況を



第26図 B13(S)区平面図(3)

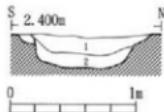
呈している。

遺物は出土していない。

S D1055溝跡（第23・27図）

調査区北側で発見した東西溝である。S D1079・1151、小溝などと重複しており、S D1079より新しく、S D1151よりも古い。方向は、発掘基準線とおおよそ一致している。規模は、上幅0.8~1.2m、下幅0.6~0.7m、深さ20cmである。底面は東側から西側に向かってわずかに傾斜しており、比高差は7cmである。埋土は黒褐色土を主体として2層に区分できる。1層は地山粒、炭化物粒を含み、2層には地山ブロック、砂を含んでいる。

遺物は土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯、製塙土器、土器片製円板、動物遺体などが出土している。土器片製円板は土師器甕、須恵器瓶の破片を転用したものである。動物遺体はウマの下顎骨である。



第27図 S D1055断面図

S D1151溝跡（第23・122図）

調査区北西隅で発見した南北溝である。S D1055・1094、小溝と重複しており、小溝より古く、S D1055・1094よりも新しい。方向は北で6度東に偏している。規模は、上幅0.6~0.7m、下幅約0.2m、深さ12cmである。平面はおおよそ水平である。埋土は黒褐色土を主体とし、最上層には灰白色火山灰粒が含まれている。

なお、本溝跡は第24次調査B50区においても検出し、S D1087東西溝とは一連の遺構であることを確認した。また、北側49区では本溝跡の延長線上でS D1075・1076を検出した。その内埋土に灰白色火山灰粒を含むS D1076は、本溝跡と一連の遺構である可能性が高い。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、土器片製円板などが出土している。土師器杯はロクロからの切り離しがわかる資料が1点あり、その内訳は回転糸切り無調整10点、回転糸切り後手持ちヘラケズリしたものが1点である。土器片製円板は須恵器甕破片を転用したものである。

S D1152溝跡

調査区南端部で発見した南北溝である。S D1093、SK1090・1092と重複し、それより古い。方向は南北発掘基準線とおおよそ一致している。規模は、上幅0.3~0.7m、下幅0.2~0.5m、深さ20cmである。底面はおおよそ水平である。埋土は黒褐色土で、炭化物粒や砂をわずかに含んでいる。

遺物は土師器甕、須恵器杯・高台付杯、丸瓦などが出土している。

S D1256溝跡（第22図）

調査区南半部で発見した南北方向の小溝である。S D1093の埋土上面で検出した。S B1082と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は、全長3.4m、幅11~23cm、深さ5cmであり、方向は北で約4度西に偏している。埋土は酸化鉄を多く含む黒褐色土である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯が出土している。土師器杯は、ロクロ調整で切離しは糸切りである。甕はロクロ調整で底部に回転糸切り痕を残すものと、非ロクロ調整で底部に木葉痕を残すもの

とがある。須恵器杯は、ロクロからの切離しがヘラ切りによるものと回転糸切りしたものとがあり、回転ヘラケズリしたものもある。

S D1258溝跡（第22図）

調査区南半部で発見した南北方向の小溝である。S D1093、S K1259と重複しており、それらより新しい。方向は、南北発掘基準線とおおよそ一致している。規模は、全長3.4m、幅0.2m、深さ7cmであり、埋土は地山粒を含む黒褐色土である。

遺物は土師器杯が出土している。

(3) 土壙・その他の遺構

S K1083土壙

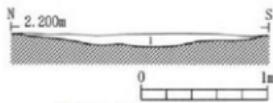
調査区北西隅で発見した方形の土壙である。小溝と重複しておりそれより新しい。規模は長辺1.0m、短辺0.8m、深さ20cmである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に区分され、いずれも地山ブロックを含んでいることから人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は土師器杯が出土している。ロクロ調整を行ったものであり、手持ちヘラケズリしたものもある。

S K1085土壙（第23・28図）

調査区中央部の東壁際で発見した梢円形の土壙である。規模は、長軸1.9m以上、深さ20cmである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がりがっている。埋土は黒褐色粘質土であり、砂や地山ブロックを多く含んでいる。

遺物は須恵器杯・長頸瓶などが出土している。杯はヘラ切り後手持ちヘラケズリを施したものである。

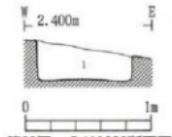


第28図 S K1085断面図

S K1086土壙（第22・29図）

調査区中央部東側で発見した円形の土壙である。規模は直径0.7m、深さ30cmである。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。埋土は黒色粘質土である。

遺物は土師器壺、須恵器杯が出土している。須恵器杯はロクロからの切り離しがヘラ切りである。



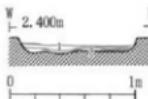
第29図 S K1086断面図

S K1090土壙（第24・30図）

調査区南西部で発見した方形の土壙である。小溝、S D1151と重複しており、小溝より古く、S D1151より新しい。規模は一辺約0.9m、深さ8cmである。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。埋土は2層に区分される。1層は地山ブロックと炭化物を多量に含む人為的な堆積であり、2層は砂の自然堆積層である。

遺物は、土師器杯、須恵器杯が出土している。土師器杯はロクロ調整で糸切り痕が見られるものがあり、

須恵器杯はロクロからの切り離しがヘラ切りと回転糸切りによるものがそれぞれある。

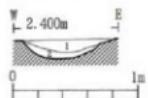


第30図 SK 1090断面図

S K 1092土壙（第24・31図）

調査区南側中央で発見した楕円形の土壙である。長軸は南北方向である。S D1093・1151と重複しており、S D1093より古く、S D1151より新しい。規模は、長軸2.9m、短軸0.8m、深さ20cmである。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。埋土は、1層が炭化物粒を含む黒褐色土、2層が地山ブロックを含む黄灰色粘土である。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。土師器甕は非ロクロ調整で底部に木葉痕がみられる。須恵器杯はロクロからの切り離しがヘラ切りである。



第31図 SK 1092断面図

S K 1095土壙（第22図）

調査区中央部東側で発見した方形の土壙である。規模は一辺約0.5m、深さ10cmである。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。

遺物は、平瓦が3点出土している。いずれも埋土上層から出土したものである。

S K 1096土壙

調査区南東部で発見した方形の土壙である。S D1094と重複しており、それより新しい。規模は長辺0.7m、短辺0.5m、深さ0.1mである。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。

遺物は出土していない。

S K 1257土壙（第24図）

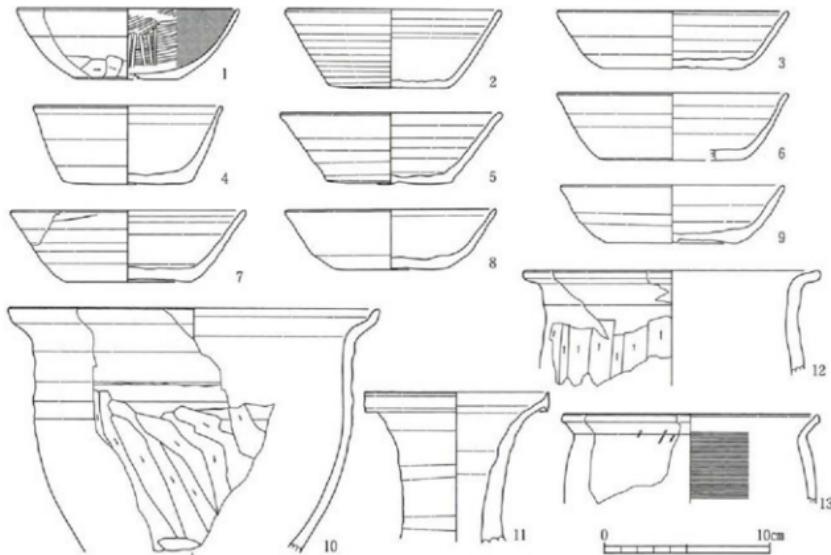
調査区南西隅で発見した楕円形の土壙である。東西に細長く、長径0.6m、短径0.2m、深さ11cmである。埋土は黄褐色土を主体とし、黒褐色土ブロックを含んでいる。

遺物は土師器杯、須恵器杯が出土している。土師器杯はロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものや、回転糸切り無調整のものなどがある。須恵器杯はロクロからの切離しがヘラ切りである。

S K 1259土壙（第22図）

調査区南半部の東壁際で発見した楕円形の土壙である。東西に細長く、長径0.7m以上、短径0.6m、深さ5cmである。埋土は2層に区分でき、1層は黒褐色土、2層は黒褐色粘土ブロックを含む黄褐色土である。

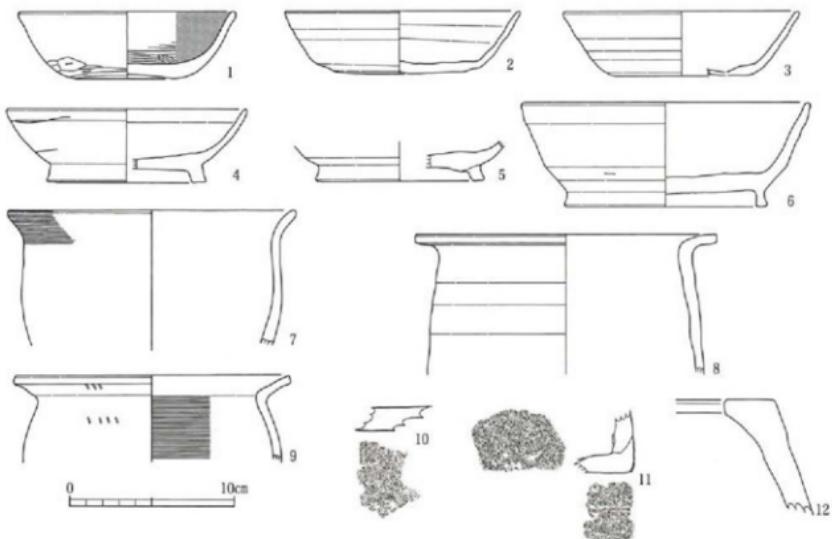
遺物は須恵器杯が出土している。回転糸切り後手持ちヘラケズリしたものである。



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S KI257・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下端) 底部:手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(13.5) 4/24	(6.2) 8/24	4.3	R-1756	
2	須恵器・杯	S D1089・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(13.2) 11/24	6.8 24/24	4.8	R-1807	図版9-11
3	須恵器・杯	S D1089・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(14.0) 9/24	(8.4) 12/24	3.5	R-1805	
4	須恵器・杯	S D1089・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(11.5) 1/24	(7.8) 7/24	4.8	R-1802	
5	須恵器・杯	S D1089・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(13.5) 10/24	7.5 24/24	4.3	R-1808	
6	須恵器・杯	S D1089・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(14.0) 4/24	(8.7) 5/24	4.1	R-1804	
7	須恵器・杯	S D1089・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転条切り 【内部】ロクロナデ	(14.3) 1/24	(7.8) 17/24	4.4	R-1806	
8	須恵器・杯	S D1089・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(12.8) 1/24	(6.9) 21/24	3.7	R-1803	
9	須恵器・杯	S D1256	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	13.5 15/24	8.3 24/24	3.6	R-1744	図版9-10
10	土師器・杯	S D1084・1層	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内部】ロクロナデ	(22.6) 2/24	—	—	R-1740	
11	須恵器・長颈瓶	S D1089・2層	【外面】ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	11.1 24/24	—	—	R-29	
12	土師器・壺	S D1256	【外面】ロクロナデ→ヘラナデ 【内部】ロクロナデ	(17.8) 3/24	—	—	R-1816	
13	土師器・壺	S D1089・1層	【外面】叩き→ロクロナデ 【内部】回転ハケメ	(15.6) 4/24	—	—	R-1811	

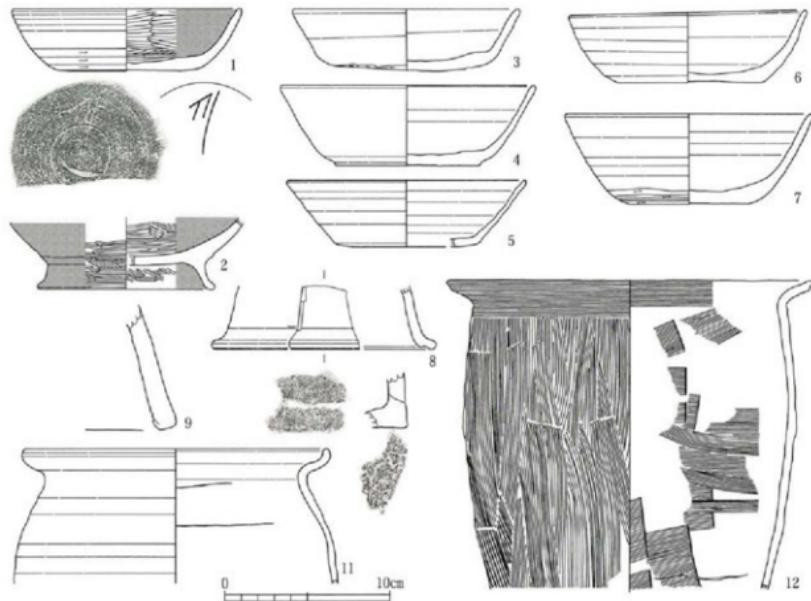
第32図 B13(S)区出土遺物(1)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	SD1093・I層	【外面】クロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下端) 底部:回転糸切り 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 7/24	(7.2) 12/24	4.1	R-1813	
2	須恵器・杯	SD1093・I層	【外面】クロナデ 底部:ヘラ切り	14.3 14/24	7.9 24/24	3.8	R-27	図版9-12
3	須恵器・杯	SD1093・I層	【外面】クロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】クロナデ	(14.3) 7/24	(7.8) 9/24	3.9	R-1817	
4	須恵器・ 高台付杯	SD1093・I層	【外面】クロナデ 底部:回転ヘラケズリ→高台貼付 【内部】クロナデ	(14.6) 10/24	(9.7) 11/24	4.5	R-712	図版9-6
5	須恵器・ 高台付杯	SD1093・I層	【外面】クロナデ 底部:ヘラ切り→高台貼付 【内部】クロナデ	— 6/24	(10.2) 6/24	—	R-397	
6	須恵器・ 高台付杯	SD1093・I層	【外面】クロナデ→回転ヘラケズリ(体部下端) 底部:回転ヘラケズリ→高台貼付 【内部】クロナデ	(17.5) 9/24	(12.3) 21/24	6.3	R-1812	図版9-7
7	土師器・壺	SD1093・2層	【外面】口縁:ヨコナデ 【内部】	(17.5) 4/24	—	—	R-1815	
8	土師器・壺	SD1093・I層	【外面】クロナデ 【内部】クロナデ	(18.2) 3/24	—	—	R-1861	
9	土師器・壺	SD1093・I層	【外面】平行叩き→クロナデ 【内部】回転ハケメ	(16.8) 3/24	—	—	R-1810	
10	製塙土器	SD1055・I層		—	—	—	R-I32	
11	製塙土器	SD1093・I層	【外面】底部:手持ちヘラケズリ	—	—	—	R-129	
12	竈形土器	SD1084・I層	【外面】ナデ 【内部】ナデ	—	—	—	R-113	

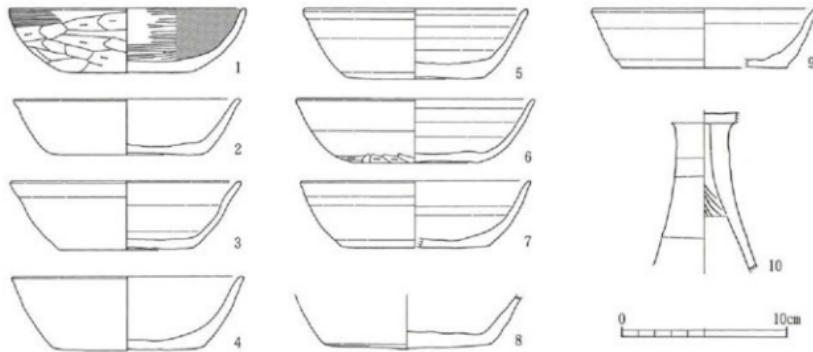
第33図 B13(S)区出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 口径 底径 底径 器高	残存率 (%)	残存率 (%)	登録番号	図版番号	
1	土師器・杯	S K1259・1層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ(体部下半) 底部:ヘラ切り→回転ヘラケズリ、ヘラ焼き 【内部】ヘラミガキ-黒色処理	13.8 4/24	(8.4) 15/24	-	3.8	R-356	図版9-17
2	土師器・高台付杯	S D1258・2層	【外面】ヘラミガキ-黒色処理 底部:ヘラ切り→高台貼付 【内部】ヘラミガキ-黒色処理	- 7/24	(10.8) - 7/24	-	-	R-36	
3	須恵器・杯	S K1085・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り→手持ちヘラケズリ 【内部】ロクロナデ	13.9 20/24	9.4 24/24	-	3.7	R-10	
4	須恵器・杯	S K1273・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	15.5 5/24	8.6 24/24	-	4.9	R-1757	
5	須恵器・杯	S K1259・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	14.5 6/24	(8.6) 17/24	-	4.0	R-1758	
6	須恵器・杯	S K1092・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転系切り 【内部】ロクロナデ	14.4 17/24	8.7 24/24	-	4.4	R-560	
7	須恵器・杯	S K1273・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ、ヘラ焼き「×」	15.0 13/24	(7.1) 14/24	-	5.5	R-1766	図版9-13
8	円面鏡	S K1085・1層	【外面】ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	- 3/24	(13.6) -	-	-	R-1741	
9	龜形土器	P-299	【外面】平行叩き 【内部】ヨコナデ	-	-	-	-	R-1786	
10	製塙土器	P-104・掘り方	【外面】 【内部】	-	-	-	-	R-128	
11	土師器・壺	S X1150・1層	【外面】ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	18.7 9/24	-	-	-	R-1745	
12	土師器・壺	S K1273・1層	【外面】ヨコナデ→ハケメ 【内部】ヘラナデ	22.1 7/24	-	-	-	R-1762	

第34図 B13(S)区出土遺物(3)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S X1205・1層	【外面】口縁: ヨコナデ 体部下半～底部: 手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.4 18/24	8.1 24/24	3.9	R-1754	図版9-8
2	須恵器・杯	S X1205・1層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 8/24	(9.6) 11/24	3.4	R-1750	
3	須恵器・杯	S X1206・1層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.1) 7/24	8.2 24/24	4.2	R-1771	
4	須恵器・杯	S X1205・1層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.1) 7/24	(9.1) 9/24	4.5	R-331	
5	須恵器・杯	S X1205・1層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.6) 5/24	8.2 24/24	4.3	R-1752	
6	須恵器・杯	S X1271・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下端) 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.6) 13/24	(7.6) 13/24	3.9	R-1761	図版9-9
7	須恵器・杯	S X1205・1層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 2/24	(9.0) 7/24	4.0	R-1751	
8	須恵器・杯	S X1205・1層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	—	10.0 16/24	—	R-1753	
9	須恵器・杯	S X1206・1層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.7) 6/24	(10.0) 7/24	3.6	R-1755	
10	須恵器・ 高杯	S X1205・1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	—	—	—	R-402	

第35図 B13(S)区出土遺物(4)

SK1260土壤 (第24図)

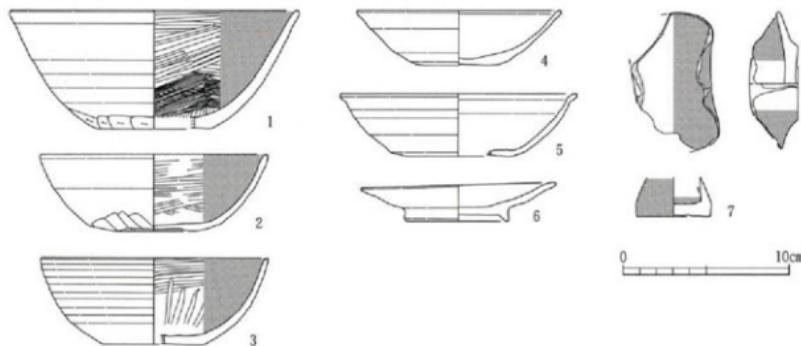
調査区南西隅の西壁際で発見した方形の土壤である。第III層上面から掘り込まれており、規模は南北1.1m、東西0.7m以上、深さ18cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、地山ブロックや炭化物粒を含んでいる。

遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯が出土している。土師器杯はロクロからの切り離しが回転糸切りしたものであり、須恵器杯はロクロからの切離しがヘラ切り無調整のものと回転糸切り無調整のものとがある。

SX1205落ち込み (第24図)

14(W)区との境界で発見した不整形の落ち込みである。直径約3mの搅乱壙によって東側が大きく破壊されている。規模は、南北3.9m以上、東西1.5m以上であり、深さは約30cmである。埋土は黒褐色粘質土である。

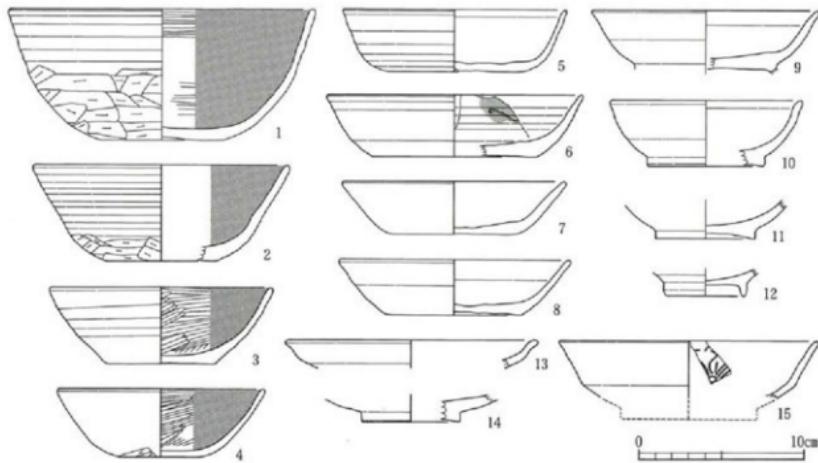
遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。土師器杯は非ロクロ調整で手持ちヘラケズリしたものが1点ある。甕も非ロクロ調整である。須恵器杯はヘラ切り無調整のものと手持ちヘラケズリを施したものとがある。



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径残存率	底径残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	P-227・抜き穴	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下端) 底部:手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(17.5) 4/24	(7.1) 5/24	7.2	R-1768	
2	土師器・杯	P-33・柱痕跡	【外面】ロクロナデ 底部:糸切り→手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(13.8) 8/24	(8.6) 11/24	4.6	R-1767	
3	土師器・杯	P-33・柱痕跡	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 7/24	(6.4) 8/24	5.3	R-1769	
4	須恵器系土器 ・杯	P-297・掘り方	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内部】ロクロナデ	(12.3) 5/24	(4.6) 16/24	3.3	R-1763	
5	須恵器・杯	P-5・埋土	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(14.4) 9/24	(6.2) 9/24	3.8	R-1764	
6	須恵器系土器 ・高台付皿	SX1263・埋土	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り→高台貼付 【内部】ロクロナデ	11.8 18/24	6.2 24/24	2.2	R-38	図版9-14
7	土師器・耳皿	P-53・掘り方	【外面】黒色処理 底部:回転糸切り 【内部】黒色処理	-	4.4 24/24	-	R-37	

第36図 B13(S)区出土遺物(5)



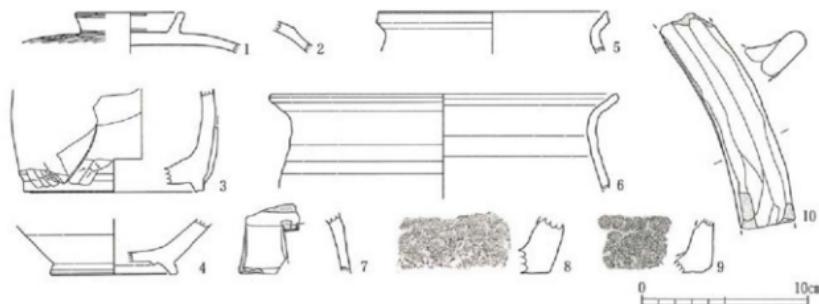
単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 mm	底径 mm	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ (体部下半) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(18.6) 6/24	7.6 24/24	8.0	R-346		
2	土師器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ (体部下端) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(15.6) 4/24	(7.2) 5/24	5.9	R-1830		
3	土師器・杯	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	13.6 8/24	6.9 12/24	4.7	R-351		
4	土師器・杯	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ (体部下端) 底部:手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(12.6) 13/24	5.0 17/24	4.2	R-355		
5	須恵器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.6) 1/24	(8.6) 7/24	3.8	R-1823		
6	須恵器・杯	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ・油煙付着 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(15.6) 1/24	(10.0) 11/24	3.8	R-1773		
7	須恵器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.6) 10/24	(7.8) 13/24	3.3	R-1822		
8	須恵器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.1) 2/24	8.3 24/24	3.4	R-1824		
9	須恵器・高台付杯	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	13.8 24/24	—	—	R-41		
10	須恵系土器 高台付杯	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(11.7) 3/24	(7.0) 6/24	4.1	R-367		
11	縁釉陶器 碗	P-11・1層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ (体部下端) 底部:割り出し高台 【内面】ロクロナデ	— —	(6.0) 10/24	—	R-195		
12	灰釉陶器 小柄	第Ⅲ層	【外面】底部:高台貼付→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→施釉	— —	(4.6) 1/24	—	R-194		
13	縁釉陶器 不明	不明	【外面】ロクロナデ→施釉 【内面】ロクロナデ→施釉	(15.4) 2/24	—	—	R-197		
14	縁釉陶器 皿	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ→施釉 底部:割り出し高台 【内面】ロクロナデ→施釉	— —	(6.0) 6/24	—	R-196		
15	縁釉陶器 陰刻花文鏡楕	第Ⅰ層	【外面】ヘラミガキ→施釉 【内面】ロクロナデ→陰刻花文→施釉	(15.6) 2/24	—	—	R-211	卷頭図版	

第37図 B13(S)区出土遺物(6)

S X1263ピット (第120図)

調査区北西部で発見した小ピットである。S D1151の埋土上面で検出した。平面形は円形であり、規模は直径23cm、深さ25cmである。須恵系土器高台付皿（第36図6）がほぼ完全な状態で出土している（図版4-4）。



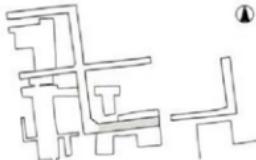
単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径残存率	底径残存率	器高	登録番号	図版番号
1	ミガキの須恵器・蓋	第Ⅲ層	【外面】ヘラミガキ 【内面】ヘラミガキ	—	ツマミ径 6.6	—	R-40	図版9-16
2	須恵器・蓋	第Ⅰ層	【外面】ヘラミガキ、沈線 【内面】ヘラミガキ	—	—	—	R-1778	
3	須恵器・手付瓶	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	—	(11.0) 8/24	—	R-398	図版9-15
4	須恵器・瓶	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	—	(7.7) 4/24	—	R-476	
5	土師器・甕	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ、スヌ付着	(13.9) 3/24	—	—	R-750	
6	土師器・甕	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(20.8) 10/24	—	—	R-1774	
7	円面磚	第Ⅲ層	【外面】 【内面】	—	—	—	R-474	
8	製塙土器	第Ⅰ層	【外面】 【内面】	—	—	—	R-137	
9	製塙土器	第Ⅰ層	【外面】 【内面】	—	—	—	R-133	
10	肧形土器	第Ⅲ層	【外面】 【内面】	—	—	—	R-1782	

第38図 B13(S) 区出土遺物(7)

5 B14(W)区

掘立柱建物跡 5 棟、井戸跡 1 基、溝跡 18 条、土壌 14 基などを発見した。また、調査区中央部と東側においていくつかの堆積層を確認した。以下、層序と主な遺構について説明する。



(1) 層序

中央部の E145~157 付近では、第 I 層（表土）を除去するとほとんどの部分で直ちに第 VII 層（地山）が現れたが、その他では第 III・VI₁・VI_{2a}・VI_{2b}・VIIc 層の堆積を確認した。第 VI₁ 層については、土色・土性が異なることから第 VI_{2a} 層と第 VI_{2b} 層に一応区分したが、その前後の層との新旧関係は共通しており、同様の時間幅で捉えることが可能である。また、灰白色火山灰層（第 V 層）は遺構内埋土としてのみ認められる。各層の概要は以下のとおりである。

第 I 層 現代の水田層

第 III 層 東端部の S D935 溝跡や中央部の S D945 溝跡など規模の大きな溝跡の窪みに堆積している黒色砂質土。厚さ約 10cm。灰白色火山灰が自然堆積する遺構を直接覆っている。

第 VI_{2a} 層 中央部から東部にかけて部分的に分布する焼土混じりの黒褐色土層。灰白色火山灰より古く、中央部では第 VI_{2a} 層、東部では第 VI_{2b} 層を直接覆っている。

第 VI_{1b} 層 S E948 埋没後、そのくぼみを埋め、さらにその周辺部にも及んだ整地層。

第 VI_{2a} 層 中央部で第 VIIc 層上に堆積している黒褐色土。上面は天長 6 年（829）の木簡が出土した S D945A 溝跡、更に灰白色火山灰が自然堆積している S D945B 溝跡の検出面となっている。また、8 世紀末頃の S D949 溝跡を直接覆っている。

第 VI_{2b} 層 東部にのみ分布する砂を多く含む砂質土層。第 VIIc 層を直接覆っており、厚さは 5cm。この層の上面は、灰白色火山灰に覆われる S D935 溝跡より更に古い S E948 井戸跡の検出面となっている。

第 VIIc 層 調査区中央部をのぞくほぼ全体に分布する黒色粘土層。遺物は含んでおらず、第 VII 層上のくぼみに自然堆積したものと考えられる。最も厚いところで約 10cm である。

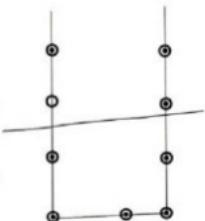
第 VIII 層 周辺一帯の基盤となっている黄褐色砂質土。

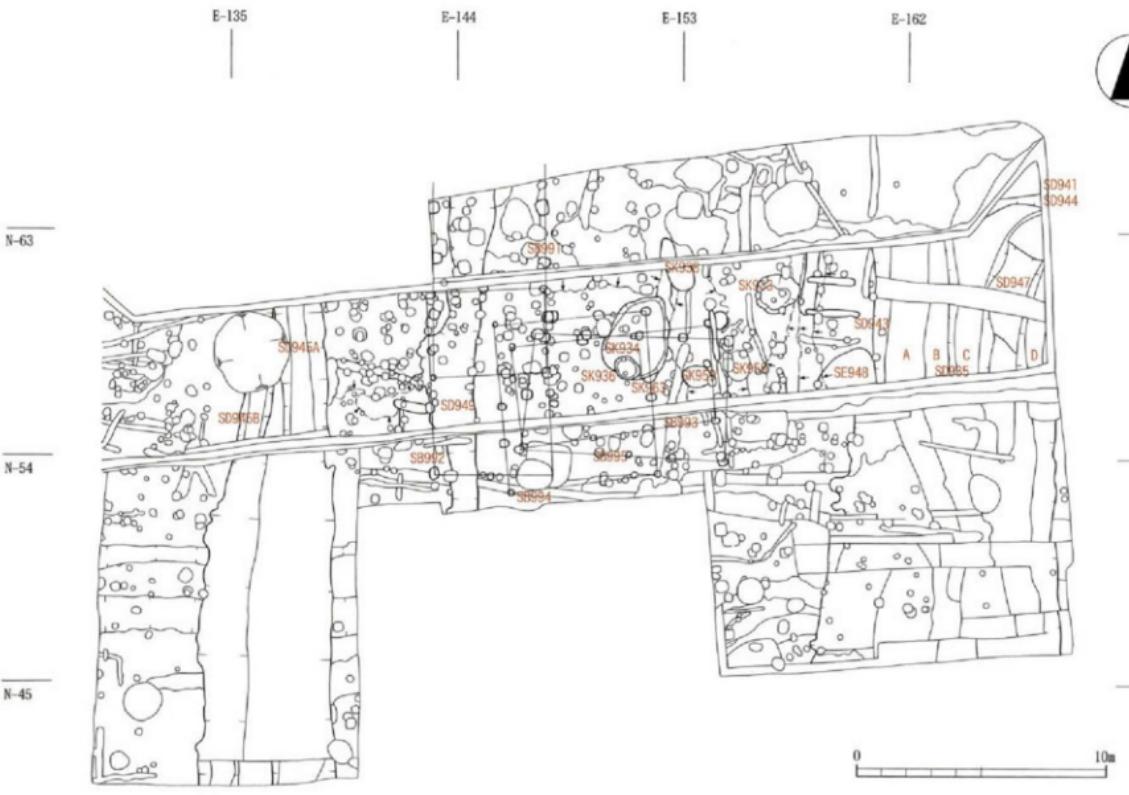
(2) 掘立柱建物跡

中央部において 5 棟発見した。検出面はすべて第 VII 層（地山）上面である。

S B991 建物跡（第 40 図）

桁行 3 間以上、梁行 2 間の南北棟掘立柱建物跡である。調査区内では南妻と東西両側柱を 1 間分検出したにすぎず、その北側は第 24 次調査 61 区で確認している。9 個の柱穴を検出し、その内 8 個で柱痕跡を確認した。S B994・S D949 と重複しており、S D949 より新しく、S B994 より古い。方向は、西側柱列でみると北で 5 度 58 分西に偏している。桁行については、西側柱列で総長 6.71m 以上、柱間は南から 2.27m、2.09m、2.03m である。梁行については、南妻で総長 4.47m、柱間は西から 2.85m、1.85m である。柱穴の平面形は方形であり、規模は最も大きいもので 50×62cm、最も小さいもので一辺 37cm である。検





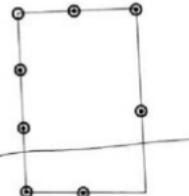
第39図 B14(W)区遺構配置図

出面からの深さは20~40cmである。掘り方埋土は黒褐色粘土を主体として炭化物や焼土粒を含むものと、黄褐色砂質土を主体とするものがある。柱痕跡は直径18~20cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。なお、西側柱列南西隅から3間目と東側柱列南東隅から2間目の柱穴で柱の切取穴を確認した。

遺物は、掘り方埋土から土師器杯・甕、須恵器杯（ヘラ切り）・甕、丸瓦、柱痕跡から土師器杯（ロクロ調整）、切取穴から土師器杯（ロクロ調整）、須恵器杯が出土している。また、検出作業の段階で埋土上面から土師器杯（ロクロ調整）・甕・小型甕、須恵器杯・甕・長頸瓶・小瓶、丸瓦が出土している。

S B992建物跡（第40図）

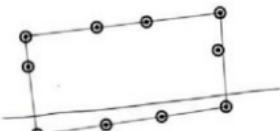
桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。北東隅の柱穴は第VI₁a層に覆われている。南妻は南側の第24次調査57区で確認している。南東隅柱を除く8個の柱穴を発見し、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。また、北西隅柱穴と南西隅柱穴では切取穴を確認した。S D949と重複しており、それより新しい。方向は、西側柱列でみると北で4度西へ偏している。桁行については、西側柱列で7.20m、柱間は南から2.92m、2.18m、2.28mである。梁行については、北妻で4.52m、柱間は西より2.14m、2.37mである。柱穴の平面形は方形を基調としており、楕円形のものもある。規模は最も大きなもので38×54cm、最も小さなもので20×26cmである。検出面からの深さは19~38cmである。掘り方埋土は黄褐色砂質土に黒褐色土粒を含むものと灰黄褐色粘質土を主体とするものがある。柱痕跡は直径10~20cmの円形である。埋土は黄色土を含む黒褐色粘質土が主体である。



遺物は、柱穴検出時に土師器杯（手持ちヘラケズリ）・土師器甕（ロクロ調整）、須恵器杯・甕等の小片が少量出土している。

S B993建物跡（第40図）

桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。東妻の柱穴は第VI₁a層に覆われている。南側柱列は南側の第24次調査57区に延びているが、すべての柱穴を検出し、柱痕跡も確認した。S B995、S K934と重複しており、いずれのものよりも古い。方向は、西側柱列でみると北で4度14分西へ偏している。桁行については、北側柱列で総長7.80m、柱間は西より2.80m、2.06m、3.01mである。梁行については、東妻で総長3.83m、柱間は南より2.23m、1.61mである。柱穴は、平面形が方形であり、規模は最大で45×42cm、最小で25×24cmである。検出面からの深さは14~39cmである。掘り方埋土は、黄色土を含む灰黄褐色粘質土と、黒褐色粘土を主体とするものがある。柱痕跡は直径16~10cmの円形であり、埋土は灰黄褐色粘土および黒褐色粘土である。



遺物は、土師器甕（ロクロ調整）が少量出土している。

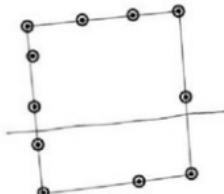
S B994建物跡（第40図）

桁行4間、梁行3間の南北棟掘立柱建物跡である。南妻と東西両側柱1間分は南側の第24次調査57区で確認した。S K970や、第VI₁a層上面で検出したS K934と重複しており、S K934より新しく、S K970よりも古い。方向は、西側柱列でみると北で5度38分西へ偏している。規模は、桁行は西側柱列で6.81m、柱間は南より2.01m、1.49m、2.00m、1.33mである。梁行は、北妻で5.97m、柱間は、西より2.12m、



第40図 SB991・992・993・994・995平面図

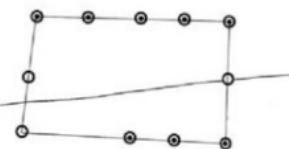
1.93m、1.91mである。柱穴は、南妻の南西隅から1間目、東側柱列の北東隅から1間目、南東隅から1間目の3個を検出できなかつたが、その他の11個を検出し、柱痕跡も確認した。柱穴は、平面形がおおよそ方形であり、規模は最も大きいもので1辺約40cm、最も小さいもので1辺約20cmである。検出面からの深さは27~43cmである。掘り方埋土は黄色土粒を含む灰黄褐色粘土が主体である。柱痕跡は直径8~18cmの円形であり、埋土は灰黄褐色粘土および黒褐色粘土を主体としている。



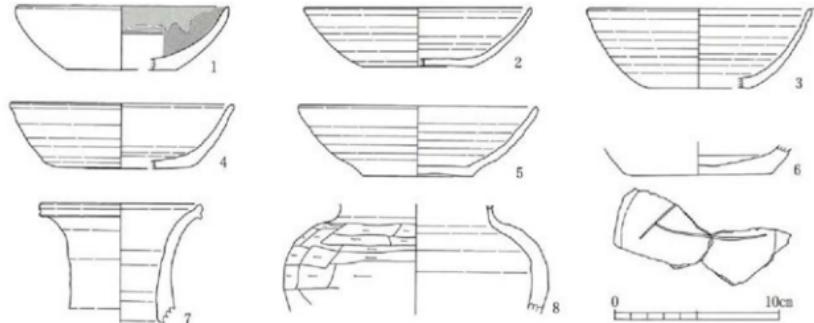
遺物は、掘り方埋土から土師器甕（ロクロ調整）、須恵器杯・甕、柱痕跡から土師器甕（ロクロ調整）、須恵器甕が出土している。土師器は判別可能な資料はすべてロクロ調整を行ったものであり、杯の切り離しはすべて回転糸切りである。須恵器杯の切り離しは回転糸切り・ヘラ切りであり、体部から底部にかけて手持ちヘラケズリを行ったものもある。また、柱穴検出時に土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、丸瓦（II A類）、平瓦（II B類・II C類）、土器片製円板が出土している。

S B995建物跡（第40図）

桁行4間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。東妻は第VIa層によって覆われている。南側柱列は南側の第24次調査57区で検出している。柱穴は、南側柱列の南東隅から1間目が検出できなかつたが、その他の11個を発見し、西妻南西隅柱穴と両棟通下柱穴を除く8個の柱穴で柱痕跡を確認した。北西隅柱穴では切取穴も確認している。S B993、S D974、S K934と重複しており、S B993、S D974より新しくS K934よりも古い。方向は、北側柱列でみると東で0度57分南へ偏っている。桁行については、北側柱列で総長7.72m、柱間は西より2.06m、2.05m、1.63m、1.98mである。梁行については、西妻で総長4.58m、柱間は南より2.18m、2.41mである。柱穴の平面形は方形である。規模は最も大きいもので1辺約45cm、最も小さいもので1辺約20cmである。検出面からの深さは15~56cmである。掘り方埋土は黄色土を含む黑色土が主体である。柱痕跡は直径9~16cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土を主体としている。



遺物は、掘り方埋土から丸瓦（II類）、柱痕跡から土師器小片、須恵器杯（ヘラ切り）などが出土している。また、検出時に埋土上面から土師器甕（ロクロ調整）、須恵器杯（ヘラ切り）・甕・短頭壺が少量出土している。そのうち須恵器短頭壺を図示した（第41図8）。



番号	種類	遺構・層位	特徴	口徑		底径	器高	登録番号	図版番号
				残存率	(%)				
1	土師器・杯	P124・埋土	【外】口縁～底部：手持ちヘラケズリ 【内】ヘラミガキ～黒色処理、油煙付着	(13.0) 5/24	(6.6) 9/24	—	3.9	R-405	
2	須恵器・杯	P205・埋土	【外】ロクロナデ ² 底部：回転糸切り 【内】ロクロナデ	(13.8) 3/24	(6.6) 10/24	—	3.6	R-649	
3	須恵器・杯	P85・埋土	【外】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内】ロクロナデ	(13.6) 2/24	(6.0) 2/24	—	4.9	R-653	
4	須恵器・杯	P155・埋土	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(13.7) 9/24	(8.9) 6/24	—	4.0	R-643	
5	須恵器・杯	P33・埋土	【外】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内】ロクロナデ	(14.6) 10/24	(6.8) 14/24	—	4.3	R-980	
6	須恵器・杯	P80・埋土	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、ヘラ描き 【内】ロクロナデ	— 5/24	(9.1) —	—	—	R-805	
7	須恵器・長頸瓶	P217・抜き穴	【外】口縁：ロクロナデ 【内】ロクロナデ	10.0 15/24	—	—	—	R-654	
8	須恵器・短頸壺	P66・埋土	【外】体部：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 【内】ロクロナデ	—	—	—	—	R-655	

第41図 B14(N)区据立柱建物跡・その他柱穴出土遺物

③ 井戸跡

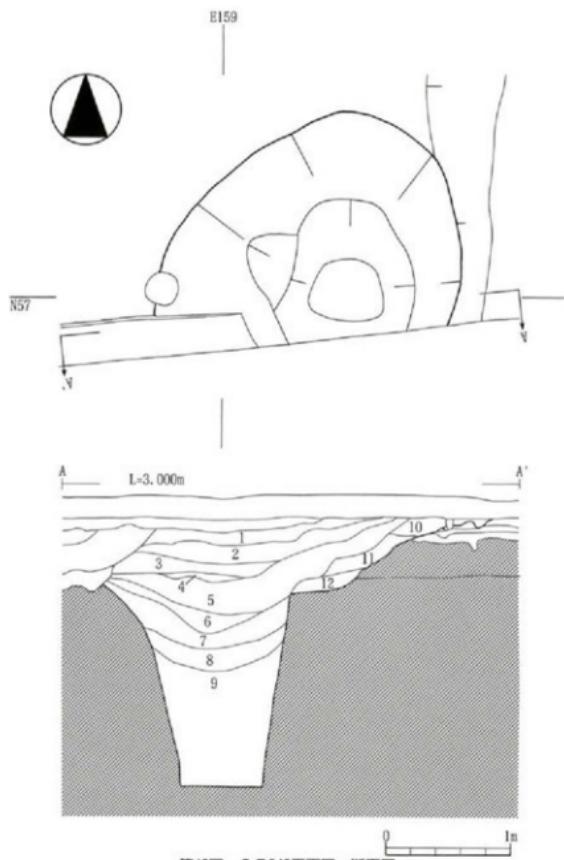
井戸跡は東半部で1基発見した。

S E948井戸跡（第42図）

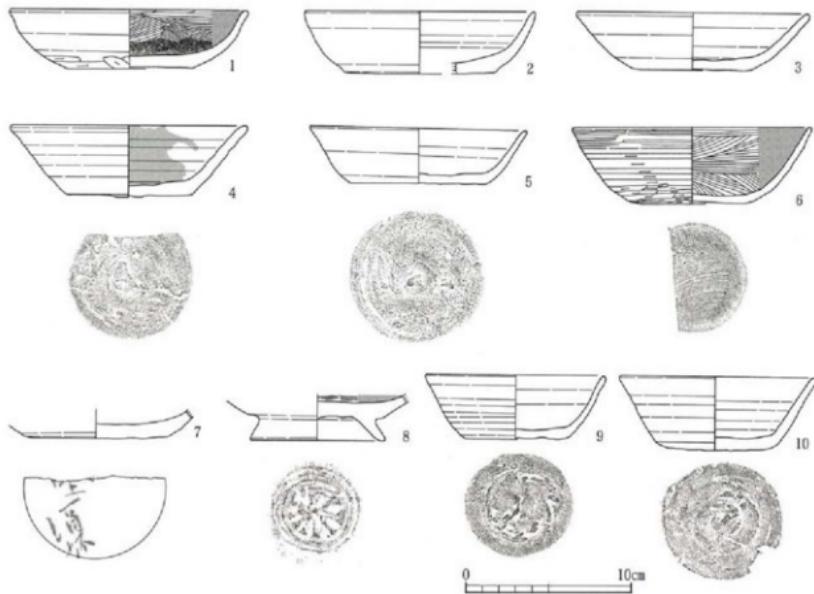
第VI₂b層上面で発見した素掘りの井戸跡である。第VI₁b層によって覆われている。SD943と重複しており、それより古い。上半部は櫛鉢状、下半部は円筒状を呈し、下半部はおおよそ垂直に掘り込まれている。規模は上半部が直径約2.4m、下半部が直径0.7mであり、深さは2.1mである。埋土は4層に大別できる。1層（1～4）は黄褐色土を主体とする整地層（第VI₁b層）、2層（5～6）は植物遺体を主体とする自然堆積層、3層（7～9）は黒色粘土の自然堆積層であり、4層（10～12）は地山の崩壊土かと考えられる。機能停止から埋没に至り、上面が整地されるという過程を明確に把握することができた。

遺物は、1層から土師器杯・高台付杯、須恵器杯・双耳杯・甌・瓶・丸瓦（II類）、土錘が出土した（第43・44・101図）。土師器杯はロクロ調整後体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリを施したものである。須恵器双耳杯は底部を覗面として使用した転用硯である。2層からは土師器杯・甌・須恵器杯・高杯・甌・瓶・軒平瓦（重弧文511a類）、平瓦（I B類）、丸瓦（II類）、木簡（第6号木簡）、曲物蓋板などが出

土している（第43・44・46図）。土師器杯は体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリしたものがあり（第43図1）、須恵器杯は底部ヘラ切りのものが出土している（第43図2・4・5・10）。また、内面に油煙が付着していることから燈火器として使用されたものがあり瓶に漆が付着しているものもある。木簡は頭部に切りこみを入れた付札で、表面に「五斗黒春」、裏面に「七月廿八日」記されている（「附章3 多賀城市市川橋遺跡（第24・25次）出土木簡」参照）。3層からは、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、丸瓦（II B類・II類）、曲物底板、不明木製品が出土している。土師器杯では静止系切り後体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリし、さらに体部下半に手持ちヘラケズリを施したものが出土している（第43図6）。須恵器杯は底部ヘラ切りのものが主体を占めている。4層からは須恵器杯が出土しており、ヘラ切り無調整のものと底部から体部下半にかけて手持ちヘラケズリを施したものがある。



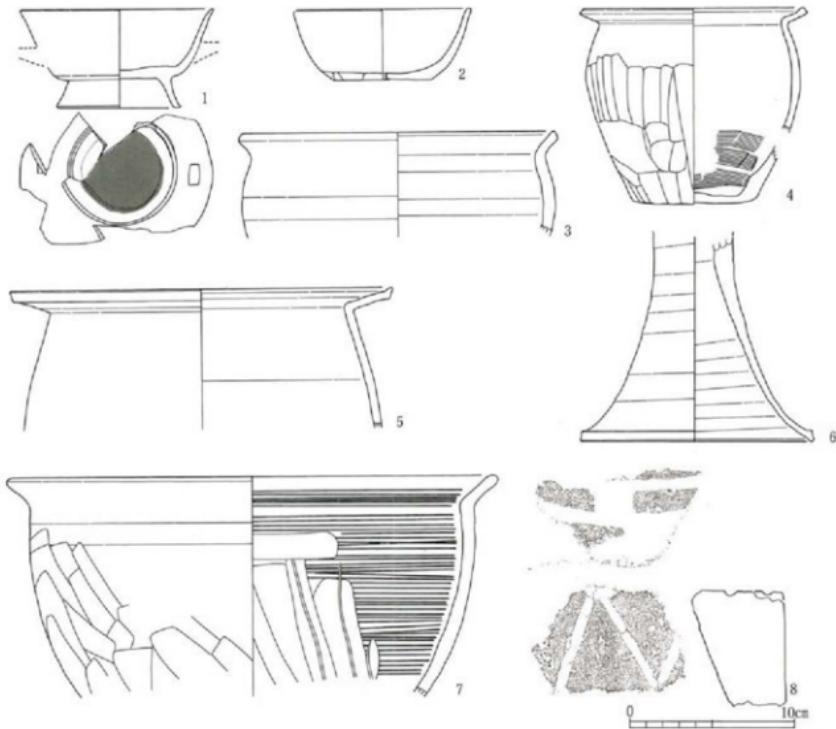
第42図 SE 948平面図・断面図



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	2層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下半) 底部:手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理、付着物	14.5 21/24	7.6 24/24	3.6	R-1	図版10-3
2	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 3/24	(9.2) 4/24	3.8	R-592	
3	須恵器・杯	4層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.1) 11/24	(6.2) 12/24	3.5	R-587	
4	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ、油煙付着	14.4 9/24	7.5 18/24	4.3	R-98	図版10-2
5	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	13.2 14/24	8.2 24/24	3.5	R-12	図版10-5
6	土師器・杯	3層	【外面】体部:回転ヘラケズリ→ヘラミガキ(口縁) 底部:静止糸切り→手持ちヘラケズリ(体部下半) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.4 4/24	6.3 14/24	4.6	R-585	
7	須恵器・杯	3層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り、墨書き 【内面】ロクロナデ	-	8.6 12/24	-	R-60	図版18-2
8	土師器・高台付杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部:高台貼付→菊花状圧痕 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	-	(8.1) 2/24	-	R-591	
9	須恵器・杯	3層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	10.9 24/24	6.2 24/24	3.9	R-14	図版10-6
10	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(11.9) 5/24	6.3 24/24	4.6	R-589	図版10-4

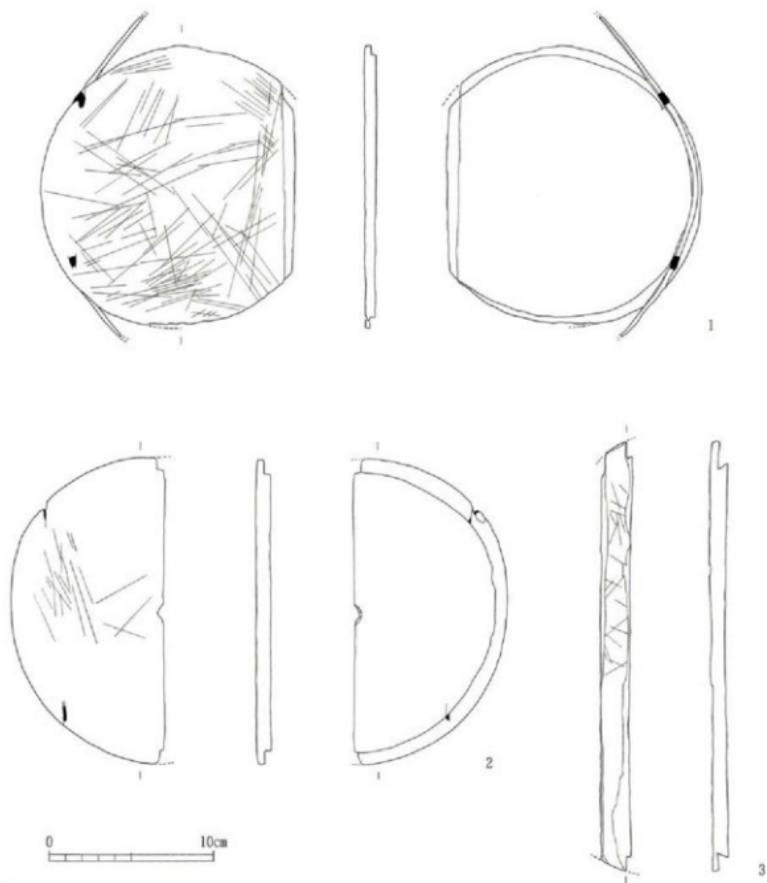
第43図 S E 948出土遺物(1)



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・双耳杯	1層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り→回転ヘラケズリ→高台 貼付(軸用銀) 【内】ロクロナデ	11.8 3/24	7.4 11/24	6.0	R-588	図版10-1
2	須恵器・杯	4層	【外】ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ(体部下半) 【内】ロクロナデ	(10.8) 4/24	(5.9) 11/24	4.4	R-595	図版10-7
3	須恵器・甕	1層	【外】ロクロナデ 【内】ロクロナデ	(18.8) 6/24	—	—	R-711	
4	土師器・甕	3層	【外】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部) 【内】ロクロナデ→ヘラナデ	(13.4) 5/24	7.4 24/24	12.0	R-507	図版10-9
5	土師器・甕	2層	【外】口縁: ロクロナデ 【内】ロクロナデ	(23.4) 4/24	—	—	R-605	
6	須恵器・高杯	2層	【外】脚部: ロクロナデ 【内】ロクロナデ	—	14.0 24/24	—	R-19	図版10-8
7	須恵器・甕	2層	【外】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部) 【内】回転ハケメ→ナデ	(30.0) 8/24	—	—	R-599	図版10-10
8	軒平瓦	2層		—	—	—	R-604	

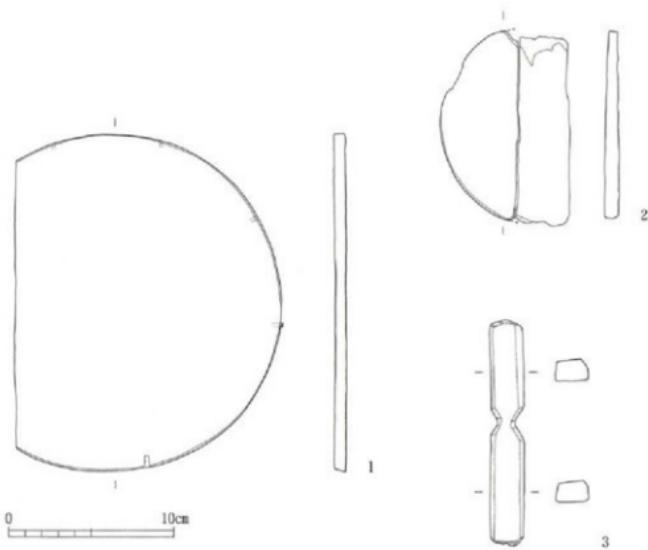
第44図 S E 948出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号	図版番号
1	曲物蓋板	S E 948・2層	径17.0×0.7	スギ	外面に刃物傷	R-33	
2	曲物蓋板	S E 948・1層	径18.8×0.9	スギ	外面に刃物傷	R-55	
3	曲物蓋板	S E 948・2層	径(26.1)×1.0	ヒノキ科アスナロ属	外面に刃物傷	R-23	

第45図 S E 948出土遺物(3)



単位 (cm)

番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号	図版番号
1	曲物底板	S E948・3層	径21.0×0.8	スギ		R-22	
2	曲物底板	S E948・2層	径(13.0) ×0.9	ヒノキ科アスナロ属		R-15	
3	不明品	S E948・3層	13.8×2.0×1.3	ヒノキ科アスナロ属		R-11	

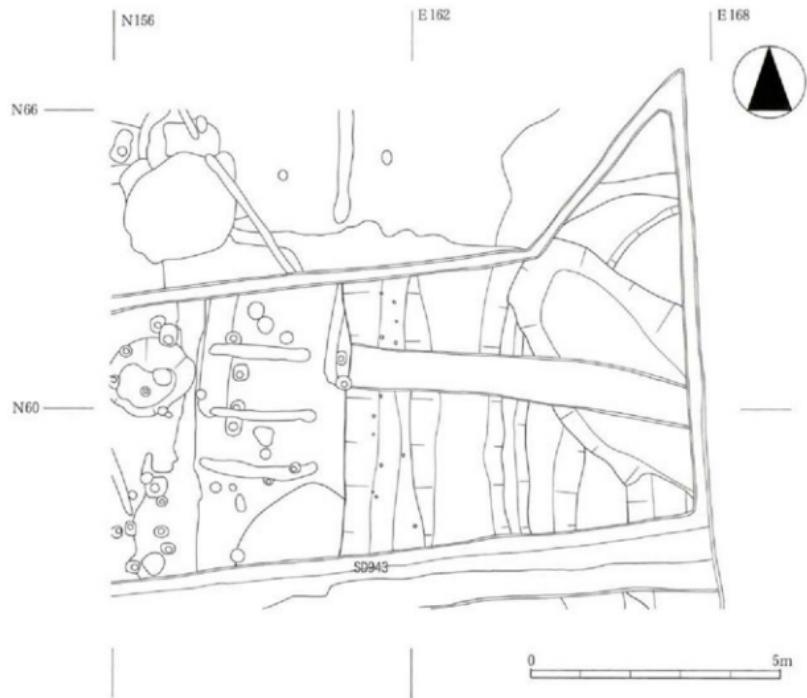
第46図 S E948出土遺物(4)

(4) 溝 跡

S D943溝跡 (第47・50図)

58区においてS X990B土壌状遺構に伴いその西側に位置する溝と同一のものである。S E948と重複しており、それより新しい。規模は上幅1.0~1.6m、下幅0.4~0.5m、深さ40~60cmである。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面はおおよそ水平である。埋土は2層に区分することができ、1層が炭化物粒と黄褐色砂質土を含む黒褐色粘土、2層が黄褐色砂を含む黒色粘土である。なお、底面両壁において打ち込み杭を23本検出した。杭は直径2~8cmであり、40~80cm間隔で南北方向に直線的に並んでいる(図版6-3)。

遺物は、1層から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕、墨書き器・製塙土器、平瓦(IA類)、丸瓦(II類)が出土している(第48図)。土師器杯は、底部が回転糸切りのもの、回転糸切り後手持ちヘラケズリしたもの、回転ヘラケズリしたものなどがある。甕はロクロ調整を施したもので、底部に回転糸切り痕を残すものがある。また、口縁部を外側に折り返して「複合口縁」とし、ロクロ調整したものが出土



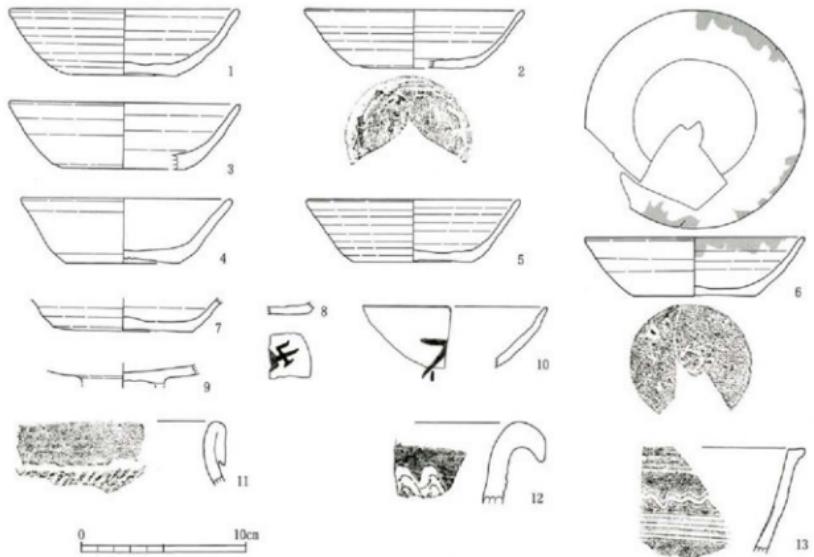
第47図 S D943平面図

している。体部には平行叩き目がみられる(第48図11)。須恵器杯は底部がヘラ切りのものや(2・3、6~8)回転糸切りのもの(1・4)とがある。また、底部に墨書きやヘラ書きがみられるもの(4・8)、漆や油煙の付着しているもの(4・6)も出土している。第48図6須恵器杯は口縁部に油煙の付着が顕著であり、燈火器として使用されたと考えられる。2層からは土師器杯・甌、須恵器杯・甌、製塙土器、曲物蓋板、不明木製品が出土している(第48・49図)。土師器杯はロクロ調整したものであり、油煙が付着しているものもある。須恵器杯は底部がヘラ切りのもので(5)、体部に墨書きされているものがある(10)。

S D935溝跡

調査区東端部で発見した南北溝跡である。南側に隣接する第24次調査58区においても検出し、平面的には約20m確認している。ほぼ同位置で重複しており、4時期の変遷(A→D期)を確認した(註)。方向は、今回の調査区においてはおおよそ南北基準線と一致しているが、南側の58区では一旦東側へ大きく屈曲した後、南側に延びている。以下、古い順に説明する。

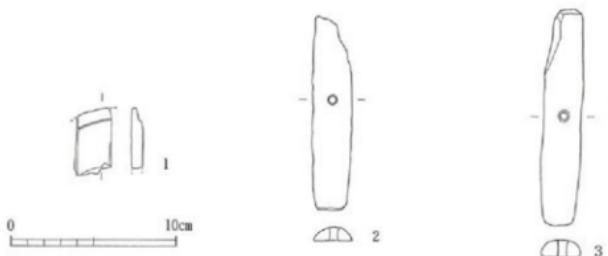
S D935A(第50・51図)：規模は上幅2.9~4.0m、下幅1.6m、深さ60cmである。壁は緩やかに立ち上がりっている。埋土は1層が炭化物粒と焼土粒を含む黒褐色粘土、2層が灰黄褐色土および砂、3層が炭化物粒・焼土粒を含む黒褐色粘土である。



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	1層	【外】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内】ロクロナデ	13.9 20/24	6.4 24/24	4.0	R-252	図版15-3
2	須恵器・杯	1層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(13.3) 6/24	(7.5) 15/24	3.6	R-255	
3	須恵器・杯	1層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(14.0) 3/24	(7.8) 6/24	4.0	R-706	
4	須恵器・杯	1層	【外】ロクロナデ 底部：回転糸切り、ヘラ描き「一」 【内】ロクロナデ、漆付着	12.8 15/24	6.9 24/24	4.0	R-78	図版15-2
5	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(13.0) 4/24	(7.1) 6/24	3.8	R-636	
6	須恵器・杯	1層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ、油煙付着	13.2 22/24	7.4 20/24	3.6	R-95	図版15-1
7	須恵器・杯	1層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ	- -	8.5 14/24	-	R-369	
8	須恵器・杯	1層	【外】底部：ヘラ切り、墨書き 【内】ロクロナデ	- -	5.8 4/24	-	R-280	
9	須恵器・高杯	1層	【外】ロクロナデ 【内】ロクロナデ	-	-	-	R-1598	
10	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ、墨書き 【内】ロクロナデ	-	-	-	R-375	
11	土師器・燒	1層	【外】体部：平行叩き 口縁：複合口縁→ロクロナデ 【内】ロクロナデ	-	-	-	R-121	
12	須恵器・甕	1層	【外】ロクロナデ→波状文 【内】ロクロナデ	-	-	-	R-630	
13	須恵器・甕	2層	【外】ロクロナデ→波状文、沈線 【内】ロクロナデ	-	-	-	R-632	

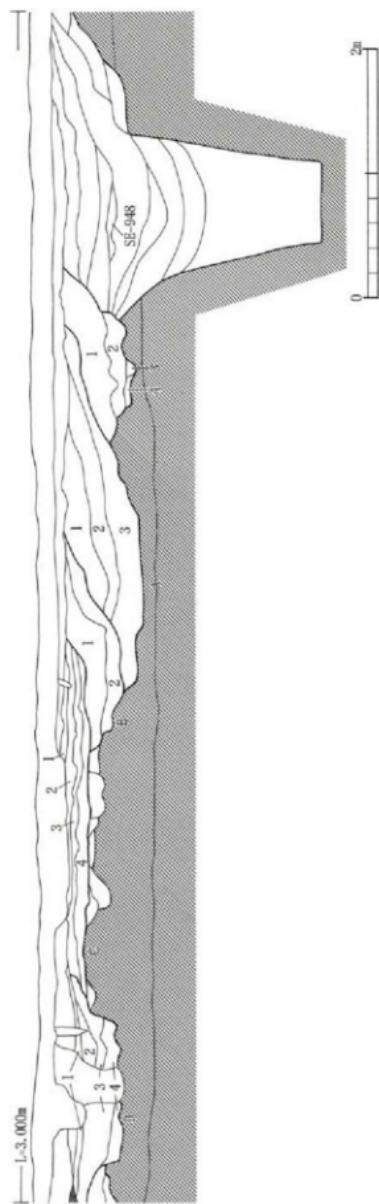
第48図 SD943出土遺物(1)



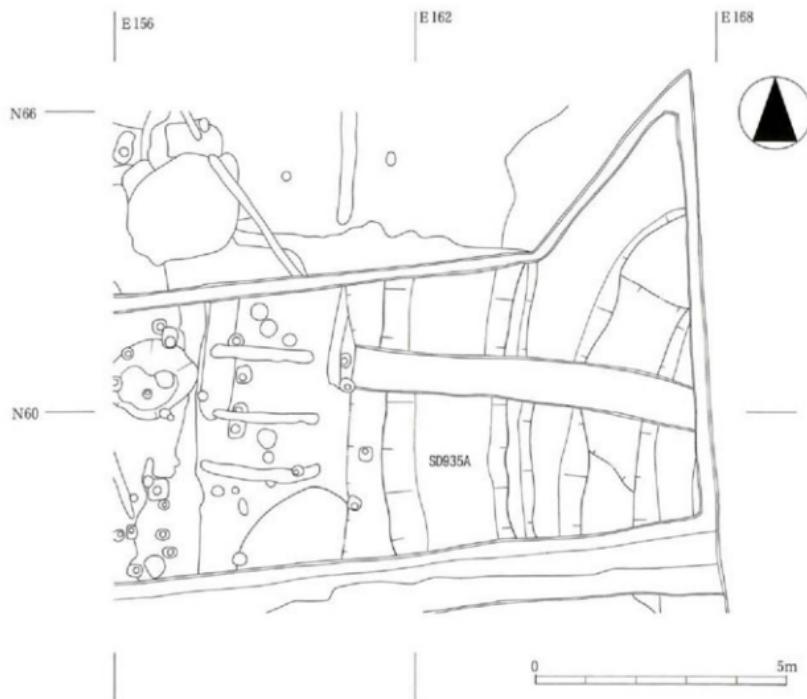
単位(cm)						
番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号
1	曲物蓋板	S D943・2層	厚0.7	スギ		R-45
2	不明品	S D943・2層	11.3×2.4×0.9	ヒノキ科アスナロ属		R-18-1
3	不明品	S D943・2層	13.2×2.3×1.0	ヒノキ科アスナロ属		R-18-2

第49図 S D943出土遺物(2)

遺物は1・2層から多量に出土している。1層からは土師器杯・高台付杯・高杯・高台付皿・甕・小型甕・須恵器杯・高台付杯・甕・平瓶・瓶・円面鏡、須恵器高台付杯を転用した転用硯、製塩土器、軒平瓦(310・310B類)、丸瓦(II A類・II類)、砾石器、曲物側板、不明木製品などが出土している(第52~59図)。土師器杯はロクロ調整したものがほとんどであり、回転糸切り後体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリしたものや体部下半・底部に手持ちヘラケズリしたもの、静止糸切り後手持ちヘラケズリのものなどがあり、基本的に再調整を行ったものである。数量的には回転糸切り後手持ちヘラケズリを施したものが多い(表5)。また、両面をヘラミガキ・黒色処理したもの、油煙が付着しているもの(第52図4)があり、墨書きやヘラ書きのあるものも出土している(第53図10~11)。第55図7は杯の体部に漆で「+」と書いたものである。内面をヘラミガキ・黒色処理した土師器甕も出土している。須恵器杯は、切り離しがヘラ切りのものと回転糸切りのものがあり、その後手持ちヘラケズリを施したものも出土している。また、内面に油煙が付着しているもの(第54図4)、燈芯の痕跡をとどめるなど燈火器として使用されたことが明らかなもの(第54図2・6)や、墨書きやヘラ描きのあるものも出土している。2層からは、土師器杯・甕・甕・須恵器杯・蓋・甕・瓶・製塩土器、土錐、土器片製円板、平瓦(I A類)、丸瓦(II A類・II類)、砾石、木器皿、曲物蓋板などが出土した(第59・60・103図)。土師器杯には回転糸切り無調整のもの、回転糸切り後体部・底部を手持ちヘラケズリしたもの、回転ヘラケズリしたものなどがある。内面に油煙が付着しているものも認められる。土師器甕には複合口縁をもつものがあり、ロクロ調整で、体部外面には平行叩き、内面には回転ハケメが観察できる(第59図11)。甕は、脚部が外側に大きく屈曲しているものが出土している(第59図12)。非ロクロ調整であり、端部は横方向にヘラケズリしている。須恵器杯はヘラ切りと回転糸切りのものがあり、再調整として底部に手持ちヘラケズリを施したものもある。また、墨書きやヘラ描きのあるものも出土している。3層からは須恵器瓶が出土している。



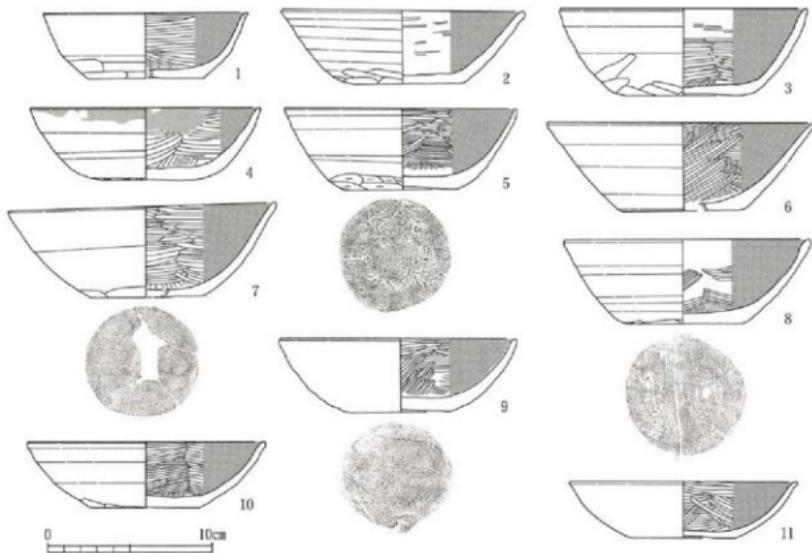
第50図 S E 948、S D 935・943断面図



第51図 S D935A平面図

(注) 本書の作成に際し、『確認調査報告書』で使用した遺構名を以下のように変更した。

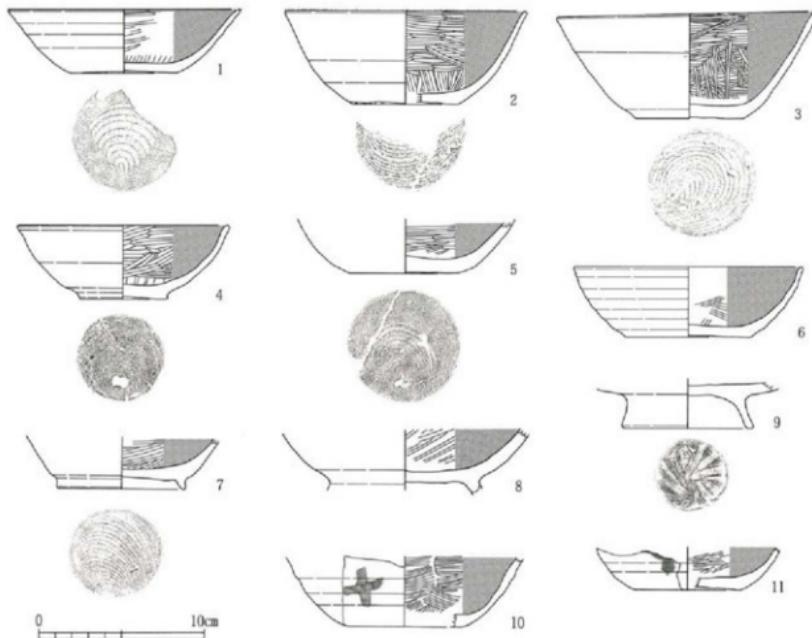
- S D942 → S D935A
- S D940 → S D935B
- S D939 → S D935C
- S D935 → S D935D



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 体縫下半～底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(12.4) 3/24	(7.0) 12/24	4.0	R-525	
2	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 体縫下半～底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.8 17/24	6.9 22/24	4.5	R-243	図版11-11
3	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.4) 4/24	(7.0) 8/24	5.3	R-247	
4	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ、油煙付着 底縫：回転糸切り→手持ちヘラケズリ (体縫下半) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.0 14/24	6.8 24/24	4.4	R-63	図版11-13
5	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ (体縫下半) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.1 13/24	6.8 24/24	5.0	R-3	
6	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 底縫：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	16.2 11/24	7.3 18/24	5.4	R-535	
7	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 体縫下半～底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	16.3 14/24	6.8 24/24	5.7	R-534	
8	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 体縫下半～底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.7) 2/24	(6.8) 24/24	5.2	R-245	
9	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 底縫：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.4 9/24	6.2 24/24	4.5	R-4	図版11-8
10	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 底縫：手持ちヘラケズリ (体縫下半) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.4) 8/24	6.5 19/24	4.0	R-533	
11	土師器・杯	1層	【外面】クロロナデ 底縫：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.8) 6/24	(6.4) 12/24	3.4	R-524	

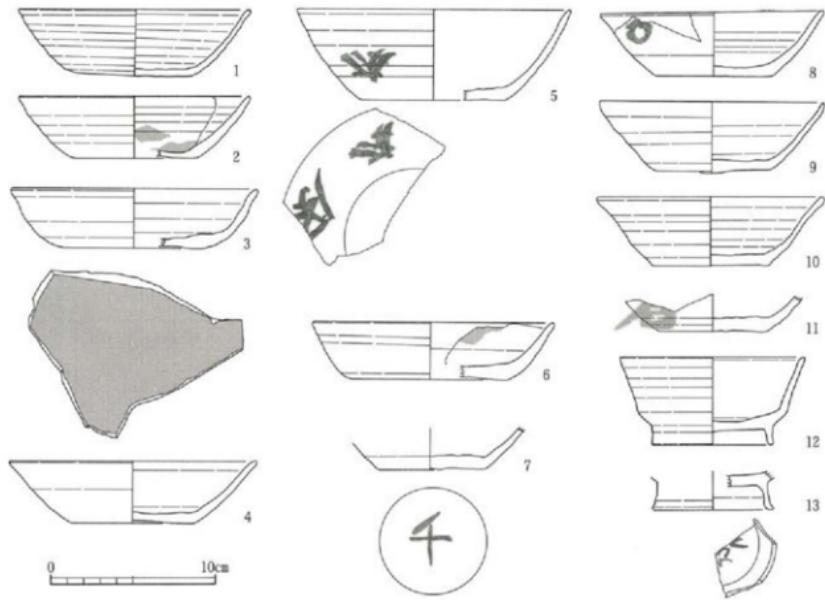
第52図 S D935 A出土遺物(1)



单位(cm)

番号	種類	層位	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) 6/24	(6.3) 15/24	3.9	R-244	図版12-5
2	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ（体部下端） 底部： 回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.6) 8/24	(6.4) 14/24	5.7	R-527	
3	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、ヘラ描き「+」 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	15.8 11/24	6.5 24/24	6.3	R-246	図版12-1
4	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	12.8 20/24	5.3 24/24	4.5	R-2	図版11-14
5	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（体 部下半）、付着物 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	6.6 23/24	-	R-537	
6	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.8) 3/24	(7.6) 10/24	4.3	R-248	
7	土師器・ 高台付杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	7.6 24/24	-	R-553	
8	土師器・ 高台付杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	-	-	R-554	
9	土師器・ 高台付杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：高台貼付→菊花状压痕 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	7.9 10/24	-	R-528	図版12-13
10	土師器・杯	1層	【外面】体部：ロクロナデ、墨書き 底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	(6.7) 6/24	-	R-66	図版18-15
11	土師器・杯	1層	【外面】体部：ロクロナデ、墨書き 底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	(6.4) 8/24	-	R-276	

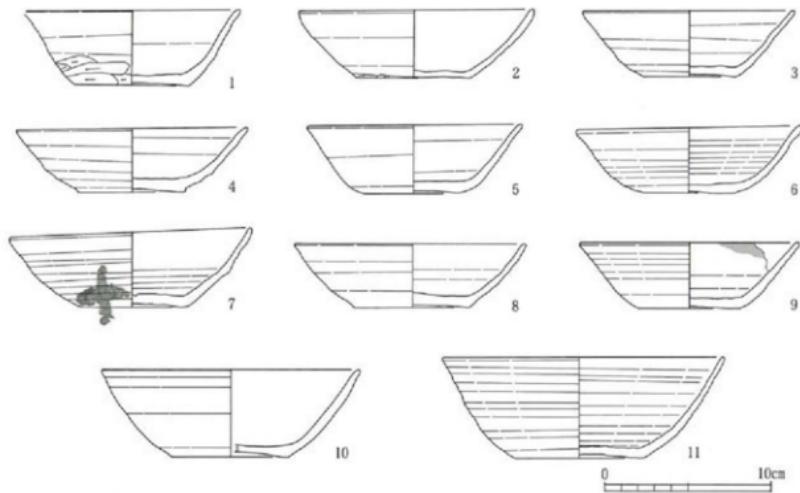
第53図 S D935A出土遺物(2)



単位 (cm)

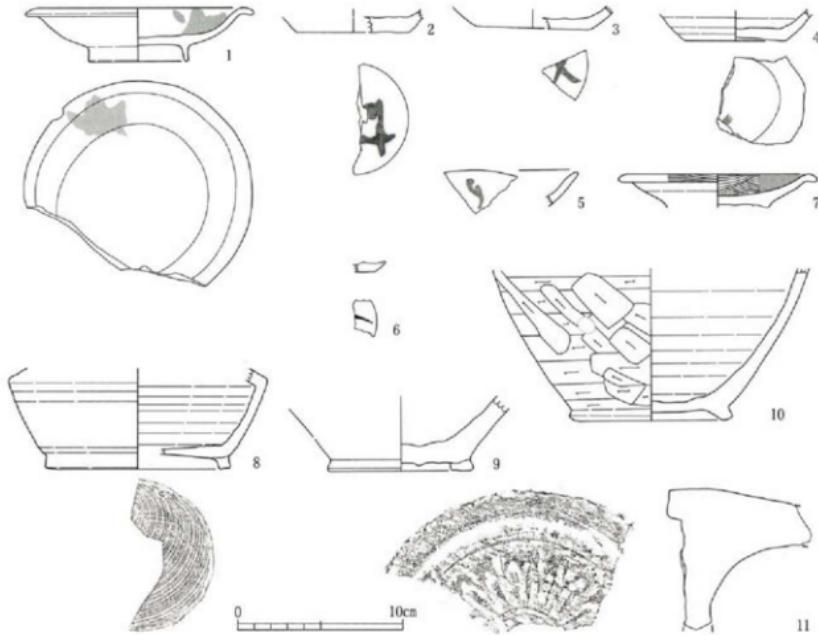
番号	種類	層位	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	I 層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.0 19/24	7.0 18/24	4.0	R-563	図版11-5
2	須恵器・杯	I 層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ 油煙付着	14.1 3/24	7.7 4/24	3.8	R-88	
3	須恵器・杯	I 層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(15.0) 3/24	(8.6) 10/24	3.7	R-547	
4	須恵器・杯	I 層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ 油煙付着	(15.0) 1/24	7.4 24/24	3.8	R-100	
5	須恵器・杯	I 層	【外面】ロクロナデ 体部：墨書 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(16.6) 4/24	(8.6) 8/24	5.5	R-62	図版18-1
6	須恵器・杯	I 层	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ 油煙付着	(14.7) 8/24	9.6 20/24	3.5	R-99	
7	須恵器・杯	I 层	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 墨書 【内面】ロクロナデ	— 24/24	6.5	—	R-61	図版18-4
8	須恵器・杯	I 层	【外面】ロクロナデ 体部：墨書 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	13.5 6/24	7.1 24/24	4.0	R-573	
9	須恵器・杯	I 层	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	13.5 18/24	6.8 24/24	4.4	R-11	図版11-7
10	須恵器・杯	I 层	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	13.7 2/24	7.1 7/24	4.2	R-549	
11	須恵器・杯	I 层	【外面】ロクロナデ 体部：墨書 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	— 24/24	6.4	—	R-65	図版18-7
12	須恵器・高台付杯	I 层	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	(11.1) 4/24	(7.3) 8/24	5.4	R-523	図版12-3
13	須恵器・高台付杯	I 层	【外面】底部：高台貼付、墨書 【内面】ロクロナデ	— 1/24	(7.3)	—	R-273	図版18-6

第54図 S D935 A出土遺物(3)



番号	種類	層位	特徴	口径		器高	登録番号	図版番号
				外径 残存率	内径 残存率			
1	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラヶズリ（体部下半）【内面】ロクロナデ	13.1 19/24	6.9 20/24	4.7	R-13	図版II-15
2	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラヶズリ（体部下端）底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	14.2 16/24	6.8 23/24	4.1	R-8	図版II-12
3	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	12.7 17/24	5.4 24/24	4.0	R-251	図版II-2
4	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	14.0 17/24	6.5 18/24	3.8	R-6	図版II-9
5	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	13.0 11/24	6.1 19/24	4.1	R-542	図版II-10
6	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	13.6 13/24	5.5 24/24	4.1	R-7	図版II-4
7	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ、墨書き 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	14.6 13/24	6.5 19/24	4.5	R-72	図版II-1
8	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	14.0 19/24	7.1 24/24	3.9	R-16	図版II-6
9	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ、油煙付着	(13.2) 9/24	(6.0) 10/24	4.0	R-96	
10	土師器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(15.6) 7/24	(7.0) 7/24	5.3	R-539	
11	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り【内面】ロクロナデ	(16.9) 5/24	7.7 21/24	6.1	R-17	図版II-3

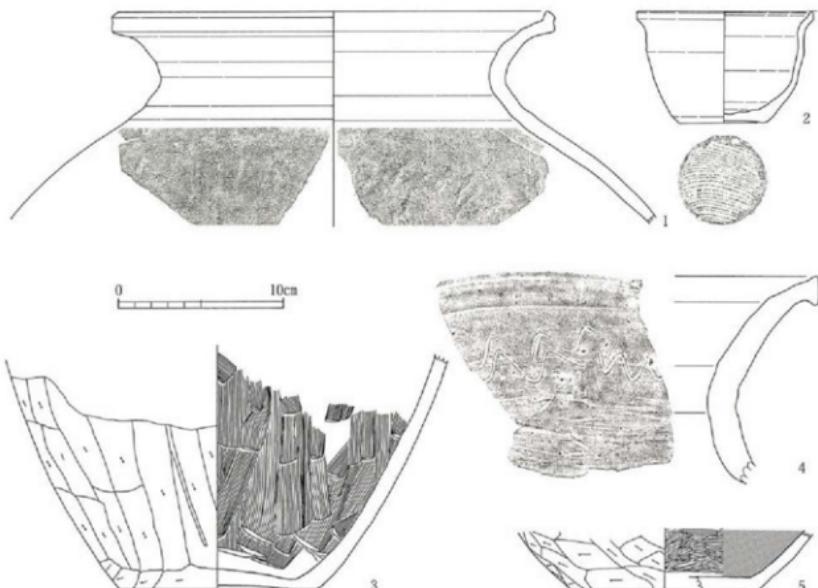
第55図 S D935A出土遺物(4)



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・高台付杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内部】ロクロナデ、油煙付着	13.8 15/24	6.0 24/24	3.3	R-107	図版12-6
2	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	— —	(6.8) 12/24	—	R-275	
3	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、墨書き 【内部】ロクロナデ	— —	(6.8) 4/24	—	R-270	図版18-5
4	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	— —	(6.0) 8/24	—	R-279	
5	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 体部：墨書き 【内部】ロクロナデ	— —	— —	—	R-282	
6	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、墨書き 【内部】ロクロナデ	— —	— —	—	R-277	
7	土師器・高台付皿	1層	【外面】ロクロナデ→ハラミガキ（口縁） 底部：高台貼付 【内部】ハラミガキ→黒色処理	(11.9) 4/24	— —	—	R-540	
8	須恵器・平瓶	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内部】ロクロナデ	— —	(11.2) 13/24	—	R-522	図版12-10
9	須恵器・瓶	1層	【外面】ロクロナデ 底部：高台貼付、ヘラ描き 【内部】ロクロナデ	— —	8.6 15/24	—	R-552	
10	須恵器・甕	1層	【外面】体部：回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ→高台貼付 【内部】ロクロナデ	— —	9.8 22/24	—	R-631	
11	軒丸瓦	1層	細弁蓮花文軒丸瓦 (310B類)	— —	— —	—	R-259	図版12-11

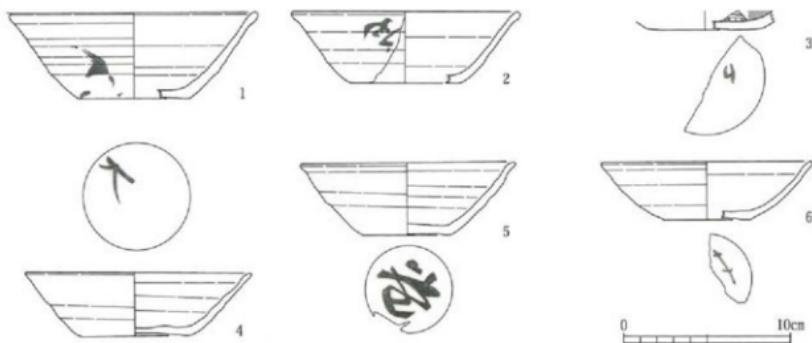
第56図 SD935A出土遺物(5)



単位(cm)

番号	種類	層位	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・甕	1層	【外面】平行叩き→クロナデ(口縁) 【内部】アテ具痕→クロナデ	(26.0) 14/24	—	—	R-629	
2	土師器・甕	1層	【外面】ロクロナデ底部: 静止糸切り 【内部】ロクロナデ	(10.5) 7/24	5.3 24/24	6.9	R-532	図版12-12
3	須恵器・甕	1層	【外面】手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラナデ	—	12.1 23/24	—	R-633	
4	須恵器・甕	1層	【外面】ロクロナデ→波状文 【内部】ロクロナデ	—	—	—	R-530	
5	土師器・甕	1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	—	(11.3) 10/24	—	R-531	

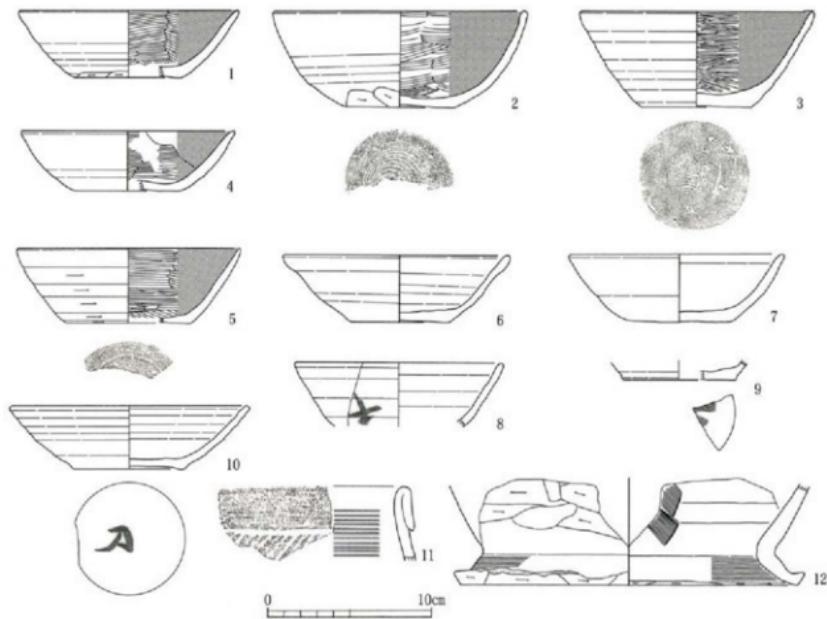
第57図 SD935A出土遺物(6)



単位 (cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ、墨書き底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(15.0) 3/24	(6.6) 8/24	5.2	R-543	
2	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ、墨書き底部：糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 6/24	(6.8) 7/24	4.3	R-55	図版18-11
3	土師器・杯	1層	【外面】ヘラケズリ底部：静止糸切り→回転ヘラケズリ、墨書き 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- 9/24	(7.0) 9/24	-	R-1846	
4	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ、油煙付着底部：墨書き	(13.7) 5/24	6.4 24/24	4.0	R-68	図版18-12
5	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ底部：回転糸切り、墨書き 【内面】ロクロナデ	13.1 22/24	5.3 22/24	4.4	R-70	図版18-10
6	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ底部：回転糸切り、墨書き 【内面】ロクロナデ	(12.7) 5/24	(5.3) 6/24	3.5	R-544	

第58図 S D935A出土遺物(7)



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 底径 存率	底径 存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	2層	【外】ロクロナデ 体部下半～底部：手持ちヘラケズリ 【内】ヘラミガキ→黒色處理	(13.4) 3/24	(6.4) 7/24	4.1	R-250	
2	土師器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内】ヘラミガキ→黒色處理 (体部下半)	15.4 20/24	6.6 13/24	6.0	R-536	図版12-9
3	土師器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内】ヘラミガキ→黒色處理	(14.2) 7/24	(6.6) 24/24	5.9	R-5	図版12-7
4	土師器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ 【内】ヘラミガキ→黒色處理 油煙付着	(13.0) 1/24	(6.4) 11/24	3.7	R-249	
5	土師器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ(体部) 【内】ヘラミガキ→黒色處理	(13.6) 9/24	(7.6) 6/24	4.6	R-538	図版12-8
6	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ	13.8 15/24	6.0 24/24	4.1	R-634	図版12-4
7	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内】ロクロナデ 墨痕	13.1 12/24	6.3 24/24	4.2	R-564	
8	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 体部：墨書 【内】ロクロナデ	12.7 5/24	-	-	R-512	
9	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 墨書 【内】ロクロナデ	- 4/24	(6.8) -	-	R-269	
10	土師器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部：回転糸切り 墨書 【内】ロクロナデ	(14.6) 6/24	(6.8) 21/24	3.9	R-63	図版18-9
11	土師器・甕	2層	【外】裏合口縁→ロクロナデ 体部→平行叩き 【内】ロクロナデ→回転ハケメ	-	-	-	R-120	
12	土師器・瓶	2層	【外】ヨコナデ→手持ちヘラケズリ 【内】ヨコナデ→ヘラナデ	- 4/24	(20.4) -	-	R-559	図版12-14

第59図 SD935A出土遺物⑧



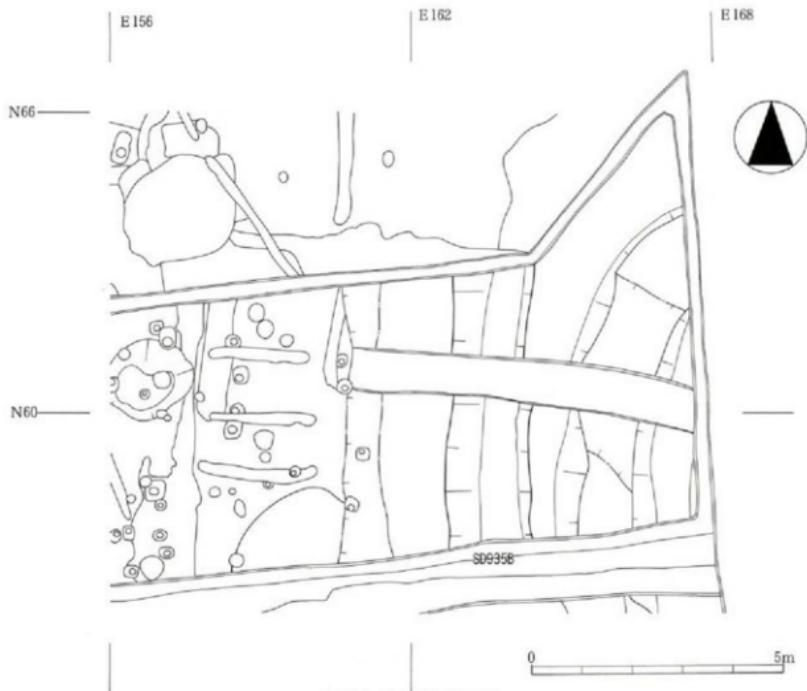
単位(cm)

番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号	図版番号
1	挽物・高台付皿	S D935A・2層	径13.4×1.0	ケヤキ		R-14	
2	曲物底板	S D935A・2層	径18.0×1.0	ヒノキ科アスナロ属		R-35	

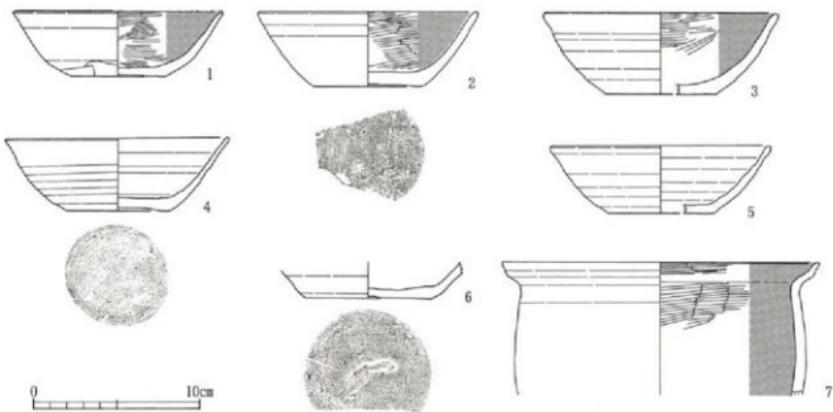
第60図 S D935A出土遺物(9)

S D935B (第50・61図)：規模は上幅1.5～1.8m、下幅0.6～0.8m、深さ45cmである。底面はおよそ水平である。埋土は炭化物粒を含む黒褐色粘土と黄褐色土を含む黒褐色粘土である。

遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・高台付杯・甕・瓶・灰釉陶器椀・製塙土器・平瓦（IA類、II B類、II B類b）、丸瓦（II類）が1層から出土した（第62図）。土師器杯はロクロ調整であり、回転糸切り無調整のものや（3）、体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリしたもの（1・2）などがある。甕もロクロ調整であり、底部に回転糸切り痕を残すものがある。また、内面をヘラミガキ・黒色処理したものも出土している（7）。須恵器杯はヘラ切り（5・6）や回転糸切り（4）のものがある。



第61図 S D935B平面図



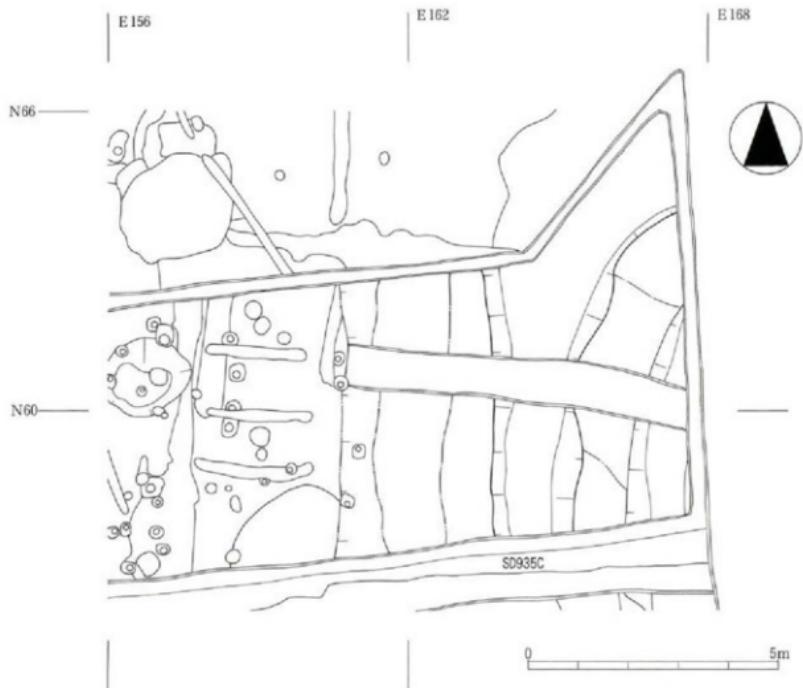
単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 体部下半～底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(12.6) 2/24	(5.6) 11/24	3.9	R-568	
2	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 体部下半～底部：手持ちヘラケズリ、ヘラ描き 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 2/24	(6.8) 8/24	4.5	R-567	
3	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転系切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) 3/24	(6.6) 11/24	4.9	R-570	
4	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転系切り、墨痕 【内面】ロクロナデ	13.5 18/24	6.2 24/24	4.4	R-15	図版15-4
5	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.2) 3/24	(6.2) 6/24	4.1	R-569	
6	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	—	7.7 17/24	—	R-565	
7	土師器・甕	1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(19.0) 3/24	—	—	R-580	

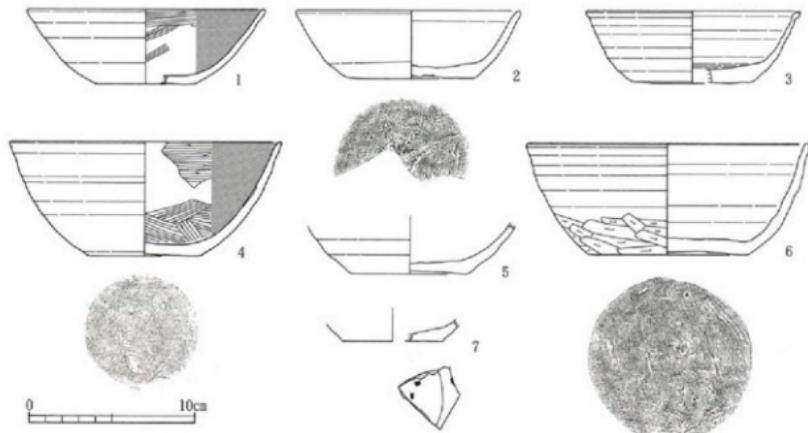
第62図 S D935B出土遺物

S D935C (第50・63図)：規模は上幅1.6～2.5m、下幅0.9～2.0m、深さ25cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、断面形は浅い皿状を呈している。底面は北側から南側に向かって傾斜しており、比高差は約20cmである。埋土は下層に薄い自然堆積層がみられるが、大部分は炭化物粒を多く含む黒褐色粘質土や黄褐色砂質土が互層となる整地層で埋められている。

遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・瓶、竈形土器、製塙土器、平瓦 (II B類)、丸瓦 (II A・II類)、土器片製円板、坩堝が1層から出土している (第64・65・99図)。土師器杯は、ロクロ調整で、底部が回転糸切り無調整のもの、回転糸切り後手持ちヘラケズリしたもの (第64図4)、体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリしたものがある。土師器甕はロクロ調整と非ロクロ調整とがあり、後者には底部にムシロ状圧痕や木葉痕を残すものがある。須恵器杯は、ヘラ切り (第64図2・3)、回転糸切り (第64図5・7)、回転糸切り後手持ちヘラケズリしたものなどがある (第64図6)。第64図7の底部外面には墨痕が認められる。



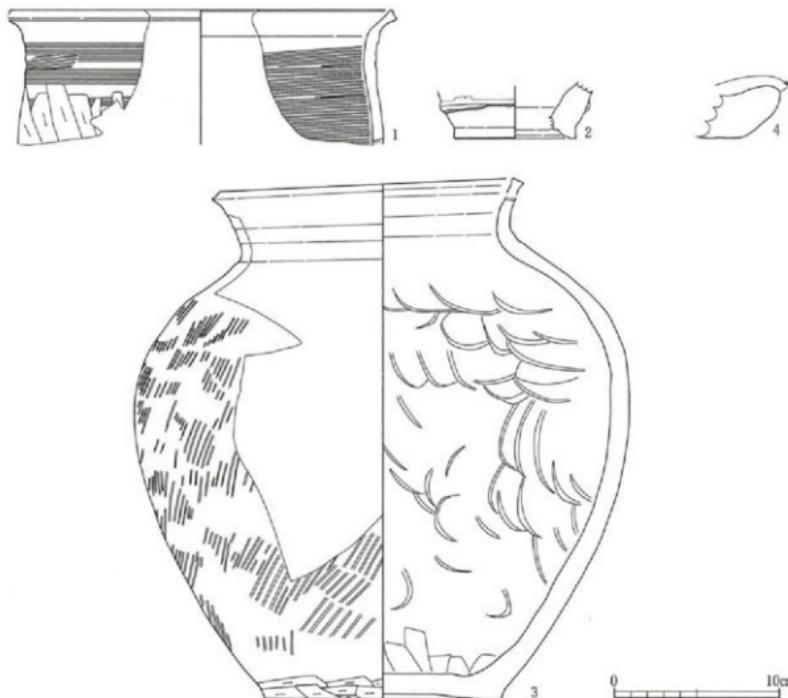
第63図 S D935C 平面図



単位(cm)

番号	種類	層位	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.4) 5/24	(6.0) 10/24	4.6	R-582	
2	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、ヘラ彫き 【内面】ロクロナデ	(13.2) 9/24	7.8 14/24	4.1	R-574	図版15-5
3	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.9) 5/24	(7.2) 4/24	4.4	R-572	
4	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(16.4) 1/24	6.9 23/24	7.0	R-576	
5	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、墨痕 【内面】ロクロナデ	—	7.0 15/24	—	R-262	
6	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 体部下半～底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(17.0) 8/24	9.7 21/24	6.8	R-571	
7	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 墨痕 【内面】ロクロナデ	—	(6.0) 5/24	—	R-281	

第64図 SD935C出土遺物(1)



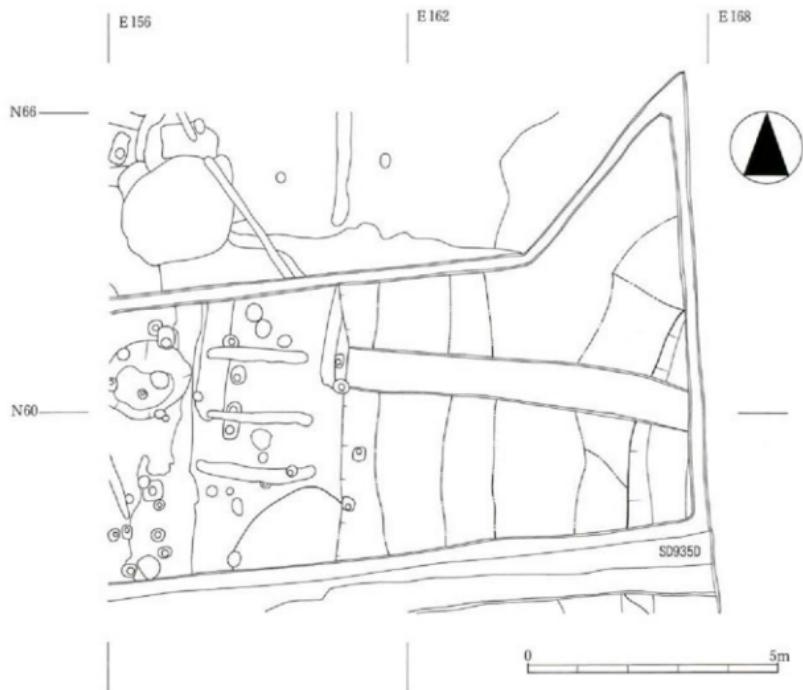
単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・甕	1層	【外面】口縁:ロクロナデ→回転ハケメ→手持ちヘラケズリ(体部) 【内部】ロクロナデ→回転ハケメ	(23.8) 3/24	—	—	R-579	
2	須恵器・瓶	1層	【外面】ロクロナデ 底部:高台貼付 【内部】ロクロナデ	— (7.4) 5/24	—	R-1734	図版15-6	
3	須恵器・甕	1層	【外面】口縁:ロクロナデ 体部:平行叩き→手持ちヘラケズリ 【内部】口縁:ロクロナデ→当具痕(体部)→ナデ(体部下)	(18.9) 2/24	(14.4) 19/24	30.9	R-628	
4	坩埚	1層		—	—	—	R-1733	図版15-7

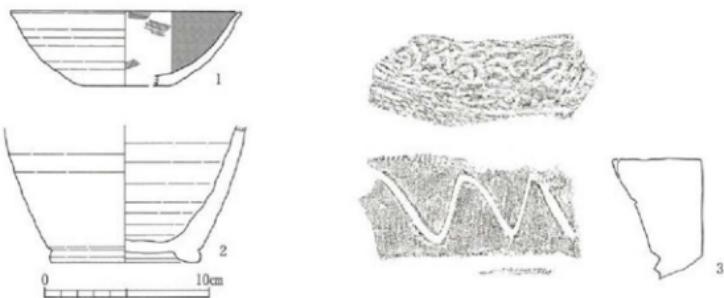
第65図 S D935C出土遺物(2)

S D935D (第50・66図)：規模は上幅1.7～2.0m、下幅0.2～0.5m、深さ45cmである。下半部はほぼ垂直気味に立ち上がっているが、上半部は緩やかに外反している。底面はほぼ平坦である。埋土は炭化物粒や焼土粒を含む黒褐色粘土層であり、その上面の僅みに灰白色火山灰が自然堆積している。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶・長頸瓶、均整唐草文軒平瓦 (721B類)、平瓦 (II B類)、丸瓦 (II A類・II類) が出土している (第67図)。土師器杯はロクロ調整で、底部が回転糸切りのもの (I)、体部から底部にかけて回転ヘラケズリしたもの、手持ちヘラケズリしたものとがある。土師器甕もロクロ調整で、底部に回転糸切り痕を残すものや、体部内面が回転ハケメ調整されているものもある。須恵器杯は回転糸切りとヘラ切りのものとが出土している。



第66図 S D935D平面図



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 体部：墨痕 底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) 5/24	(4.8) 8/24	4.5	R-639	
2	須恵器・瓶	I層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ（体部下半）底部：高台貼付 【内面】ロクロナデ	— (9.0) 8/24	—	—	R-644	
3	軒平瓦	I層	均整唐草文 (721B類) 瓦当面：叩き 裏面：波文	—	—	—	R-1818	図版15-9

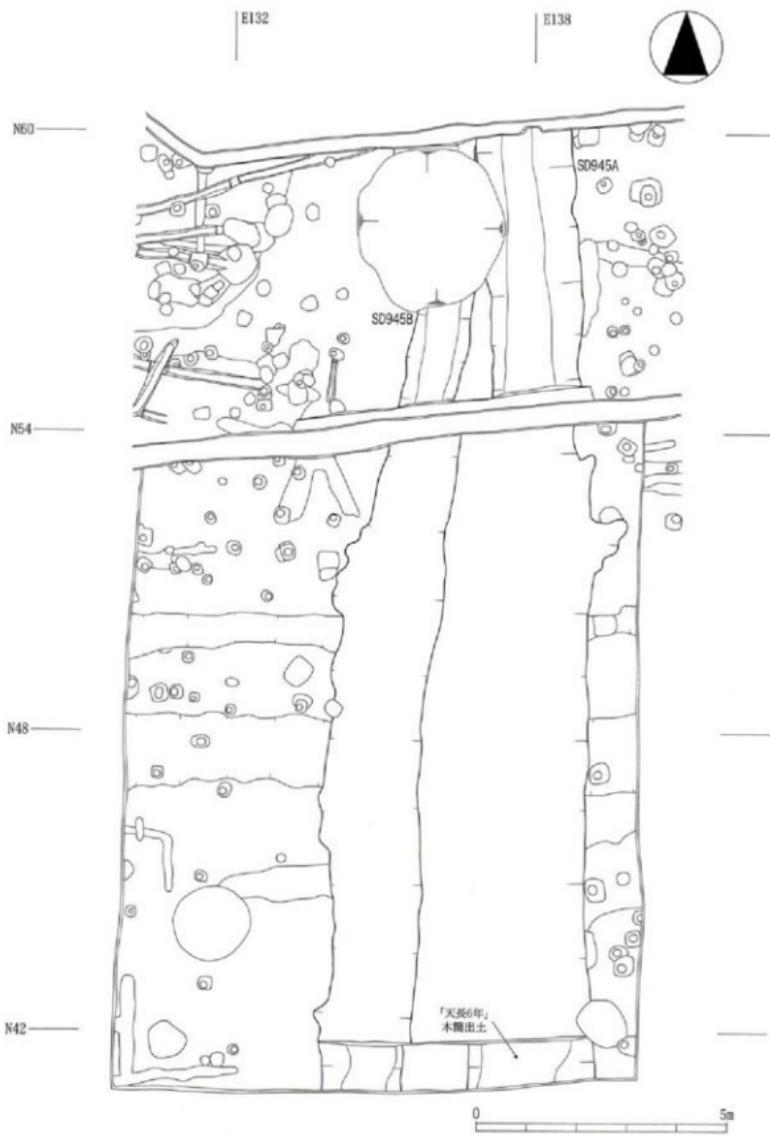
第67図 SD935D出土遺物

SD945溝跡 (第68・69図)

調査区西半部の第VI₂a層上面で発見した南北溝跡である。B49区や第5・9・14次調査区、第24次調査B55・59区でも確認しており、総長160m以上にわたる溝跡である。ほぼ同位置で2時期 (A→B期) の変遷がある(註)。以下、古い順に説明する。

S D945A：規模は、上幅3.3m以上、深さ約0.6mである。断面形は上面が大きく開いたV字形である。底面は、55区(第24次調査)南端部を含めてもほとんど比高差がなくおおよそ水平である。方向は南北発掘基準線とおおよそ一致している。埋土は1層(第69図1・2)が炭化物粒・焼土粒を多く含む黒褐色土、2層(3)が炭化物粒と黄褐色砂質土ブロックを含む黒褐色粘土、3層(4)が黄褐色土を含む黒褐色粘土でありおおよそ3層に大別できる。

遺物は1層から土師器杯・高台付杯・甌・小型甌・須恵器杯・高台付杯・蓋・甌・瓶・長頸瓶・平瓦(I A類・II B類)・丸瓦(II B類・II類)、土器片製円板、曲物側板・底板、挽物皿、木簡(第7号木簡)が出土した(第70~72図)。土師器杯には、底部が回転糸切りのもの、体部・底部あるいは体部から底部にかけて回転ヘラケズリしたもの、回転糸切り後に体部・底部を手持ちヘラケズリしたもの、体部から底部にかけて手持ちヘラケズリしたものなどが見られる。須恵器杯は、ヘラ切り、回転糸切り、回転糸切り後手持ちヘラケズリしたものなどがある。外面底部に「政所」と墨書きされたものもある(第70図5)。2層からは、土師器杯・甌・小型甌・須恵器杯・高台付杯・双耳杯・甌・瓶・長頸瓶・転用硯・土器片製円板、竈形土器、平瓦(II B類)、曲物側板・底板、挽物皿が出土した(第71・72図)。土師器杯は、底部が回転糸切りもの、回転糸切り後体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリしたもの、体部から底部にかけて回転ヘラケズリしたもの、体部を手持ちヘラケズリしたものなどがある。須恵器杯は、ヘラ切り(3~6)、

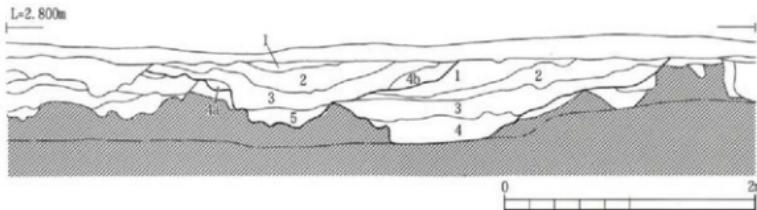


第68図 S D945平面図

回転糸切り（7・8）、回転糸切り後底部を持ちヘラケズリしたものなどがある。

S D945B：規模は上幅約3.1m、深さ0.5～0.6mである。断面形は上面が大きく開いたV字形である。底面はおおよそ水平である。方向は、55区（第24次調査）も参考にすると北で約3度東へ偏している。埋土は3層に大別でき、1層（第69図1～3）は炭化物粒・焼土粒を含む黒褐色粘土、2層（4a・4b）は灰白色火山灰、3層（5）は黒褐色粘土である。

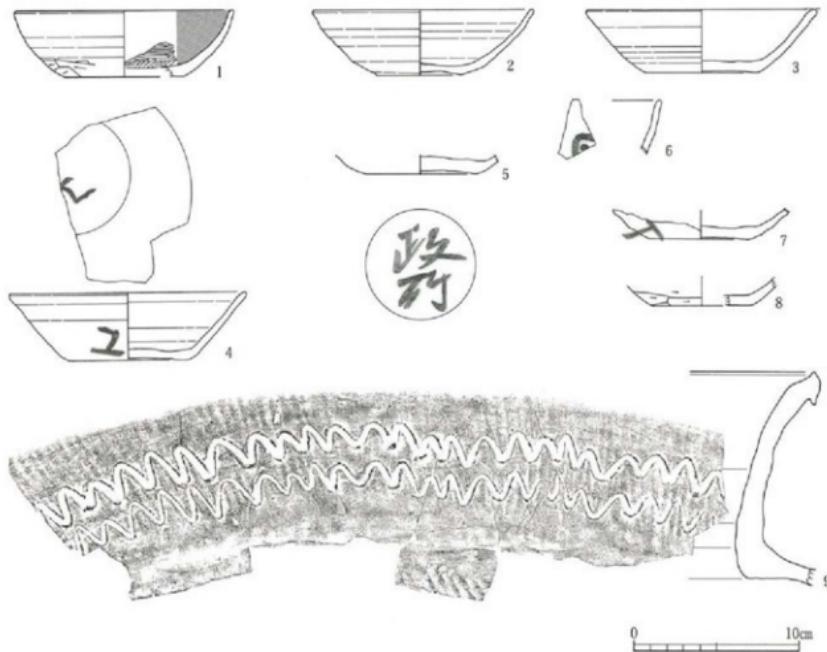
遺物は、1層から土師器杯・高台付杯・甕・小型甕・須恵器杯・甕・瓶・長頸瓶・縁軸陶器椀・平瓦（II B類）、丸瓦（II類）、不明木製品が出土した（第73・99図）。土師器杯は、底部が回転糸切りのもの、回転糸切り後体部下半から底部にかけて持ちヘラケズリしたものなどがある。須恵器杯はヘラ切りしたものと回転糸切りしたものが主体を占め、ヘラ切り後体部を回転ヘラケズリしたものや回転糸切り後体部を回転ヘラケズリしたものも少數ある。縁軸陶器椀（第99図10）は口縁部破片である。素地は灰白色でやや軟質であり、淡黄色、浅黄色の縁釉が薄くかけられている。この資料と同一個体と見られる破片が第III層から3点出土している。3層からは土師器杯・甕・須恵器甕・瓶が出土した。土師器杯は全てロクロ調整したものであり、切り離しが明かなものは全て回転糸切りである。



第69図 S D945断面図

(註) 本書の作成に際し、「鹿嶺調査報告書」で使用した遺構名を以下のとおり変更した。

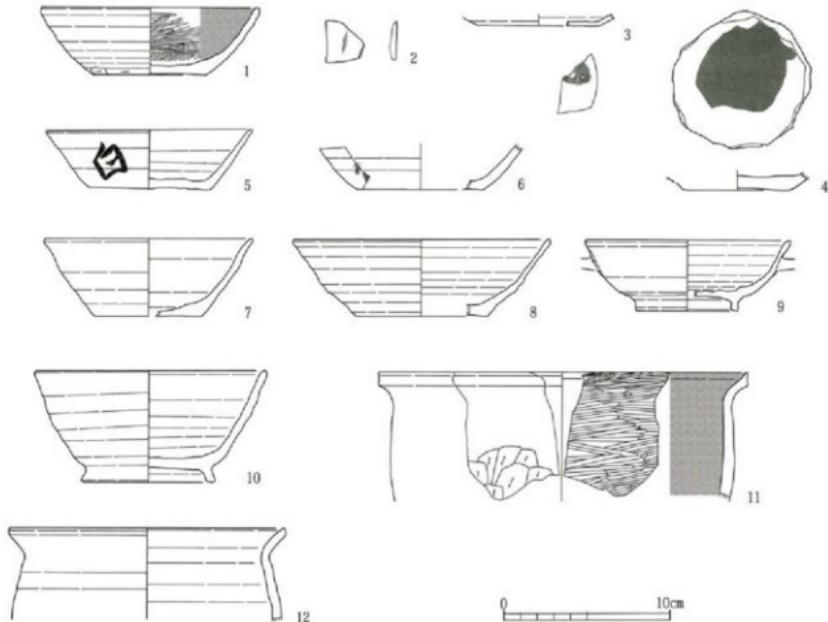
SD946 → SD945A
SD945 → SD945B



単位(cm)

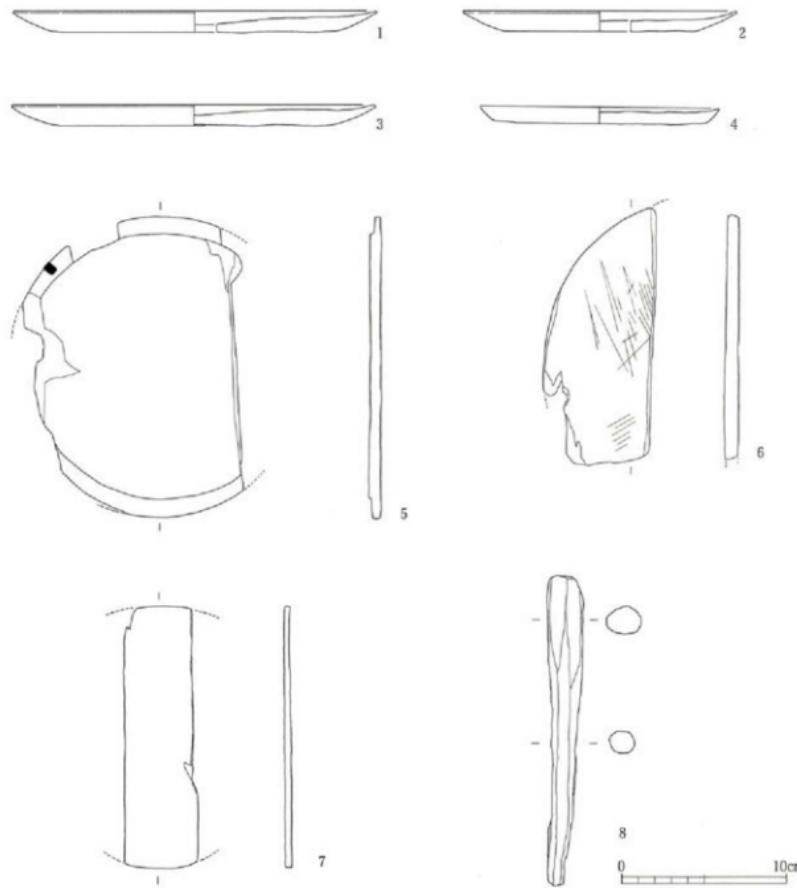
番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(13.5) 1/24	(7.2) 6/24	4.1	R-682	
2	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内部】ロクロナデ	(13.5) 3/24	5.3 20/24	4.0	R-684	
3	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、墨痕 【内部】ロクロナデ	(13.7) 8/24	(6.7) 16/24	3.9	R-264	
4	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 体部：墨書き底部：ヘラ切り 【内部】ロクロナデ、墨書き	(14.4) 4/24	(7.4) 10/24	4.1	R-1845	図版18-14
5	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、墨書き	-	6.7 24/24	-	R-71	図版18-13
6	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ、墨書き 【内部】ロクロナデ	-	-	-	R-272	図版18-17
7	須恵器・杯	1層	【外面】体部：ロクロナデ 墨書き 底部：回転糸切り 【内部】ロクロナデ	-	(6.0) 8/24	-	R-377	
8	土師器・杯	1層	【外面】体部：手持ちヘラケズリ 【内部】漆付着	-	6.0 7/24	-	R-256	
9	須恵器・甕	1層	【外面】口縁：平行叩き→ナデ→波状文 【内部】ロクロナデ	-	-	-	R-257	

第70図 S D945 A出土遺物(1)



番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 3/24	6.8 16/24	4.1	R-681	
2	土師器・杯	2層	【外面】ロクロナデ、墨痕	-	-	-	R-278	
3	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、墨書 【内部】ロクロナデ	- (7.4) 4/24	-	-	R-271	
4	須恵器・杯 (転用器)	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	- 24/24	6.6 24/24	-	R-101	図版16-7
5	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、墨書 【内部】ロクロナデ	12.4 20/24	7.2 24/24	3.8	R-261	図版16-2
6	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ、墨書 底部：ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	- 5/24	(7.6) 5/24	-	R-268	
7	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内部】ロクロナデ	(12.6) 4/24	(6.4) 8/24	4.7	R-683	
8	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内部】ロクロナデ	(15.7) 2/24	(8.0) 8/24	4.7	R-685	
9	須恵器・ 双耳杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→高台貼付 【内部】ロクロナデ	(12.3) 6/24	(6.2) 11/24	4.3	R-687	
10	須恵器・ 高台付杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内部】ロクロナデ	14.0 9/24	8.1 23/24	6.7	R-327	
11	土師器・甕	2層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ（体部） 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(22.2) 2/24	-	-	R-688	
12	土師器・甕	1層	【外面】ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	(16.7) 4/24	-	-	R-689	

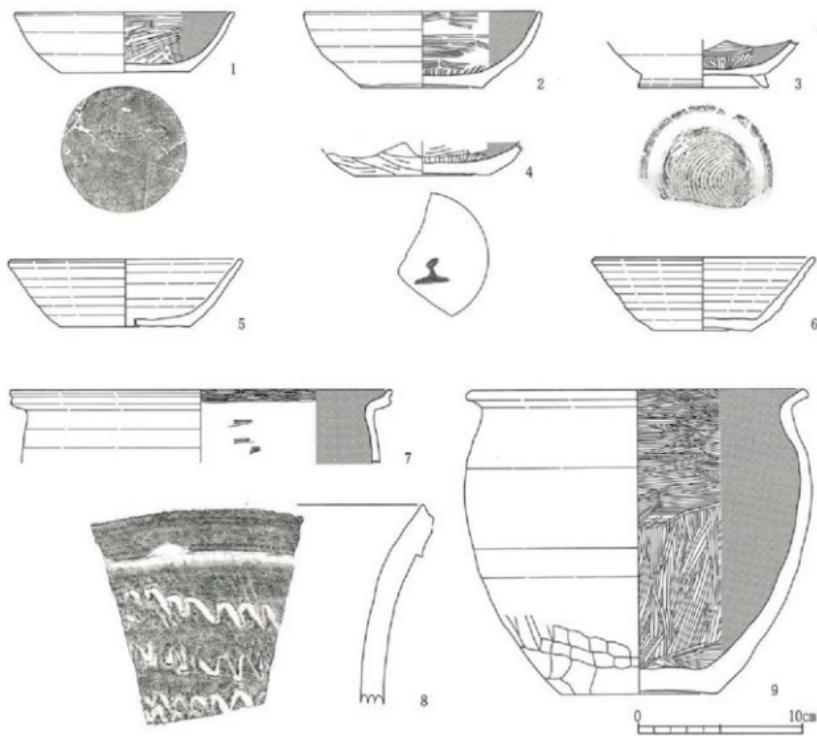
第71図 S D945 A出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号	図版番号
1	挽物・皿	S D945A・2層	径22.1×0.9	ケヤキ		R-3	
2	挽物・皿	S D945A・2層	径18.6×0.7	ケヤキ		R-37	
3	挽物・皿	S D945A・2層	径(22.0)×1.0	ケヤキ		R-27	
4	挽物・皿	S D945A・2層	径14.4×0.8	ケヤキ		R-29	
5	曲物・蓋板	S D945A・2層	径18.3×0.8	ヒノキ科アスナロ属		R-43	
6	曲物・底板	S D945A・2層	径10.9×0.9	マツ科モミ属		R-26	
7	曲物・底板	S D945A・2層	径7.9×0.4	ヒノキ科アスナロ属		R-28	
8	不明品	S D945A・2層	18.8×2.1×1.7	ヒノキ科アスナロ属		R-5	

第72図 S D945A出土遺物(3)



単位(cm)

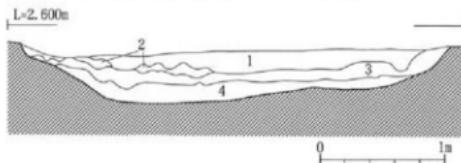
番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	13.4 15/24	7.8 24/24	3.7	R-694	図版16-1
2	土師器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.4) 9/24	7.4 24/24	4.6	R-596	
3	土師器・ 高台付杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	—	7.9 14/24	—	R-672	
4	土師器・杯	1層	【外面】底部：糸切り→手持ちヘラケズリ（体部下半）、墨書き 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	— (8.2)	— 9/24	—	R-1736	
5	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.2) 3/24	(7.8) 5/24	4.1	R-697	
6	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(13.4) 3/24	5.8 24/24	4.4	R-695	
7	土師器・甕	1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(23.2) 4/24	—	—	R-703	
8	須恵器・甕	1層	【外面】口縁：ロクロナデ→波状文 【内面】ロクロナデ	—	—	—	R-567	
9	土師器・甕	1層	【外面】口縁：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ（体部下半） 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(20.7) 10/24	8.4 24/24	18.6	R-33	図版16-4

第73図 SD945B出土遺物

S D947溝跡（第74・83図）

調査区東端の第VII層（地山）上面で発見した溝状の落ち込みである。S D935C・Dと重複しており、それよりも古い。規模は上幅2.0～3.4m、深さ15～54cmである。断面形は船底形であり、底面が広く、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は北側から南側に傾斜しており、40cmの比高差がある。方向は、北で34度西へ偏している。埋土はいずれも自然堆積層であり、4層に分けられる。1層が黒褐色粘土、2層が黒褐色粘土ブロックを含む暗灰黄色粘土、3層が灰黄褐色粘土、4層はグライ化した暗灰黄色粘土である。

遺物は土師器甕、須恵器杯・瓶の小片3点が出土したのみである。

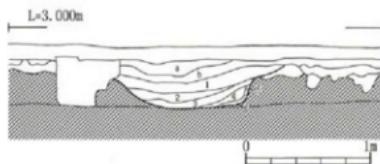


第74図 S D947断面図

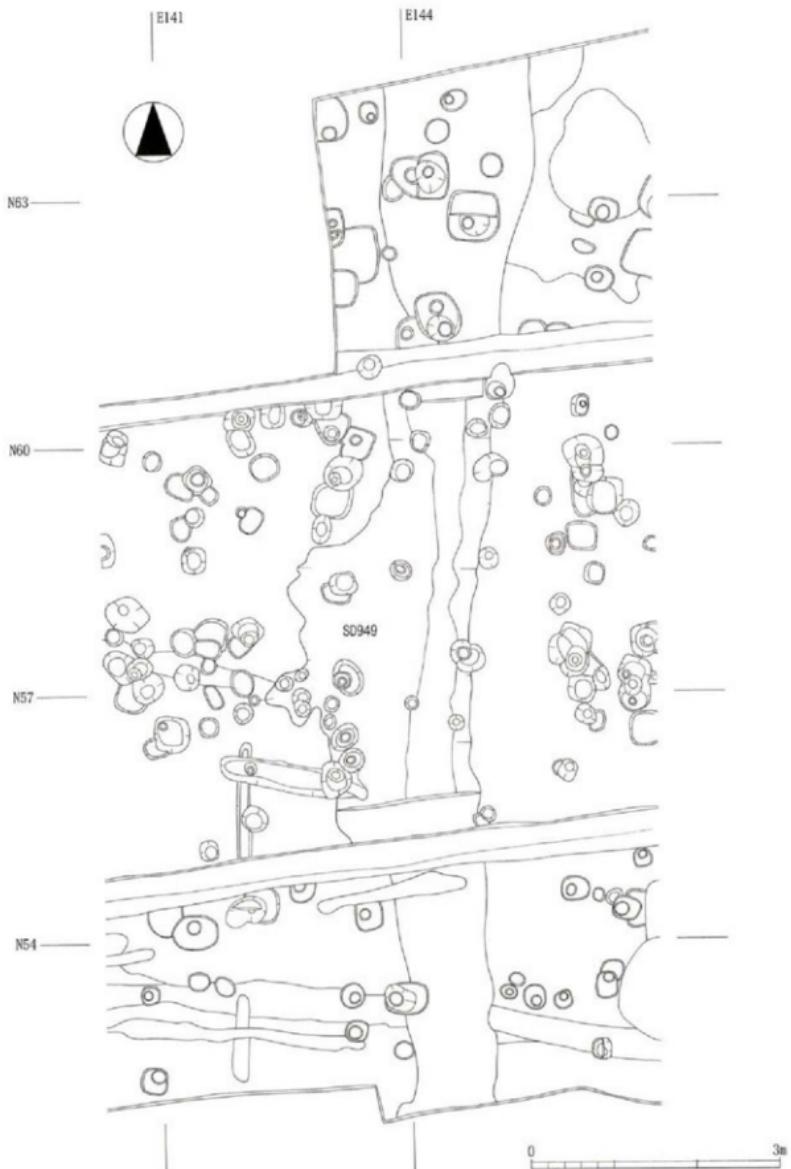
S D949溝跡（第75・76図）

調査区中央部や西寄りの第VII層（地山）上面で発見した南北溝跡である。57・61区（第24次調査）でも確認しており、長さは13m以上である。西側に大きく張り出す部分がある。規模は、西側に張り出す部分で上幅が2.3m、その他は1.3～1.6mである。深さは南壁でみると45cmである。断面形は船底形であり、底面はおおよそ水平である。方向は北で約3度東に偏している。埋土は6層に細分され、1～3層が灰黄褐色粘土、4～6層が褐灰色粘土ブロックを含む黄褐色砂質土であり、4～6層と西側に張り出す部分は人為的に埋められている。なお、本溝跡が完全に埋まりきらない段階で、1層上面にピットが掘り込まれている。

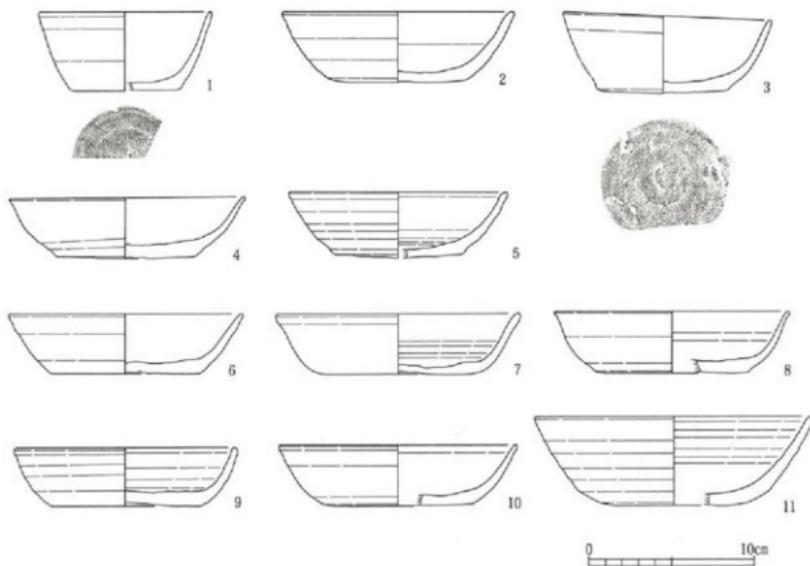
遺物は1層から土師器杯・甕・小型甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕、平瓦（II B類）が出土した（第77・79図）。土師器杯には体部から底部にかけて手持ちヘラケズリした破片と、ロクロ調整かとみられる小片が出土している。須恵器杯はヘラ切りしたものと底部を手持ちヘラケズリしたものがある。2層からは土師器杯・蓋・甕・小型甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕、製塙土器が出土した（第77・78・79図）。土師器杯は、底部から体部にかけて手持ちヘラケズリしたものがほとんどであり、外面にヘラミガキを施した小片も出土している。須恵器杯はヘラ切り無調整がほとんどである（第77図1～10、第78図1～4）。底部にヘラ描きのあるものや（第77図1）、底部に「守」と墨書きされたものもある（第78図1）。



第75図 S D949断面図



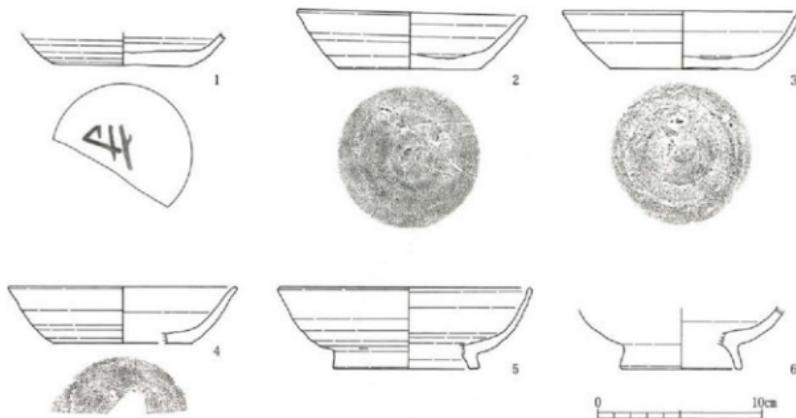
第76図 SD949平面図



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り、ヘラ描き 【内】ロクロナデ	(10.6) 6/24	(6.6) 9/24	4.8	R-618	
2	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(13.9) 11/24	(8.5) 4/24	4.3	R-608	
3	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	12.5 14/24	7.7 18/24	4.7	R-611	図版13-3
4	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	14.3 13/24	8.6 24/24	3.7	R-610	図版13-4
5	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	13.2 8/24	8.0 8/24	4.0	R-614	
6	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(14.2) 7/24	(9.0) 9/24	3.7	R-635	
7	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(14.8) 4/24	(8.8) 16/24	3.7	R-607	
8	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(14.2) 4/24	(9.2) 4/24	3.8	R-616	
9	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	13.6 17/24	9.2 24/24	3.6	R-612	図版13-1
10	須恵器・杯	2層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(14.4) 3/24	(9.1) 12/24	3.7	R-615	
11	須恵器・杯	1層	【外】ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ 【内】ロクロナデ	(16.8) 6/24	(8.8) 5/24	5.4	R-623	

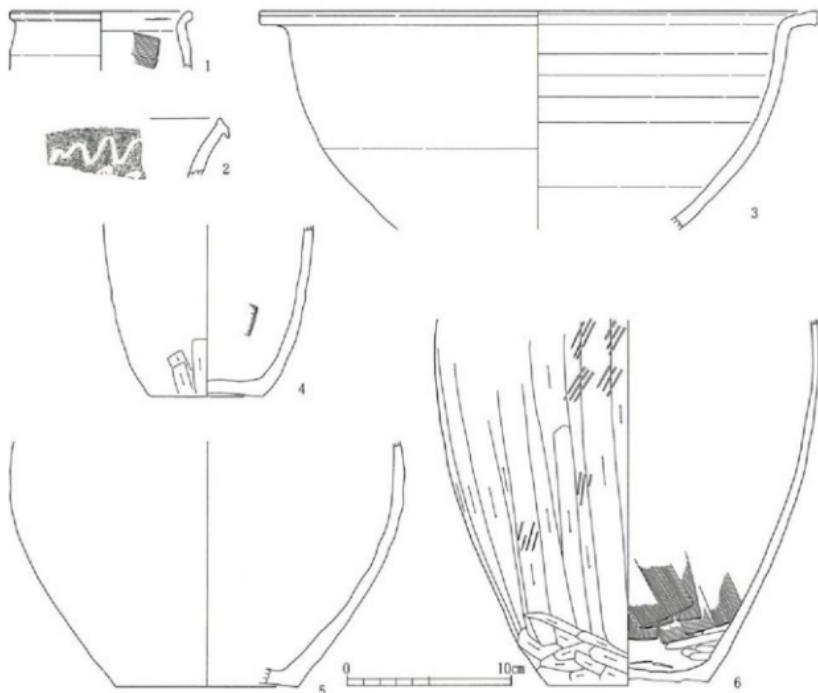
第77図 S D949出土遺物(1)



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 墨書 【内面】ロクロナデ	— 14/24	(8.5) 24/24	—	R-253	
2	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.0 15/24	8.4 24/24	3.5	R-609	図版13-2
3	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.6 13/24	8.8 24/24	3.6	R-617	図版13-5
4	須恵器・杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 1/24	(8.5) 9/24	3.5	R-619	
5	須恵器・ 高台付杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→回転ヘラケズリ（体部 下側）→高台貼付→螺旋状点列 【内面】ロクロナデ	(15.4) 2/24	8.9 18/24	5.0	R-620	図版13-6
6	須恵器・ 高台付杯	2層	【外面】ロクロナデ 底部：高台貼付 【内面】ロクロナデ	— 5/24	(7.4) —	—	R-622	

第78図 SD949出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	層位	特　　徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・甕	2層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→ヘラナデ	(11.1) 9/24	—	—	R-613	
2	須恵器・甕	1層	【外面】口縁：ロクロナデ→波状文 【内面】ロクロナデ	—	—	—	R-621	
3	須恵器・甕	1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(33.8) 3/24	—	—	R-624	
4	土師器・甕	1層	【外面】体部：手持ちヘラケズリ　底部：木葉模 【内面】ヘラナデ	— (6.8) 19/24	—	—	R-627	
5	須恵器・甕	2層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	— (11.2) 15/24	—	—	R-625	
6	土師器・甕	1層	【外面】体部：平行叩き→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラナデ	—	—	—	R-626	図版13-7

第79図 SD949出土遺物(3)

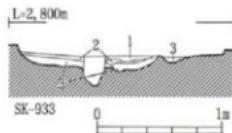
(5) 土 壤

14基発見した。いずれも埋土に炭化物粒や焼土粒を多く含んでいる。

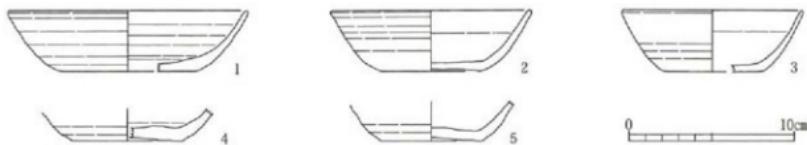
S K933土壤 (第80・83図)

東半部の第VIIb層上面で発見した。複数のビットと重複している。平面形はおおよそ円形であり、断面形は浅い皿状である。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長径1.8m、短径1.6m、深さ25cmである。埋土は3層に分けられ、1層は炭化物・焼土を多く含む黒褐色土、2層は炭化物・焼土を少量含む灰黄褐色土、3層は黄褐色土ブロックを含む灰黄褐色土である。

遺物は、1層から土師器杯・高台付杯・甕・小型甕・須恵器杯・甕・瓶・長頸瓶・灰釉陶器椀・竈形土器、壁土、土器片製円板、平瓦 (IA類・IB類・II C類)、丸瓦 (II類) が出土した (第81図)。土師器杯には回転糸切りのもの、回転糸切り後体部を持ちヘラケズリしたもの、体部を回転ヘラケズリしたものなどがあり、須恵器杯はヘラ切り、回転糸切り、回転糸切り後持ちヘラケズリしたものなどがある。灰釉陶器椀は体部破片である。内面には厚く斑状に灰釉がかかっているが、外面にはハケ塗りの痕跡が確認できる。



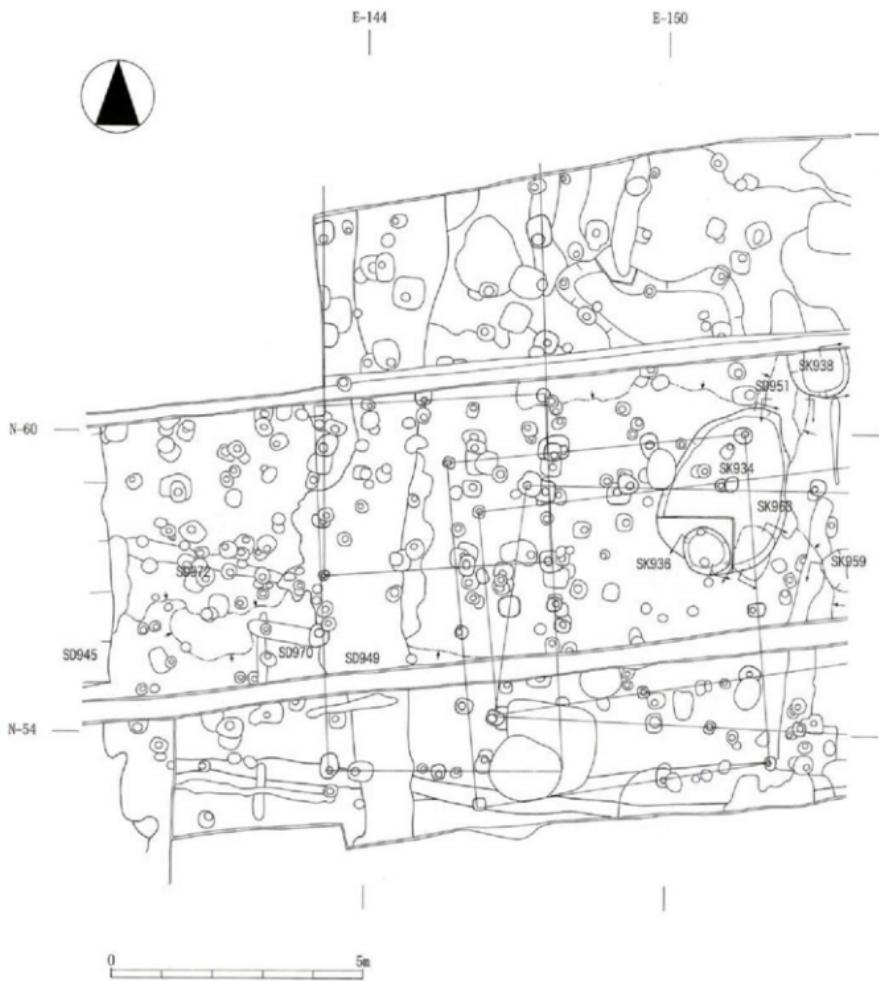
第80図 S K933断面図



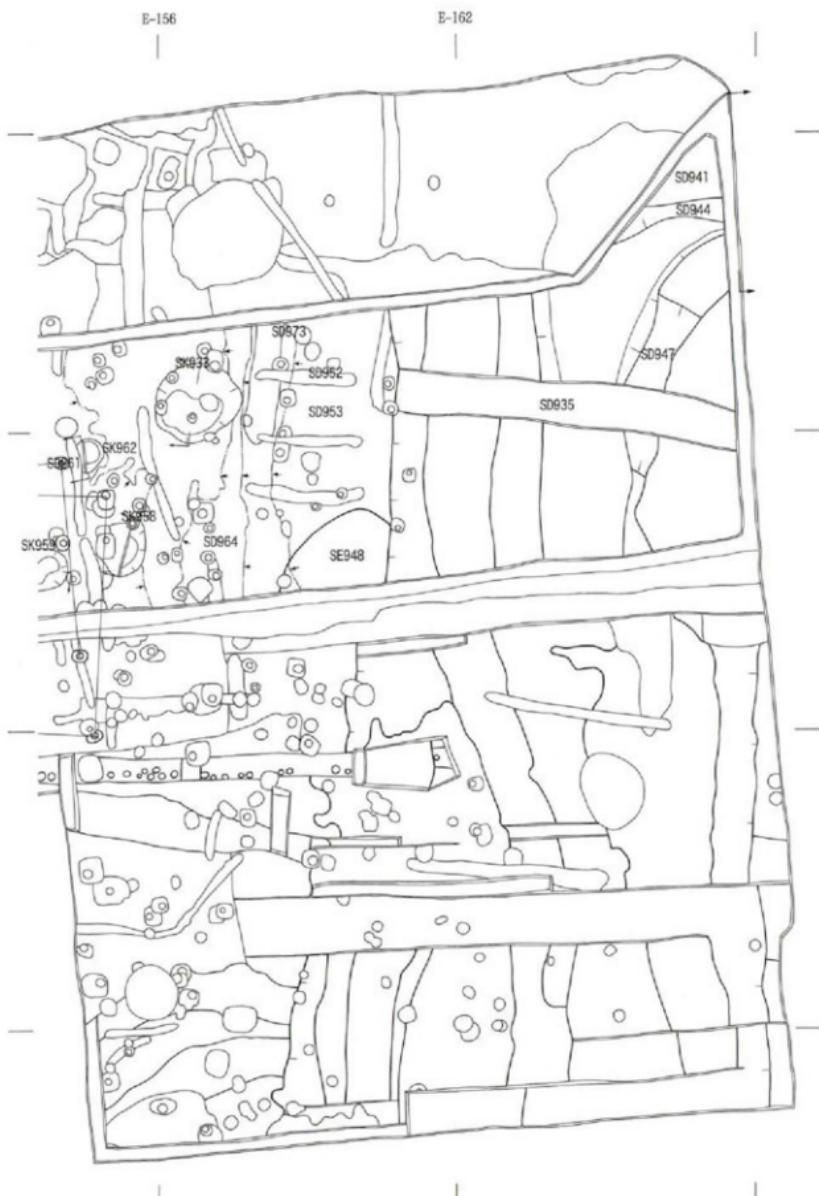
単位 (cm)

番号	種類	層位	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(13.6) 2/24	(8.4) 8/24	3.7	R-494	
2	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内部】ロクロナデ	(12.3) 2/24	5.0 24/24	3.7	R-492	
3	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内部】ロクロナデ	(10.9) 1/24	(6.2) 4/24	3.8	R-495	
4	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	—	(5.8) 4/24	—	R-496	
5	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内部】ロクロナデ	—	(6.2) 7/24	—	R-493	

第81図 S K933出土遺物



第82図 B14(Ⅱ)区土壤等平面図(1)

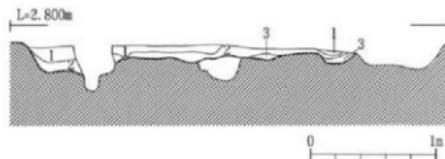


第83図 B14(Ⅱ)区土壤等平面図(2)

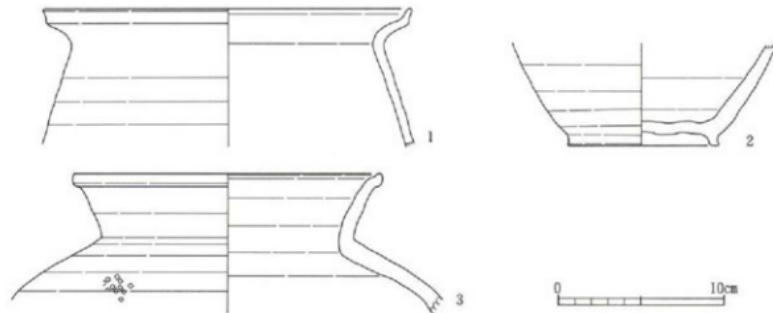
S K934土壤 (第82・84図)

中央部の第VIa層上面で発見した。S K936・950・963、S D951、S B993と重複しており、S K963・950、S D951より新しいが他のものより古い。平面形はおよそ梢円形である。断面形は浅い皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっており。底面には凹凸がある。規模は、長径3.6m、短径2.5m、深さ20cmである。埋土は3層に分けられ、1層は炭化物・焼土を多く含むしまりのない黒褐色土、2層はにぶい黄色土ブロックと炭化物や焼土を含む黄灰色土、3層はにぶい黄色砂質土ブロックを含む黒褐色土である。1層は2・3層堆積後、その瘤みに自然堆積したような状況である。

遺物は、1層から土師器杯・高台付杯・甕・小型甕・須恵器杯・甕・長頸瓶・須恵系土器杯・土器片製円板、平瓦(II B類)、丸瓦(II類)が出土した(第85・86図)。土師器杯は、底部が回転糸切りのもの、手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り後体部を回転ヘラケズリしたもの、体部・底部を手持ちヘラケズリしたものなどがある。須恵器杯は、ヘラ切り、回転糸切り、回転糸切り後体部を手持ちヘラケズリしたもの、ヘラ切り後体部を手持ちヘラケズリしたものなどがある。2層からは、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・瓶・長頸瓶が出土した。土師器杯は、底部と体部に手持ちヘラケズリしたもののがほとんどである。須恵器杯はすべてヘラ切り無調整のものである。



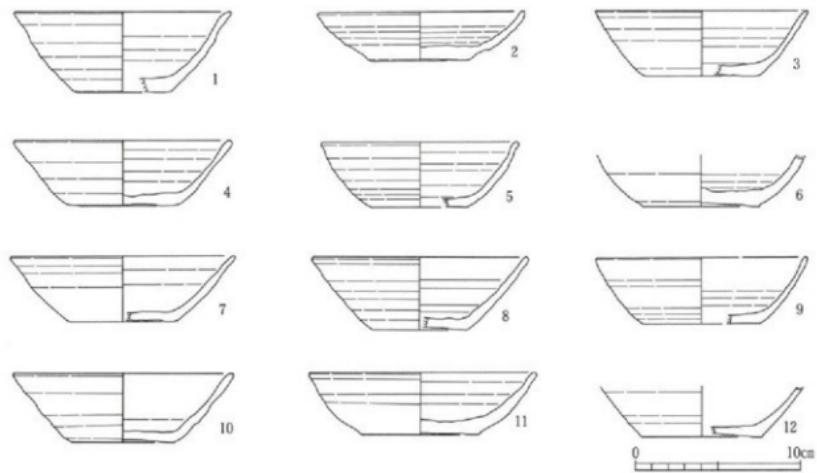
第84図 S K934断面図



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・甕	1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(22.4) 9/24	-	-	R-509	
2	須恵器・瓶	1層	【外面】ロクロナデ 底部：高台貼付 【内面】ロクロナデ	- (9.0) 19/24	-	-	R-662	
3	須恵器・甕	2層	【外面】口縁：ロクロナデ 体部：格子叩き→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(18.7) 5/24	-	-	R-724	図版13-13

第85図 S K934出土遺物(1)



単位(cm)

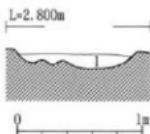
番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(13.2) 5/24	(5.9) 6/24	4.9	R-734	
2	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	12.6 17/24	5.9 24/24	3.0	R-500	図版13-10
3	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.9) 8/24	(7.0) 18/24	4.0	R-501	
4	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.2) 1/24	(6.8) 13/24	4.1	R-502	
5	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.0) 5/24	(5.9) 10/24	4.0	R-505	図版13-8
6	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	—	7.1 20/24	—	R-506	
7	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(13.6) 1/24	(6.6) 18/24	4.0	R-504	
8	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.2) 9/24	(5.8) 12/24	4.4	R-497	
9	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(12.8) 3/24	(7.0) 11/24	4.1	R-732	
10	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.2) 5/24	6.1 19/24	4.3	R-498	
11	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	13.8 12/24	7.2 24/24	3.9	R-499	図版13-9
12	須恵器・杯	I層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	—	(7.2) 11/24	—	R-503	

第86図 SK934出土遺物(2)

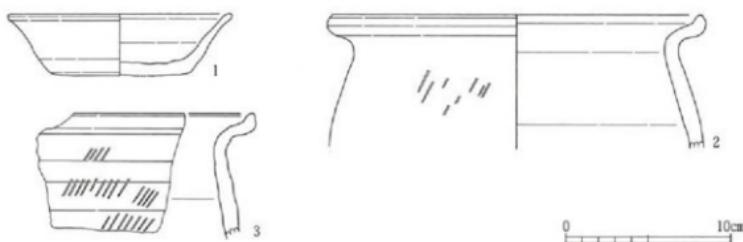
S K936土壤 (第82・87図)

調査区中央部のS K934埋土上面で発見した。また複数のピットとも重複しており、それより新しい。平面形はおおよそ梢円形であり、断面形は浅い皿状である。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長径1.0m、短径0.9m、深さ23cmである。埋土は黄橙色土ブロックと炭化物、焼土粒を多く含むしまりのない黒色土である。

遺物は、土師器杯・高台付杯・壺・須恵器杯・蓋・壺・瓶が出土した(第88図)。土師器杯は、回転糸切りのものと手持ちヘラケズリしたものがある。須恵器杯はヘラ切り無調整のもの、回転糸切り無調整のもの、ヘラ切り後手持ちヘラケズリしたものが出土地で出土している。



第87図 S K936断面図



番号	種類	層位	特徴	単位(cm)				
				口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(13.6) 2/24	(8.4) 12/24	3.7	R-510	
2	土師器・壺	1層	【外面】口縁：ロクロナデ 体部：平行叩き→ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	(22.2) 2/24	—	—	R-707	図版13-11
3	土師器・壺	1層	【外面】口縁：ロクロナデ 体部：平行叩き→ロクロナデ 【内部】ロクロナデ	—	—	—	R-708	図版13-12

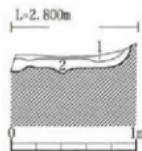
第88図 S K936出土遺物

S K938土壤 (第82・89図)

調査区東部の第VIa層上面で発見した。SD951と重複しており、それよりも新しい。平面形は梢円形であり、断面形は浅い皿状である。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長径1.1m、短径0.9m以上、深さ27cmである。埋土は2層に分けられ、1層はぶい黄色砂質土と炭化物、焼土粒を多く含む黒色土、2層は黒褐色ブロックと炭化物を含むぶい黄色砂質土である。

遺物は、土師器杯・壺・小型壺・須恵器杯・蓋・壺・小型壺・瓶・長頸瓶・丸瓦(II類)が出土した。土師器杯は、回転糸切り後体部を手持ちヘラケズリしたもの、回転ヘラケズリしたものなどがある。須恵

器杯はヘラ切りと回転糸切りのものがある。2層からは土師器甕、須恵器杯・甕・瓶が出土した。須恵器杯はヘラ切りである。



第89図 S K958断面図

S K958土壤 (第83図)

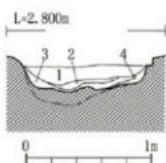
調査区中央部の第VII層(地山)上面で発見した梢円形の土壌である。S K956と重複しており、それよりも古い。断面形は浅い箱型であり、底面はおおよそ平坦で、壁は急に立ち上がっている。規模は、長径0.9m、短径0.5m、深さ18cmである。埋土は3層に区分され、1層は炭化物粒や焼土粒を多く含む灰黄褐色土、2層は炭化物を多量に含む黒褐色粘土、3層は地山である黄褐色砂質土粒を含む黒褐色粘土である。

遺物は、須恵器杯が出土した。

S K959土壤 (第83・90図)

東半部の第VII層(地山)上面で検出した。第VI_a層によって覆われている。S D955と重複しており、それよりも新しい。平面形はおおよそ梢円形である。断面形は浅い箱型であり、壁は立ち上がりが急である。底面には凹凸がある。規模は、長径1.1m、短径0.9m、深さ44cmである。埋土は、炭化物粒・焼土粒を含む黒褐色粘質土(第90図1)と黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘土(2~4)の2層に大別できる。

遺物は出土していない。

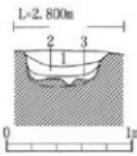


第90図 S K959断面図

S K962土壤 (第83・91図)

東半部の第VII層(地山)上面で発見した。第VI_a層によって覆われている。S D961と重複しており、それよりも古い。平面形はおおよそ円形であり、断面形は箱型である。規模は直径約0.6m、深さ25cmである。埋土は黄褐色土ブロックと炭化物粒・焼土粒を含む黒褐色粘質土(第91図1・2)と、黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘土(3)の2層に大別できる。

遺物は出土していない。

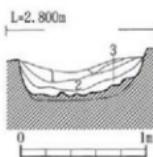


第91図 SK962断面図

S K963土壤（第82・92図）

中央部の第VII層（地山）上面で発見した。SK934と重複しており、それよりも古い。平面形は方形である。断面形は箱型であり、壁は急に立ち上がっている。底面には凹凸がある。規模は長辺1.0m、短辺0.7m、深さ45cmである。埋土は3層に分けられ、1層は黄褐色土ブロックと炭化物粒を含む黒褐色土、2層は黄褐色土ブロックと炭化物粒を含む黒褐色粘土、3層は黄褐色ブロックを含む黒褐色粘土である。

遺物は出土していない。



第92図 SK963断面図

(6) その他の遺構

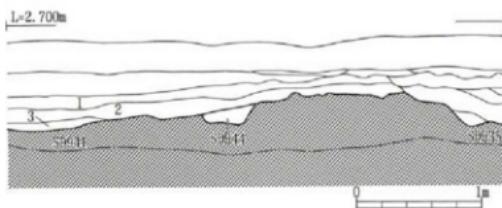
S D941溝跡（第83・93図）

東端部北側の第VII層（地山）上面で発見した東西溝である。SD935・944と重複しており、前者より古く後者より新しい。規模は上幅2.1m以上、下幅1.7m以上、深さ約30cmである。約1.2m検出したにすぎず、北側に傾斜する落ち込みの可能性もある。埋土は炭化物粒や焼土粒を含む黒褐色粘土である。

遺物は土師器杯が出土した。回転糸切り後体部から底部にかけて手持ちヘラケズリしたものであり、底部にヘラ描きのあるものも出土している（第95図1・2）。

S D944溝跡（第83・93図）

調査区東半部北端の第VII層（地山）上面で発見した東西溝である。SD941と重複しており、それよりも



第93図 SD941・944断面図

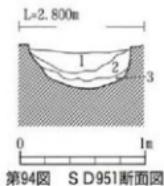
古い。規模は上幅0.4m、下幅0.3m、深さ18cmであり、長さは約1.2mである。埋土はややグライ化した黒褐色粘土である。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯が出土した。須恵器杯はヘラ切りであり、底部に「秦」の墨書がある（第95図4）。

S D951溝跡（第82・94図）

調査区中央部の第VII層（地山）上面で発見した南北溝である。SK934・938と重複しており、それより古い。方向は北で3度東に偏している。規模は上幅0.5~0.9m、下幅0.2~0.4m、深さ35~40cmであり、長さは約4.9mである。断面形は船底状を呈している。埋土は3層に分けられるが、いずれも黄褐色土ブロックを含む黒色土を主体としている。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋・円面鏡が出土した（第95図5～9）。1層から出土した土師器杯は、体部から底部にかけて手持ヘラケズリしたものであり、須恵器杯はヘラ切り後体部下半に手持ヘラケズリしたものである。油煙が付着しているものもある。2層から出土した須恵器杯は、ヘラ切りのもの、ヘラ切り後体部下半から底部にかけて手持ヘラケズリしたものである。円面鏡は2層から破片が7点出土した。接合しないものもあるが同一個体と考えられる（第95図12）。



第94図 S D951断面図

S D952溝跡（第83図）

調査区東半部の第VI₂b層上面で発見した小規模な東西溝である。規模は上幅0.2~0.3m、深さ12cmであり、長さは約2.0mである。断面形はU字形である。方向は、東で3度南に偏している。埋土は黄褐色砂質土ブロックを含む黒褐色土である。

遺物は土師器甕、須恵器杯（ヘラ切り）・甕の小破片数点が出土したのみである。

S D953溝跡（第83図）

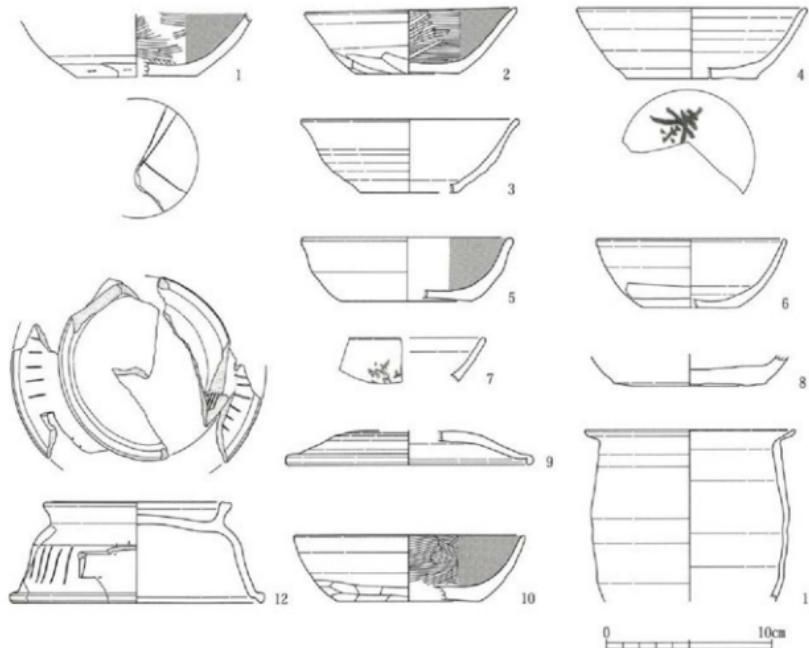
調査区東半部の第VI₂b層上面で発見した小規模な東西溝である。規模は、上幅0.2~0.3m、深さ10cmであり、長さは約1.2mである。断面形はU字形である。方向は、東で7度南に偏している。埋土は黄色土粒と炭化物粒を含む灰黄褐色土である。

遺物は土師器甕（ロクロ）の破片1点が出土したのみである。

S D961溝跡（第83図）

調査区中央部の第VI₁a層上面で発見した小規模な南北溝である。SK962と重複しており、それより新しい。規模は上幅1.0~0.2m、下幅約0.1m、深さ8cmであり、長さは約2.0mである。方向は、北で5度西へ偏している。

遺物は土師器甕、須恵器杯・甕の小片が数点出土した（第95図3）。



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S D941・1層	【外観】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（体部下端）【内観】ヘラミガキ→黒色処理	- 8/24	(7.3) 6.2	-	R-368	
2	土師器・杯	S D941・1層	【外観】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（体部下端）【内観】ヘラミガキ→黒色処理	12.9 21/24	6.2 24/24	3.9	R-638	図版16-5
3	須恵器・杯	S D961・埋土	【外観】ロクロナデ 底部：回転糸切り	(13.2) 1/24	(5.9) 3/24	4.5	R-641	
4	須恵器・杯	S D944・1層	【外観】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、墨書き	(12.8) 3/24	(8.0) 14/24	4.2	R-53	図版18-16
5	土師器・杯	S D951・1層	【外観】ロクロナデ→削断ヘラケズリ（体部下半）・油付付着	(12.7) 7/24	(7.8) 10/24	3.8	R-94	
6	須恵器・杯	S D951・2層	【外観】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（体部下端）【内観】ロクロナデ	(11.5) 10/24	(5.9) 12/24	4.1	R-637	
7	須恵器・杯	S D951・2層	【外観】ロクロナデ、墨書き	-	-	-	R-57	図版18-19
8	須恵器・杯	S D951・2層	【外観】ロクロナデ 底部：ヘラ切り	- 7/24	(9.1) -	-	R-519	
9	須恵器・蓋	S D951・2層	【外観】ロクロナデ→回転ヘラケズリ	(14.7) 8/24	-	-	R-521	
10	土師器・杯	S D973・1層	【外観】ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（体部下端）【内観】ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) 8/24	8.6 24/24	4.0	R-254	
11	土師器・甕	S D970・1層	【外観】ロクロナデ	(12.7) 5/24	-	-	R-640	
12	円面鏡	S D951・2層	【外観】ロクロナデ	(11.4) 11/24	(15.2) 9/24	6.1	R-102	図版15-8

第95図 B14(II)区その他の溝跡出土遺物

S D964溝跡（第83図）

調査区中央部の第VII層（地山）上面で発見した小規模な南北溝である。規模は上幅0.2～0.3m、下幅約0.1m、深さ8cmであり、長さは0.8m以上である。方向は、北で5度西へ偏している。埋土は炭化物粒・焼土粒を含む黒褐色土である。

遺物は土師器杯・甕、須恵器甕の小破片数点と土錘（第101図）が1点出土した。

S D970溝跡（第82図）

調査区中央部で発見した小規模な東西溝である。第VII層上面で検出したが第VI₂a層上面より掘り込まれた可能性がある。S D949と重複しており、それより新しい。規模は、上幅0.3～0.4m、下幅約0.2m、深さ31cmであり、長さは約1.9mである。方向は、東で10度南に偏している。埋土は焼土粒・炭化物粒・黄褐色土を含む黒褐色粘質土の1層と黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘土の2層に分けられる。

遺物は土師器甕、須恵器杯の小破片数点が出土した（第95図11）。

S D972溝跡（第82図）

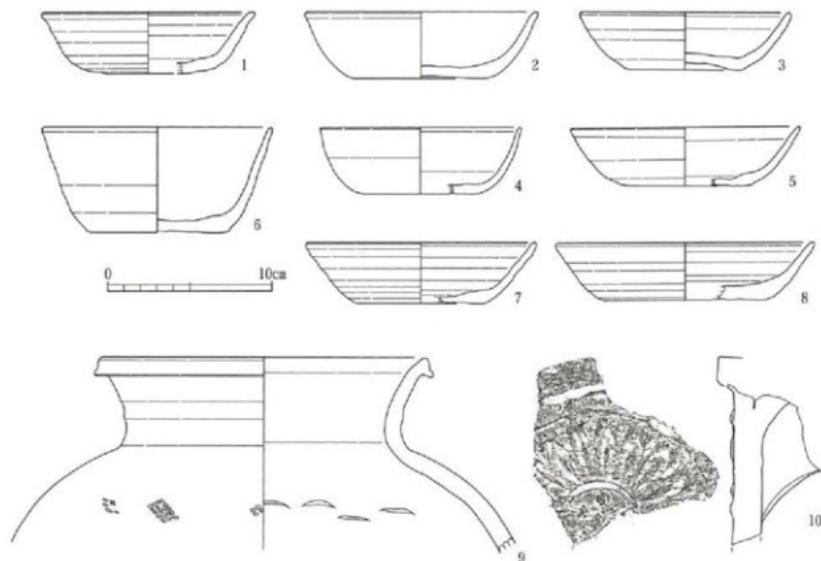
調査区中央部の第VII層（地山）上面で検出した。第VI₂a層によって覆われている。長さ4.8mの溝跡である。S D949と重複しており、それより古い。規模は、上幅0.2～0.4m、深さ10～18cmであり、長さは約4.8mである。断面形はU字形である。底面は東側から西側へ傾斜しており、比高差は5cmである。方向は、東で11度南に偏している。

遺物は、土師器杯、須恵器杯、平瓦（II B類）の小破片数点が出土した。

S D973溝跡（第83図）

調査区東半部の第VII層（地山）上面で検出した南北溝である。第VI₂b層によって覆われている。規模は上幅0.5～0.8m、下幅0.3～0.4m、深さ25cmであり、長さは約2.5mである。方向は、北で5度東に偏している。埋土は2層に分けられ、1層は灰黄褐色砂質土、2層は黄褐色砂ブロックを含む灰黄褐色粘質土である。

遺物は土師器杯が1点出土している。回転糸切り後手持ちヘラケズリしたものである（第95図10）。



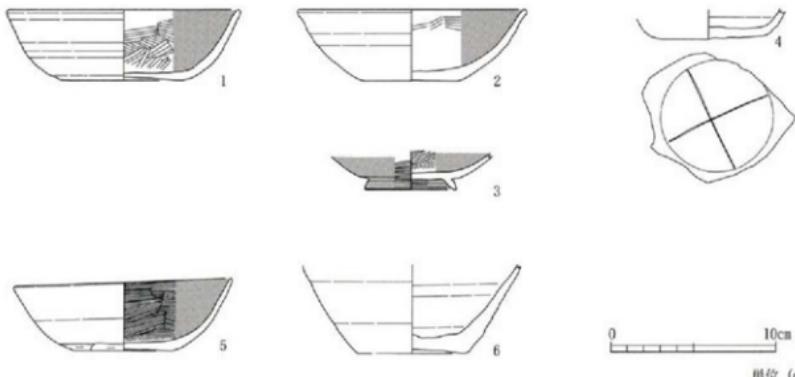
单位 (cm)

番号	種類	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.0) 4/24	(6.9) 6/24	3.6	R-647	
2	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.2) 2/24	(8.8) 7/24	4.1	R-650	
3	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.8) 4/24	6.9 16/24	3.5	R-646	
4	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.2) 2/24	(7.2) 3/24	4.1	R-648	
5	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	13.9 15/24	8.1 16/24	3.6	R-9	図版14-2
6	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り、ヘラ描き「×」 【内面】ロクロナデ	(14.0) 8/24	8.6 24/24	6.4	R-295	
7	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 1/24	(7.8) 10/24	3.7	R-652	
8	須恵器・杯	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(15.6) 1/24	(9.6) 6/24	3.5	R-651	
9	須恵器・甕	【外面】口縁: ロクロナデ 体部: 格子叩き→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(19.6) 4/24	—	—	R-656	
10	軒丸瓦	細弁蓮花文 (310B類)	—	—	—	R-260	図版14-14

第95図 B14(II)区遺構外出土遺物(1)

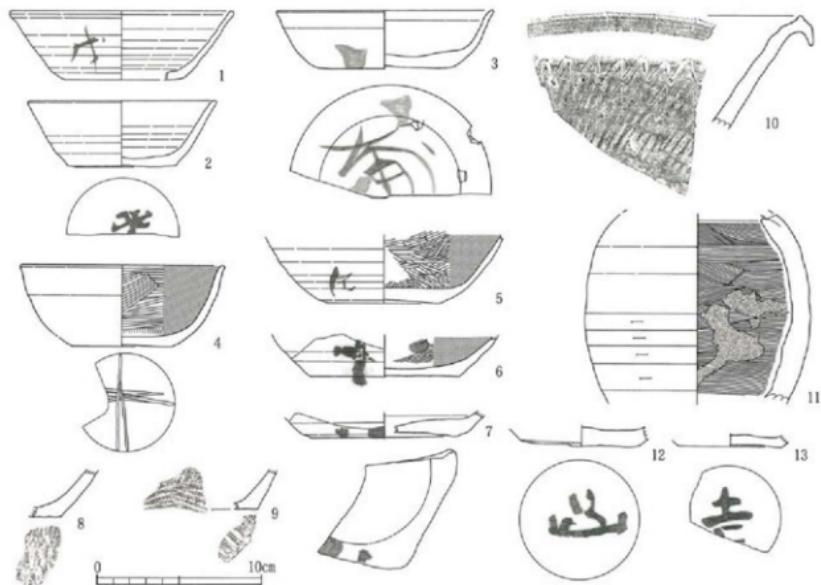
種類	瓦 丸瓦	平瓦	軒瓦 丸瓦	不明	灰陶器	綠釉器	土器	硬石 器	石器 礫石器	不明	2	
											1	2
S D 991												
S D 992	7	3			1							
S D 993	1											
S D 994	5	2		1			1					
S D 995	44											
E 948	1	1										3
D 943	4	3	2	1	1		1	2	2	1		
D 935 A	2	3				1						
D 935 B	3	1										
D 935 C	2	1		1	1							
D 935 D												
S D 944	2	1										
S D 945 B	3	3				1						
S D 945 A	3											
S D 947	1	1			1							
S D 949												
S D 951												
S D 952												
S D 953												
S D 955												
S D 960												
S D 961												
S D 964												
S D 970												
S D 972												
S D 973	1	1	5									
S K 933	2	3		1								
S K 934												
S K 936		1										
S K 938												
S K 965	1	37	27	2	2	5	2	1	2	2	2	4

表4 B14(Ⅲ)区出土遺物集計表(1)



番号	種類	特 徴	口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	【外観】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.2) 1/24	6.4 15/24	4.3	R-659	
2	土師器・杯	【外観】ロクロナデ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) 4/24	6.0 13/24	4.4	R-660	
3	土師器・ 高台付杯	【外観】底部:高台貼付→ヘラミガキ→黒色処理 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	— —	5.6 24/24	—	R-661	図版14-13
4	須恵器・杯	【外観】ロクロナデ 底部:ヘラ切り、ヘラ描き「X」 【内面】ロクロナデ	— —	6.8 24/24	—	R-371	
5	土師器・杯	【外観】ロクロナデ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ(体部下半) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	13.3 15/24	6.0 24/24	4.2	R-657	図版14-1
6	土師器・甕	【外観】体部:ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	— —	6.8 24/24	—	R-658	

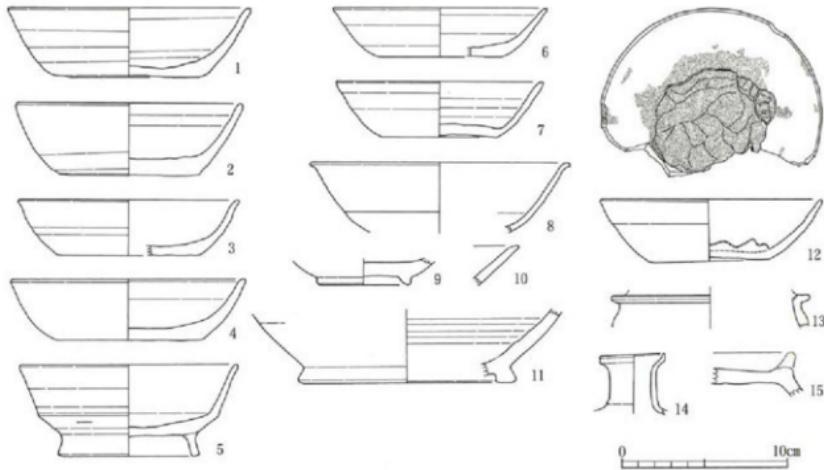
表97図 B14(Ⅲ)区遺構外出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ、墨書き底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.5) 4/24	(7.2) 5/24	4.2	R-267	図版18-20
2	須恵器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(12.4) 8/24	6.7 12/24	4.0	R-54	図版18-18
3	須恵器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(13.1) 11/24	8.6 12/24	3.6	R-374	
4	土師器・杯	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ底部:回転糸切り、ヘラ描き 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(12.4) 6/24	6.0 18/24	5.0	R-318	図版14-9
5	土師器・杯	第Ⅰ層	【外面】ロクロナデ、墨書き底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	6.2 24/24	-	R-347	
6	土師器・杯	第Ⅲ層	【外面】体部:ロクロナデ、漆書き底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- -	(9.0) 5/24	-	R-74	
7	須恵器・杯	混 亂	【外面】体部:ロクロナデ、墨書き 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	- -	(9.1) 7/24	-	R-372	
8	土師器・甕	第Ⅳ層	【外面】ハケメ底部:ムシロ痕 【内面】ハケメ	- -	(9.7) 4/24	-	R-1691	図版14-16
9	土師器・甕	第Ⅲ層	【外面】ハケメ底部:ムシロ痕	-	-	-	R-1692	
10	須恵器・甕	第Ⅲ層	【外面】平行叩き→波状文 【内面】ロクロナデ	-	-	-	R-1732	
11	須恵器・瓶	第Ⅲ層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ→ヘラナデ、塗付着	-	-	-	R-1735	
12	須恵器・杯	表 採	【外面】ロクロナデ底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	- -	7.2 24/24	-	R-59	図版18-3
13	須恵器・杯	不 明	【外面】ロクロナデ底部:回転糸切り、墨書き 【内面】ロクロナデ	- -	(6.1) 16/24	-	R-58	

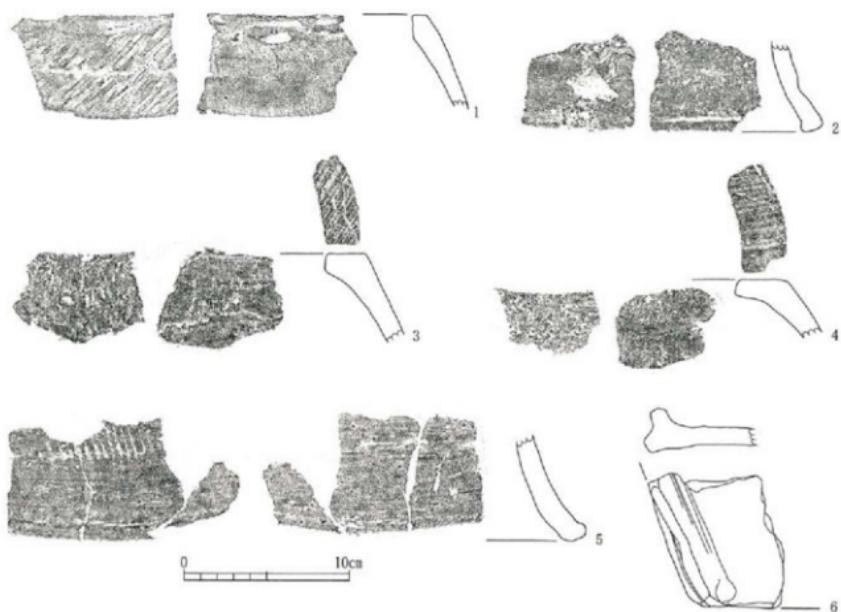
第98図 B14(W)区遺構外出土遺物(3)



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	擾乱	【外】ロクロナデ底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	14.7 17/24	8.8 24/24	4.3	R-43	
2	須恵器・杯	擾乱	【外】ロクロナデ底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(13.7) 9/24	8.5 24/24	4.5	R-44	
3	須恵器・杯	擾乱	【外】ロクロナデ底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(13.4) 5/24	(8.5) 11/24	3.4	R-329	
4	須恵器・杯	擾乱	【外】ロクロナデ底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(14.2) 7/24	8.8 18/24	3.7	R-328	
5	須恵器・破瓶	検出面 →高台貼付	【外】ロクロナデ→回転ヘラケズリ底部: 回転ヘラケズリ 【内】ロクロナデ	(13.3) 4/24	(8.5) 14/24	5.6	R-324	
6	須恵器・杯	擾乱	【外】ロクロナデ底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(13.0) 2/24	(7.7) 7/24	3.0	R-344	
7	須恵器・杯	検出面	【外】ロクロナデ底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	(12.6) 5/24	7.1 24/24	3.4	R-326	
8	灰釉陶器・ 楕	第Ⅲ層	【外】回転ヘラケズリ (体部下半) →施釉 【内】施釉	(15.8) 3/24	—	—	R-169	
9	灰釉陶器・ 小碗	第Ⅲ層	【外】回転ヘラケズリ底部: 回転ヘラケズリ→高台貼付、トチン跡 【内】施釉	—	(5.7) 13/24	—	R-172	
10	綠釉陶器・ 楕	SD945A Ⅰ層	【外】施釉 【内】施釉	—	—	—	R-207	
11	灰釉陶器・ 広口壺	第Ⅲ層	【外】回転ヘラケズリ→施釉底部: 高台貼付 【内】ロクロナデ	—	(12.8) 2/24	—	R-715	
12	須恵器・杯	不明	【外】ロクロナデ底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ、塗紙付着	13.4 13/24	7.2 15/24	3.9	R-77	
13	土師器・羽 釜	検出面	【外】ロクロナデ 【内】ロクロナデ	—	鷄径 (12.0)	—	R-1694	
14	須恵器・ 小型瓶		【外】ロクロナデ 【内】ロクロナデ	(4.0) 5/24	—	—	R-284	
15	円面鏡	第Ⅲ層	【外】 【内】	—	—	—	R-1847	

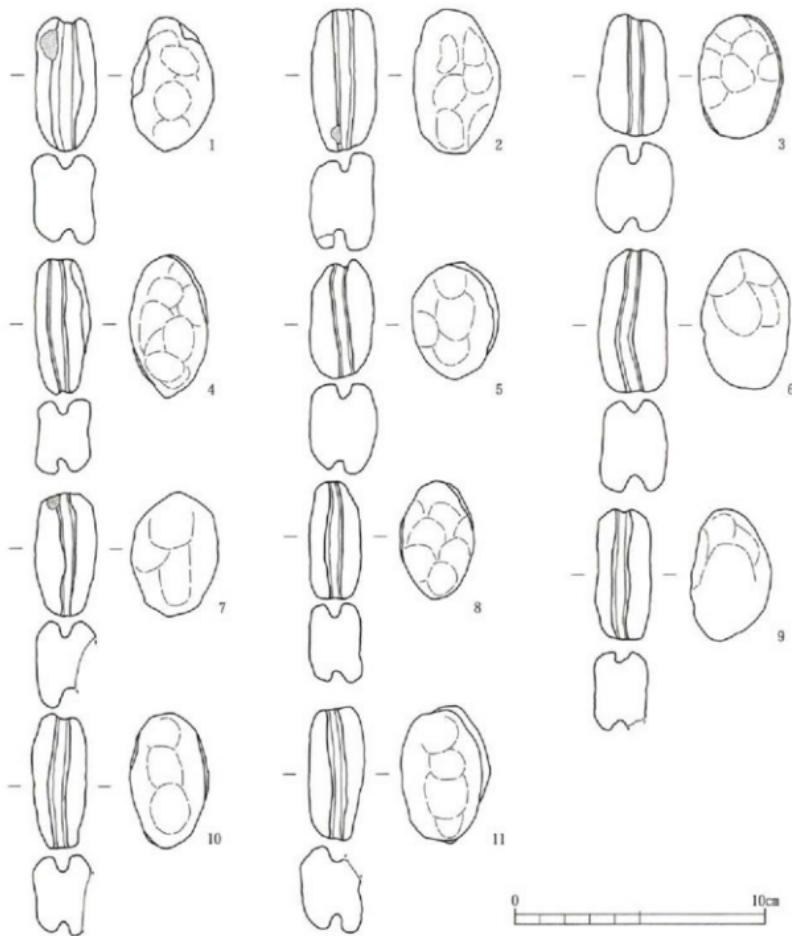
第99図 B14(N)区遺構外出土遺物(4)



単位(cm)

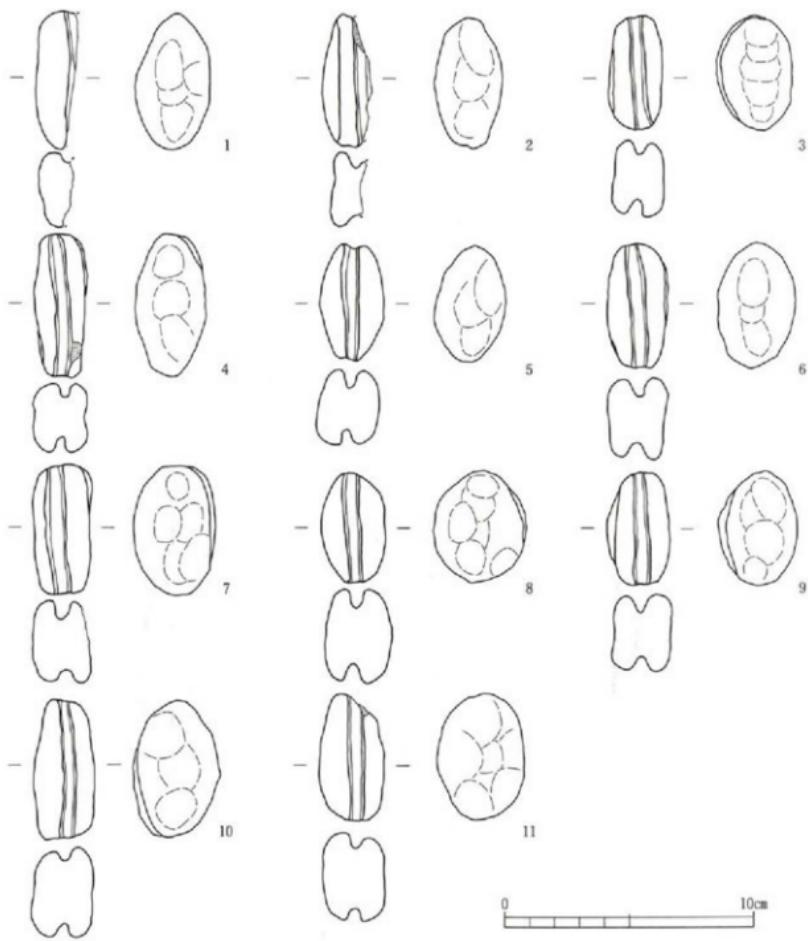
番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	龜形土器	第1層	【外面】平行叩き	—	—	—	R-1603	
2	龜形土器	SD905C 1層		—	—	—	R-1601	
3	龜形土器	第四層	【外面】ヘラケズリ 接口：板圧痕 【内面】口縁：ヘラケズリ	—	—	—	R-1670	
4	龜形土器	第四層	【外面】ヘラケズリ 接口：板圧痕 【内面】ヨコナデ	—	—	—	R-1669	
5	龜形土器	第四層	【外面】平行叩き→ヨコナデ	—	—	—	R-1668	
6	龜形土器	第四層	【外面】ヨコナデ、底貼付	—	—	—	R-1602	

第100図 B14(W)区出土龜形土器



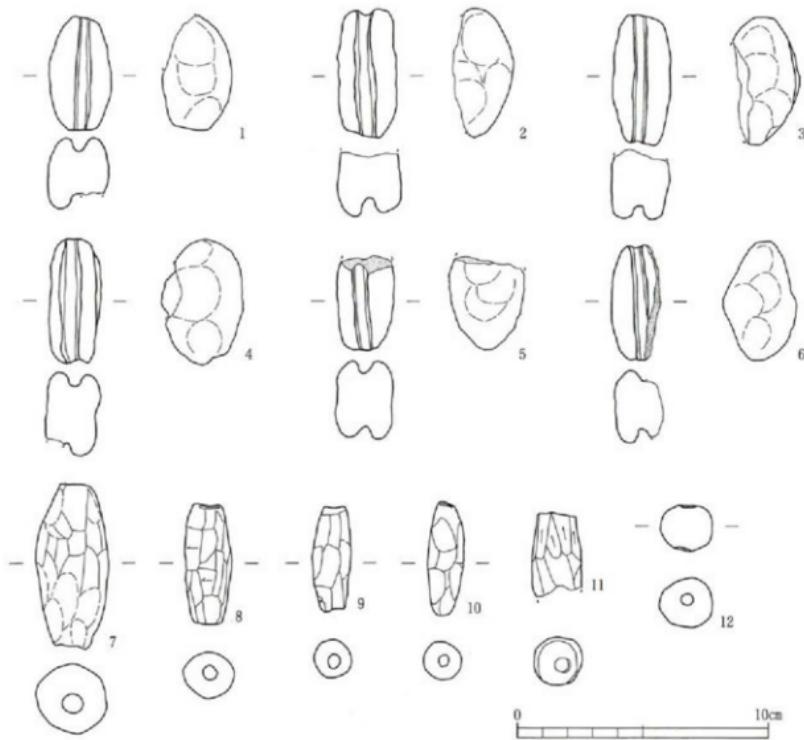
番号	地区	遺構	層位	形態分類	長さ	幅	溝幅	最小溝幅	重さ	遺存	備考	登録番号	図版番号
1	14(W)区	S E948	I層	II-2類	5.4	2.4	0.9	0.5	45	ほぼ完形	オサエ	R-213	図版19-2
2	14(W)区		検出面	II-2類	5.8	2.6	0.7	0.4	55	ほぼ完形	オサエ	R-214	図版19-2
3	14(W)区		第Vlb層	II-2類	5	3	0.9	0.5	50	完形	オサエ	R-215	図版19-2
4	14(W)区	S E948	I層	II-1類	5.6	2.2	0.8	0.4	40	完形	オサエ	R-216	図版19-2
5	14(W)区		第Vlb層	II-2類	4.8	2.7	0.8	0.4	45	完形	オサエ	R-217	図版19-2
6	14(W)区	P.86	埋 土	II-2類	5.6	2.6	1	0.5	55	ほぼ完形	オサエ	R-218	図版19-2
7	14(W)区	S E948	I層	II-2類	5	2.4	1	0.4	35	5分の4	オサエ	R-219	
8	14(W)区	P.93	埋 土	II-1類	4.7	2	0.8	0.4	30	完形	オサエ	R-220	図版19-2
9	14(W)区	S D964	I層	II-2類	5.2	2.3	0.6	0.3	40	I部欠	オサエ	R-221	図版19-2
10	14(W)区		第I層	II-2類	5.4	2.3	0.8	0.4	40	5分の4	オサエ	R-222	図版19-2
11	14(W)区		第I層	II-2類	5.4	2.3	0.7	0.4	40	I部欠	オサエ	R-223	図版19-2

第101図 B14(W)区出土土器(1)



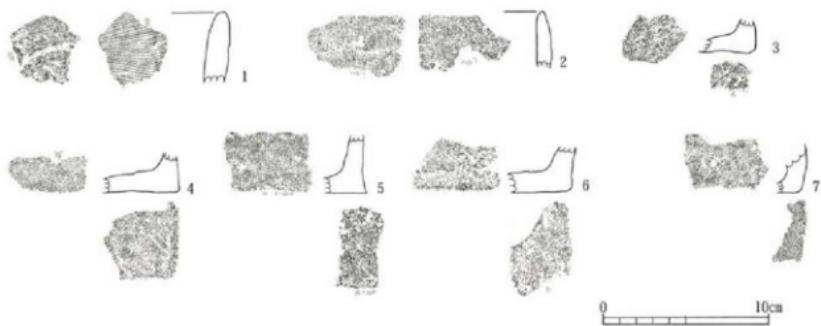
番号	地区	遺構	層位	形態分類	長さ	幅	溝幅	最小溝幅	重さ	遺存	備考	登録番号	図版番号
1	14(W)区		第Ⅰ層	II類	5.5	—	—	—	20	2分の1	オサエ	R-224	
2	14(W)区		第VIa層	II類	5.3	—	—	—	20	2分の1	オサエ	R-228	
3	14(W)区		第VIa層	II-1類	4.6	2	0.8	0.4	30	完形	オサエ	R-229	図版19-2
4	14(W)区		第VIa層	II-1類	5.8	2.2	0.7	0.4	35	完形	オサエ	R-230	図版19-2
5	14(W)区		第VIa層	II-1類	4.7	2.6	0.8	0.4	35	完形	オサエ	R-231	図版19-2
6	14(W)区		第VIa層	II-1類	5	2.4	1	0.5	40	完形	オサエ	R-232	図版19-2
7	14(W)区		第VIa層	II-2類	5.2	2.4	0.8	0.5	45	I部欠	オサエ	R-233	図版19-2
8	14(W)区		第VIa層	II-1類	4.5	2.7	1	0.5	40	完形	オサエ	R-234	図版19-2
9	14(W)区		第VIa層	II-1類	4.6	2.3	1	0.4	35	完形	オサエ	R-235	図版19-2
10	14(W)区		第VIa層	II-2類	5.5	2.4	0.8	0.4	45	完形	オサエ	R-236	図版19-2
11	14(W)区		第VIa層	II-2類	5.1	2.5	0.8	0.4	45	I部欠	オサエ	R-237	

第102図 B14(W)区出土土器(2)



番号	地 区	遺 構	層 位	形態分類	長さ	幅	溝幅	最小溝幅	重さ	遺存	備 考	登録番号	図版番号
1	14(W)区		第VIa層	II - 2類	4.6	2.4	0.8	0.5	30	3分の2	オサエ	R-238	
2	14(W)区		第VIa層	II - 2類	5.2	2.5	0.9	0.5	30	3分の2	オサエ	R-239	
3	14(W)区		第VIa層	II - 2類	5.2	2.3	0.8	0.4	30	3分の2	オサエ	R-240	
4	14(W)区		第VIa層	II - 2類	5.2	2.1	0.9	0.5	35	3分の2	オサエ	R-241	
5	14(W)区		第VIa層	II類	—	2.2	1	—	25	2分の1	オサエ	R-242	
6	14(W)区		第VIb層	II - 1類	4.7	—	—	—	20	3分の2	オサエ	R-478	
7	14(W)区	SD835A	2層	I A - 2類	6.8	2.9	0.9	0.7	45	1部欠	ナデ・オサエ	R-225	
8	14(W)区		第III層	I A - 1類	4.9	1.9	0.6	0.5	15	完形	ナデ・ケズリ	R-226	
9	14(W)区		第III層	I A - 1類	4.2	1.5	0.6	0.5	10	1部欠	ナデ・オサエ	R-227	
10	51区	P.15新	抜き取り穴	I A - 2類	4.6	1.5	0.4	0.4	10	完形	ナデ	R-1437	
11	51区	D-51	4層	I A - 1類	—	2.0	0.7	0.5	15	2分の1	ナデ・ケズリ	R-1438	
12	55区	SD945B	1層	I B類	1.8	2.1	0.6	0.4	5	完形	外面摩滅	R-840	

第103図 B14(W)区出土土種(3)



单位 (cm)

番号	種類	層位	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	製塙土器	第Ⅰ層	【外面】ヨコナデ 【内面】ハケメ	-	-	-	R-1616	図版16-6
2	製塙土器	第Ⅰ層		-	-	-	R-1612	図版16-6
3	製塙土器	不 明		-	-	-	R-1606	図版16-6
4	製塙土器	第Ⅱ層		-	-	-	R-1605	図版16-6
5	製塙土器	第Ⅰ層		-	-	-	R-1608	図版16-6
6	製塙土器	第Ⅰ層		-	-	-	R-1611	
7	製塙土器	第Ⅱ層		-	-	-	R-1609	図版16-6

第104図 B14(W)区出土製塙土器



第105図 B14(W)区出土鏡

頻度表											
件	種類	標本	不規則	規則	規則+規則	規則+規則+規則	規則+規則+規則+規則	規則+規則+規則+規則+規則	規則+規則+規則+規則+規則+規則	規則+規則+規則+規則+規則+規則+規則	規則+規則+規則+規則+規則+規則+規則+規則
			無	少	中	多	極多	無	少	中	多
S.D901	非口	口	その他の	その他の	その他の	その他の	その他の	その他の	その他の	その他の	その他の
S.D902	2	1	3	7	8	16	11	2	14	7	2
S.B903				2	10	1	3	3	10	2	
S.B904	18	4	1	29	10	2	20	6	10	8	2
S.B905					1	1	1	1	1	3	13
S.F948	3	1	1	4	3	1	1	1	6	4	2
S.D945	135	1	12	1	22	32	1	4	1	2	2
S.D955B	3	2	12	6	6	3	6	21	47	5	2
S.D955C	18	5	5	10	8	6	1	2	11	25	1
S.D955D	22	7	5	8	10	8	1	2	2	3	9
S.D944			3	7	10	2	1	2	8	4	2
S.D945B	12	1	7	10	2	1	9	1	3	4	1
S.D945A	34	1	7	19	11	2	1	21	3	22	17
S.D947				1	21	3	1	1	1	1	1
S.D949							1		1	1	1
S.D951	16		14	10	10	10	8	68	1	13	14
S.D962							2	10	8	10	6
S.D953									1	1	1
S.D955	1	4	2	4	1	4	1		1	2	3
S.D960									1	2	1
S.D961		1		1		1	2			1	1
S.D964							1		1	1	1
S.D970							1		1	1	1
S.D972								1		1	2
S.D973	1		4	5	3	1	7	1	1	1	1
S.K933	29	2	13	6	2	3	20	4	2	23	19
S.K934	37	1	9	13	13	13	15	9	1	8	23
S.K935	3	1	7	22	15	1	19	33	1	5	5
S.K938	14							26	6	11	41
S.K965	624158	3	1	52	246161	14	5147	2	18	3	6475212971
								16	2	2	1
								39	8	49114107	1304288150
								2	20	1	411131
									5	10	1
									6	1	53111

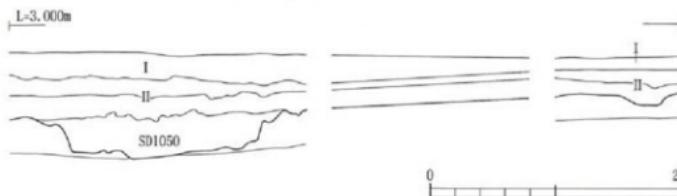
表5 B14(6)区出土遺物集計表(2)

6 B14(E)・B15区

本トレンチでは溝跡3条を発見した。

(1) 層序

B14(E)・15区では表土(第I層)を除去すると、黒褐色粘質土を主体とする第II層が約10~30cmの厚さで全域に堆積しており、東端部周辺では亜泥炭層(スクモ層)化している。この下層はぶい黄褐色粘質土(第VII層)であり、本調査内での遺構検出面となっている。第VII層上面の比高差をみると、B14(E)区では西端部-東端部間約34mで約40cm、B15区では南端部-北端部間約35mで約20cmあり、全体として北東方向に緩やかに傾斜している(第106図)。



第106図 14(E)・15区の層序

(2) 溝跡

S D898溝跡

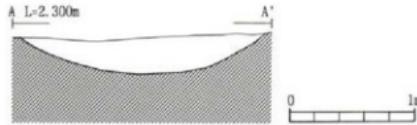
B14(E)区西端部の第VII層上面で発見した東西溝跡である。他の遺構との重複関係はない。規模は上幅0.6m、下幅0.4m、深さ12cmである。断面形状は皿状で埋土は黒褐色土の自然堆積土である。方向は東で約3度北に偏している。本溝跡は壁際でわずかにその一部を検出したにすぎないが、14(W)区のS D941あるいはS D944のいずれかと同一の可能性がある。

遺物は出土していない。

S D1050溝跡 (第107・108図)

B15区東端の第VII層上面で発見した南北溝である。この調査区の南側の第7次調査で発見したS D204溝跡の延長と考えられる。他の遺構との重複関係はない。規模は上幅1.80~1.85m、下幅1.45~1.50m、深さ30cmである。方向は北で約5度東に偏している。断面形状は皿状である。底面は南から北に向かって傾斜し、比高差は18cmである。埋土は黒色粘質土の自然堆積土である。

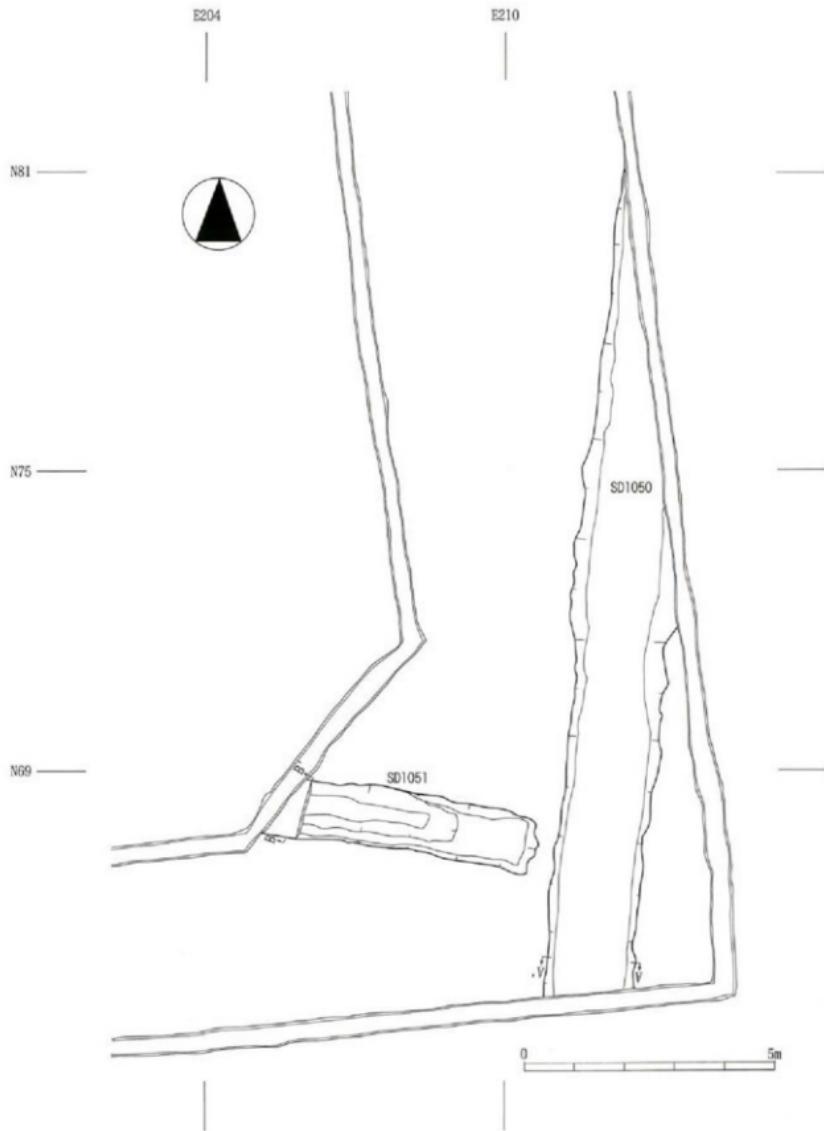
遺物はロクロ調整で静止糸切りによる土師器杯1点、非ロクロ調整の土師器碗1点、須恵器碗(ヘラ切り6点、回転ヘラケズリ1点)・甕、馬形3点、田下駄1点が出土している(第109・111図)。



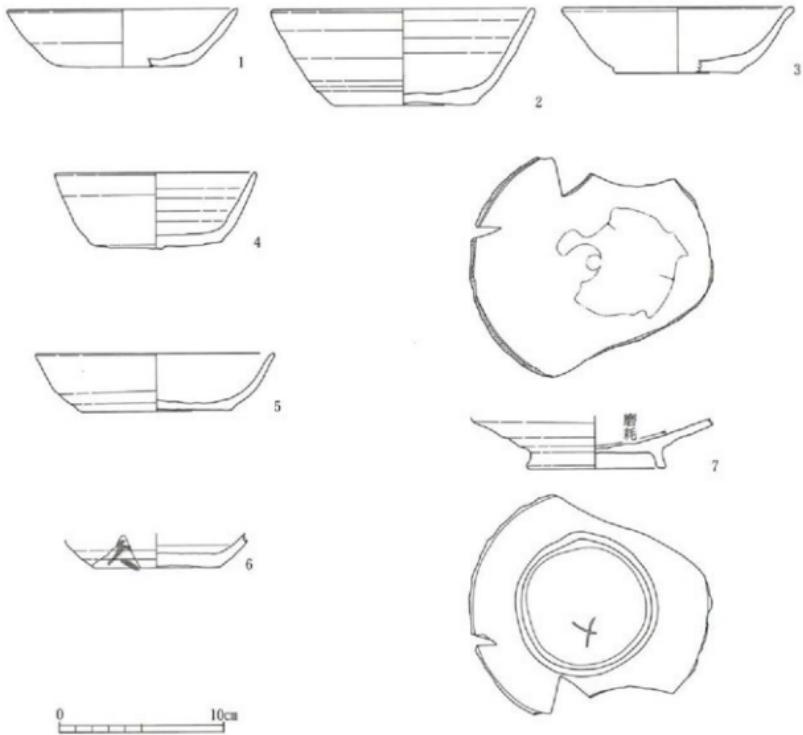
第107図 S D1050断面図

S D1051溝跡 (第108・110図)

B15区南端のS D1050溝跡の0.4m西側から始まる東西方向の溝跡である。他の遺構との重複関係はな



第108図 SD1050・1051平面図

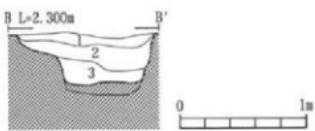


番号	種類	遺構・層位	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	SD1050・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 4/24	(8.2) 5/24	3.5	R-1158	
2	須恵器・杯	SD1050・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(16.0) 1/24	(8.4) 9/24	5.9	R-1159	
3	須恵器・杯	SD1050・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 2/24	7.4 18/24	4.0	R-1160	
4	須恵器・杯	SD1050・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	12.2 15/24	7.7 15/24	4.5	R-1161	
5	須恵器・杯	SD1050・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.5 12/24	9.3 20/24	3.5	R-21	
6	須恵器・杯	14(E) 第1層	【外面】ロクロナデ、墨書き 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	— —	(7.6) 9/24	—	R-265	
7	須恵器・俊輪 (軽用器)	14(E) 不明	【外面】ロクロナデ 底部：高台貼付、ヘラ描き「×」 【内面】ロクロナデ、墨書き、磨耗痕	(9.8) 8/24	8.2 24/24		R-106	図版14-6

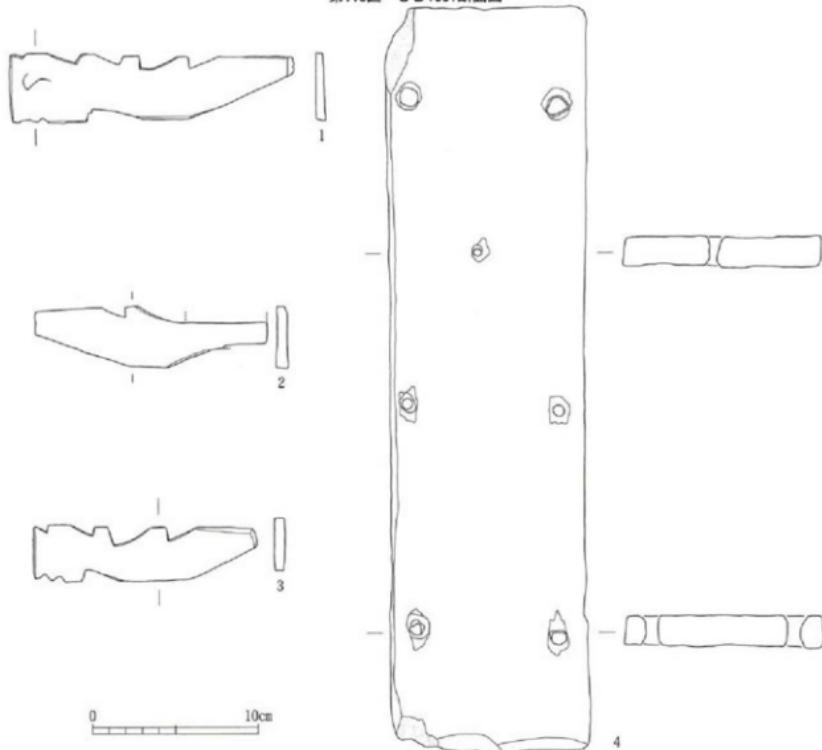
第109図 14(E)・15区出土遺物

い。規模は上幅1.15m、下幅0.4m、深さ40cmである。方向は西で約10度北に偏している。断面形は下方ではU字形であるが、上方では段がつき緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けられ、1層は黒色粘質土、2層は灰黄褐色粘質土、3層は灰黄褐色砂質土であり、いずれも自然堆積土である。

遺物は調整不明の土師器杯・壺の小片、須恵器杯（ヘラ切り3点、回転ヘラケズリ1点）・壺、曲物蓋板が出土している。



第110図 S D1051断面図



番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号	図版番号
1	馬形	S D1050	17.1×4.1×0.6	ヒノキ科アスナロ属		R-34	
2	馬形	S D1050	14.0×3.6×0.8	ヒノキ科アスナロ属		R-74	
3	馬形	S D1050	13.5×3.2×0.7	ヒノキ科アスナロ属		R-73	
4	田下駄	S D1050	45.0×12.0×1.9	マツ科モミ属		R-50	

第111図 No.15区出土遺物

7 B49区

本地区はB区のおおよそ中央部に位置し、東西約80mと細長い調査区である。掘立柱建物跡1棟、溝跡18条、土壙2基、河川跡1条など発見した。

(1) 層序

本調査区の層序は、西部、中央部（E135ライン付近まで）、東部で大きく異なる。西部では、中央部に近い部分で小範囲に第VI層が見られるが、ほとんどの部分では第I層を除去すると直ちに古代における基盤層である第VIIc層が現れた。中央部では第I層の下に第III層があり、直接第VIIc層を覆っている。東部では第II・IV・V・VIIb・VIIa・VIIb層がおおよそ水平に堆積している。第II層は4層に細分され、著しい凹凸が認められることから古代以降の水田層の可能性がある。第VI層と第VIIb層との新旧関係は把握できないが、他調査区におけるあり方から推定した。第VIIa層は薄いスクモ層（亜泥炭層）を含むものの基本的には第VIIc層と同一のものであり、第VIIb層とともに古代における基盤層と考えられる。第VIIc層と第VIIa層の上面の標高値についてみると、調査区東部にかけて徐々に傾斜しており、中央部と東端部付近約38m間で約30cmの比高差が認められる。ところで、堆積層の在り方についてみると、西半部にはほとんど堆積層が認められず、東半部と大きく異なる。これは、ある時期に西半部が削平されたためと考えられ、西側から東側にかけて傾斜はさらにも顯著であった可能性も考えられよう。

各層の概要については以下の通りである。

第I層 表土。現代の水田層。

第IIa層 にぶい黄褐色土。5~10cm。

第IIb層 黒褐色土。5~15cm。

第IIc層 黒褐色土。約5cmの薄い層。

第IId層 暗褐色土。5~15cm。

第III層 中央部にのみ堆積している黒褐色土。北壁土層断面の観察によればその範囲は東西約14mに及んでいる。その中央部付近はさらに一段低くなっており、東側の第IV層を切るように堆積している。

第IV層 褐灰色粘質土。5~15cm。

第V層 灰白色火山灰を含む褐灰色土。5~10cm。

第VI層 調査区西部にのみ堆積している黒褐色砂質土。上面に第V層が自然堆積している。

第VIIb層 黒褐色土。5~10cm。

第VIIa層 にぶい黄褐色砂質土。薄いスクモ層（亜泥炭層）を含む。

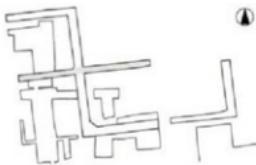
第VIIb層 灰黄褐色砂質土。

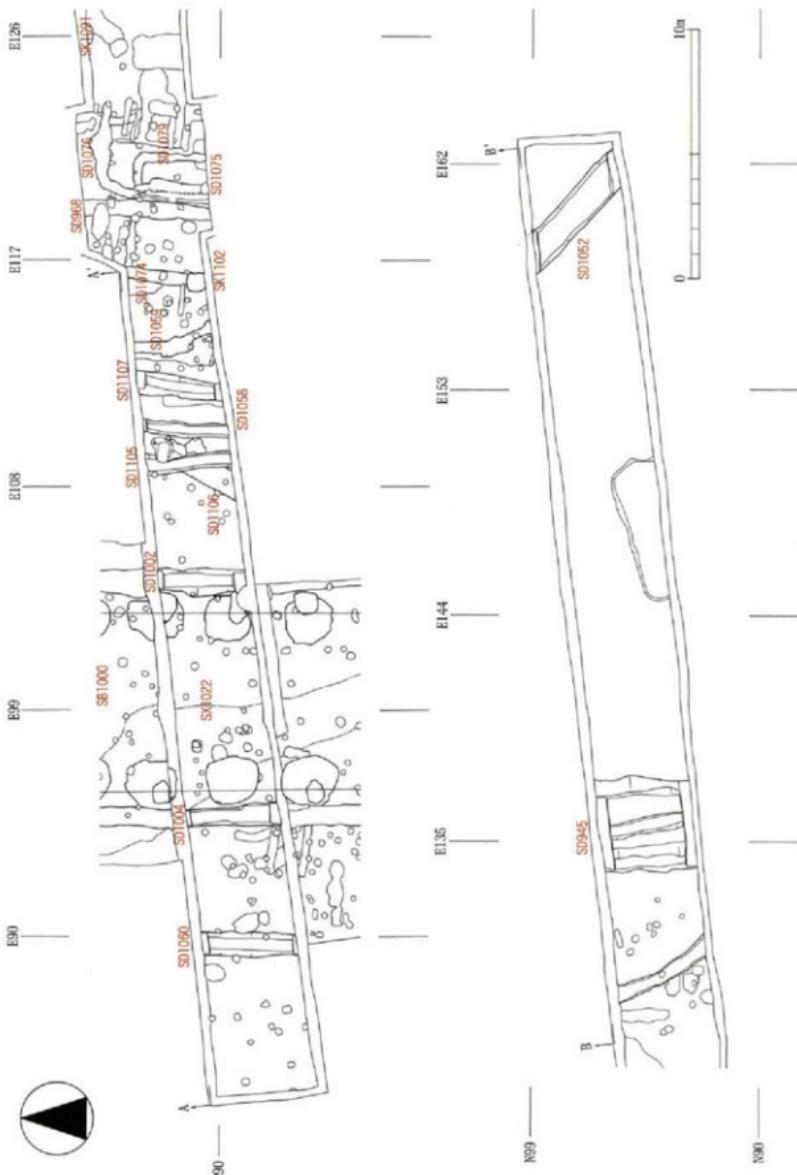
第VIIc層 黄褐色砂質土。

(2) 掘立柱建物跡

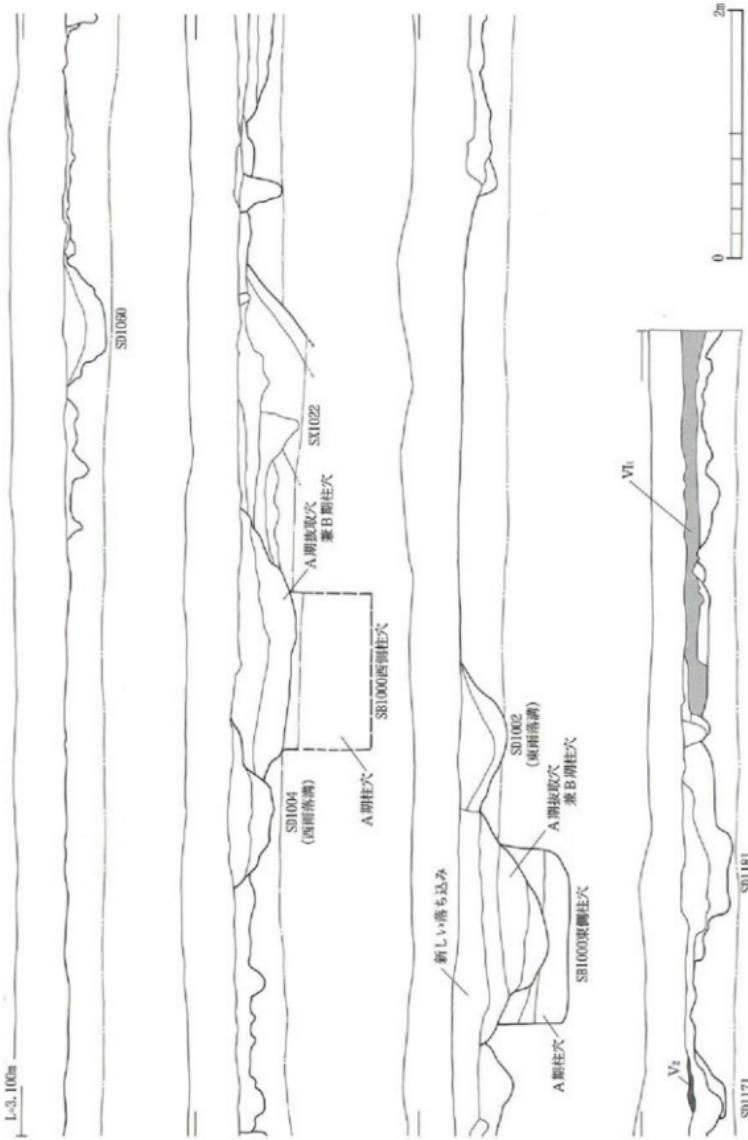
S B1000掘立柱建物跡（第115・116・117図）

西半部で発見した掘立柱建物跡である。北側のB63区と南側のB51区において一連の柱穴を検出し、桁行11間、梁行2間の南北棟であることを確認した。同位置で2時期の変遷（A期→B期）があり、B期で





第1112圖 49區地震剖面圖



第113図 B49区北壁西部断面図



第114图 B49区北翼東半部断面图

みると桁行は東側柱列で総長約32.7m、西側柱列で総長約33.0m、梁行は北妻で総長約6.9mである。軒の出は、東側雨落ち溝との間隔から約1.2mである。方向は北で約2度東に偏している（多賀城市教育委員会：1999）。

今回調査対象となったのは、東側柱列の南妻より2間目と3間目の柱穴及び西側柱列の南妻より2間目の柱穴の計3個である。これらは第1層（表土）を除去した段階で、第VII層（地山）及びSX1022河川跡堆積土上で直ちに検出することができた。関連する遺構として東西両側に雨落ち溝、内部には足場穴と見られる小柱穴を検出した。以下、それぞれの概要を説明する。

S B1000A：古い段階の建物跡である。底面にはいずれも礎盤が敷設されているが、柱はB期の抜き取り穴によって取り除かれている。この時期の柱穴は、柱抜取穴によって全体が浅く掘り窪められているが、最も残存状



第115図 SB1000平面図

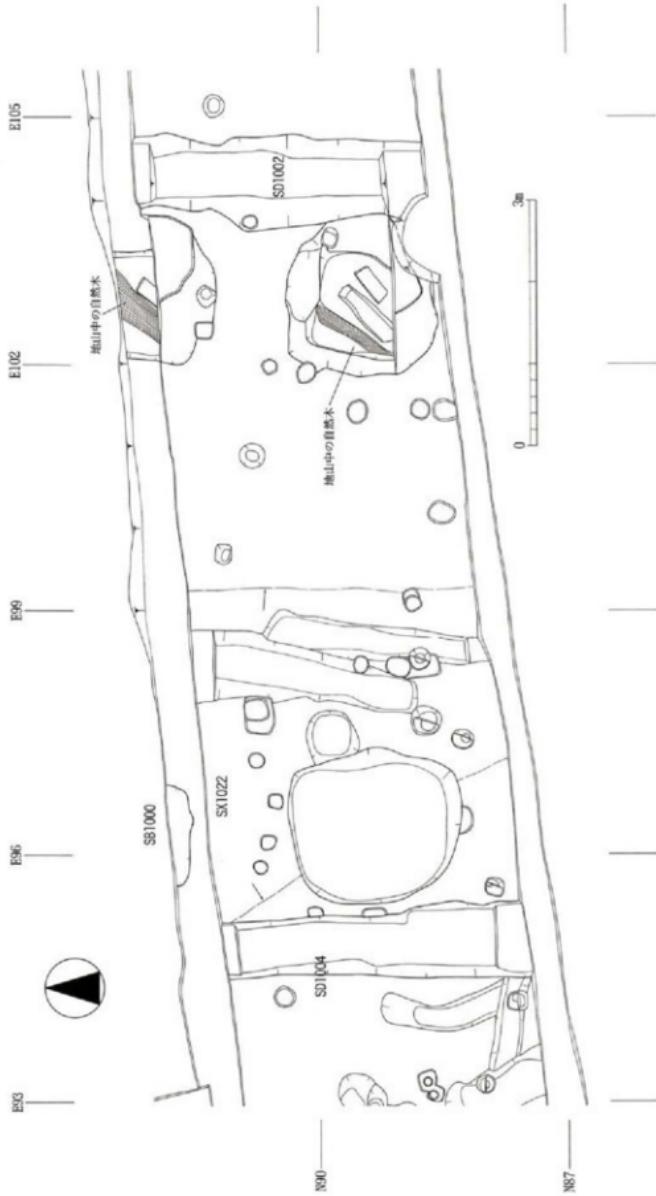
況が良好な東側柱列南妻より2間目の柱穴でみると、掘り方の平面形は方形であり、規模は一辺約1.2mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、確認面からの深さは約1.0mである。埋土は黒色粘質土と緑灰色砂土が互層になっている。礎盤は長さ0.9m、幅25cm、厚さ約10cmの板材で、材質はミズキである。

遺物は出土していない。

S B1000B：A期の柱を抜き取り、ほぼ同位置で建て替えた建物跡である。この段階の柱穴は、A期の柱抜取穴を利用して掘り方としている。柱抜取穴が外側から掘り込まれており、いずれの柱も抜き取られているが、抜取穴の先端に柱の当り痕跡をとどめているものがあり、およそその柱位置を推定できる。東側柱列の2個の柱間は約3.0mである。最も残存状況が良好な東側柱列南妻より2間目の柱穴でみると、掘り方（兼A期柱抜取穴）の平面形はおおよそ方形であり、規模は一辺1.8×2.0mである。壁は上部が浅い皿状を呈するが、下部はほぼ垂直である。確認面からの深さは約1.0mである。埋土は黒色粘質土と緑灰色砂土の小ブロックである。

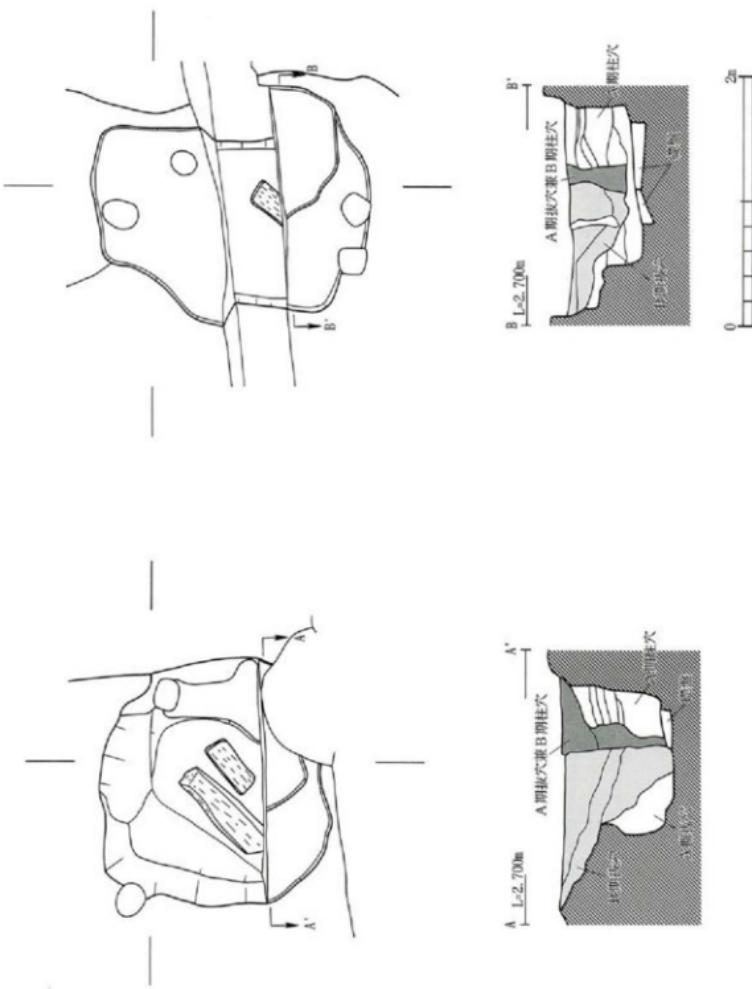
S D1002雨落ち溝：東側の雨落ち溝である。S B1000の東側柱列と重複しており、それより新しい。建物構築時の工程差と理解できる。ほぼ同位置で2時期の変遷がある（A→B期）。規模は、A期が上幅約0.8m、深さ約40cmであり、B期が上幅約1.0m、深さ約30cmである。

S D1004雨落ち溝：西側の雨落ち溝である。ほぼ同位置で2時期の変遷がある（A→B期）。規模は、A期が上幅約0.8m、深さ約30cmであり、B期が上幅約1.2m、深さ約20cmである。



第116図 S-B1000平面図(部分)

第117图 S B1000号穴断面图

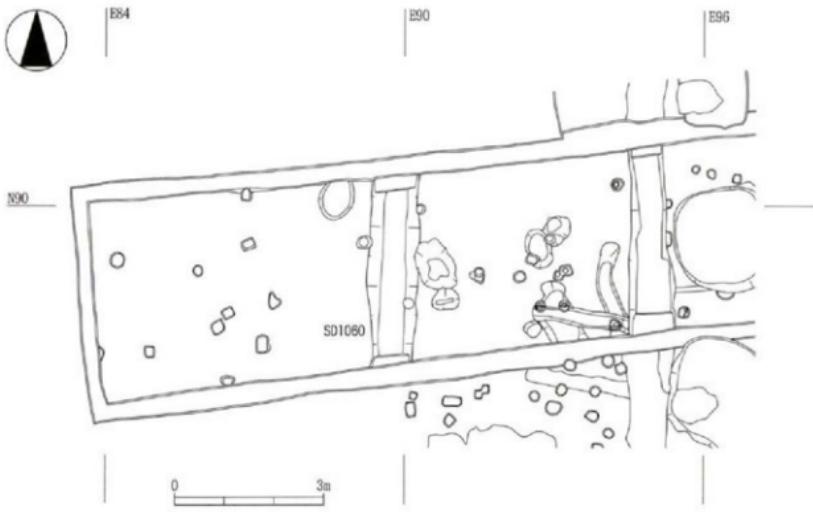


③ 溝跡・河川跡

S D1060溝跡（第118図）

西端部で発見した南北溝である。第Ⅰ層（表土）除去後、第VII層（地山）上面で検出した。小ピット等と重複しており、それより古い。北側のB63区、南側のB50・52区（第24次調査）で延長部分を発見しており、総長81.5m以上であることが判明している。今回調査の対象としたのは長さ3.2mである。方向は、北で約2度東に偏している。規模は上幅0.9~1.0m、下幅約0.5m、深さ約48cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は褐灰色粘質土を主体としている。

遺物は出土していない。



第118図 S D1060平面図

S D1105溝跡

中央部で発見した南北溝である。第VI層に覆われ、第VII層（地山）上面で検出した。S D1106や黒褐色粘質土を埋土とする落ち込みと重複し、それより新しい。一部攪乱により破壊されている。方向は発掘基準線に対して北で約4度西に偏している。調査区外に更に延びており、検出したのは約3.3mである。規模は、上幅0.6~0.9m、下幅0.4~0.5m、深さ約14cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色砂質土である。

遺物は出土していない。

S D1058溝跡

中央部で発見した南北溝である。第VI層に覆われており、第VII層（地山）上面で検出した。調査区外に更に延びており、検出したのは約3.3mである。方向は、南半部はほぼ発掘基準線と一致しているが、北半部は発掘基準線に対し北で約3度東に偏している。規模は、上幅0.5~0.6m、下幅0.2~0.4m、深さ10~19cmである。断面形は逆台形であり、底面はおおよそ平坦である。埋土は灰黄褐色砂質土であり、黒色粘

第119图 B-49区中央部墓葬平面图



質土粒や黄色土を粗く層状に含んでいる。

遺物は、土師器杯・甕・高台付杯、須恵器杯・瓶・甕、須恵系土器杯、丸瓦、製塙土器、砥石が出土している。土師器杯は糸切り後手持ちヘラケズリしたものや回転糸切り無調整のものがあり、その他にも底部や体部に手持ちヘラケズリの痕跡が確認できるものが多数ある。土師器甕にはロクロ調整を行ったものと非ロクロ調整のものがある。須恵器杯は底部が残存するものが4点あり、ヘラ切りが1点、回転糸切りが3点である。

S D1106溝跡

西半部で発見した南北溝である。第VII層（地山）上面で検出した。黒褐色粘質土を埋土とする落ち込みとS D1105と重複し、前者より新しいが後者より古い。北端部は擾乱により破壊されている。約2.5m検出し、南側は調査区外に延びている。規模は、上幅1.0m、下幅0.5m、深さ10~13cmである。方向は溝の西辺で見ると北で約29度東に偏している。底面はほぼ平坦で北端部ではやや窪みが見られる。

遺物は出土していない。

S D1107溝跡

中央部で発見した南北溝である。第VI層に覆われており、第VII層（地山）上面で検出した。S D1108・小ピット3基と重複し、S D1108より新しく他より古い。約3.8m検出し、さらに調査区外にのびている。方向は、北で約3度東に偏している。規模は、上幅0.6~1.0m、下幅0.2~0.4m、深さ約39cmである。S D1057を含めた総長は51mである。断面形は段掘り状である。底面は北側から南側に傾斜しており、約6cmの比高差がある。埋土は灰黄褐色砂質土であり、下層は粘性を帯びている。

なお、本溝跡の南側延長部分はB50~56区で検出した。また、北側はB13(N)区のS D1019東西溝跡に連続する可能性が高く、東西10m以上、南北59m以上の範囲を囲む区画溝のそれぞれ北辺と西辺にあたると考えられる。

遺物は出土していない。

S D1059溝跡

中央部で発見した南北溝である。第VII層（地山）面で確認した。小ピットと重複しており、それより古い。約3.5m検出し、両側は調査区外に延びている。方向は、上半部はおおよそ発掘基準線に一致しているが、下半部は北で約28度西に偏している。規模は、上幅0.3~0.7m、下幅0.2~0.5m、深さ7~10cmである。断面形は浅い皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。底面はおおよそ平坦である。埋土は、黄褐色土粒やブロック、焼土、炭化物などを含む黒褐色土である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕が出土している。土師器杯はロクロ調整を行ったものが出土している。底部が残存するものが1点あり、回転糸切りが4点、回転糸切り後手持ちヘラケズリが1点、切り離し不明で手持ちヘラケズリが6点である。甕にもロクロ調整を行ったものが出土している。須恵器杯は底部破片が3点あり、手持ちヘラケズリ1点、回転糸切り2点である。

S D1074溝跡

中央部で発見した南北溝である。第VI層に覆われ、第VII層（地山）上面で検出した。S D1109、SK 1102・1113と重複しており、SK 1102より古いが、他より新しい。方向は、北で約7度東に偏している。約2.3m検出し、更に調査区外にのびている。規模は、上幅0.4~0.6m、下幅0.3~0.4m、深さ6~16cmである。断面形は皿状であり、壁は穏やかに立ち上がっている。底面はおおよそ平坦である。埋土は黄褐色

土粒を含む暗褐色砂質土である。

なお、北側のB13(N)区のS D1025東西溝、南側のB13(S)区のS D1084東西溝、B50区（第24次調査）のS D1272はいずれも一連の溝跡である可能性が高い。南北約20m、東西9m以上の範囲を囲う区画溝の西辺及び北辺と南辺の一部と考えられる。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕、灰釉陶器碗、製塙土器が出土している。土師器杯には底部破片が9点あり、回転糸切り後手持ちヘラケズリ2点、手持ちヘラケズリ4点、回転糸切り3点である。その他体部に回転ヘラケズリを施したものが1点出土している。土師器甕にもロクロ調整を行ったものがあり、底部を回転糸切りしたもののが1点出土している。灰釉陶器碗は底部破片である。高台は角高台であり、内面と外面にそれぞれトチンの目跡がある。内面には厚く斑状に灰釉がかかっている。

S D1053・1076溝跡（第119・120・122図）

調査区中央部の第VII層上面で発見した南北・東西溝である。S D1076南北溝の北端部でおおよそ直角に東側に屈曲し、S D1053東西溝に続いている。S D968・1075・1079と重複しており、S D968より新しく、S D1075・1079よりも古い。方向は、S D1076が北で約7度東に偏している。S D1053は約3.4m検出したのみであるが、S D1076は13(S)区においてその延長部分を検出しており、南北12m以上である（49区では約4.3m検出）。規模は、S D1053が上幅0.3～1.0m、下幅0.2～0.3m、深さ約7cmであり、S D1076が上幅0.4m以上、下幅0.3m以上、深さ6cmである。両者の底面はおおよそ平坦であり、比高差はほとんどない。埋土は黒褐色砂質土であり、炭化物や灰白色火山灰粒、地山である黄褐色砂質土ブロックを含んでいる。

遺物は出土していない。

S D1049・1079溝跡（第119・122図）

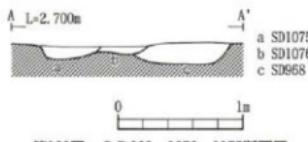
調査区中央部の第VII層上面で発見した南北・東西溝である。S D1079南北溝の北端部でおおよそ直角に西側に屈曲し、S D1049東西溝に続いている。S D968・1073・1075・1076と重複しており、すべてのものより古い。方向は、S D1079が南北発掘基準線とおおよそ一致しており、S D1049は東で約6度南に偏している。S D1049は約4.2m検出したのみであるが、S D1079は13(S)区においてその延長部分を検出しており、南北12m以上である（49区では約2.5m検出）。規模は、S D1049が上幅0.3～0.4m、下幅0.1～0.2m、深さ12cmであり、S D1079が上幅0.2～0.4m、下幅0.1～0.2m、深さ15cmである。両者の底面はおおよそ平坦であり、比高差はほとんどない。

遺物は出土していない。

S D1075溝跡（第119・122図）

調査区中央部の第VII層上面で発見した南北溝である。S D1049・1076と重複しており、それらより新しい。方向は北で約7度東に偏している。約3.0m検出し、規模は上幅約0.5m、下幅約0.3m、深さ10cmである。埋土は黒褐色砂質土であり、炭化物、焼土、地山である黄褐色砂質土粒などを含んでいる。

遺物は出土していない。



S D945溝跡（第121図）

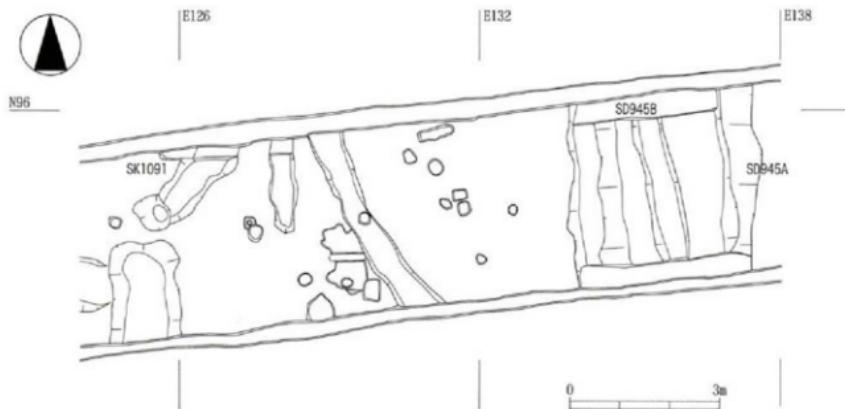
東半部で発見した南北溝である。第IV層に覆われ、第VIIa・VIIIc層上面で検出した。同位置で重複しており、2時期の変遷を確認した（A→B期）。

S D945A: B期によって大きく破壊されており、検出できたのは東壁と底面の一部である。断面は断掘り状を呈しており、底面は平坦である。規模は、幅1.9m以上、深さ約0.5mである。方向はおおよそ発掘基準線の方向と一致している。埋土は黒褐色土である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、墨書き土器、軒丸瓦が出土している。土師器杯・甕は特徴的な部分を残していないがロクロ調整を行ったものが出土している。須恵器杯は底部破片が6点あり、ロクロからの切離しが明らかなものの5点の内訳は、ヘラ切り3点、回転糸切り2点である。

S D945B: 壁は緩やかに立ち上がっており、中央部は溝状にくぼんでいる。規模は、上幅約3.6mであり、深さは中央部の最も深い部分で約0.5m、それ以外は0.2~0.3mである。方向について見ると、北で約5度西に偏している。埋土は、下層より黒褐色粘質土、褐灰色粘質土、黒褐色砂質土が順次堆積しており、上層には灰白色火山灰が自然堆積している（註）。

遺物は土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶・甕、須恵系土器杯・台付鉢、平瓦、丸瓦、竈形土器などが出土している。土師器杯は底部破片が44点あり、その内訳は回転ヘラケズリ2点、手持ちヘラケズリ26点、回転糸切り14点である。甕は体部をヘラケズリしたものが多く出土しており、非ロクロ調整のものも11点出土している。須恵器杯は底部破片が10点あり、その内訳はヘラ切り5点、回転糸切り5点である。



第121図 S D945平面図

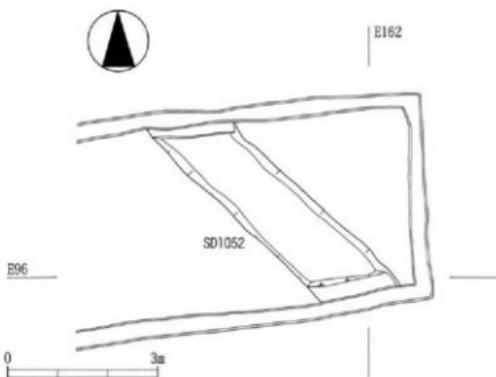
（註）平面的には確認できなかったが、北側断面ではB期の灰白色火山灰層を切る明瞭な立ち上がりが確認できることにより火山灰層下後にも改修があった可能性がある。同様な状況は北側の第14次調査区及び南側の第24次調査55区でも確認している（多賀城市教育委員会：1994）。第14次調査では本溝跡と同一の溝と見られるSD554に3時期の変遷を確認しており、最も古いA期に灰白色火山灰が自然堆積している。また、第24次調査55区では重複する2条の溝のうち、新しいSD945の上層に灰白色火山灰が自然堆積しているが、やはり浅い溝状の落ち込みによって切られている状況が観察できる。



第122図 SD968・1076・1191・1175平面図

S D1052溝跡（第123図）

東端部で発見した南北溝である。第VIIa層に覆われており、第VIIIa層上面で検出した。本調査区においては約5.0m検出したにすぎないが、平面的にはきわめて直線的であり、方向は北で約45度西に大きく偏している。規模は、上幅1.3~1.4m、下幅1.0~1.3mであり、壁はほぼ垂直気味に立ち上がっている。埋土は大きく2層に区分され、上層（1・2）は地山ブロックを含む砂質土と粘質土、下層（3・4）は粘質土である。自然堆積が進行した後、人為的に埋められた可能性がある。



第123図 SD1052平面図

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕が出土している。土師器杯は体部から底部を手持ちヘラケズリしたものであり、甕も体部をヘラケズリしたものである。須恵器杯は底部破片が1点あり、ヘラ切りである。

S X1022河川跡

調査区西半部を南北に緩やかに湾曲する旧河川である。SB1000や小ビットと重複しており、すべての遺構より古い。今回検出したのは約3.6mである。規模は、上幅2.2~4.1m、深さ0.6m以上である。埋土は浅黄色土を含む黒色粘質土である。

本河川跡は、北側のB64区、南側のB50・51区において延長部分を発見しており、総長は55m以上である。東側に湾曲しながら南北方向にのびている。

遺物は出土していない。

(4) 土 壤

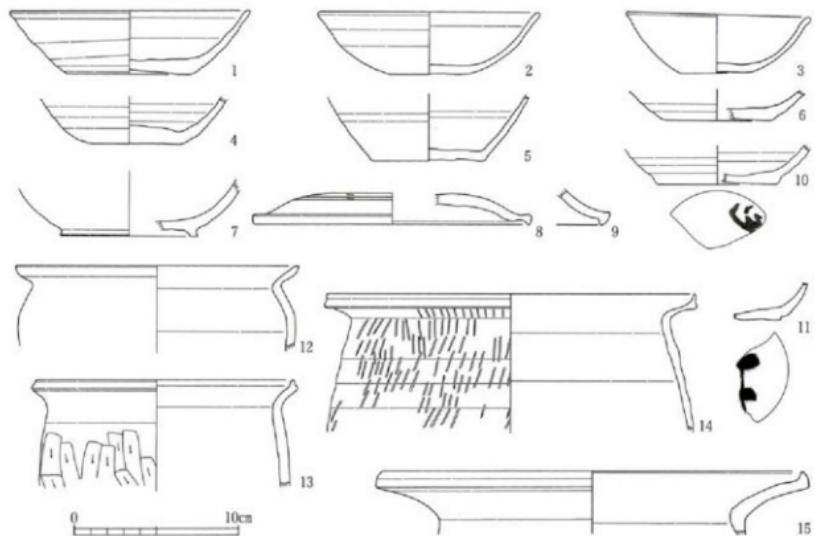
S K1102土壤

中央部で発見した梢円形の土壤である。第VIII層（地山）面で検出した。SD1074と重複しており、それより新しい。断面形は袋状を呈し、底面は凹凸が著しい。規模は、長径0.8m以上、短径0.7m、深さ14~28cmである。

遺物は土師器杯（回転糸切り・回転ヘラケズリ）・甕、須恵器瓶・甕、製塙土器が出土している。



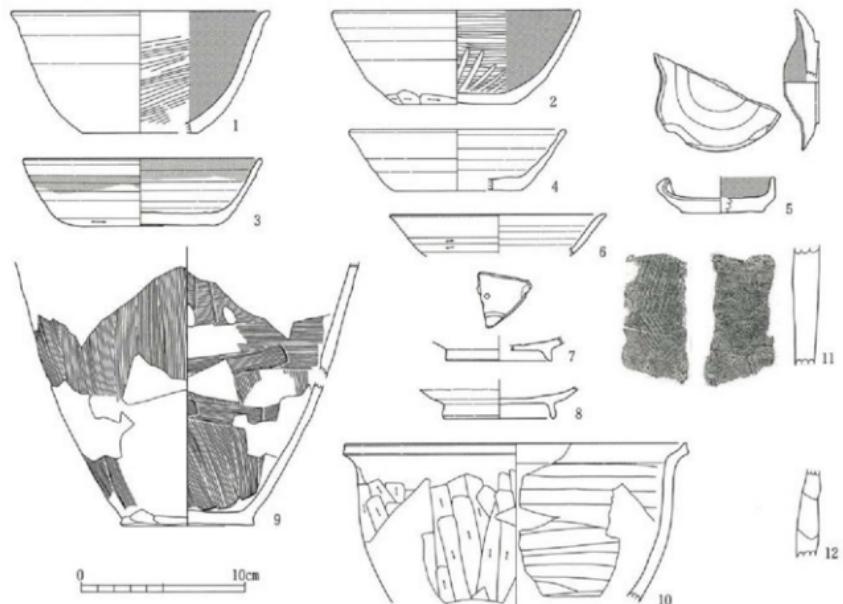
第124図 SK1102断面図



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S D1002・1層	【外面】クロコナデ 底部：回転糸切り 【内面】クロコナデ	14.6 24/24	7.4 24/24	3.9	R-1169	図版17-1
2	須恵系土器 杯	S D1058・1層	【外面】クロコナデ 底部：回転糸切り 【内面】クロコナデ	(13.6) 4/24	(4.7) 21/24	3.8	R-1172	
3	須恵系土器 杯	S D945・1層	【外面】クロコナデ 底部：回転糸切り 【内面】クロコナデ	11.2 21/24	4.3 24/24	3.7	R-1170	図版17-3
4	須恵器・杯	S D1004	【外面】クロコナデ 底部：ヘラ切り 【内面】クロコナデ	- 24/24	6.1 -	-	R-1193	
5	須恵器・杯	S D1002・1層	【外面】クロコナデ 底部：ヘラ切り 【内面】クロコナデ	-	(5.8) 9/24	-	R-1191	
6	須恵器・杯	S D1002・1層	【外面】クロコナデ 底部：回転糸切り 【内面】クロコナデ	-	(5.7) 9/24	-	R-1190	
7	灰釉陶器・ 椀	S D1074・1層 リ→高台貼付	【外面】クロコナデ 体部下半～底部：回転ヘラケズリ 【内面】施釉	- 6/24	(8.4) -	-	R-1181	
8	須恵器・蓋	S D945	【外面】クロコナデ→回転ヘラケズリ 【内面】クロコナデ	(16.8) 4/24	-	-	R-1223	
9	須恵器・蓋	S D1101・1層	【外面】ヘラミガキ 【内面】ヘラミガキ	-	-	-	R-1282	
10	須恵器・杯	S D945・1層	【外面】クロコナデ 底部：ヘラ切り、墨書 【内面】クロコナデ	- 7/24	(7.3) -	-	R-266	
11	須恵器・杯	S D945(2)・1層	【外面】クロコナデ 底部：回転糸切り、墨書 【内面】クロコナデ	-	-	-	R-1173	
12	土師器・甕	S D1052・1層	【外面】クロコナデ 【内面】クロコナデ	(17.2) 5/24	-	-	R-1232	
13	土師器・甕	S D945(7)・1層	【外面】クロコナデ→手持ちヘラケズリ（体部） 【内面】クロコナデ	(16.6) 5/24	-	-	R-1177	
14	土師器・甕	S D1002・1層	【外面】平行叩き→クロコナデ 【内面】クロコナデ	(22.4) 7/24	-	-	R-1178	
15	土師器・甕	S D945・2層	【外面】クロコナデ 【内面】クロコナデ	(25.6) 3/24	-	-	R-1237	

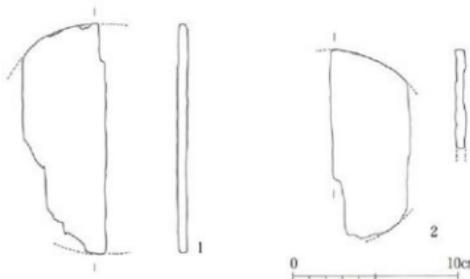
第125図 B49区出土遺物(1)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S K1091・1層	【外面】ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(15.8) 11/24	(7.0) 4/24	7.5	R-1165	
2	土師器・杯	S K1091・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下半) 底部：糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(15.1) 2/24	(4.2) 18/24	5.8	R-1166	
3	須恵器・杯	S K1077・1層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ(体部下半) 底部：糸切り→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ、油煙付着	14.6 11/24	8.6 24/24	4.2	R-1164	図版17-2
4	須恵器・杯	SDI022・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.2) 3/24	(7.8) 6/24	3.8	R-1194	
5	土師器・耳皿	第1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ→黒色処理	— —	5.0 10/24	—	R-1273	
6	縄袖陶器・碗	第1層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ→施釉 【内面】ロクロナデ→施釉	(13.2) 4/24	—	—	R-1288	
7	縄袖陶器・碗	第1層	【外面】底部：回転ヘラケズリ→高台貼付→ロクロナデ→施釉 【内面】施釉	— —	(6.4) 2/24	—	R-1284	
8	灰釉陶器・碗(転用器)	第1層	【外面】ロクロナデ→施釉 底部：回転ヘラケズリ→高台貼付 【内面】ロクロナデ	— —	(6.7) 4/24	—	R-1203	
9	土師器・甕	第II a層	【外面】体部：ハケメ 底部：木葉模 【内面】ヘラナデ	— —	(8.2) 8/24	—	R-1263	
10	須恵器・甕	S K1091・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部) 【内面】ナデ	(21.0) 3/24	—	—	R-1167	
11	土製カマド	第II a層	【外面】条脈状叩き→ヘラケズリ 【内面】ナデ、ハケメ	— —	—	—	R-1266	
12	製塙土器	第1層	【外面】ナデ 【内面】ナデ	— —	—	—	R-1860	

第126図 B49区出土遺物(2)



番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号	図版番号
1	曲物底板	S D945	径14.0×0.6	ヒノキ科アスナロ属		R-63	
2	曲物底板	S D945	径12.0×0.6			R-40	

第127図 49区出土遺物(3)

8 B63区

本地区はB区で最も北に位置する東西約37mの調査区である。竪穴住居跡1軒、溝跡5条、土壙19基、小柱穴群を発見した。本調査区では、表土(第I層)下は直ちに黄褐色砂質土(第VII層)となつておらず、遺構はすべて第VII層上面で検出している。

なお、本調査区は確認調査であり、遺構の平面的な調査にとどめた。

(1) 竪穴住居跡

S I 1008竪穴住居跡

調査区中央部からB64区北端部にかけて発見した竪穴住居跡である。小柱穴群と重複し、これらよりも古い。規模は西辺約4.2m、南辺3.9mである。方向は北で約27度東に偏している。

遺物は出土していない。

(2) 溝 跡

S D1060溝跡

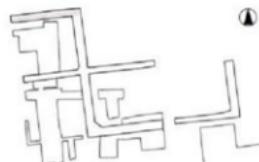
中央部で発見した南北方向の溝跡である。B49区、B50・64区(第24次調査)でこの溝跡の延長部分を発見している。S K1139や小柱穴群と重複し、それよりも古い。規模は、上幅0.7~0.9mである。方向はB50区の南端とB63区の北端で測ると北で約2度東に偏している。

遺物は出土していない。

S D1125溝跡

西半部で発見した東西方向の溝跡である。東側では南東方向に屈曲している。S D1127、S K1131・1132、小柱穴群と重複し、これらよりも新しい。規模は、上幅0.4~0.6m、下幅0.3~0.4m、深さ8cmであり、断面形は皿状である。方向は屈曲する東側を除いた部分で測ると、西で約1度北に偏している。

遺物は、須恵系土器杯・高台付杯・小型杯・高台付皿が出土している(第129図)。



Ⓐ

Ⓑ

Ⓒ

Ⓓ

Ⓔ

Ⓕ

Ⓖ

Ⓗ

Ⓘ

Ⓛ

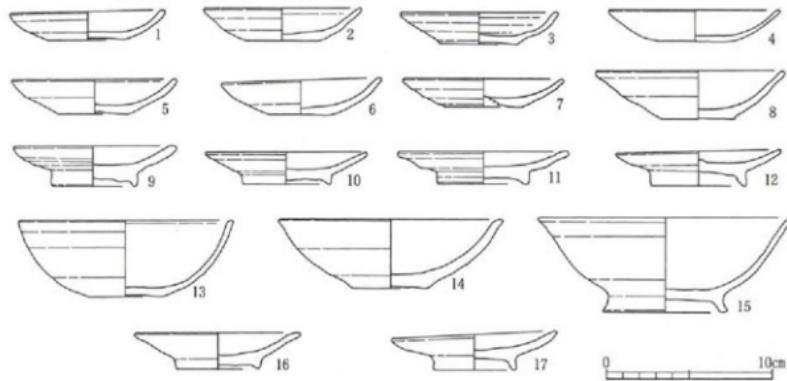
Ⓜ

Ⓝ

Ⓣ

第128图 B63区道路配图





番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	9.4 19/24	4.4 24/24	1.8	R-1644	図版17-7
2	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(9.6) 9/24	4.6 24/24	2.0	R-1640	
3	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	9.6 19/24	4.6 24/24	2.0	R-1645	図版17-5
4	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(10.3) 5/24	(4.5) 21/24	1.9	R-1643	
5	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(10.0) 7/24	4.3 24/24	2.1	R-1641	
6	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	9.8 21/24	3.9 24/24	2.1	R-1651	図版17-6
7	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(9.8) 8/24	(4.6) 12/24	1.7	R-1647	
8	須恵系土器 ・小型杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(11.4) 11/24	4.4 24/24	3.0	R-1646	図版17-4
9	須恵系土器 ・高台付皿	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	9.9 24/24	5.3 24/24	2.4	R-1650	図版17-8
10	須恵系土器 ・高台付皿	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	(9.2) 7/24	5.1 24/24	2.0	R-1848	
11	須恵系土器 ・高台付皿	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	(10.4) 10/24	5.4 24/24	2.0	R-1654	
12	須恵系土器 ・高台付皿	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	10.0 21/24	5.7 24/24	2.2	R-1656	
13	須恵系土器 ・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.0) 1/24	4.8 24/24	4.7	R-1652	
14	須恵系土器 ・杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.5) 2/24	(4.6) 12/24	4.2	R-1639	
15	須恵系土器 ・高台付杯	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	(15.4) 5/24	7.5 24/24	5.8	R-1655	図版17-9
16	須恵系土器 ・高台付皿	1層	【外面】ロクロナデ 底部：高台貼付 【内面】ロクロナデ	(10.1) 7/24	5.0 24/24	2.2	R-1642	
17	須恵系土器 ・高台付皿	1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	10.0 24/24	5.1 24/24	2.1	R-39	

第129図 S D1065出土物

9 B67区

本地区はB区で最も東側に位置する調査区である。調査着手前の状況は畠地及び空閑地である。遺構の有無を確認するため南北約40m×東西約6mの調査区を設定し、重機を使用して掘り下げた。現地表下約2.0mで灰白色火山灰ブロックを含む古代の層を確認し(第V層)、その面から3ヵ所の地点(■部分)を更に深く掘り下げたが、遺物が少量出土したのみで遺構は発見できなかった。

(1) 層序

盛土層 昭和50年開校の城南小学校造成に伴う盛り土。厚さ150~160cmである。

第I層 小学校造成前の水田層。オリーブ黒色粘土で厚さ8~18cmである。隣接地で第I層(表土)とした水田層と概ね同時代の層である。

第II層 古代以降の水田層。オリーブ黒色粘土層及び黄灰色粘土層であり、合わせて厚さ15~22cmである。

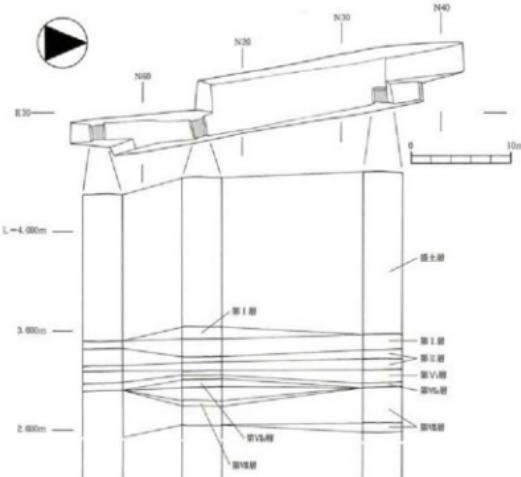
第V層 灰白色火山灰(10世紀前葉)ブロックを含む黄灰色粘土層である。厚さ4~12cmである。

第VId層 黒褐色粘土層である。厚さ3~7cmである。

第VIII層 砂層と亜泥炭層の互層である。厚さ70cm以上である。

(2) 出土遺物

遺物は第VId層より土師器杯、須恵器杯などの小片が数点出土している。土師器杯にはロクロ調整を行ったものが出土しており、手持ちヘラケズリを施したものもみられる。須恵器杯には底部ヘラ切りのものが出土している。



第130図 B67区平面図・土層柱状図

VI 考察

1 遺構の年代

今回の調査では、掘立柱建物9棟、柱列跡1条、井戸跡1基、溝跡77条、土壙35基、その他多数の小柱穴、小溝跡などを発見した。本項では、出土遺物の分析を通してそれらの年代を検討する。その方法としては、遺構の新旧関係が把握でき、遺物の出土量も比較的多い14(W)区のS E948井戸跡やS D949・945・943・935溝跡出土遺物を対象とし、(1)成形・調整手法、(2)口高比(径口指數)、(3)底高比をやや詳しく見ていく(註)。(1)については破片資料を含めたすべての出土資料を対象とし、(2)(3)については反転復元したものを含め、実測図を作成できたものに限定した。それ以外の少数の破片しか出土していないものについては後で一括して扱うこととする。

なお、以下の分析ではしばしば多賀城跡出土資料との比較を行う。それらの詳細については改めて述べないが、年代観は次のように報告されている。

大畠地区	S I2153	8世紀末～9世紀前葉
	S I2160A	同上
	S E2101B	9世紀前葉～9世紀前半
	S K2167	9世紀中葉
鴻の池地区	第10層	9世紀後半
五万崎地区	S K2272	9世紀第3四半期
	S K2270	9世紀第4四半期

(1) S D949・S D945の年代

第VI₂a層を介在させ、その下層よりS D949、その上層よりS D945A・Bを検出した。したがって、S D949→S D945A→S D945Bという新旧関係が確認できる。S D945Aは第24次調査時に2層から天長6年(829)の木簡が出土していることから存続年代の一点が確実に押さえられ、S D945Bは灰白色火山灰によって覆われていることから下限を承平4年(934)とすることができるものである。

各出土土器の概要は以下のとおりである。

a. S D949出土土器

1層から土師器が4点、須恵器が11点、2層から土師器が9点、須恵器が9点、合計33点出土している。出土量が少ないため一括して扱う。実測図を作成できたものはすべて須恵器であり、14点ある(内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のもの6点)。

成形・調整手法: 土師器杯は体部から底部にかけて手持ちヘラケズリしたものが13点ある。ロクロ調整の有無は確認できない。須恵器杯はヘラ切り無調整のものが14点(70.0%)あり、手持ちヘラケズリを施したもののは6点(30.0%)ある。

口高比: 2.21～4.06の間に分布している。3.90前後に集中しており、3.20周辺にも小さなまとまりがある。

底高比: 0.52～0.68の間に分布している。最も少ないもの(0.52)1点を除けば、すべて0.59以上であり、0.60～0.63の間に集中している。

b. S D945A出土土器

1層から土師器が35点、須恵器が22点、2層から土師器が3点、須恵器が9点、合計69点出土している。2層からの出土量が少ないので一括して扱う。実測図を作成できたものは、1・2層とも土師器1点、須恵器3点であり、合計8点ある（内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のものは1・2層とも須恵器各1点）。第24次調査では、2層から天長6年（829）の木簡が出土しており、実年代の一点を押さえる資料として注目される。

成形・調整手法：土師器はロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものが25点（65.8%）あり、そのうち4点はロクロからの切離しが回転糸切りである。回転糸切り無調整のものは7点（18.4%）、回転ヘラケズリしたものは6点（15.8%）ある。須恵器はヘラ切り無調整のものが13点（41.9%）、回転糸切り無調整のものは12点（38.7%）とほぼ同量ある。手持ちヘラケズリを行ったものは6点（19.4%）あり、その内2点のロクロからの切離しは回転糸切りである。

口高比：1層では土師器が3.22・3.29であり、須恵器は2.68・3.34・3.35・3.38・3.51である。

底高比：1層では土師器が0.52・0.53である。須恵器は0.39～0.58の間に分布しており、0.50前後にまとまりが認められる。

		SD 949	SD 945 A	SD 945 B		SE 948		SD 943	SD 935 A	SD 935 B	SD 935 C	SD 935 D	計
		1層	2層	1層	2層	1層	2層	3層	4層	1層	2層	1層	2層
土 師 器	回転 ヘラケズリ	非ロクロ調整											
		静止糸切り											
		回転糸切り											
		ヘラ切り								1			1
		切離し不明	5	1	1					1	2	4	1 2 17
		(小計)	5	1	1					1	3	4	1 2 18
須 恵 器	手持ち ヘラケズリ	静止糸切り						1					1
		回転糸切り	6	1					1	6	2	1	4 21
		ヘラ切り											
		切離し不明	18	1	11	1	2	1	1	1	8	3	2 4 2 55
		(小計)	24	1	12	1	2	2	2	1	14	5	3 8 2 77
	ヘラ切り												1
土 師 器 ・ 須 恵 器 合 計	回転 糸切り		5	1	6	1			1	12	3	2	4 5 41
	その他	4	9	3					2	16	6	6	5 6 57
	土師器 計	4	9	38	3	19	1	1	2	2	6	1	45 19 11 18 15 194
	回転 ヘラケズリ	静止糸切り											1
		回転糸切り			1								1
		ヘラ切り			1								2
須 恵 器		切離し不明		1					1				4
		(小計)		3					1				
	手持ち ヘラケズリ	静止糸切り											6
		回転糸切り	1	1					1	3			5
		ヘラ切り											5
		切離し不明	3	3	2	2	1		1	2	9	7	3 33
須 恵 器 ・ 土 師 器 合 計	(小計)	3	3	3	3	1			1	3	17	7	3 44
	ヘラ切り	8	6	9	4	3	1	6	5	2	7	2	13 2 4 6 2 80
	回転糸切り		10	2	4				4	32	6	3	6 2 69
	その他		1			1			1	3	4	3	1 14
	須恵器 計	11	9	23	9	11	2	6	5	3	14	3	66 19 10 16 4 211
	土師器・須恵器 合計	15	18	61	12	30	1	3	8	7	3	20	4 111 38 21 34 19 405

表7 主要遺構出土土器集計表

c. S D945B出土土器

1層から土師器が19点、須恵器が11点、2層から土師器が1点、合計31点出土している。出土量が少ないので一括して扱う。実測図を作成できたものは、土師器2点、須恵器2点であり、合計4点ある（内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のものは土師器2点）。

成形・調整手法：土師器ではロクロ調整後回転ヘラケズリが1点(5.0%)、手持ちヘラケズリしたもののが12点(60.0%)あり、回転糸切り無調整が6点(35.0%)ある。須恵器は回転ヘラケズリしたものが3点(27.3%)あり、その内ロクロからの切離しはヘラ切り1点、回転糸切り1点である。手持ちヘラケズリを行ったものが1点(9.1%)あり、ヘラ切り無調整が3点(27.3%)、回転糸切り無調整が4点(36.4%)である。

口高比：土師器が3.13と3.62であり、須恵器は3.05と3.46である。

底高比：土師器が0.51・0.58であり、須恵器は0.43・0.55である。

S D945B出土土器の年代：S D945B出土土器の年代については、天長6年(829)の木簡が出土したS D945Aを上限とし、灰白色火山灰との層位的関係から承平4年(934)を下限とするものである。ただし、灰白色火山灰はS D945Bがほとんど埋没した段階で堆積していることから、934年よりは時間的に遡る可能性が高いと考えられる。

下限年代については供膳形態における須恵器杯のあり方から探ってみたい。出土土器の構成についてみると、土師器杯63.5%に対し須恵器杯36.5%の割合であり、須恵器は供膳形態の中に一定の位置を占めていることがわかる。この点について城内の成果を参考にすると、9世紀前葉のS I 2153・2160Aと9世紀第2四半期のS E2101Bでは須恵器が半数以上を占めているが、9世紀中葉のS K2167では土師器72.4%、

		SD 949	SD 945A	SD 945B	SE 948	SD 943	SD 935A	SD 935B	SD 935C	SD 935D	Total
土 師 器	非ロクロ調整										
	回転ヘラケズリ	静止糸切り									
		回転糸切り					2.4				0.7
		ヘラ切り									
		切離し不明	15.8	5.0		20.0	14.3		7.7	22.2	12.4
		(小計)	15.8	5.0		20.0	16.7		7.7	22.2	13.1
須 恵 器	手持ちヘラケズリ	静止糸切り			25.0						0.7
		回転糸切り	15.8	5.0		20.0	19.0	20.0	30.8		15.3
		ヘラ切り									
		切離し不明	50.0	55.0	75.0	40.0	26.2	40.0	30.8	22.2	40.2
		(小計)	65.8	60.0	100.0	60.0	45.2	60.0	61.5	22.2	56.2
		ヘラ切り					2.4				0.7
須 恵 器	回転糸切り		18.4	35.0		20.0	35.7	40.0	30.8	55.6	30.0
	回転ヘラケズリ	静止糸切り									
		回転糸切り			9.1						0.5
		ヘラ切り			9.1						0.5
		切離し不明			9.1		1.3				1.0
		(小計)			27.3		1.3				2.0
須 恵 器	手持ちヘラケズリ	静止糸切り									
		回転糸切り		6.5		6.2	3.9				3.0
		ヘラ切り					6.4				2.5
		切離し不明	30.0	12.9	9.1	7.1	12.5	20.5		20.0	16.8
		(小計)	30.0	19.4	9.1	7.1	18.7	30.8		20.0	22.3
		ヘラ切り		70.0	41.9	27.3	92.9	56.3	19.2	57.1	40.0
	回転糸切り			38.7	36.3		25.0	48.7	42.9	40.0	50.0
											35.1

表8 主要遺構出土土器組成表

須恵器27.6%とその割合が逆転し、9世紀後半の鴻の池地区第10層では破片が少數出土している程度である。また、9世紀第3四半期のSK2272は土師器72.5%、須恵器27.5%であり、9世紀第4四半期のSK2270は土師器94.6%、須恵器5.4%となっている。10世紀前葉以降のものであることが確実な鴻の池地区第7層ではほとんど出土していない(第133図)。これらのことから、9世紀中葉から10世紀前葉にかけて須恵器杯が減少するという現象が窺われ、土師器と須恵器が共存するSD945Bは鴻の池地区第10層やSK2270などよりも古い時期に位置付けることが可能であろう。したがって、SD945Bの下限は9世紀中葉頃と見ることができよう。

S D945A出土土器の年代: SD945Aについては、第24次調査時に2層から天長6年(829)の木簡が出土していることから存続年代の一点が確実に押さえられ、同年を上限年代とすることができます。また、後続するSD945Bの存在から9世紀中葉を下限とすることができます。したがって、829年から9世紀中葉にかけてという年代観が得られることになる。この点については、同じ「天長」の紀年銘資料が伴出した多賀城跡大畠地区SE2101B井戸跡Ⅲ層出土土器との比較検討を通して考えてみたい。

SE2101B井戸跡Ⅲ層出土土器は天長9年(932)以降の漆紙文書が共伴したもので、上限年代を9世紀前葉、下限年代を天長9年(832)以降でもさほど隔たらない9世紀前半代に限定されているものである(宮城県多賀城跡調査研究所:1992)。具体的には9世紀第2四半期に相当すると解釈できる。

はじめに土師器杯の成形・調整手法について検討する。SE2101Bは非ロクロ調整のものをわずかに含むが主体はロクロ調整を施したものである。回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリによって再調整されたものがそれぞれ38.0%・56.0%あり、全体で94.0%を占めている。再調整を行わないものとして回転糸切り無調整のものが4.0%ある。一方、SD945Aはすべてロクロ調整を行ったものである。回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリによって再調整されたものがそれぞれ15.8%・65.8%あり、全体で81.6%を占めている。回転糸切り無調整のものは18.4%ある。SE2101B、SD945Aのいずれも再調整を行っているものの割合が大きいといふ点で共通しているが、その割合や非ロクロ調整によるもの的存在などからSE2101Bの方に古い要素が認められる。

次に、須恵器杯の成形・調整手法について検討する。SE2101Bは回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリによって再調整されたものがそれぞれ5.0%・2.0%あり、全体で7.0%の割合を占めるのみである。それに対し、ヘラ切り無調整が80.0%、回転糸切り無調整が13.0%あり、再調整を行わないものの割合は93.0%に達している。一方SD945Aは手持ちヘラケズリ再調整されたものが19.4%あり、回転ヘラケズリされたものは見られない。それに対し、ヘラ切り無調整が41.9%、回転糸切り無調整が38.7%あり、再調整を行わないものの割合は80.6%である。再調整されたものの割合はSD945Aが多く、この点については古い要素が多いと見られるが、回転糸切り無調整のものの割合が多い点は新しい要素である。したがって、須恵器については古い要素を残しながらも新しい要素が見られるということが言えよう。

ところで、SE2101Bとは年代的にかなり近いとされながら、新しい要素が多いことから9世紀中葉に位置付けられているものにSK2167がある。SD945Aの土師器・須恵器における再調整されるものと再調整されないものの比率はむしろSK2167に近い。

このように、SD945AはSE2101BとSK2167の両者にそれぞれ共通点が見出され、前者が9世紀第2四半期、後者が9世紀中葉とされている年代観と矛盾するものではない。したがって、SD945Aの上限である天長6年(829)からSD945Bの下限である9世紀中葉の間が両者の存続期間ということになるが、

更に詳細な位置付けは明らかにできない。

S D949出土土器の年代：S D949の年代については、S D945Aより古いことから天長6年（829）を下限とし、それ以前のものであることが明らかである。この点については、9世紀前葉に位置付けられる多賀城跡大烟地区 S I 2153・2160との比較を通して考えてみたい。

はじめに須恵器杯について検討する。ロクロからの切離しや再調整など手法的な点はおおよそ共通していると言ってよい。ヘラ切り無調整のものを主体とし、それに手持ちヘラケズリしたものが少数加わるという構成の比率はほぼ一致している。器形について見ると、底径に対する口径の比率（底口比）に相違が認められる。すなわち、S I 2153は0.43～0.63の間に分布して0.53～0.57の間に集中し、S I 2160は0.46～0.61の間に分布して0.56～0.61の間に収まるものが多いという傾向が窺われる。一方、S D949は0.52～0.68の間に分布して0.60～0.63の間に集中していることから、S I 2153・2160より底部が大きい形態であることがわかる。S I 2153・2160より古い様相を持つという土器群についてみると、伊治城跡S I 173は0.39～0.84の間に分布し、0.56前後に集中していることはS I 2153・2160と近似した値といえるが、今回の調査区に近い第7次調査S K236では0.49～0.67の間に分布し、0.63～0.65の間に集中していることからさらに古い様相を示している。伊治城跡S I 173や市川橋遺跡S K236は8世紀末まで遡る可能性があるという見解に従えば、S D949出土土器の年代を8世紀末から9世紀前葉に位置付けることが可能であろう。

したがって、S D949の年代は8世紀末から9世紀前葉頃に位置付けることができると考えられる。

② S E948、S D943、S D935出土土器の年代

S E948→S D943→S D935A→S D935B→S D935C→S D935という新旧関係を捉えることができた。S D935Dは灰白色火山灰降下時には埋没していることから、下限年代は承平4年（934）であることが明らかである。

各出土土器の概要は以下のとおりである。

a. S E948出土土器

1層は廃絶後の整地層であることから除外し、埋まり土である2・3・4層を対象とする。2層からは土師器1点、須恵器4点、3層から土師器1点、須恵器4点、4層から須恵器2点、合計12点が出土している。これも出土量が少ないため一括して扱う。実測図を作成できたものは土師器2点、須恵器7点であり、合計9点ある（内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のものは土師器1点、須恵器3点）。

成形・調整手法：土師器はロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものが4点（内1点は静止糸切り）ある。須恵器はヘラ切り無調整が9点、手持ちヘラケズリが1点ある。

口高比：土師器が3.13・4.03であり、須恵器は2.45～4.03の間に分布している。須恵器は2.6と3.6前後にまとまりがみられる。

底高比：土師器が0.44・0.52であり、須恵器は0.44～0.66まで分布している。いずれもまとまりがなく、散在している。

b. S D943出土土器

1層から土師器が4点、須恵器が14点、2層から土師器が1点、須恵器が2点、合計21点出土している。出土量が少ないので一括して扱う。

成形・調整手法：土師器は手持ちヘラケズリが3点、回転ヘラケズリが1点、回転糸切り無調整が1点である。須恵器はヘラ切り無調整が9点と最も多く、回転糸切り無調整が4点、手持ちヘラケズリが3点（内

1点は回転糸切り)である。実測図を作成できたものはすべて須恵器であり、合計6点ある(内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のものは3点)。

口高比: .20~3.69の間に分布している。

底高比: 0.46~0.56の間に分布し、最も小さいもの1点(0.46)を除いたものは0.55前後に集中している。

c. S D935A出土土器

1層から土師器が32点、須恵器が63点、2層から土師器が41点、須恵器が15点、合計121点出土している。1・2層には土色・土質に明確な違いが認められたことから区別して扱う。実測図を作成できたものは1層では土師器16点、須恵器25点であり、合計41点ある(内・口縁部及び底部の残存率がすべて1/3未満である)。2層では土師器5点、須恵器4点、合計9点ある(内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のものは土師器・須恵器ともに各2点ある)。

成形・調整手法: 土師器はロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものが19点(内7点は回転糸切り)と最も多く、次に回転糸切り無調整の15点、回転ヘラケズリ7点(内回転糸切り1点)である。その他ヘラ切り無調整が1点、静止糸切りが1点ある。須恵器は回転糸切り無調整が38点と圧倒的に多く、手持ちヘラケズリ19点、ヘラ切り無調整15点がそれに次いでいる。また、ヘラ切り後手持ちヘラケズリしたものが5点、回転糸切り後回転ヘラケズリしたものが1点出土している。

口高比: 土師器が2.41~3.51、須恵器は2.98~3.74の間に分布している。

底高比: 1層では土師器は0.41~0.49、須恵器は0.40~0.53の間に分布している。2層では土師器は0.43~0.56、須恵器は0.43~0.48

d. S D935B出土土器

土師器が11点、須恵器が10点、合計21点出土している。実測図を作成できたものは土師器3点、須恵器2点であり、合計5点ある(内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のものは須恵器1点である)。

成形・調整手法: 土師器はロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものが3点(内1点は回転糸切り)、回転糸切り無調整が2点あり、不明6点である。須恵器はヘラ切り無調整が4点、回転糸切り無調整が3点あり、不明が3点である。

口高比: 土師器が2.86~3.23、須恵器は3.07~3.22である。

底高比: 土師器は0.44~0.52、須恵器は0.46~0.47である。

e. S D935C出土土器

土師器が18点、須恵器が16点、合計34点出土している。実測図を作成できたものは土師器2点、須恵器3点であり、合計5点ある(内・口縁部及び底部の残存率が1/3以上のものは須恵器2点である)。

成形・調整手法: 土師器はロクロ調整後回転ヘラケズリ1点、手持ちヘラケズリしたものが8点(内2点は回転糸切り)、回転糸切り無調整4点、不明5点である。須恵器は手持ちヘラケズリ3点、ヘラ切り無調整6点、回転糸切り無調整6点、その他1点である。

口高比: 土師器が2.34~3.13、須恵器は2.50~3.22の間に分布している。

底高比: 土師器は2点ともに0.42である。須恵器も0.56~0.57~0.59と近似した値となっており、平均値は0.57である。

f. SD935D出土土器

土師器が15点、須恵器が4点、合計14点出土している。実測図を作成できたものは土師器1点である（口縁部及び底部の残存率は1/3未満）。

成形・調整手法：土師器はロクロ調整後回転ヘラケズリ2点、手持ちヘラケズリ2点、回転糸切り無調整5点、その他6点である。須恵器はヘラ切り無調整が2点、回転糸切り無調整が2点ある。

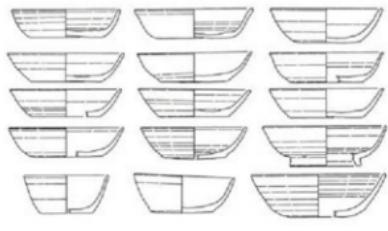
口高比：3.11。

底高比：0.34。

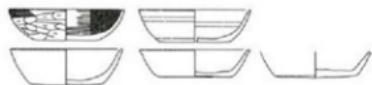
S E948の年代：S E948では土師器は5点出土しており、いずれもロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものである。ただし、その内1点は、第1次再調整として体部下半から底部外縁に回転ヘラケズリを施し、第2次再調整として体部下半を手持ちヘラケズリしたものである。須恵器はヘラ切り無調整のものが92.9%と主体を占め、他に手持ちヘラケズリしたものが7.1%あるという構成である。手法的には①土師器・須恵器ともに回転糸切り無調整のものを含まないこと、②須恵器杯がヘラ切りを主体とし、その割合がかなり高い点などが指摘できる。器形的にみると、土師器・須恵器ともに口高比・底高比が大きく、器高の低い器形が多いことが特徴である。このように手法的な特徴および器形的な特徴はおおよそSD949と共通すると言ってよい。しかし、底口比がやや小さい点が注意され、8世紀末から9世紀前葉頃と考えたSD949とほぼ同時期ではあるが、それよりやや新しい要素を持った土器群と考えられる。

S D943の年代：SD943は、土師器はロクロ調整後回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリの再調整を行つたものがそれぞれ20.0%・60.0%あり、全体で80.0%の割合を占めている。再調整を行わず回転糸切り無調整のものは20.0%である。須恵器は手持ちヘラケズリ再調整を行つたもの18.7%に対し、ヘラ切り無調整のものが56.3%、回転糸切り無調整が25.0%という組み合わせである。土師器・須恵器ともに回転糸切り無調整のものを含んでおり、SD949より新しい要素が認められる。回転糸切り無調整のものが出土しているSD945Aとその割合を比較すると、土師器はSD945Aとほぼ等しいが、須恵器はSD945Aより少ない。また、SD945Bは土師器・須恵器ともに多い。これらのことからSD943は、8世紀末から9世紀前葉頃としたSD949より新しく、天長6年(829)から9世紀中葉としたSD945Aとおおよそ同時期で、それより新しいSD945Bよりは古い要素を持った土器群と考えられる。

S D935Aの年代：SD935Aは、土師器はロクロ調整後手持ちヘラケズリしたものが45.2%と最も多く、次いで回転糸切り無調整のものが35.7%、回転ヘラケズリしたものが16.7%、ヘラ切り無調整のものが2.4%という組み合わせである。須恵器は回転糸切り無調整のものが48.7%と半数近くを占め、次いで手持ちヘラケズリしたものが30.1%、ヘラ切り無調整のものが19.2%、回転ヘラケズリしたものが1.3%である。この土器群で最も特徴的なことは回転糸切り無調整の占める割合であり、土師器・須恵器ともにSD943より倍近く増加し、特に須恵器ではヘラ切り無調整の割合と逆転して全体の半数近くに達している。回転糸切り無調整のものの割合について種別ごとに比較すると、土師器では、SD945Aが18.4%、SD945Bは35.0%に対し、SD935Aは35.7%であり、須恵器では、SD945Aが38.7%、SD945Bが36.3%に対し、SD935Aは48.7%となっている。このように、SD935Aは、土師器でみるとSD945Bと共通した要素がみられ、須恵器でみるとSD945A・Bより新しい様相を呈する土器群ということができよう。したがって、天長6年(829)から9世紀中葉にかけての土器群と同じか、それより少し新しい年代が想定される。



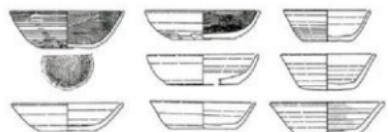
S D949



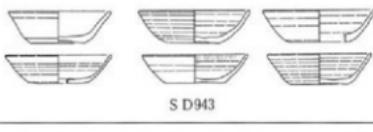
S X1205



S D1050



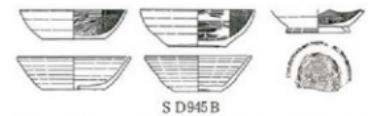
S E948



S D943



S D945 A



S D945 B



S D935 B

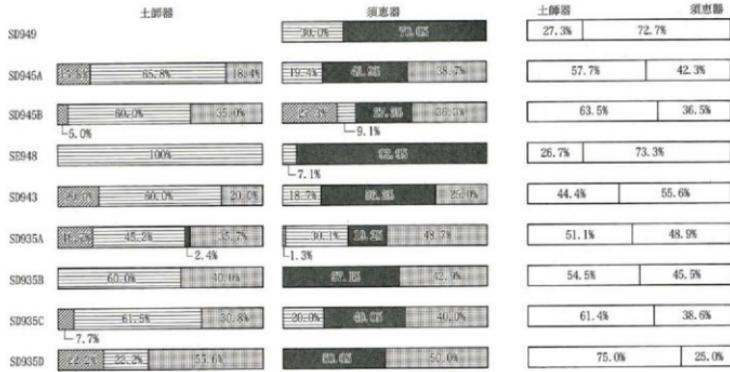


S E935 A

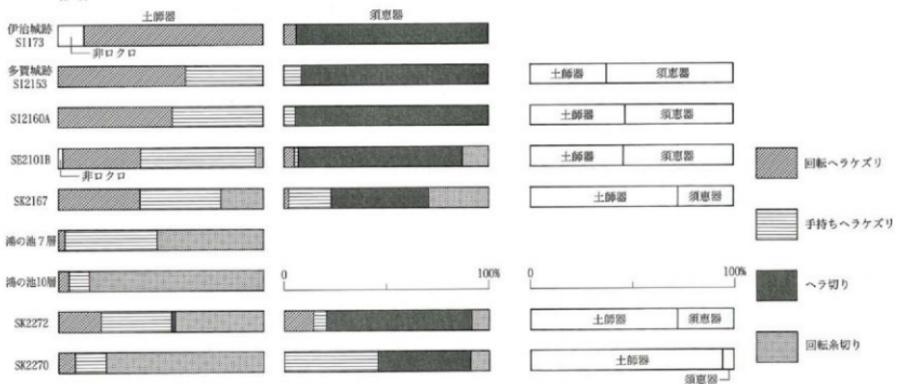


S D935 D

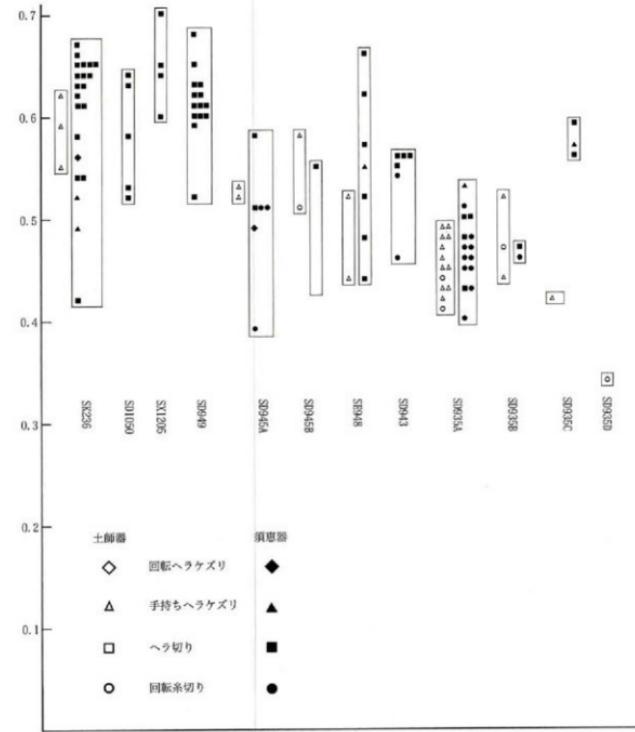
第131図 主要遺構出土土器の比較



(参考)



第132図 主要遺構出土土器の底部再調整および土師器・須恵器の構成



第133図 主要遺構出土土器の底高比

なお、S D935B・935C・935D出土土器については9世紀中葉を上限とし、934年を下限とするものである。しかも、S D935B・935C・935Dの中で最も新しいS D935Dが完全に埋没した後、その堆積に灰白色火山灰が堆積しているという状況は、その存続期間が934年より遡ることを示している。出土土器の点数が少なく、それらから得られた数値については不安定であるが、いずれについても土師器では回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリなどの再調整が施されたものが半数以上を占めており、須恵器も依然として組成の一部を担っていることから9世紀後半・9世紀第4四半期の土器群とは明確に異なっている。このように、下限を示す火山灰との関係及び出土土器の構成から、S D935B・935C・935D出土土器についても9世紀中葉という時間幅の中に収まる可能性がある。

(3) 14(W)区の掘立柱建物跡・土壇の年代

掘立柱建物跡や土壇は、最終遺構面であるVI₁a層上面で検出したものと、基本層との関係が全く不明なものとがあり、いずれも下限年代を示す資料はない。しかし、狭い範囲で重複し、平面的なまとまりが認められということは時期的に連続していることを窺わせるものである。そして、それらの中には最終遺構面であるVI₁a層に伴うものがあることから比較的新しい遺構群であると考えられる。S D945A・BやS D935A～Dなど灰白色火山灰降下時には埋没していた遺構とは全く重複していないことを考え合わせると、それらと同時期の可能性がある。従って、この地区においてもほとんどの遺構が10世紀前葉以前のものであると考えられる。

(4) 13(N)区の遺構の年代

I3(N)の遺構は相互の関係が明瞭でなく、出土遺物も少ない。

B13(N)では第VII層～第VIIIa層などの古代の整地層・堆積層がある。発見した遺構は、それらとの対応関係から次の五つのグループに分類が可能である。

a : 第VIIa層に直接覆われるもの………SD968 SD1023・1024 SD999 SK1033 SK983 SK1036

SK1037

b : 第VIIa層上面で検出し、第VI₂b層に覆われるもの………SD1049

c : 第VIII層上面で検出し、第VI₂層に覆われるもの………SD1031

d : 第VIIa・VIII層上面で検出し、第VI₂層に直接覆われるもの、他の堆積層との関係が不明なもの

………SD1032 SD1005・1006・1007 SD1001 SD1019 SD1025

SK1026 SK1028 SK1116 SK969 SB967 SD1034 SD1035

SD1038 SD1048 SK998 SA1118

①a群は層位的にみても最も古い。②b群はa群より新しく、d群よりも古い。③c群はd群より古い。④e群はa群より新しく、d群よりも古いという関係が確認できる。従って、全体的にa群→b・c群→d群という変遷が想定できる。b・c群については新旧関係が不明である。また、最も新しいd群が灰白色火山灰に覆われていることから、すべて承平4年(934)以前の遺構であることが明らかである。

a・b・c群の遺構に伴う遺物はほとんどないが、d群の遺構には、回転糸切り無調整の杯を含まないS K969・S K1026と、回転糸切り無調整の杯を含むS D1019・S D1025・S K998があり、いずれも須恵器杯を含んでいる。須恵器杯の存在を重視すれば、9世紀中葉頃を下限と見ることができる。また、灰白色火山灰はd群の遺構群が埋没し、それらを覆う第VI₂層上面に堆積していることから、承平4年(934)を遡る可能性が高く、土器から見た下限年代と矛盾するものではない。上限年代を示す資料はほとんどな

いが、a群のS D999からロクロ調整を施した土師器杯・甌の破片が各1点出土していることから、一応8世紀末頃を上限と考えておきたい。

(5) I3(S)の遺構の年代

B I3(S)区では遺構と基本層との関係を明確に把握できないものが多く、重複関係による分類も難しい。したがって、遺構の年代については出土遺物に依って個別に推定せざるをえない。

本地区で発見した遺構の内、杯類で特徴的な部分が出土しているものはI6の遺構に過ぎない。しかも、最も出土点数が多いものでも43点であり、10点以上出土した遺構はわずかに4件である。資料的には問題があるが、成形・調整手法、ロクロからの切離し、再調整の有無と種類等からa～eに分類することができる。

a：土師器は非ロクロ調整、須恵器はヘラ切り無調整と手持ちヘラケズリを行ったもので構成

..... S X1205

b：土師器・須恵器ともに回転糸切り無調整のものを全く含まない

..... S D1088・1093・1083・1085・1086・1092・1259

c：土師器・須恵器ともに回転糸切り無調整のものを含む

..... S D1084・1087・1089・1151・1260

d：土師器は回転糸切り無調整のものを含まないが、須恵器は回転糸切り無調整のものを含む

..... S D1256・1090・1257

e：須恵系土器を含む

..... S X1263

aについては、土師器が非ロクロ調整であり、体部上半部まで手持ちヘラケズリを施した平底の杯で、從来の土器型式に当たるると圓分寺下層式に相当する。須恵器杯はヘラ切り無調整のものを主体とし、わずかに手持ちヘラケズリしたものを含んでいる。底口比は0.60・0.64・0.65・0.70であり、底径の大きな器形が多い。このような形態の杯はS D949に類似し、成形・手法的な点も共通していることからSD949と同様の年代と考えられ、8世紀末から9世紀前葉頃の年代を想定しておきたい。

bの中のS D1093出土土器は、須恵器杯に回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリしたものとヘラ切り無調整のものがあり、後者が多い。土師器はロクロ調整後手持ちヘラケズリを施したものである。このような組合せは、多賀城跡大畠地区の調査において土師器・須恵器とも回転糸切り無調整の杯を伴わない土器群として8世紀末から9世紀前葉の年代が与えられているものと共通する部分がある。それ以外の遺構については、わずか1・2点の土器しか出土していないものがほとんどであり、詳細は不明である。

c・dについては、多賀城跡大畠地区の調査において9世紀前葉の遺構には土師器・須恵器とも回転糸切り無調整の杯は伴わず、それより新しい9世紀第2四半期頃の遺構出土土器から見られるようになることから、上限を9世紀第2四半期とし、それ以降の年代を考えておきたい。下限については須恵器杯の存在から9世紀中葉頃としておきたい。S D1151南北溝とS D1087東西溝は埋土上層に灰白色火山灰粒を多く含んでおり、10世紀前葉にはほぼ完全に埋没していたことが知られる。

eについては須恵系土器高台付皿の存在が手掛かりになる。須恵系土器は、10世紀前葉の灰白色火山灰降下前後に出現するとされているが、高台付皿は白鳥良一による『多賀城跡出土土器の変遷』(白鳥:1980)の中でF群土器としたものに見られ、それより古い段階であるE群土器には見られない。多賀城跡大畠地

区における須恵系土器を含む一括土器の検討において、10世紀中葉頃の年代を与えた土器群に見られるこ
とから、おおよそ同様の年代を考えておきたい（宮城県多賀城跡調査研究所：1993）。

また、遺物は出土していないが、S D1055は天長6年（829）の木簡が併出したS D945Aと接続する可
能性を考えており、同様の年代が想定される。

⑥ B49区の遺構の年代

B49区の遺構は、堆積層との関係によって次のa～cに大別できる。

a群：第VIIb層に覆われるもの

……… S D1052

b群：第VI層に覆われ、さらに灰白色火山灰に覆われるもの

……… S B1000、S D1002・1004（第24次調査で確認）

S D1105・1058・1107・1059・1074

S D945A・B（灰白色火山灰＝第Vb層に覆われる）

c群：堆積層との関係を把握できなかったもの

……… S D1060・1049・1079・1053・1075・1076

a群については遺物が出土していないため、年代については不明である。上面が灰白色火山灰より下層
の第VIIb層に覆われていることから、少なくとも下限は承平4年（934）である。

b群のS D1058・1059・1074では土師器・須恵器とともに回転糸切り無調整のものを含んでおり、第VI層
を介して灰白色火山灰層に覆われている。このような出土遺物の構成および火山灰との層位的関係から、
9世紀中葉頃の年代を考えておきたい。大型建物S B1000とその雨落ち溝S D1002・1004は、出土遺物お
よび灰白色火山灰との層位的関係から、8世紀末から9世紀中葉の年代と考えている（多賀城市教育委員
会：1999）。

c群については、年代的に古いものと新しいものとが混在する。S D1049・1079は13(S)区においてS D
1055より古いことが確認されている。S D1055は天長6年（829）の木簡が併したS D945Aに接続する
と考えているものであることから下限は829年であり、さらに13(N)区で最も古いa群のS D968よりも古い
ことから第25次調査発見遺構の中では最も古い可能性がある。S D1075は埋土に灰白色火山灰粒が混入し
ていることから10世紀前葉以降のものである。

S D945についてもB期の埋土上層に灰白色火山灰が自然堆積しており、同様の状況である。灰白色火山
灰降下後の遺構としては第VII層（地山）上面で検出したS D1075があるのみである。

⑦ 14(E)・15区の遺構の年代

この調査区で発見した遺構は溝跡3条である。その内、遺物が出土しているS D1050について検討する。

出土土器には土師器杯・甕、須恵器杯がある。土師器杯は底部が静止糸切りであるがロクロ調整の有無
は不明である。甕は非ロクロ調整である。須恵器杯はロクロからの切離しがヘラ切り無調整のものが6点、
回転ヘラケズリを行ったものが1点ある。須恵器杯の底口比は0.52から0.64の間に分布している。須恵器
杯についてみれば、ヘラ切り無調整を主体とし、わずかに回転ヘラケズリ再調整したものを含むという構
成は伊治城跡S I 173など8世紀末から9世紀前葉にかけての土器群に共通する。底口比の分布範囲もおお
よそ一致している。

⑧ B63区の遺構の年代

本調査区は基本的に確認調査のため、発見遺構の詳細な年代は不明であるが、小柱穴群を破壊する S D 1065から須恵系が出土している。器種は、杯・小型杯・高台付杯・高台付皿がある（註）。第25次調査では須恵系土器はきわめて少量しか出土しておらず²、確実に遺構に伴ったものは本溝跡と13(S)区のS X1263のみである。

多賀城跡大畠地区の調査では須恵系土器を含む一括土器の検討を行い、口径 9 cm前後、器高 2 cm以下、器高/口径比が0.15～0.2程のものを小皿に分類し、小皿を含む土器群（第62次調査第IV群土器）の年代を10世紀中葉以降としている（宮城県多賀城跡調査研究所：1993）。本書で小型杯と分類した資料の中には大畠地区で小皿に分類したしたものと法量や器高/口径比が共通しているものがあることから、第62次調査第IV群土器に相当すると考えられる。年代についても、第IV群土器と同様の年代を考えておきたい。

（註）須恵系土器の器種については、口径が12.0cm以上、器高が3.1cm以上のものを杯、口径が12.0cm未満、器高が3.1cm未満のものを小型杯、口径が12.0cm未満で高台が付くものを高台皿とした。第26次調査ではこのような須恵系土器が多量に出土しており、同調査の報告書の中で詳細な分類を行うこととし、本書では暫定的に上記のような器種名を使用しておきたい。

2 出土遺物の分析

第25次調査出土遺物の内、土器については前項で分析し、墨書・刻書土器については「附章2 市川橋遺跡高平地区出土の墨書土器」、木簡については「附章3 多賀城市市川橋遺跡（第24・25次）出土木簡」に別項を設けた。ここではそれ以外の陶器、硯、壺形土器、製塙土器、土錘、土器片製円板、木製品、金属製品について考察を加える。

(1) 陶器

陶器としては灰釉陶器が53点、綠釉陶器が14点、合計67点出土している（表9）。遺構から出土したものは少なく、ほとんどのものが表土や堆積層から出土している。特に、I3(S)区と14(W)区の境界付近に厚く堆積した第III層からの出土資料が70%以上を占めており、遺構から出土したものはきわめて少ない。そのような出土状況のため、ここでは一括して器種、年代、生産地等についてまとめてみる。

(1) 灰釉陶器

椀、皿、長頸瓶、短頸壺が出土している。

椀

口縁部の破片が6点、体部の破片が9点、底部の破片が7点ある。底部には次の3タイプがある。

A : 断面が方形を基調とする角高台 2点 第99図9 (R172)、第125図7 (R1181)

B : いわゆる三日月高台 2点 第126図 (R1203)

C : 二等辺三角形を呈する高台 1点 第37図 (R194)

それらの施釉されている部位について見ると次のとおりである。

Ⓐ : 内面に斑状の自然釉がある。外面には施釉痕跡を確認できない。

Ⓑ : 内面底部は無釉。体部は内外両面にハケ塗り。

Ⓒ : 内面に斑状の自然釉がある。体部外面にハケ塗り。

また、口縁・体部の破片で施釉されている部位が判明しているものが15点あり、その特徴から次の2タイプに分けられる。

a : 内面は斑状の自然釉。外面は無釉 2点

b : 内外両面に灰釉をハケ塗り 13点

その他の特徴として、AのR172・R1181の底部内外両面に三叉トチンの痕跡が残っており、窯道具を使用して重ね焼きしたことが確認できる。

猿投窯における灰釉陶器編年にあてはめると、A・A・aの特徴を持つものは黒窯14号窯式、B・C・Ⓑ・Ⓒ・bの特徴を持つものは黒窯90号窯式にそれぞれ相当する。年代については、黒窯14号窯式は9世紀中葉、黒窯90号窯式は9世紀後葉を中心とするものと考えられている。生産地については明確に識別で

	灰釉陶器						緑釉陶器				合計
	椀	椀or皿	段皿	瓶	短頸壺	(小計)	椀	皿	陰刻花文椀	(小計)	
13N											
13S	8			9	1	18	1	3	2	6	24
14W	12	1		11	6	30	5		1	6	36
14E・15	2		1	2		5	2			2	7
49											
63	22	1	1	22	7	53	8	3	3	14	67

表9 陶器集計表

きないが、A・aの製品は、現時点では狼投窯以外では生産が確認されていないことから狼投窯の製品と考えられる。B・bの製品はA・aと胎土の特徴が共通することから同様に狼投窯製品と推定されるものが多く見られる。Cの製品は胎土が白色・灰白色を呈し、A・B・bよりも緻密で、滑らかな割れ口を呈するものであり、東濃窯製品と考えられる（註）。

長頸瓶

口縁部破片が1点、体部破片が17点、底部破片が2点ある。体部破片の中には長頸瓶以外の瓶類が含まれている可能性がある。ほとんどの破片は厚く自然釉がかかったものであるが、その下に薄いハケ塗りの痕跡を確認できるものもある。特徴的な部分をとどめるものがいたため、年代は不明である。生産地につ

器種	部位	第 25 次					第 24 次										第 5 次		第 7 次		第 9 次		合計	
		13 N	13 S	14 W	14E 15	49	63	50	51	52	53	55	56	58	59	60	61	64	Z	1	6	9	36	
椀	口	2	4					7				1		4	2		1	6		4	6	22		
	体	3	6					2				1								2	6	19		
	底	3	2			2		3								1						1	1	
	口～底																			1		1		
皿	口																					2	2	
	体																					1	1	
	底																							
段皿	口																							
	体																							
	底							1																
灰皿	口																							
	体																							
	底																							
耳皿	口																							
	体																							
	底																							
袖・皿	口																							
	体																							
	底																							
三足皿	口																							
	体																							
	底																							
周	口																							
	体																							
	底																							
器	瓶	1						1				1						1		1	8	9		
	体	8	9			2		1	10	1	1	1				2	1	4	1	11	12	63		
	底	2										1				1			3		1	8		
小瓶	口																			1	2	4		
	体																			1		1		
	底																							
手付瓶	口																			10		11		
	体																							
	底																							
短頸壺	口																							
	体	1	5																					
	底	1																						
淨瓶 (水瓶)	口																							
	体																							
	底																							
(小計)		18	30	5		2	25	1	1	2	1	3	2	6	8	2	1	72	2	82	263			
綠釉陶器	椀	口	3		1															1	5			
	体	2																		1	5			
	底	1																		4				
	皿	1																		1		1		
楕・皿	楕	1																		3	2	5		
	体																							
	底																							
陰刻花文楕	楕	2																						
	体	1																						
	底																							
(小計)		6	6	2		3	1												3	1	8	30		
白楕	楕	口																		1				
	体																							
	底																							
合 計		24	36	7		2	28	2	1	2	1	3	2	6	8	2	1	75	3	91	294			

表10 高平地区出土陶器集計表

いっては、椀と同様に猿投窯・東濃窯製品に類似するものがそれぞれあり、後者が多い。

短頸壺

体部破片6点、底部破片1点がある。口縁部は出土していないが体部・底部の形状から短頸壺と推定した。接合しないが同一個体と考えられる。体部下半から底部にかけては無釉である。特徴的な部分がないため年代は不明である。生産地については、猿投窯・東濃窯のいずれかであろう。

(ii) 緑釉陶器

椀・皿、陰刻花文椀が出土している。

椀・皿

椀の底部が2点ある。皿は口縁部が1点、体部が1点、底部が1点ある。皿は接合しないが同一個体とみてほぼ間違いない。以下、椀と皿を一括で扱う。底部には高台の成形方法によって次の2タイプがある。

A：高台を貼り付けたもの 1点（第126図7・R1284）

B：削り出したもの 2点（第37図11・R195、同14・R196）

高台の成形技法からAは東海地方の製品、Bは畿内の製品とされている。具体的な生産地については、吉川義彦（関西文化財調査会）、平尾政幸（京都市埋蔵文化財研究所）、尾野善裕（京都国立博物館）三氏の教示によると、R1284は猿投窯、R195は山城国西部、R196は山城国北部であり、年代はR196が870～900年、R1284・195は870～930年頃という（註）。

陰刻花文椀

口縁部が2点、体部が1点出土した。第37図15（R211・212）は稜椀であり、接合しないが同一個体と考えられる。巻頭図版左（R210）は体部下半が屈曲気味に立ち上がる器形である。R211・212は内外両面を丁寧にヘラミガキし、内面に宝相華文を陰刻している。R210は、内面は器表がやや荒れているため確認できないが、外表面はヘラミガキされており、内面に花文が陰刻されている。生産地については、同様の陰刻花文が猿投窯に見られることから、猿投窯製品と考えられる。

第5・7・9・24次調査区出土資料を加えた市川橋遺跡高平地区（城南地区B区）における陶磁器の総数は、灰釉陶器263点、綠釉陶器30点、白磁1点となる（註）。出土点数が多いのは第5次・第9次・第24次（51区）・第25次（14W・13S区）であり、これらはB区南西部に位置する調査区である。灰釉陶器では椀・皿・長頸瓶が多く、小瓶、手付瓶、短頸壺、淨瓶（或いは水瓶）、三足皿、耳皿などがある。綠釉陶器では碗・皿がほとんどで、陰刻花文碗は第9次調査区からも1点出土している。中国製品としては口縁部を玉縁とした白磁碗が1点ある。

これらの施釉陶器については、A・C・D区出土資料の整理を行った上で城外の各地点出土資料との比較・検討を行うこととし、今回は事実関係のみの報告にとどめておきたい。

(2) 瓦

円面瓦が3点、転用瓦が4点出土している。

（註）胎土が白色・灰白色を呈し、緻密で滑らかな割れ口を見せるものが一般に東濃産とされている。肉眼観察によるため、猿投窯製品とは必ずしも明確に識別できないものが存在する。

（註）年代については平安京の土器編年における位置付けである。

（註）多賀城跡第22次調査地区（高平遺跡）においても灰釉陶器と綠釉陶器が出土しており、報告書には灰釉陶器3点が掲載されている（宮城県多賀城跡調査研究会：1973）。今回それらについては確認作業を行わなかったため、集計表には掲載していない。

円面硯

第95図12は全体の形状がわかる唯一の資料である。硯部の形状は、中央部から縁にかけて緩やかに傾斜しており、陸と海の境界が明確でない。縁は硯部の外縁にはば直立気味に貼り付けられており、その接合面には予め外縁に沿って細い沈線を入れ、接合部分の強化を図っている。脚部には、横方向に長い長方形の透かしと縦方向の線刻がある。脚部の端部は、外側に屈曲して丸く取まり、接地面には太い沈線が形成されている。第34図9は脚部の破片である。縦方向の透かしが確認できるが、端部の形状は第95図12と共通しており、同一個体の可能性もある。第99図15は硯部の破片である。縁は剥離している。硯面はおおよそ平坦な形状である。

転用硯

墨が付着しているものと、墨の付着は見られないが部分的に磨耗しているものとがある。後者については、厳密には硯と断定できない要素もあるが、基本的に破片の凹面を利用していること、硬い物質で強く擦った痕跡が確認できるなどの点が硯に転用されたものに類似していることから転用硯と推定した。

第18図7は須恵器杯の内面を使用したものである。特に内面中央部が著しく磨耗している。墨はほとんど認められない。

第44図1は須恵器高台付杯の底部を使用したものである。高台はそのまま縁として利用したとみられる。底部には墨が良好に残存している。

第71図4は須恵器杯の内面を使用したものである。特に磨耗している部分は少ないが、墨は良好に残存している。

第109図7は高台付杯の内面を使用したものである。内面中央よりやや外側の一部が磨耗している。墨はほとんど認められない。

これらの内、第44図1は8世紀末～9世紀前葉の井戸跡から、第71図4は9世紀前葉～中葉の溝跡からそれぞれ出土している。それ以外については堆積層から出土したものが多く、年代については不明である。

(3) 竜形土器

各調査区から出土しているが、14(W)区が最も多い。いずれも破片であり、特徴的な部分をとどめていないものが多いので一括して扱う。以下、器形、成形、調整等についてみていく。

器形

全体の器形がわかるものはないので各部位ごとにみていく。

掛け口は、A：上端部を肥厚させ、内側に張り出して上面に幅の広い平坦面を形成しているもの（第33図12、第100図3・4）と、B：上面に幅の広い平坦面を形成しないもの（第100図1）とがあり、Aが多い。

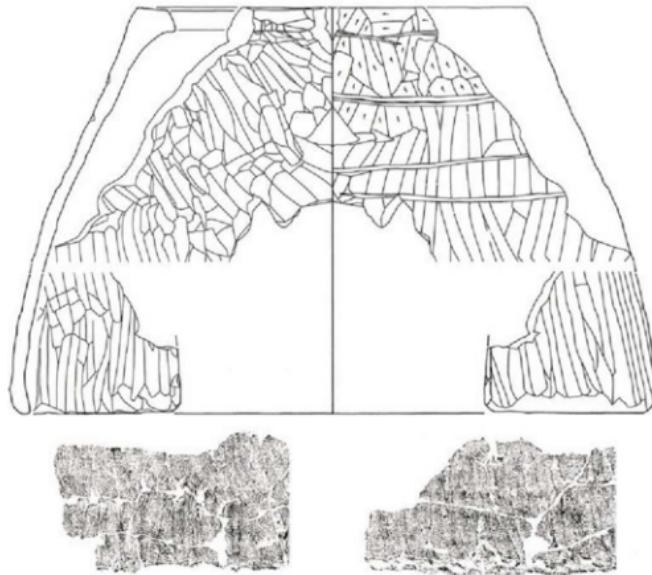
基部の先端は、C：外半するもの（第100図5）と、D：そのまま単純に取めるもの（第34図8）、E：内側にやや折り返すもの（第100図2）などがある。

焚口には、F：周囲に庇が巡るものがある（第38図10、第100図6）。庇が巡らないものも存在するが今回の調査では出土していない。

成形・調整

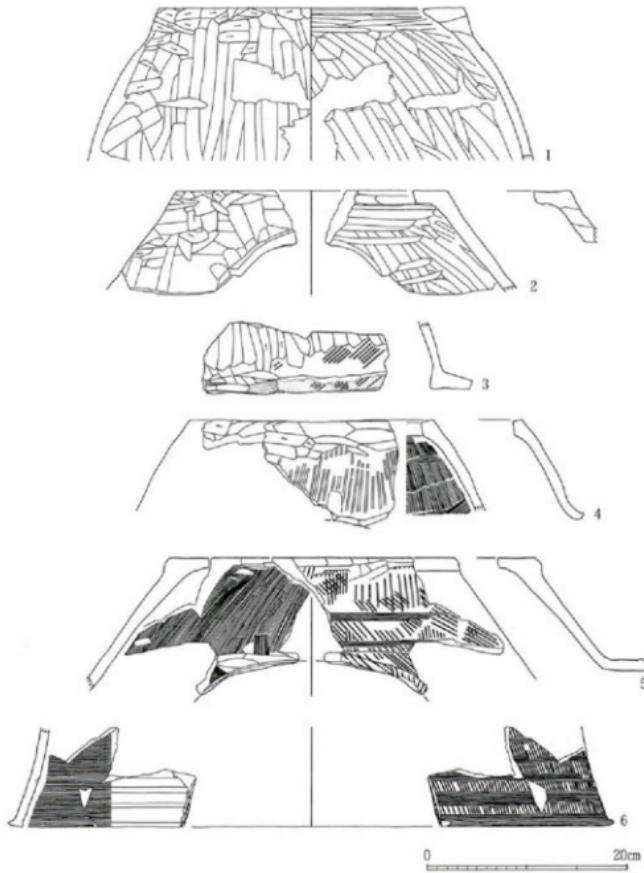
体部に粘土紐の巻き上げ痕跡をとどめるものが確認できることから、粘土紐の巻き上げ成形と考えられる。その後の調整としては、A：叩き成形、B：ヨコナデ調整、C：ヘラケズリ調整、D：ナデツケ調整などが確認できるが、BとDについてはその単位や方向など明確に把握できないものが多い。

また、Aの掛口上面には木目状の圧痕が観察される（第100図3・4）。成形時に使用した作業台、あるいは乾燥段階（作業終了、一時中断の両方の可能性がある）で置かれた台の圧痕かと考えられる。



番号	種類	遺構	特 徴	掛口率 残存率	基部径 残存率	器高	登録番号	図版番号
電形土器	第8次調査整地層	【外面】ヘラケズリ→ナデツケ（体部下半）ラケズリ 【内面】ナデ		38.7 2/24	61.3 8/24	40.2	R-131	

第134図 第8次調査出土電形土器



番号	種類	遺構	特徴	掛口径 残存率	基部径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	竈形土器	第9次調査 SD263・2層	【外面】ヘラケズリ、掛口内径：22.3cm 【内部】ナデ	30.5 13/24			R-522	
2	竈形土器	第9次調査 整地層	【外面】ヘラケズリ・工具によるナデ 【内部】ナデ、掛口内径：20.2cm	27.1 4/24			R-503	
3	竈形土器	第9次調査 SD277・2層	【外面】平行叩き→ヘラケズリ、底：貼付 【内部】ヨコナデ、底：ヘラケズリ				R-524	
4	竈形土器	第9次調査 SD287・2層	【外面】平行叩き→ヘラケズリ、底：折り曲げ成形 【内部】ヘラナデ→ヘラケズリ（掛口）	24.2 7/24			R-44	
5	竈形土器	第8次調査 整地層	【外面】平行叩き→ヨコナデ、底：折り曲げ成形 【内部】ハケメ底；工具によるナデ	28.4 3/24	—	—	R-132 a	
6	竈形土器	第8次調査 整地層	【外面】平行叩き→ヨコナデ 【内部】ヨコナデ	—	60.5 5/24		R-132 b	

第135図 第8・9次調査出土竈形土器

年代

第33図12はS D1084から、第100図2はS D935Cから出土している。また、図示していないがS D945Aからも体部破片が1点出土している。S D1084は9世紀中葉、S D935Cは9世紀中葉、S D945Aは9世紀前葉～中葉と考えていることから、竈形土製品についても同様の年代が考えられる。また、第100図3～6は934年を下限とする第III層から出土したものであり、10世紀前葉以前のものである。

参考資料として、全体の形状が判明するものは多賀城廃寺出土資料である。体部はほぼ直線的に内傾し、掛口の形状はBタイプ、基部の形状はDタイプであり、焚口は体部を切り取って形作り、底は巡っていない（多賀城市：1991）。法量は、器高25.3cm、掛口外径16.5cm、掛口内径14.5cm、基部直径35cmである。第134図は第8次調査出土資料である。体部は内湾気味に立ち上がり、掛口の形状はAタイプである。基部の形状は、やや内湾するもののDタイプである。焚口の形状は不明である。法量は、器高が61cm、掛口外径58cm、掛口内径47cm、基部直径93cmであり、多賀城廃寺出土資料と比較してかなり大型品である。第8・9次調査では竈形土器の破片が多く出土しており、比較的大きな破片が多い。器形や成形・調整についても第25次調査出土資料と同様である。

分布と性格

宮城県内では類例が少なく、現時点では多賀城廃寺、市川橋遺跡（高平遺跡を含む）、山王遺跡、伊治城跡の4遺跡において確認されている。伊治城は宮城県北部に設置された城柵であり、多賀城廃寺は多賀城付属寺院、市川橋遺跡・山王遺跡は多賀城南面に形成された町並みの一部である。年代的には8世紀末と考えられている伊治城跡出土資料が最も古く（築館町教育委員会：2001）、市川橋遺跡・山王遺跡出土資料はおおよそ9世紀代のものである。このように、竈形土器が出土した遺跡はいずれも官衙あるいはそれに関連する施設であることが注目される。また、出土している遺跡が少ないことや、その分布が官衙関連遺跡に限定されていることから、竈形土器が特殊な土器であった可能性はきわめて高いと考えられる。伊治城跡の報告では、竈形土器が一般的な煮沸に使用されたのではなく、祭祀のための特別な調理に用いられた（稲田：1978）との指摘を受け、祭祀的性格を推定している（築館町教育委員会：2001）。どのような煮沸形態と組み合って機能したのかという基本的な問題も含め、今後検討していきたい。

（4）製塙土器

製塙土器は口縁部が4点、体部が296点、底部が18点出土している。上半部のみではあるが復元図を作成できたものが1点ある（第18図8）。第18図8は口径約30cmであり、器高は7cm以上である。体部はほぼ直立気味に立ち上がっており、口縁部はそのまま丸く仕上げられている。器表の調整は明確に捉えがたいが、ヨコナデ、ナデツケなどがあり、内面にハケメ状工具の痕跡が認められるものもある（第104図1）。いずれも内外両面とも粘土紐巻き上げ痕が明瞭に観察できる。底部は良好な資料がないが、体部下端が外側にやや張出したものが多い（第18図10・12、第104図4・5）。

(5) 土 錘

B区からは、一般に魚網錘であると考えられる土錘が出土している。土錘の使用法として、釣漁や筌等を使った陷阱漁への使用を考慮する必要もあるが、ここでは球形の土錘以外は魚網錘に使用したものとして考えていきたい。

本調査区から出土した土錘の総数は49点である。このうち計量・図化できたものは34点で、管状土錘5点、有溝土錘28点、球形の土錘が1点である。欠損がひどく計量・図化できなかった残りの15点の土錘はすべて有溝土錘である。

本調査区の約400m西側には、県内で一遺跡の土錘出土数では最多の山王遺跡多賀前地区（宮城県教育委員会：1996）がある。今回の調査では魚骨が出土していないため、対象魚を想定することはできないが、周辺の立地条件からして同様の漁場で漁撈に使われていたものと考えられる。

以下、長さ、幅、重量、孔径、溝幅などのデータを参考にしながら、土錘の形状ごとに分類し述べていきたい。

形態分類

I類 中心部に孔のある土錘。

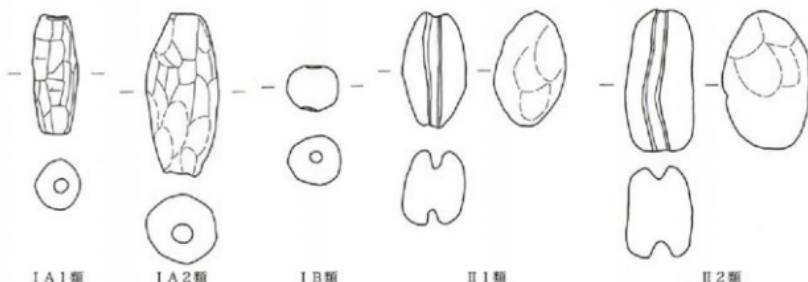
IA類：中心部に孔のある筒型の土錘で、管状土錘と呼ばれるものである。重量から二つに細分することができる。図化した5点のうち、計量できたのは4点である。

IA1類：重量10～15g、孔径4～5mm大のもので3点出土している。

IA2類：重量45g、孔径7mm大のもので1点出土している。

IB類：中心部に孔のある球形の土錘で、重量5g、孔径4mm大のものが1点出土している。

II類 両側面に溝のある土錘。有溝土錘と呼ばれるものである。本調査から最も多く出土したタイプのもので、図化した28点のうち、計量できたのは25点である。重量から2つに分類できる。計量は完形の状態を想定した。各類とも重量の最大と最小の差が10～15gであり、おおよそ10gの差でまとまりを持つものと推定している。



第136図 土錘形態分類図

II 1類：重量30～40g、溝幅3～5mm大のもので9点出土している。

II 2類：重量40～55g、溝幅4～5mm大のもので16点出土している。

成形

管状土錘は、丸い棒状の工具を芯にし、粘土を巻きつけて成形したと考えられる。工具は、孔径から直径約5mmと約7mmの2種類の存在が想定できる。表面を観察すると、指圧痕が見られるものがあることから、粘土を巻きつけた後、指でおさえて形を整え、さらに工具を使ってのナデやヘラケズリなどの調整を施したと考えられる。

球形の土錘は、管状土錘と同様に直径約4mmの丸い棒状の工具を芯にし、粘土を巻きつけて成形したと考えられる。しかし、表面が磨耗しているため、工具か指か、もしくは両方を使ったのか、又、芯を中心回転させて成形したかどうかも判別できない。

有溝土錘は、指の圧痕が顕著に見られることから、およそ長軸4.5～5.8cm、短軸2.1～2.7cm大にした粘土の塊を手捏成形したと考えられる。溝部分については、断面がほぼ半円形であることから、直径3～5mmの丸い棒状の工具を両側面に押圧して成形したと考えられる。ただし、端部には溝が及んでいないことから両側面に対しそれぞれ1回ずつの工程を行ったと推定できる。指の圧痕は、溝を切る際にいたものも含まれていると思われる。

東北地方における出土状況

B区出土土錘で特徴的なのは、II類のような有溝土錘が多量に出土している点である。県内でも、このタイプの土錘が多量に出土した報告例は今までない。

上述したように、県内で土錘が最も多くまとめて出土した山王遺跡多賀前地区でも、短軸に溝を切っている有溝土錘は7点図化し報告されているが、II類のような長軸に溝を切っている土錘は1点出土しているのみである。この他多賀城市内では、多賀城跡作賈地区（宮城県多賀城跡調査研究所：1981）と山王遺跡千刈田地区（多賀城市教育委員会：1991）から1点づつ出土しているが、県内の他の地域では出土していない。つまりII類の土錘は県内で3点しか出土していないことになる。その他東北地方では秋田城跡から出土した2点の資料が知られている程度である（秋田市教育委員会：1976・1990）。

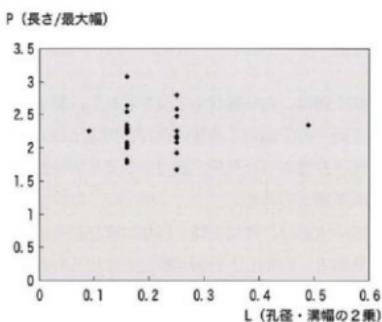
一方、瀬戸内地方では、II類のような有溝土錘が古代の遺跡から多量に出土しており、平安時代に急速に普及していくと考えられている。このような有溝土錘は2本の沈子綱を平行に装着できるため、綱の抗張力が強い上に左右反対方向のよりかかった綱を使うと、綱のねじれを相殺し綱の形状を維持する事が容易である。以上のことを踏まえて、水産学的なデーターや民俗資料との比較から、平安時代には綱漁において操業人数が増加し、主流となる漁法が刺網から曳網に転換していったのではないかと考察されている（真鍋篤行1993）。B区出土土錘は瀬戸内地方と比べて個体数が少なく同様の結果が出るとは言えないが、データーから比較考察をしてみたい。

$T = K D^2$ (Kは比例定数) [T:綱の強度である抗張力、D:綱の直径]は水産学的に操業人数を割り出す式とされている（註）。このDを土錘の溝幅に置き換れば、土錘の孔径の2乗は沈子綱の抗張力に比例する。便宜上この値をL、土錘の長さを最大幅で除した値をPとする。B区出土のI A・II類の計量できた土錘をもとに、P値とL値の関係についてグラフにあらわすと第137図のようになる。この図から有溝土錘は $1.5 < P < 3.0$ で $L \leq 0.16$ 、 $L = 0.25$ の大きさく2つのグループに分類できる。

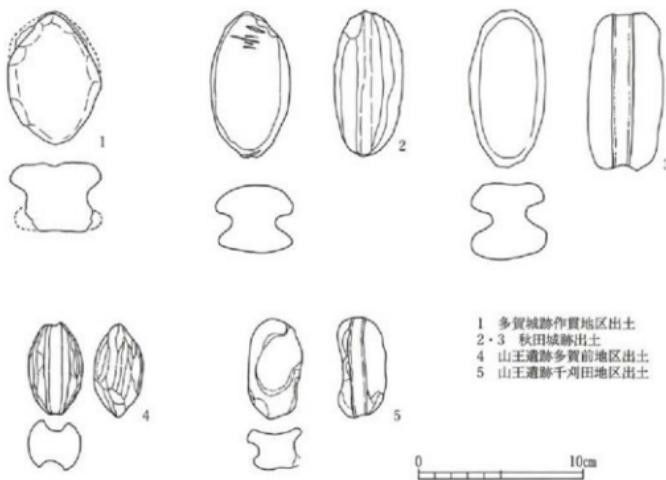
瀬戸内地方では、 $0 < L \leq 0.25$ が刺網、 $0.25 < L$ が底曳網・地曳網といった曳網に使用したと考えられ

ている（真鍋：1994）。この事例をあてはめるなら、B区出土の有溝土錐は刺網に使用されていたと思われる。しかし、L値で大きく2つのグループに分けられることから、少なくとも2種類の網を使用していたことが推定できる。市川橋遺跡においてL値の0.25を基準にしたグループわけがふさわしいかは、今後検討の余地がある。

一概には言えないが、II類のような有溝土錐が古代において瀬戸内地方特有の漁具とすれば、近隣地域であまり出土例がないことから、B区周辺でそのような技術を持った人々と何らかの関わりがあったのではないかと考えられる。



第137図 土錐P・L値統計



第138図 東北地方出土の有溝土錐

(註) 真鍋（1994）では以下の文献を参照している。

本多勝司『漁具材料』新水産全集20 恒星社厚生閣 1981

宮本秀明『漁具漁法学（網漁具編）』金原出版株式会社 1956

(6) 土器片製円板

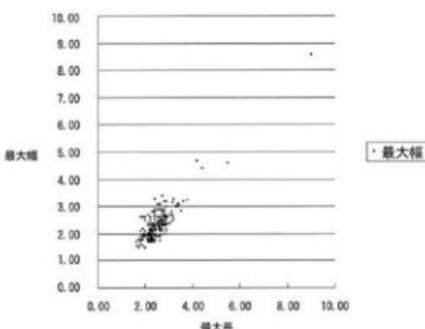
土器片製円板は須恵器、土師器の壺の体部などの破片を素材として打ち欠きながら円形に成形したものである。宮城県外では草戸千軒町遺跡など中世以降の遺物としては広く認識されており、用途については冥銭説、呪術・信仰説、玩具・遊戯具説、めんこ説、搔き立て説など様々な考察がなされている（小田原：1985、下津間：1993・1994、兼康：1988）。宮城県内でも土器片製円板の出土例についての報告や分類がなされているが、県内の土器片製円板の分布範囲や出土総数は把握出来ておらず用途や製作技法などに不明な点が多い。そこで今回は土器片製円板の用途や性格を市川橋遺跡B地点から出土した土器片製円板を中心的に周辺の遺跡からの出土資料を含めて検討してみたい。

多賀城市教育委員会の発掘調査で出土している土器片製円板の総数は現在把握しているもので869点あり、遺跡別では市川橋遺跡が462点、山王遺跡249点、高崎遺跡78点、留ヶ谷遺跡51点、新田遺跡14点、西沢遺跡14点、八幡沖遺跡1点となる（第142図）。この分布から土器片製円板は多賀城市内の古代の遺跡から一般的に出土する遺物と言え、特に市川橋遺跡では第25次調査区などの南北・東西大路交差点より北東ブロック周辺に全体の424点（48.8%）が集中する。

今回は市川橋遺跡第25次調査B区の発掘調査で出土した土器片製円板249点を分類対象資料とし、観察項目を①最大長②最大幅③最大厚④重量⑤素材⑥器種⑦摩耗の度合いと設定した。⑦の摩耗の度合いについては肉眼および15倍のルーペによる観察を行い、稜線の切り合ひの観察が困難なものを（強）、稜線は観察出来るが剥離面の観察が困難なものを（中）、研磨・摩耗をうけるが稜線および剥離面の観察が可能なものを（弱）とした。しかし摩耗の度合いの観察には主観的要素が多く含まれるため正確な分類とは言い難いが、土器片製円板の性格を知る上で重要な要素として捉えることが可能であると判断し採用した。また軟質の土師器については人為的な摩耗・研磨なのか風化などの自然的な要因の摩耗なのか判断が付かないものは大きい範疇での（摩耗）とした。実測図は最も多く出土した51区の102点のみ示した（第143～147図）。その結果土器片製円板は最大長の平均で2.51（1.6～9.0）cm、最大幅の平均が2.37（1.5～8.61）cm、厚さの平均で1.0（0.4～2.2）cm、重量の平均で7.25（1.8～87.2）gとなった。摩耗度では全体の84%に

	全体	壺	瓶	
須恵器	194 (78%)	17 (85%)	4 (15%)	20
土師器	52 (21%)	30 (56%)	22 (85%)	
瓦	1			
製塙土器	2			
小計		200 (80.3%)	26 (10.4%)	20 (8%)
合計	249			

表11 土器片製円板素材組成表

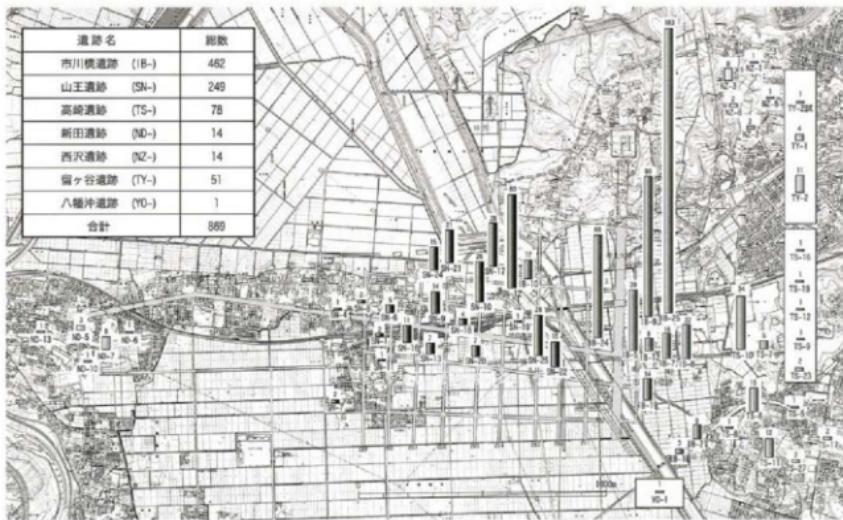


第139図 土器片製円板法量分布図

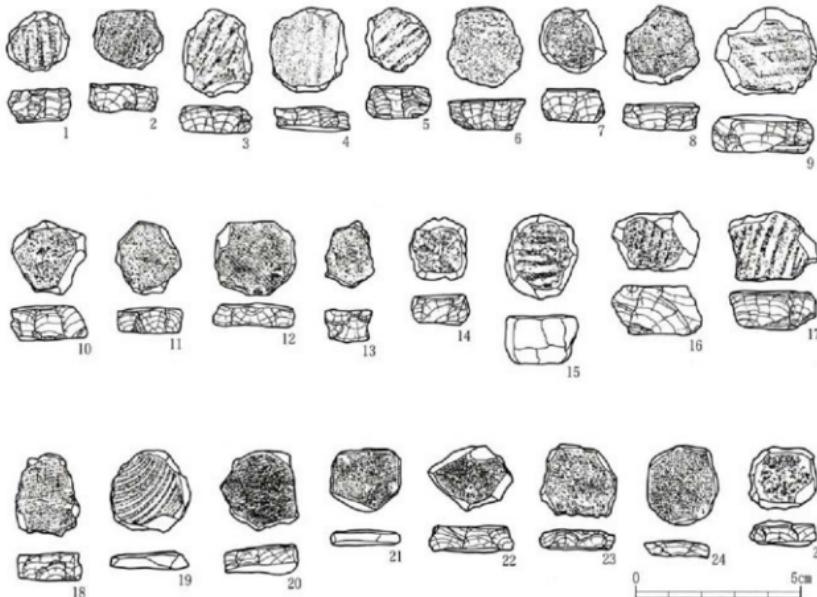
あたる209点に何らかの摩耗が観察され、硬質の須恵器や瓦の全周に（強）の摩耗を受けるものが24点（9.6%）観察された。素材に関しては須恵器片が194（78%）点となり、打ち欠きや磨耗で不明な物もあるが甕170点、瓶20点、杯4点となった。須恵器片製円板（註）に関しては全体の68.3%と甕の体部破片を多用している。土師器片製円板は52点出土しており、甕が30点、杯22点となる。その他に製塙土器片製円板が2点、瓦片製円板が1点出土している（第141図・表11）。このグラフから土器片製円板の長さや幅の平均値が2.5cm前後に集中することが認められ、素材別の平均値もほぼ2.5cm前後に集中する。山王遺跡多賀前地区（宮城県教育委員会：1996）ではa類（直径2～3cmの小型のもの）、b類（赤焼土器の高台杯の底部の径を利用した大型のもの）の2類に分類されておりこれに基づけば市川橋遺跡B地区では総てa類に分類される。ただし今回観察した小型の土器片製円板が多賀城政庁（宮城県多賀城跡調査研究所：1982）などで出土している大型の土器片製円板と同じ機能や性格をもつものかは今後十分な検討が必要である。

土器片製円板の製作については山王遺跡多賀前地区考察編（宮城県教育委員会：1996）で両極剥離技法の存在が指摘されており、今回の土器片製円板の観察からも剥離面の両端にバルブを有するものや縁辺に微細な剥離痕を持つなどの両極剥離の痕跡が観察された。また土器片製円板の大きさから直接打撃では土器片製円板の保持に無理が生じるため両極剥離技法を用いていることが推察される。現状では両極剥離の際に使用されるハンマーと台の種類については不明であるが、叩き石と台石の組み合わせが想定されよう。

今回観察した249点の土器片製円板の長さや幅の平均値が2.5cm前後に集中することが土器片製円板の機能や性格に因る規制を受けるようにも考えられる。また成形後焼成を受けているものは皆無であることから、甕などの破片を素材とした二次的な性格を持つ転用品という位置付けは出来るであろう。今回は土器

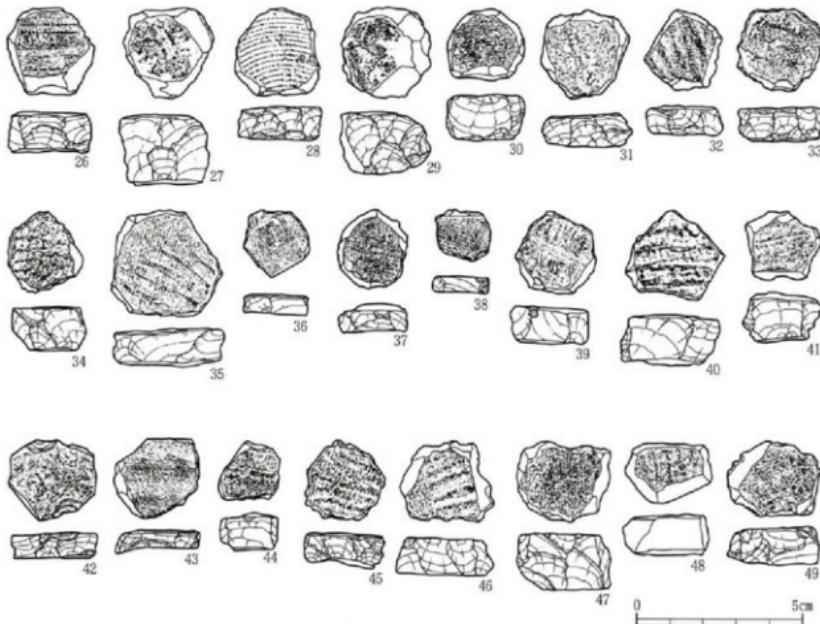


第140図 土器片製円板の出土地点



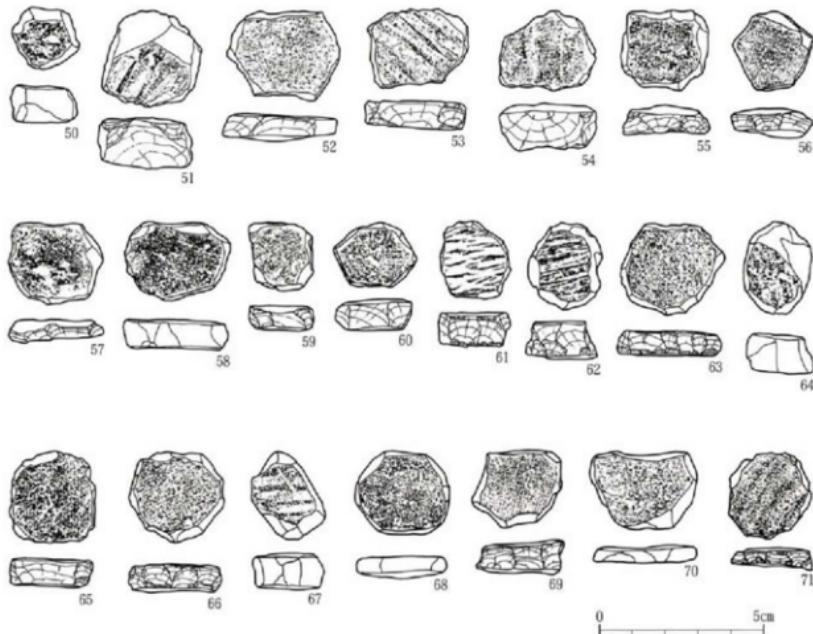
No.	調査区	層位	長さ	幅	厚	重量	素材	磨耗の度合	図版番号	登録番号
1	B51区	D15-4	1.80	1.90	1.00	4.10	須恵器	窓 全周(弱)	図版19-1	R1456
2	B51区	D15-4	1.80	2.10	0.90	4.10	須恵器	窓 なし	図版19-1	R1457
3	B51区	D1-K面	2.60	2.10	0.80	5.30	須恵器	窓 一部(弱)		R1458
4	B51区	P12-柱麻	2.60	2.30	0.70	4.90	須恵器	窓 一部(弱)	図版19-1	R1459
5	B51区	D2-1	1.90	2.00	1.10	3.80	須恵器	窓 全周(強)	図版19-1	R1460
6	B51区	D15-3	2.40	2.30	1.00	5.80	須恵器	窓 一部(弱)	図版19-1	R1461
7	B51区	D15-1	1.95	2.00	1.10	4.40	須恵器	窓 全周(弱)	図版19-1	R1462
8	B51区	D15-3	2.40	2.30	0.90	4.80	須恵器	窓 一部(弱)		R1463
9	B51区	D15-3	2.60	3.10	1.10	10.50	須恵器	窓 全周(強)		R1464
10	B51区	D15-4	2.20	2.20	1.10	5.20	須恵器	窓 一部(弱)		R1465
11	B51区	D15-2	2.20	2.00	0.90	3.80	須恵器	窓 一部(弱)	図版19-1	R1466
12	B51区	D2-1	2.20	2.50	0.70	3.70	須恵器	窓 一部(弱)	図版19-1	R1467
13	B51区	D15-3	2.00	1.50	1.00	3.20	須恵器	窓 なし		R1468
14	B51区	D15-1	1.90	1.90	0.90	3.50	須恵器	窓 なし		R1469
15	B51区	D15-1	2.55	2.20	1.50	9.40	須恵器	窓 全周(強)	図版19-1	R1470
16	B51区	D15-1	1.80	2.60	1.50	7.10	須恵器	窓 一部(弱)		R1471
17	B51区	D15-1	2.10	2.70	1.20	7.80	須恵器	窓 一部(弱)		R1472
18	B51区	D15-1	2.50	1.90	0.80	4.70	須恵器	窓 一部(弱)		R1473
19	B51区	D-1	2.40	2.60	0.50	2.90	土師器	窓 全周(強)	図版19-1	R1474
20	B51区	D15-2	2.50	2.30	0.90	4.50	土師器	窓 全周(中)		R1475
21	B51区	D15-4	1.90	2.20	0.40	1.90	土師器	窓 全周(中)		R1476
22	B51区	D15-4	2.00	2.60	0.80	3.50	土師器	窓 全周(中)		R1477
23	B51区	D15-2	2.20	2.30	0.60	3.00	土師器	窓 全周(中)		R1478
24	B51区	D15-4	2.40	2.10	0.50	2.60	土師器	窓 全周(中)	図版19-1	R1479
25	B51区	D15-2	2.00	2.10	0.70	2.70	土師器	窓 全周(強)		R1480

第141図 B51区出土土器片製円板(1)



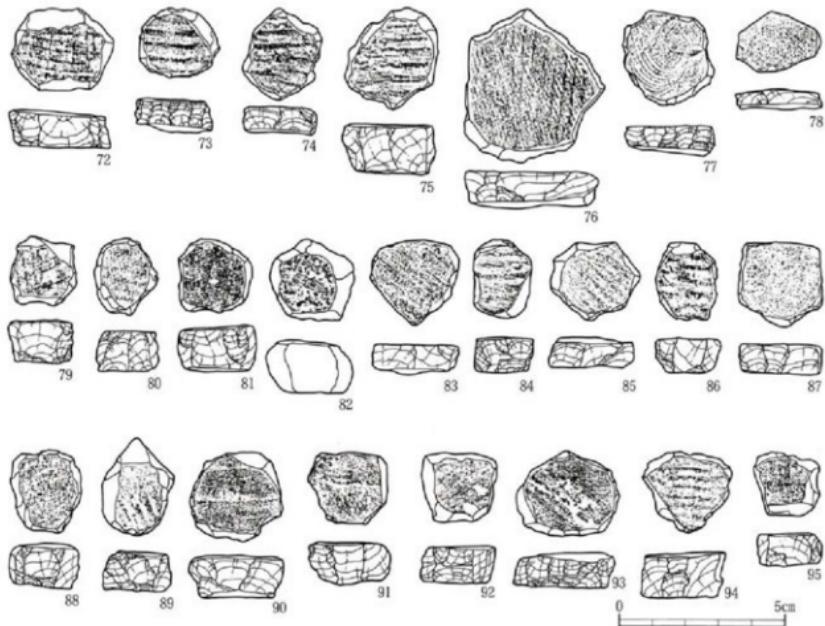
No.	調査区	層位	長さ	幅	厚	重量	素材	磨耗の度合い	図版番号	登録番号
26	B51区	検出面	2.60	2.60	1.20	9.40	須恵器	塵	一部(弱)	R1481
27	B51区	検出面	2.80	2.70	2.20	17.80	須恵器	塵	全周(中)	R1482
28	B51区	検出面	2.60	2.50	1.10	8.00	須恵器	瓶	一部(弱)	図版19-1 R1483
29	B51区	検出面	2.70	2.70	1.90	14.20	須恵器	塵	全周(中)	図版19-1 R1484
30	B51区	検出面	2.20	2.40	1.40	9.30	須恵器	塵	全周(中)	図版19-1 R1485
31	B51区	検出面	2.70	2.70	1.10	7.10	須恵器	塵	一部(中)	図版19-1 R1486
32	B51区	検出面	2.40	2.40	0.90	5.80	須恵器	塵	全周(中)	R1487
33	B51区	検出面	2.50	2.60	1.00	7.20	須恵器	塵	全周(中)	図版19-1 R1488
34	B51区	検出面	2.40	2.30	1.40	7.70	須恵器	塵	一部(弱)	図版19-1 R1489
35	B51区	検出面	3.20	3.30	1.10	13.20	須恵器	塵	一部(弱)	図版19-1 R1490
36	B51区	検出面	2.00	2.00	0.60	3.30	須恵器	塵	一部(弱)	R1491
37	B51区	検出面	2.20	2.10	0.90	4.20	須恵器	瓶	一部(中)	R1492
38	B51区	検出面	1.60	1.70	0.50	1.80	須恵器	塵	なし	R1493
39	B51区	検出面	2.40	2.40	1.10	7.70	須恵器	瓶	一部(弱)	図版19-1 R1494
40	B51区	検出面	2.70	2.90	1.50	10.70	須恵器	塵	なし	R1495
41	B51区	検出面	2.10	2.30	1.50	6.90	須恵器	塵	なし	R1496
42	B51区	検出面	2.50	2.60	0.70	4.90	須恵器	瓶	なし	R1497
43	B51区	検出面	2.40	2.50	0.70	4.40	須恵器	瓶	一部(中)	R1498
44	B51区	検出面	1.70	1.80	1.10	3.30	須恵器	瓶	一部(中)	R1499
45	B51区	検出面	2.40	2.40	1.00	5.70	須恵器	塵	なし	図版19-1 R1500
46	B51区	検出面	2.50	2.90	1.10	8.40	須恵器	塵	なし	R1501
47	B51区	検出面	2.40	2.80	1.71	12.00	須恵器	塵	一部(弱)	R1502
48	B51区	検出面	1.80	2.60	1.20	6.90	須恵器	塵	全周(中)	R1503
49	B51区	検出面	2.30	2.80	1.10	7.30	須恵器	塵	一部(弱)	R1504

第142図 B51区出土土器片製円板(2)



No.	調査区	層位	長さ	幅	厚	重量	素材	磨耗の度合	図版番号	登録番号
50	B51区	検出面	1.90	2.00	3.90	1.20	須恵器	焼 全周(中)	図版19-1	R1505
51	B51区	検出面	2.90	3.00	1.40	11.10	須恵器	焼 全周(中)	図版19-1	R1506
52	B51区	検出面	2.70	3.40	0.80	7.30	須恵器	焼 一部(強)	図版19-1	R1507
53	B51区	検出面	2.50	3.10	0.90	7.80	須恵器	焼 一部(弱)	図版19-1	R1508
54	B51区	検出面	2.40	2.90	1.30	10.20	土師器	焼 全周(中)	図版19-1	R1509
55	B51区	検出面	2.40	2.60	0.80	4.70	土師器	燒 全周(中)	図版19-1	R1510
56	B51区	検出面	2.40	2.50	0.60	3.70	土師器	焼 全周(中)	図版19-1	R1511
57	B51区	検出面	2.50	2.90	0.70	4.00	土師器	焼 全周(中)	図版19-1	R1512
58	B51区	検出面	2.40	3.30	0.90	6.70	土師器	焼 全周(中)	図版19-1	R1514
59	B51区	検出面	2.00	2.00	0.70	3.30	土師器	焼 全周(中)	図版19-1	R1513
60	B51区	検出面	2.00	2.50	0.90	4.20	土師器	焼 全周(中)	図版19-1	R1515
61	B51区	第Ⅰ層	2.40	2.20	1.10	7.20	須恵器	燒 なし	図版19-1	R1516
62	B51区	第Ⅰ層	2.60	2.20	1.20	8.30	須恵器	焼 一部(中)	図版19-1	R1517
63	B51区	第Ⅰ層	2.90	3.20	0.80	8.80	須恵器	焼 全周(弱)	図版19-1	R1518
64	B51区	第Ⅰ層	2.90	2.10	1.20	7.80	須恵器	焼 全周(強)	図版19-1	R1519
65	B51区	第Ⅰ層	2.80	2.60	0.80	9.20	須恵器	焼 全周(弱)	図版19-1	R1520
66	B51区	第Ⅰ層	2.80	2.90	0.90	8.60	須恵器	焼 全周(弱)	図版19-1	R1521
67	B51区	第Ⅰ層	2.70	2.30	1.20	4.90	須恵器	焼 全周(中)	図版19-1	R1522
68	B51区	第Ⅰ層	2.60	2.90	0.70	5.00	土師器	焼 全周(強)	図版19-1	R1523
69	B51区	黒色土	2.40	2.70	1.00	6.10	土師器	焼 全周(弱)	図版19-1	R1524
70	B51区	黒色土	2.40	3.30	0.70	4.40	土師器	焼 全周(中)	図版19-1	R1525
71	B51区	黒色土	2.60	2.50	0.60	4.30	須恵器	焼 一部(弱)	図版19-1	R1526

第143図 B51区出土土器片製円板(3)

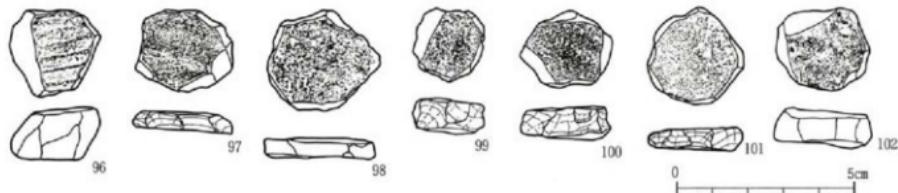


No.	調査区	部位	長さ	幅	厚	重量	素材	磨耗の度合	図版番号	登録番号	
72	B51区	黒色土	2.50	3.10	1.10	9.80	須恵器	斐	図版19-1	R1527	
73	B51区	黒色土	2.10	2.40	1.00	5.60	須恵器	斐	図版19-1	R1528	
74	B51区	黒色土	2.80	2.40	0.80	6.50	須恵器	斐	一部(弱)	R1529	
75	B51区	黒色土	3.10	2.80	1.50	13.10	須恵器	斐	一部(中)	R1530	
76	B51区	黒色土	4.20	4.70	1.10	22.10	須恵器	斐	全周(中)	R1531	
77	B51区	黒色土	2.90	2.70	0.90	7.10	須恵器	杯	一部(弱)	R1532	
78	B51区	黒色土	1.90	2.60	0.60	3.00	須恵器	瓶	なし	R1533	
79	B51区	S B1010	2.10	2.00	1.20	6.10	須恵器	斐	一部(弱)	R1534	
80	B51区	P46-1	2.30	1.90	1.30	6.70	須恵器	斐	全周(弱)	R1535	
81	B51区	S B1010	2.20	2.20	1.40	8.90	須恵器	斐	一部(中)	R1536	
82	B51区	S B1010	2.50	2.60	1.60	11.70	須恵器	斐	全周(強)	R1537	
83	B51区	P65	2.60	2.60	0.90	6.70	須恵器	瓶	全周(中)	R1538	
84	B51区	P48-1	2.40	1.80	1.10	5.90	須恵器	斐	一部(弱)	R1539	
85	B51区	S B1010	2.40	2.70	0.90	7.00	須恵器	斐	全周(中)	R1540	
86	B51区	S B1010	2.30	1.80	1.10	5.30	須恵器	斐	一部(弱)	R1541	
87	B51区	S B1010	2.60	2.50	0.90	8.70	須恵器	斐	なし	R1542	
88	B51区	S B1010	2.40	2.20	1.30	7.40	須恵器	斐	全周(中)	R1543	
89	B51区	S B1010	2.90	2.20	1.20	7.60	須恵器	斐	全周(中)	R1544	
90	B51区	S B1010	2.70	2.70	1.30	10.20	須恵器	斐	一部(弱)	図版19-1	R1545
91	B51区	S B1010	2.30	2.40	1.30	6.40	須恵器	瓶	一部(中)	R1546	
92	B51区	S B1010	2.10	2.30	1.20	9.80	須恵器	斐	一部(中)	R1547	
93	B51区	S B1010	2.50	3.10	1.00	9.50	須恵器	斐	全周(弱)	図版19-1	R1548
94	B51区	S B1010	2.40	2.60	1.40	7.60	須恵器	斐	なし	R1549	
95	B51区	S B1010	2.00	2.00	0.90	4.60	須恵器	斐	一部(弱)	R1550	

第144図 B51区出土土器片製円板(4)

片製円板の用途・機能としての祭祀・信仰説、玩具・遊戯具説等の各説を検証するに至らなかったが今後の調査や製作実験、使用痕観察等を視野に入れ土器片製円板の機能や性格を明らかにしていきたい。

(注) 素材別の属性分類のため仮称した。以下、「土器器片製円板」「製塙土器片製円板」「瓦片製円板」についても同じ。



No.	調査	層位	長さ	幅	厚	重量	素材	磨耗の度合い	図版番号	登録番号
96	B51区	S B1010	2.50	2.60	1.50	9.80	須恵器	発	R1551	
97	B51区	S B1010	2.30	2.30	0.50	3.30	土師器	発	R1552	
98	B51区	S B1010	2.80	3.20	0.60	4.90	土師器	発	R1553	
99	B51区	P46-1	2.00	2.00	1.00	3.70	土師器	発	R1554	
100	B51区	S B1010	2.20	2.60	1.00	4.80	土師器	杯	R1555	
101	B51区	S B1010	2.70	2.80	0.50	4.60	土師器	杯	R1556	
102	B51区	S B1010	2.40	2.60	1.00	6.00	土師器	杯	R1557	

第145図 B51区出土土器片製円板(5)

(7) 木製品

溝跡、井戸跡などから、容器24点（曲物15、挽物9）、祭祀具4点（馬形3、刀子形1）、農具1点（田下駄1）、服飾具1点（櫛1）、不明品が出土した。以下、種類ごとに記述する。

容器

曲物

側板を有していたと思われる円形板も曲物として扱った。このうち、周縁に段を有し、桿皮により側板と結合させたものを蓋板、無段で木釘により側板と結合させたものを底板とした。蓋板6点、底板9点を発見した。樹種はヒノキ科アスナロ属8点、スギ6点、マツ科モミ属1点である。

挽物

すべて白木作りの皿である。うち高台付のもの（第60図1）が1点、外面底部に「宅」と墨書きされたもの（図版20-5）が1点ある。樹種はすべてケヤキである。

祭祀具

馬形3点（第111図1～3）、刀子形1点（第177図5）を発見した。馬形はいずれも鞍を削り出した飾り馬を表現しているものである。墨痕がみえるものも1点ある。刀子形は破片であるため全体形は不明だが、先端から片側側面にかけて削られており、刃を表現していると考えられる。樹種はすべてヒノキ科アスナロ属である。

農具

田下駄の足板（第111図4）を1点発見した。長方形の板に枠木を固定するための紐孔が板の両端に2つずつ、親指を挟むための紐孔が3つ開けられている。樹種はマツ科モミ属である。

服飾具

櫛1点を発見した。破片であるため全体形は不明だが、背の部分が直線的に延び、肩に丸みをもつ形状である。樹種はミズメである。

(8) 金属製品

銅製品2点、鉄製品3点を発見した。銅製品には海獣葡萄鏡・釣針、鉄製品には轡・鉄斧・鉄鉗などがある。全体に鋶化が著しい。すべてX線写真撮影を行っている。以下種類ごとに記述する。

海獣葡萄鏡（第105図）

外区から外縁にかけての破片であり鋶化が著しいが、外区には葡萄唐草文、外縁には葉文が観察できる。径は推定14.0cmであり、中型海獣葡萄鏡に属するものである。なお、本資料は蛍光X線分析を行っており、鉛の含有量が銅に比して多いという結果が出ている。

釣針（第158図8）

無鐵のものを1点発見した。高さ1.7cm、幅0.7cm、直径1mmである。

轡（第166図6）

1点出土している。大きさ及び環がつくられていることから、引手あるいは衡の一部と思われる。

鉄鉗（第158図7）

鉄鉗の一部とみられるものを1点発見した。鉗止めの痕跡が確認できる。

鉄斧（第158図6）

完形の袋状鉄斧が1点出土した。袋部の断面は長方形である。

(9) 石製品

石製品は25点出土しているが、そのうち石匙、扁平片刃石斧、石帶、紡錘車、砥石の12点のみ図示した。石匙（第181図1）は珪質頁岩の綫長の剥片を素材とし、刃部・基部（つまみ）を押圧剥離で調整している。背面の側縁部に一部自然面が残り、先端・側縁部に使用の際に生じたと思われる微細剥離痕を有する。

扁平片刃石斧（第182図2）は全周縁を入念に磨くが一部剥離痕を残す。刃部に有段を呈することから刃部を再生した可能性がある。石材は堆積岩の一種（緑泥岩？）と思われる。

紡錘車は2点出土した（第181図3・4）。一つは砂岩製で中央部に断面V字状の痕跡が認められる。穿孔が貫通しておらず穿孔作業中の破損品と考えられる。穿孔径0.5cm～1.4cm。図5は凝灰岩製で平面形はやや不整形で穿孔は両側から行われており、孔中央部で若干そばまる。穿孔径は0.5cm～1.1cmである。

砥石は20点中粘板岩、砂岩、凝灰岩（細粒）の3種類7点を図示した。第181図5は砂岩製である。第181図6は6面中4面に擦痕、被熱の変色、焼けはじけを観察することができる。第181図8は研磨面は3面で破損後廃棄されたものと思われる。第181図12は粘板岩素材で、いずれも周縁に剥離による整形が見られる。第181図11は砥石の長軸に対して直行する線状痕が認められる。研磨面は4面で木口面にも線状痕が観察される。第181図6～8は凝灰岩（細粒）製の砥石である。第181図9は小形の携帯用の砥石と思われる。6面中5面に擦痕が見られる。第181図7は長軸に対して直行するU字状の窪みを有する。研磨面は3

面で側面に欠損後の研磨痕が一部見られる。第181図8は長軸に対して線状痕が斜行する面や直行する面など研磨面によって研磨方向が若干変る。研磨面は概ね中央部付近で細くくびれ、木口面にも断面V字状の痕跡を有する。

⑩ 埋堀・鉄滓

埋堀が1点、鉄滓が1点出土している。

埋堀

S D935Cから出土した(第65図4)。口縁部の破片であり、溶解物が付着している。分析を行っていないため、具体的な対象は不明である。

鉄滓

① 漆紙・漆付着土器・漆書土器

漆紙付着土器が1点、漆付着土器が10点、漆書土器が1点出土している。

漆紙付着土器

I4(W)区から出土した(第99図12)。出土地点については不明である。須恵器杯の内面底部に漆紙が付着しており、その周囲には漆が付着している。漆紙は平面形がおおよそ円形を呈し、表面は凹凸がある。現存する規模は直径6.5cmである。赤外線テレビカメラを使用したが文字は確認できなかった。

漆付着土器

土師器杯、須恵器杯、須恵器壺がある。

須恵器壺は体部の破片であるが敢えて復元して図示した(第98図11)。ロクロ調整を行い、外面体部下半には回転ヘラケズリを施したものである。内面全体に漆が厚く付着しており、容器として使用されたと推定される。

漆書土器

杯の体部に「十」と筆書きしたものである(第55図7)。

② 文字資料

文字資料としては木簡が2点、削屑が3点、墨書土器が48点出土している。

木簡

I4(W)区のS E948から第6号木簡、S D945Aから第7号木簡が出土している。いずれも付札である。材質は、第6号木簡がマツ科モミ属、第7号木簡は不明である。第6号木簡については「附章3 多賀城市市川

		製塗 土器	竈形 土器	炉壁	竈材	埋堀	鉄滓
13T(S)	S D1055	1					
	S D1084		1				
	S D1093	1					
	小柱穴	1	1				
	第I層	2					
	第III層	1	1				
13T(N)	第I層	6					
	第VI層	5					
14T(W)	S E948		1				
	S D935C	7					1
	S D935B		1				
	S D935A	22	3		7		
	S D943	3					
	S D945B				2		
	S D945A		3	1			
	S D953	1					
	S K934	15		2	1		
	S K936	1					
	S K938				1		
	小柱穴	4					
	焼土層		2				
	セイチ層	2	2		1		
15T	第I層						1
	S D1074	3					
	S D1076	3	1				
49T	S D1058	8					
	S D945	7					
	S D1052	1					
	S D1004	1					
	S D1059	2					
	S D1002	11					
	S K1102	3					
	S K1077	1					
	小柱穴	1					
	第I層	51	2				
	第II層	12					
64T	S D1065	3	5				
	S D1066	8					
	小柱穴	24					
	第I層	26	4				
	第II層	1					

表12 製塗土器、竈形土器、炉壁、竈材、埋堀、鉄滓集計表

橋遺跡（第24・25次）出土木簡」において詳細を報告している。

削屑

15区のS D1050から3点出土した。その内の1点に墨痕が確認できるが判読不明である。

墨書き土器・刻書き土器

「附章2 市川橋遺跡高平地区出土の文字資料」において詳細を報告している。

3 遺構の変遷

(I) 第24・25次調査発見遺構の年代的整理

前項では第25次調査で発見した遺構の年代について、出土遺物の分析を中心に検討し、8世紀末から10世紀中葉以降に及んでいることを明らかにした。年代的には9世紀前葉から中葉頃のものが最も多く、それより古い8世紀末から9世紀前葉にかけてのものと、新しい9世紀後葉以降のものに大別される。それらを古い順に仮にa期、b期、c期とし、各時期の遺構を示すと次のとおりである。

a期（8世紀末から9世紀前葉）：S E948、S D949・1050、S X1205

b期（9世紀前葉から中葉）：S D945A・B、S D943、S D935A～D
S B1000・S D1002・1004

c期（9世紀後葉以降）：S D1019・1025、S D1065、S X1263

また、第24次調査発見遺構の中で、S B1000に伴う雨落ち溝（S D1001・1003）とS B1000と一連の建物であるS B1010、雨落ち溝（S D1011・1012・1013・1014）はすべてb期である。また、S X990はS D943・935と共存する区画施設と理解しているものであり、S D1055はS D945Aと連結する溝跡と推定している。したがって、これらはの遺構はいずれもb期と考えることができる。

次に、第24次調査発見遺構の中でa～c期との関係を推定できるものがある。重複関係があるものを抽出すると次のとおりである。

① S A977→S D987→S D949（a期）

② S D1156→S B1010（b期）

③ S D1155→S B1010（b期）

④ S I1009→S D1001（b期）

⑤ S B1010（b期）→S D1015

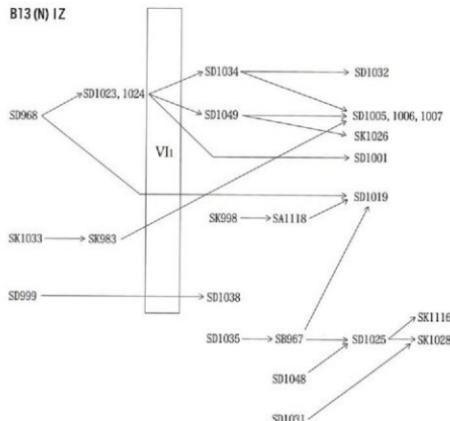
また、第25次調査発見遺構の中で、出土遺物がないため年代を明らかにできなかつたが、第24次調査発見遺構と重複関係を確認できたものに以下のものがある。

⑥ S D968→S D1055（b期）

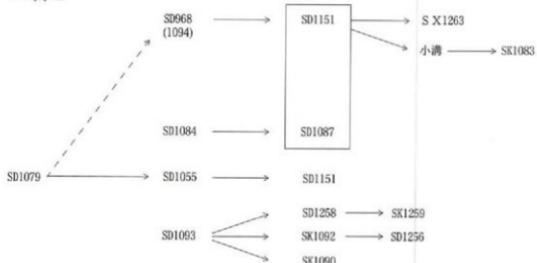
⑦ S D1060→S D1001（b期）

①～⑦の中で、⑤はS D1015から須恵系土器が出土していることからc期に相当するとみて問題ない。②～④⑥⑦については、年代決定資料が出土したS D945・935及びS B1000などの大型建物がb期の主要な構成要素を見るならば、それより古いS D930・1156、S D1155、S I1009、S D968、S D1060はa期と考えられる。S A977、S D987についても、b期より古い一群という意味でa期に含めて考えられよう。このように、第24・25次調査発見遺構はa・b・cの3期に大別され、おおよそ3段階の変遷を経ていることが想定される。以下、それらをそれぞれA・B・C期とし、各時期ごとの様相をみていきたい。

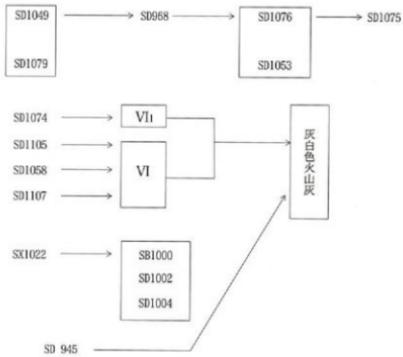
B13(N) IZ



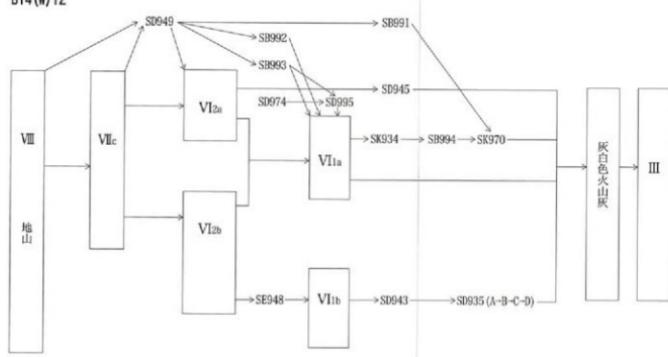
B13(S) IZ



B49区



B14(W) IZ



(2) A期の様相

A期の遺構としてはS E948、S D949・1050、S X1205、S D1156、S D1155、S I 1009、S A977、S D987、S D968、S D1060などがある。

S D1060、S D968、S D930・1156は広い範囲にわたる溝跡である。S D1156は東西約70mに亘って延びており、A区でおおよそ直角に折れ曲がって更に南側に延びている(S D930)。S D1060は南北約80m、S D968は南北約115mに亘って一直線に延びている。S D968は北端部で東側に屈曲している。これらの溝跡には主軸方位に相違が見られ、S D1156・930はおおよそ発掘基準線(真北方向)と一致しているのに対し、S D968・1060は北で約2度東に偏し、政府中軸線の方位に近い。新旧関係は不明であるが、後者の方位はB期のS B1000・1010などに共通することから、後者の方が新しい可能性がある。S D1050は最も東側で発見した南北溝であり、この時期の遺構が湿地に近い地点まで及んでいることを示している。直線的ではないが、北で5度前後東に偏していると見られる。S I 1008・1009は近接した位置で発見した。S I 1009はS D1060より古く、B区で最も古い遺構の可能性がある。S E948は素掘りの井戸である。周辺の各調査地点では井戸側を備えたものがほとんどであり、素掘りの井戸はきわめて少ない。同時期の遺構は第7・9次調査区においても確認している(多賀城市教育委員会:1990)。第7次調査では多量の一括土器が出土したS K236やS D204があり、S D204は位置的に見てS D1050と一連の溝跡とみられる。これらの性格については明確にしがたいが、S D930・1156は東西70m以上の範囲を囲む区画溝の可能性があり、S E948は周辺に生活空間の存在を推測させるものである。

出土遺物としては、S E948から春米に関わる付札木簡が出土しており、S E948周辺に物資保管のための施設或は消費の場が存在した可能性がある。S D1050からも木簡の削屑が出土していることも考え合わせると、未調査地区に関連施設が存在した可能性が考えられよう。また、この時期には供膳形態の大半が須恵器で占められるという状況が見られ、一般集落とは異なった様相を呈している。第7次調査S K236・整地層と第9次調査区S D283からは、長岡京期かそれより新しいとされる須恵器長頸瓶(平城宮分類「壺G」)が出土しており、東北地方においては他に伊治城跡と払田柵跡などいずれも城柵官衙遺跡から出土していることが注目される(宮城県多賀城跡調査研究所:1993)。このような出土遺物の様相は、この地区が官衙の様相を帯びていることを示唆するものと言えよう。さらに、S D1050から馬形、第7次調査区S K236から絵馬など律令的祭祀遺物が出土していることも、この地区的性格を考える上で重要であろう。

現時点では8世紀末頃を巡る遺構・遺物は確認できることから、この地区が積極的に使用され、機能した時期は8世紀末以降と考えられる(註1)。この時期は、多賀城の遺構期に対応させると政府第III期の古い段階にあたり、伊治公告麻呂の乱後の一時的改修を経て、多賀城が本格的な復興を遂げた時期に相当する。この時期には城外の幹線道路である南北・東西大路は確実に機能しており、その交差点の北東部が官衙の様相を持った一つの区画として政府第III期のはじめ頃に成立したと理解することができよう。山王遺跡八幡地区では多賀城創建期から遺構が継続的に営まれており(註2)、城外の区画・施設が段階的に整備されていったことを明確に示している。

(3) B期の様相

B期の遺構としてはS D945A・B、S D943、S D935A～D、S B1000・S D1002・1004がある。

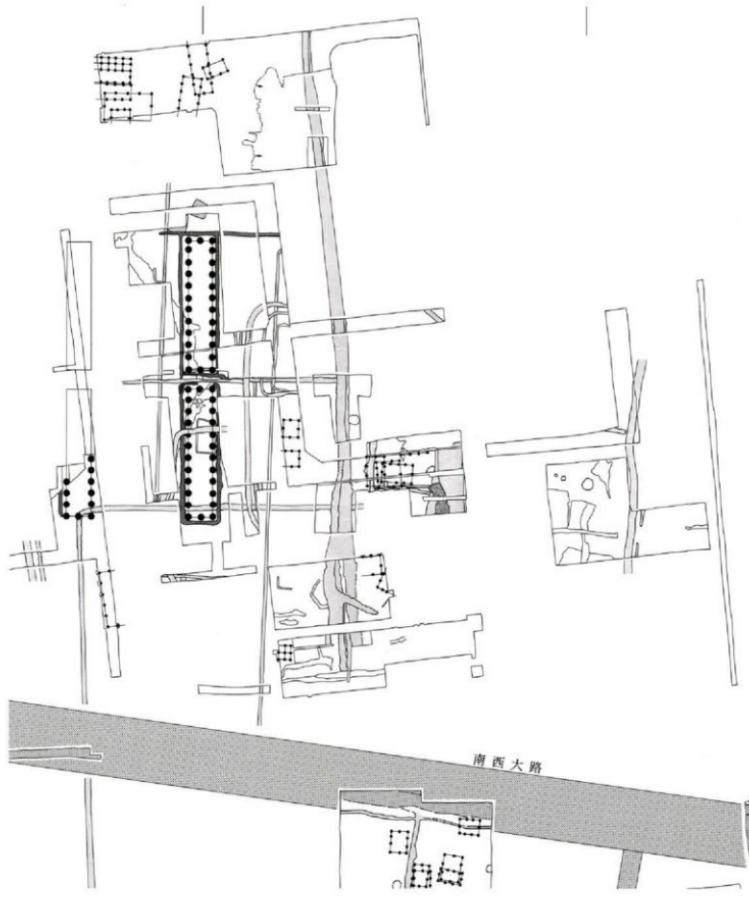
この時期の遺構の特徴は、S B1000・1010、S D945、S D935など同位置での改修を経て、比較的長期間に亘って存続する遺構の存在である。S B1000・1010はともに桁行総長11間という長大な南北棟であり、

同位置で2時期の変遷を確認した。柱間は10尺（約3.0m）で計画されており、両側柱を揃え、約5mの間隔をおいて並んでいる。その西側のA区にはS B1010と南妻を揃えたS B1020があり、さらにその北側に想定しているもう1棟とともに同規模の4棟が1ブロックを構成すると推定している（註3）。S B1000・1010と西側のS B1020との間からは建物と同時期の遺構は確認されておらず、東西約25m、南北約73mの広い空間となっている。広場あるいは作業空間と考えられる。S D945の延長部分は南側の第5・9次調査区、北側の第14次調査区でも検出しており、南北170m以上に及んでいる。さらに、第14次調査区の北側約220mの地点にある県文化財保護課調査地区においてもその延長部分が確認されている。この溝は、ほぼ同位置で数時期の変遷があり、今回の調査では2時期、第5・9・14次調査区においてもそれぞれ何時期かの変遷を確認しており、長期間に亘って機能していたことが考えられる（註4）。その東側のS D943・935についてもおおよそ同位置で改修が確認され、S D945と同様に一定の役割を担っていたものと思われる。S D945とS D943・935は出土遺物から時期的に平行する可能性が高く、S B1000・1010についても雨落ち溝出土遺物との様相はおおよそ一致している（註5）。したがって、S B1000・1010・1020、S D945、S D943、S D935を同時期の遺構と理解しておきたい。

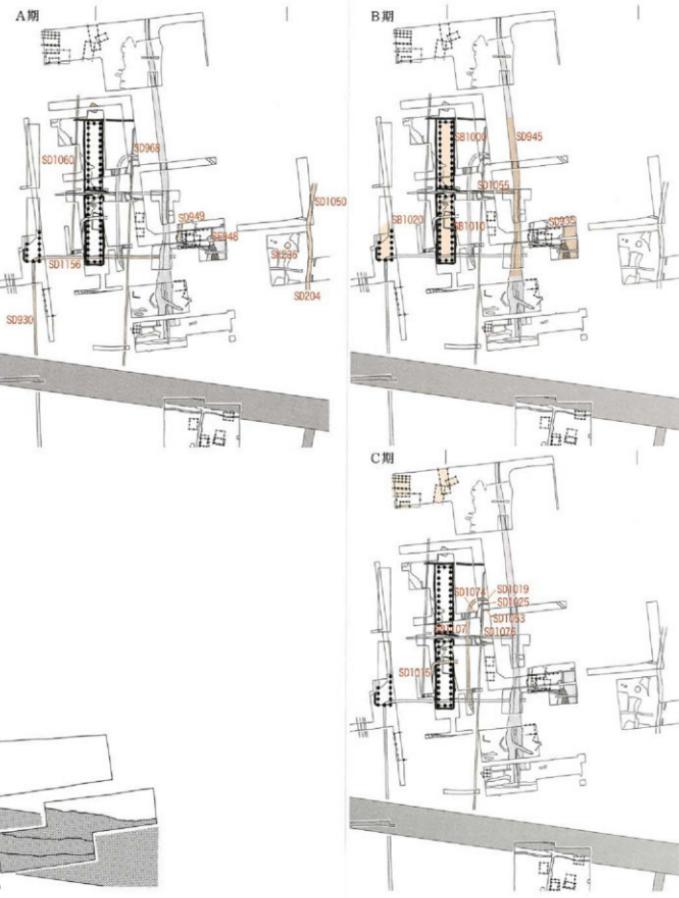
S B1000・1010は柱間が10尺（約3.0m）、桁行総長11間という規模から城内の官衙に匹敵し、しかも3棟（推定4棟）が柱筋を揃えて整然とした配置をとっていることから城外に置かれた官衙と考えられる。性格に関わる資料は出土していないが、長大な南北棟のみで構成されている可能性が高いことから倉庫のような性格を想定している。S D943・935はS X990土壘状遺構を伴った区画溝と考えられる。これらの東側では同時期の遺構は全く確認できないことから、B期の東辺区画施設であった可能性がある。ただし、これらの溝は北側のB49区（東半部）や南側の第5次調査区では確認できず、区画の範囲については不明である。S D945はこの地区をおおよそ東西に二分する区画溝と考えられる。S D945とS D935の間にはS B991・992・993・994・995、S B1000・1010とS D945の間にS B1081・1082がある。S B1081・1082については不明であるが、S B991・992・993・994・995はS D945・935とは重複していないことからおおよそ同時期に機能していたと推定しており、C期には下らないと考えている。そのように考えると、S D945などの区画溝によってこの地区がいくつかに分割され、S B1000・1010など大型建物で構成されるブロックとS B991・992・993・994・995など小規模建物で構成されるブロックに分けられ、機能分担していた可能性も考えられよう。

なお、S B1000の雨落ち溝S D1003は、S D1056によって破壊されているため詳細は不明であるが、天長6年（829）の木簡が出土したS D945Aと連結するS D1055の延長線上にあり、一連の溝の可能性もある。その推定に従えば、S B1000・1010など大型建物の年代の一端が天長6年にすることになる。一つの可能性として指摘しておきたい。

この時期の遺構はS B1000・1010・1020やS D935のある東西約110m、南北約90mの範囲に存在し、その外側には確実な広がりを確認できない。わずかに第7次調査区のS E197や第14次調査区のS B541が同時期の遺構の可能性がある。このことは、この地区的機能がA期より低下したことを示すものではなく、逆にこの区画の使われ方が確定し、長期間に亘って継続的に機能したことを物語るものと言えよう。S D935Aから出土した多量の土師器・須恵器杯はその周辺にそれらを使用した人々の存在を裏付けるものである。



第147図 B区免見造機模式図



第148図 B区免見造機変遷図

この時期は城外の遺構が最も整備された時期である。B期の様相は山王遺跡多賀前地区・伏石地区・八幡地区の動向と一致し、城内においても大畠地区官衙で建物群が増加し、最盛期を迎える時期と一致している。このことは、城内・城外を含め多賀城が最も充実した時期が9世紀前葉から中葉にかけての時期であったことを明確に示している。また、A期にみられた官衙的様相は、大型建物の存在によって明確に確認できる。城外の方格地割りについては、東西大路沿いに国司など高級官僚の邸宅があり、それより離れた区画には中・下級役人や庶民の住いがあったという漠然とした考えがあるが、南北・東西大路交差点の北東区画におけるA・B期の遺構の在り方は城外の方格地割りの性格を考える上で重要な問題を提起している。南北・東西大路の北東区画のみが特殊な機能を持つのか否か、今後検討すべきであろう（註6）。

(4) C期の様相

C期の遺構としてはS D1019・1025、S D1053・1076、S D1065、S X1263、S D1015がある。それらは灰白色火山灰降下以前のものと、降下以後のものとがあり、前者にはS D1019・1107、S D1025・1074があり、後者にはS D1053・1076、S D1015、S D1065、S X1263がある。

S D1019・1107、S D1025・1074、S D1053・1076は区画溝と見られる。S D1025には、灰白色火山灰降下時の表土と見られる第VI層の半ばまで堆積しており、その内側に位置するS D1053・1076の埋土には灰白色火山灰粒が含まれていることから、この3組の区画溝は灰白色火山灰降下前後に機能していたことが知られる。区画内については不明であるが、位置的に相当するI3(S)・14(W)区の第III層からは9世紀中葉から10世紀前葉にかけての灰釉陶器や綠釉陶器が最も多く出土しており（表9）、同時代の遺構が存在した可能性がある。灰釉・綠釉陶器が多いことは日常生活の場への変化を示すものかもしれない。I3(S)区から集中的に出土した土錘はこの時期に伴うものであろう。C期の遺構はB期のS B1000・1010やS D945による配置を全く踏襲していないことから性格的な断絶が考えられ、区画のあり方が9世紀中葉頃を境に大きく変化したことを物語っている。詳細は不明であるが、少なくとも前段階まで見られた官衙的様相は認め難い。遺構の数も9世紀中葉以降減少し、10世紀前葉の灰白色火山灰降下時には多くの遺構が廃絶している。このような区画内の状況変化を引き起こし、更には衰退に向かわせた原因については明らかでない。しかし、『日本三代実録』貞觀11年（869）5月26日条には陸奥国に大地震があり、多賀城とその城下が大きな被害を受けたという記事がある。要因の一つとして今後検討すべき重要な問題かと思われる。

灰白色火山灰降下後の遺構としては、63区から64区北半部にかけて建物として組み合わない多数の柱穴を発見し、それによって構成される掘立柱建物群の存在が想定される。それらの年代は、須恵系土器杯・小型杯・高台付皿が出土したS D1065が柱穴群を破壊していることから10世紀中葉を下限とすると考えられる。北側の第14次調査区では、同様な小規模な柱穴からなる掘立柱建物跡を11棟発見している。その中にはS D1015から出土した須恵系土器と類似したものが、柱抜穴から出土しているものがあり、同様の年代が想定できる（多賀城市教育委員会：1994）。このような建物跡や須恵系土器はA44区の北東部まで及んでおり、通称「大臣宮」の低丘陵の南面から西面にかけて分布するものと見られる。特にA62区からは胎土に砂を多量に含み、厚手で、赤褐色を呈する須恵系土器が集中的に出土しており、多賀城周辺では特異な土器として注目される（註7）。それらの年代的な位置付けが問題となるが、この地区的掘立柱建物跡群の性格と合わせ、A区の報告書において検討する予定である。

最後に、C期以降の様相について簡単に触れておきたい。今回の調査では、14(W)区第III層から中世の青磁碗の小片1点が出土したのみで、同時期の遺構は発見していない。13(N)において第V層が擬似畦畔と

して削平を免れている点は、中世以降に水田として利用された状況を示すものと考えられる。中世の遺構・遺物は第5・7・9次調査でも認められず、A・C・D区の確認調査（第23・24次調査）でもA区の堆積層から青磁碗1点が出土しているのみである。このような状況から、B区周辺は10世紀以降急速に衰退し、中世頃には一帯が湿地化したと考えられる。

VII ま　と　め

- 1 南北・東西大路交差点の北東区画を調査し、8世紀末から10世紀中葉にかけての遺構を発見した。
- 2 その区画は、8世紀末頃から9世紀中葉にかけては官衙的区画として機能した。
- 3 9世紀中葉以降、区画内に性格的な変化があり、その後急速に衰退した。

〔註1〕この年代表は周辺地域に8世紀中葉以前の遺構の存在を否定するものではなく、この地区が積極的に使用された時期という意味にすぎない。本地区の東側約700mに位置する多賀城廢寺は8世紀前半の創建であり、多賀城と寺を結ぶ道路は当然存在したと考えられることから、それと同時期の遺構の存在についても考慮する必要があろう。

〔註2〕八幡地区からは8世紀代の漆付土器が多数出土しており、漆に関わる工房の存在が推定できる。S K5422から出土した土師器杯は多賀城創建頃の特徴を持つもので、内面に付着した漆紙文書は、養老5年（721）以前の様式を持つ計帳様文書であった（多賀城市教育委員会：1995）。

〔註3〕S B1000・1010とその雨落ち溝では2時期の重複を確認したが（多賀城市教育委員会：1990）、S B1020では3時期の重複であった。この問題についてはA区S B1020の報告の中で検討したい。

〔註4〕第14次調査区のS D555はS D945A、S D554はS D945Bにそれぞれ対応すると見られる（多賀城市教育委員会：1994）。第5次調査区ではS D3に灰白色火山灰が自然堆積しており、それより古いものとしてS D13～16・20がある。前者はS D945Bに対応させることができあり、後者のいずれかはS D945Aに対応するものであろう（多賀城市教育委員会：1985）。第9次調査区でもS D945に相当するとみられる雨北溝を2条発見している。灰白色火山灰との上下関係が矛盾するものの、一連の溝跡の可能性が高い（多賀城市教育委員会：1990）。

〔註5〕『確認調査報告書』表I S B1000・1010および雨落ち溝出土遺物集計表 p40

〔註6〕南北・東西大路の北西区画を対象とした第27次調査においても、南北に並ぶ大型の南北棟建物を2地点で検出している。

〔註7〕『確認調査報告書』出土遺物集計表I p77・78で「赤焼土器＊」と記載しているものに相当する。

附章1 第24次調査の発見遺構・遺物（補遺）

第24次調査区の概要は『確認調査報告書』として既に報告しているが（多賀城市教育委員会：1999）、本文中で説明を行わなかった遺構が多い。また、出土遺物に至っては出土遺物集計表とわずか12点の実測図を掲載したに過ぎない（内1点はA区出土遺物）。本章には、未報告となっていた遺構の事実記載及び既報告分の補足説明を収録し、遺物については特に必要と見られるものに限って実測図を掲載した。なお、同一の遺構を各調査区で検出しているが、それぞれ状況が異なる部分もあり、便宜的に各区ごとに記載した。

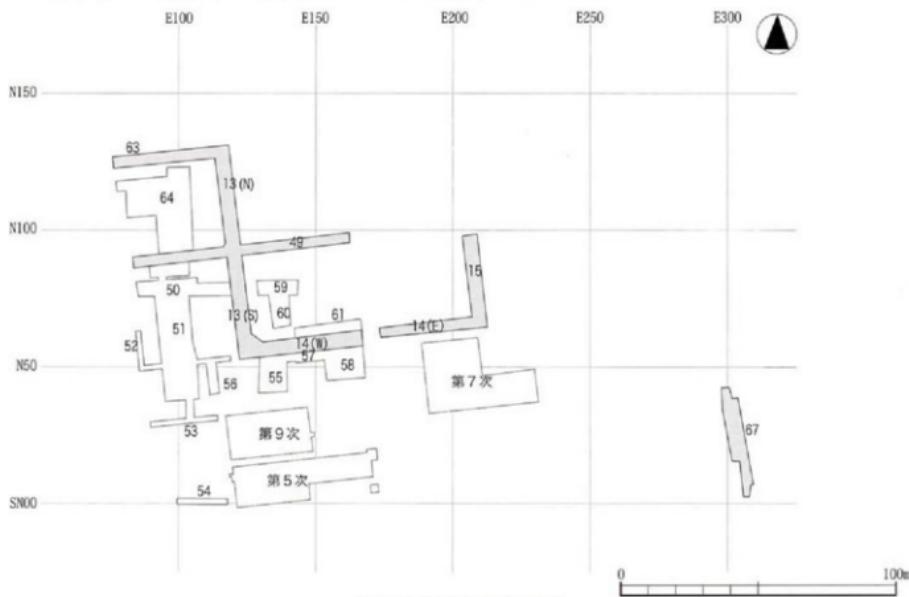
1 B64区

掘立柱建物跡1棟、柱列跡1条、竪穴住居跡2軒、溝跡4条、旧河川1条、多数の小柱穴・小溝を発見した（大型建物S B1000とその雨落ち溝については『確認調査報告書』を参照）。

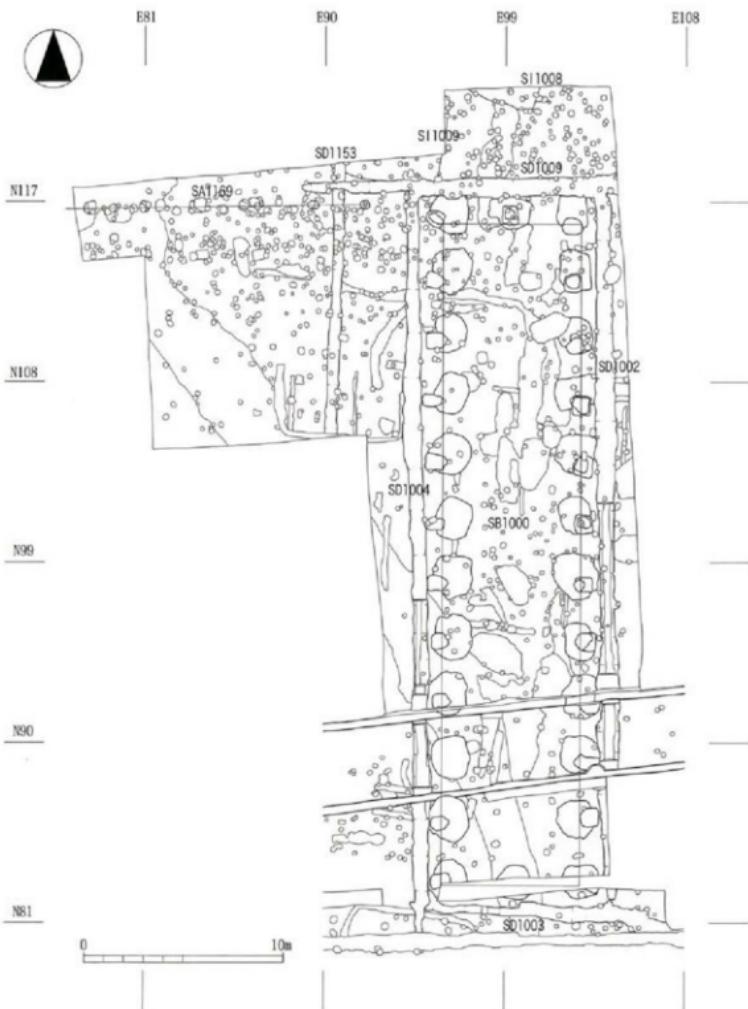
S A1169：北端部で発見した東西方向の柱列跡である。総長約14.1m以上あり、柱間は東より約2.8m、約2.8m、約2.9m、約2.8mである。方向は、柱痕跡を確認していないため明確ではないが、おおよそ東西発掘基準線と一致している。

S I 1008・1009竪穴住居跡：北端部で検出した。このうちS I 1009住居跡は、SD1001雨落ち溝、SD1060南北溝と重複し、それよりも古い。東辺と南辺の一部を検出しており、東西約4.5m、南北約4.3mである。方向は、東辺で見るに北で約8度東に偏している。

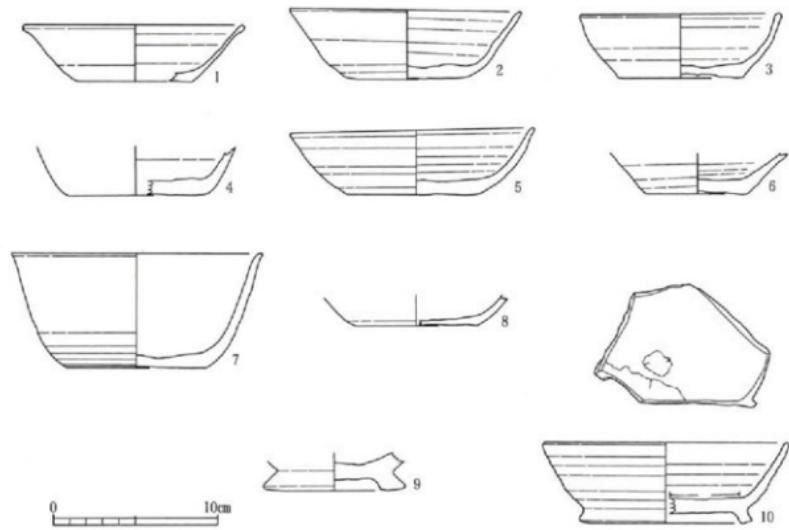
S D1160溝跡：トレンチ西半部で発見した南北溝である。SD1001雨落ち溝よりも古く、S I 1009竪穴住居よりも新しい。方向は、南北発掘基準線とおおよそ一致している。検出したのは約14mであるが、49・63区においても確認しており、約39mにわたって直線的に伸びている。



第149図 第24次調査区配置図



第150図 B64区平面図



単位 (cm)

番号	種類	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S D1002・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.5) 5/24	(6.9) 15/24	3.5	R-1627	
2	須恵器・杯	S D1002・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.0 13/24	8.4 24/24	4.2	R-1619	
3	須恵器・杯	S D1004・1層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.2) 9/24	(7.6) 8/24	3.9	R-1633	
4	須恵器・杯	S B1000 A期抜き穴	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	- 7/24	(8.7) -	-	R-1623	
5	須恵器・杯	S B1000 B期掘り方	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.7 5/24	8.0 24/24	4.1	R-1631	
6	須恵器・杯	S B1000 B期掘り方	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	- 24/24	6.4 -	-	R-1622	
7	須恵器・杯	S B1000 B期掘り方	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(15.2) 5/24	(8.4) 17/24	7.0	R-1630	
8	須恵器・杯	S B1000 B期掘り方	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	- 24/24	(7.5) -	-	R-1635	
9	須恵器・ 淨瓶	S B1000 B期掘り方	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	- 24/24	8.6 -	-	R-1634	
10	須恵器・ 高台付坏	第I層	【外面】ロクロナデ→高台貼付 【内面】ロクロナデ→消耗痕(軋用痕)	- 9/24	(10.4) -	-	R-1629	

第151図 B-64区出土遺物

2 B50・51区

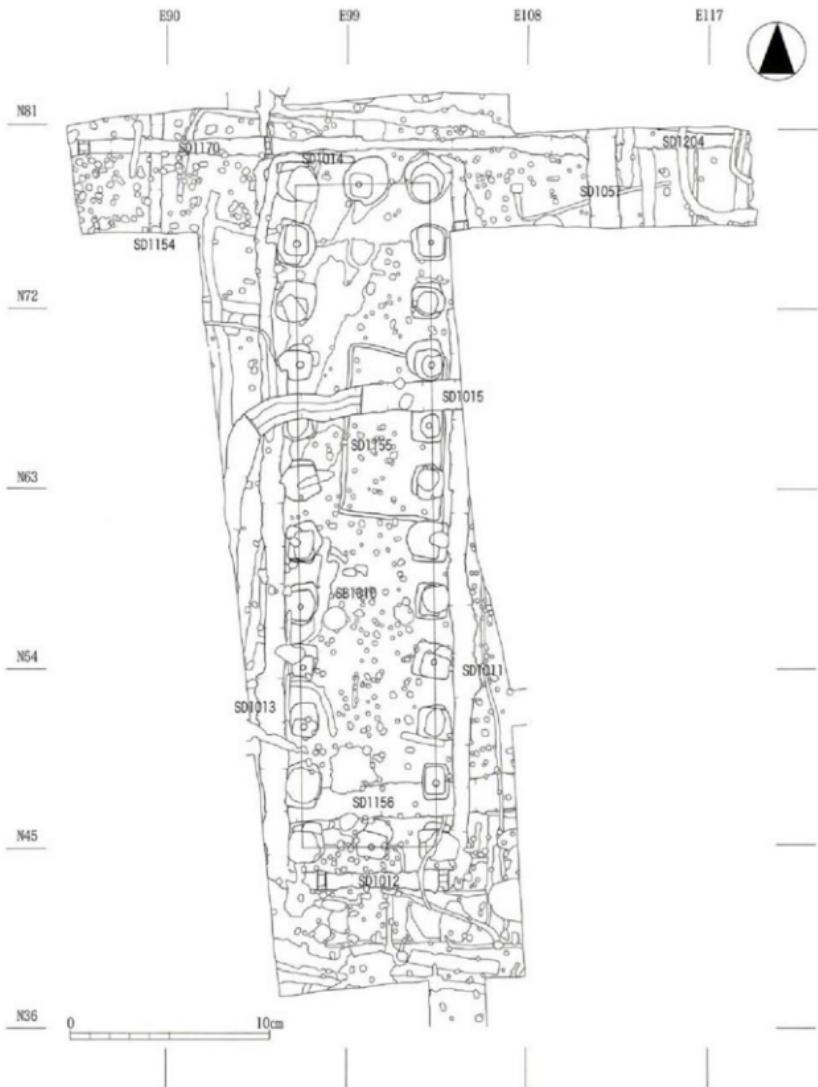
掘立柱建物跡1棟、溝跡17条、旧河川1条、土壙7基、多数の小柱穴を発見した（大型建物SB1010とその雨落ち溝については『確認調査報告書』を参照）。

SD1015溝跡：中央部で発見した「L」型の溝跡である。西壁際で屈曲し、東西・南北方向にそれぞれ延びている。方向は、南北については北でやや東に偏しており、東西については東でやや北に偏している。SB1010建物跡、SD1155区画溝と重複し、それよりも新しい。規模は上幅1.2～1.5m、下幅0.4～1.1m、深さ0.5～0.6mであり、底面は東側から西側に傾斜している。埋土は黒褐色土を主体としており、5層に細分することができる。1～3層が粘質土、4・5層が砂質土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付杯・皿が出土している。

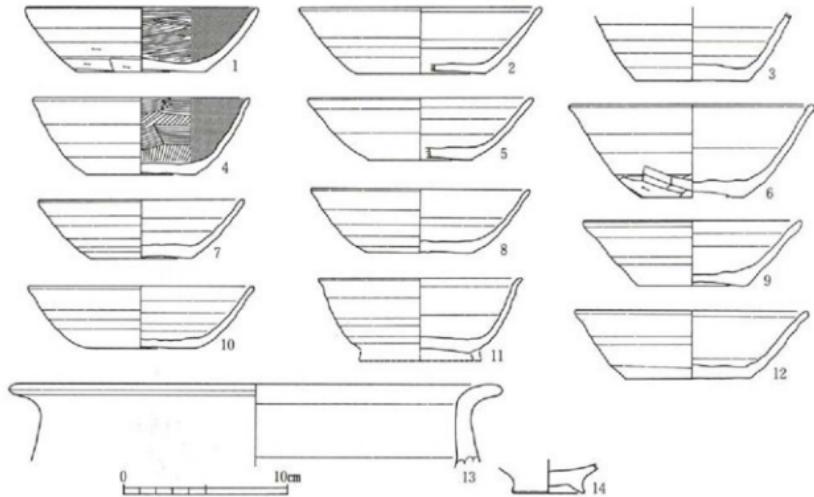
SD1156：南半部で発見した東西溝である。SB1010建物跡と重複しており、それよりも古い。方向は東で約4度北に偏している。規模は上幅1.6～1.8mであり、埋土は黒褐色土を主体とした粘質土である。方向や埋土から56区のSD1157、55区のSD1164と一連の溝跡と考えられる。

SD1155：北半部で検出した区画溝である。北辺約4.9m、南辺約5.1m、東辺約7.8m、西辺約8.0mであり、歪んではいるがおおよそ長方形の範囲を巡っている。SB1010建物跡、SD1050溝跡と重複しており、それよりも古い。規模は西辺約8.4m、南辺約5.2mであり、方向は西辺で計ると北で約3度東に偏している。

次に特徴的な遺物について説明する。第157図12はハケメ調整された非クロロ調整の土師器甕である。体部外面には平行叩きの痕跡も見られる。胎土は赤褐色を呈している。SD1155の埋土上層から出土した。9～11・13も内・外両面をハケメ調整した土師器甕である。いずれも底部にはムシロ状圧痕が見られる。9・10はSB1010の西側雨落ち溝SD1013検出時にその上面より出土した。9～11は12と胎土や色調が共通するが、13はにぶい黄橙色で明瞭に異なっている。5は底部に「巖」の刻書がある土師器杯である。



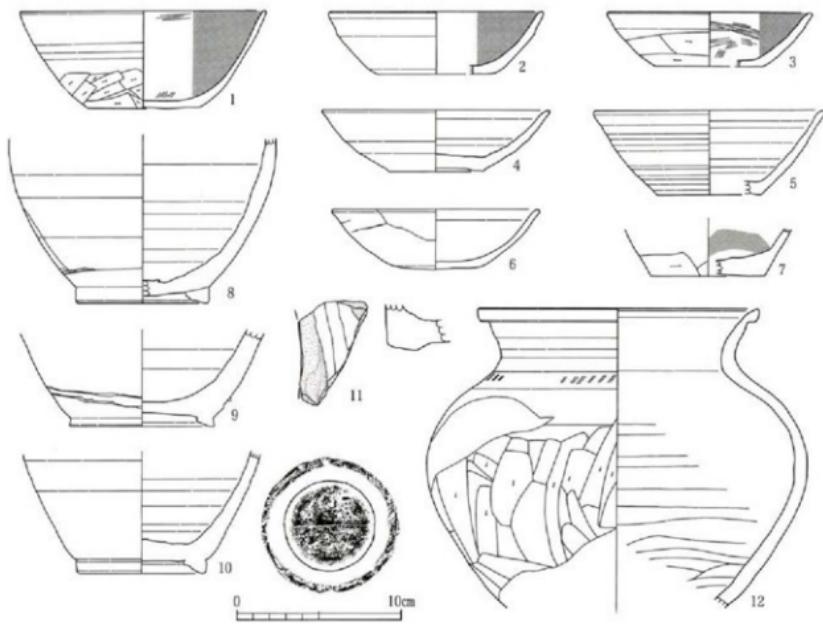
第152図 B50・51区平面図



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S D1013・B期	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ(体部下半)→手持ちヘラケズリ(体部下端)底部:回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガギー・黒色処理	(14.2) 7/24	(7.8) 9/24	4.0	R-1349	
2	須恵器・杯	S D1013・I層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.8) 5/24	(7.8) 11/24	4.1	R-1336	
3	須恵器・杯	S D1013・I層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	—	6.9 24/24	—	R-1339	
4	土師器・杯	S D1013・検出面	【外面】ロクロナデ 底部: 糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガギー・黒色処理	(13.2) 2/24	(6.5) 16/24	4.7	R-1350	
5	須恵器・杯	S D1013	【外面】ロクロナデ 底部: 糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 2/24	(6.3) 12/24	3.8	R-1342	
6	須恵器・杯	S D1011・検出面	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下半)底部: 静止糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(15.0) 1/24	(6.2) 15/24	5.7	R-1337	
7	須恵器・杯	S D1013・B期	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	12.6 24/24	6.2 24/24	3.6	R-1344	
8	須恵器・杯	S D1013・検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.3) 8/24	6.0 24/24	3.9	R-1341	
9	須恵器・杯	S D1015・4層	【外面】ロクロナデ 底部: 回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.3) 2/24	(6.7) 14/24	4.0	R-1340	
10	須恵器・杯	S D1013・検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 2/24	(7.0) 5/24	3.7	R-1347	
11	須恵器・高台付杯	S D1013・検出面	【外面】ロクロナデ 底部: 糸切り→高台貼付→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(12.4) 1/24	6.1 24/24	—	R-1338	
12	須恵器・杯	S D1011・2層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.2 24/24	7.5 24/24	4.2	R-23	
13	須恵系土器・火釜	S D1269・検出面	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(30.0) 1/24	—	—	R-1435	
14	須恵系土器・高台皿	S D1015・2層	【外面】ロクロナデ 底部: 高台貼付 【内面】ロクロナデ	—	4.4 24/24	—	R-1430	

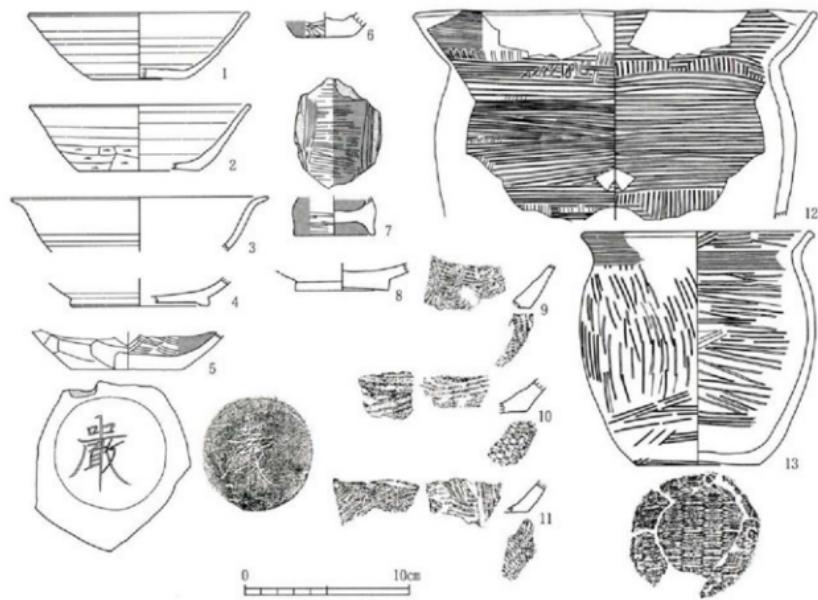
第153図 B51区出土遺物(1)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S B1010・B期抜き穴	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ（体部下半） 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.9 15/24	6.9 24/24	6.0	R-1595	
2	土師器・杯	S B1010・焼出面	【外面】ロクロナデ：底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.0) 1/24	(7.2) 6/24	3.9	R-1373	
3	土師器・杯	S B1010・B期抜き穴	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底部：手持 ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(12.4) 3/24	(6.4) 7/24	3.3	R-1372	
4	須恵器・杯	S B1010・往穴	【外面】ロクロナデ：底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 7/24	5.8 24/24	3.7	R-1365	
5	須恵器・杯	S B1010・焼出面	【外面】ロクロナデ：底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 4/24	(6.2) 7/24	5.2	R-1366	
6	須恵器土器・杯	P-116	【外面】ロクロナデ：底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	12.6 9/24	5.4 24/24	3.7	R-1361	
7	土師器・甕	S B1010・B期抜き穴	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ、付着物	— —	(6.9) 12/24	—	R-407	
8	須恵器・瓶	第1層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ、焼台痕 【内面】ロクロナデ	— —	(8.0) 15/24	—	R-50	
9	須恵器・瓶	S B1010・B期抜き穴	【外面】ロクロナデ、焼台痕 【内面】ロクロナデ	— —	8.8 24/24	—	R-31	
10	須恵器・瓶	P-158	【外面】ロクロナデ：底部：高台貼付、ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	— —	7.5 24/24	—	R-30	
11	電形土器	S B1010・焼出面	— —	— —	— —	—	R-1428	
12	須恵器・甕	S B1010・B期抜き穴	【外面】ロクロナデ：体部：平行叩き→ロクロナデ→ ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ→ナデ	(17.0) 14/24	— —	— —	R-1363	

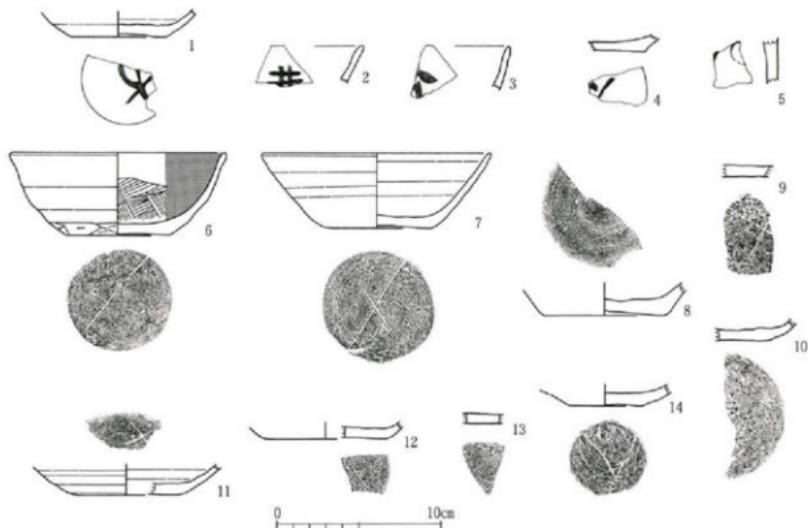
第154図 B51区出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	黒色土	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(13.4) 3/24	(5.7) 11/24	4.1	R-1384	
2	須恵器・杯	黒色土	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ (体部下半) 底部: 手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	13.4 11/24	7.3 15/24	4.0	R-1380	
3	灰釉陶器・楕	検出面	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】施釉	(15.6) 3/24	—	—	R-181	
4	灰釉陶器・楕or皿	第I層	【外面】体部: 回転ヘラケズリ 底部: 高台貼付、回転ヘラケズリ 【内面】施釉	—	(8.2) 10/24	—	R-171	
5	土師器・杯	黒色土	【外面】体部~底部: 手持ちヘラケズリ 底部: 刻書 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	—	6.9 24/24	—	R-75	
6	土師器・小瓶	黒色土	【外面】ヘラミガキ→黒色処理 【内面】—	—	3.7 13/24	—	R-1401	
7	土師器・耳皿	第I層	【外面】ヘラミガキ→黒色処理 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	—	4.9 24/24	—	R-1399	
8	灰釉陶器・楕or皿	第I層	【外面】施釉 底部: 剥り出し高台、無釉 【内面】施釉	—	5.7 24/24	—	R-201	
9	土師器・甕	S D1013・検出面	【外面】ハケメ 底部: ムシロ痕 【内面】—	—	—	—	R-1411	
10	土師器・甕	S D1013・検出面	【外面】ハケメ 底部: ムシロ痕 【内面】ハケメ	—	—	—	R-1412	
11	土師器・甕	第I層	【外面】ハケメ 底部: ムシロ痕 【内面】ハケメ	—	—	—	R-1413	
12	土師器・甕	S B1010	【外面】平行引き→ヨコナデ→ハケメ 【内面】ハケメ	(24.4) 6/24	—	—	R-1364	
13	土師器・甕	S X1268	【外面】口縁: ヨコナデ 体部: ハケメ 底部: ムシロ痕 【内面】ハケメ→ヨコナデ (頭部)	13.3 18/24	7.4 22/24	14.2	R-109	

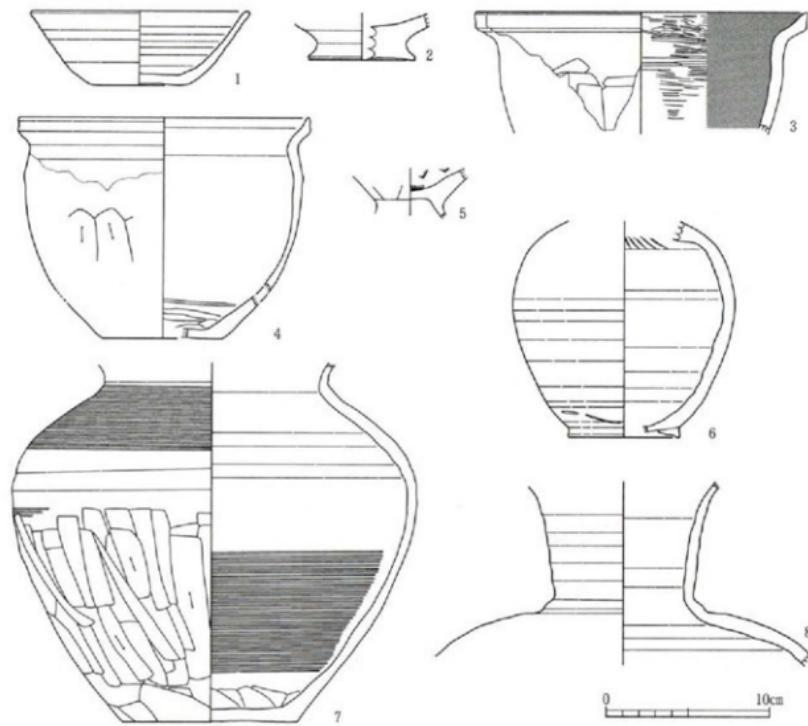
第155図 B51区出土遺物(3)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S B1010・抜き穴	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、墨書 【内面】ロクロナデ	- (5.8) 11/24	-	-	R-1416	
2	須恵器・杯	S D1015・2層	【外面】ロクロナデ、体部：墨書 【内面】ロクロナデ	-	-	-	R-1599	
3	須恵器・杯	S B1010・柱穴	【外面】ロクロナデ、体部：墨書 【内面】ロクロナデ	-	-	-	R-1600	
4	土師器・杯	S D1015・3層	【外面】底部：回転糸切り、墨書 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	-	-	-	R-1417	
5	土師器・甕	S D1015・3層	【外面】墨書【内面】	-	-	-	R-1418	
6	土師器・杯	第I層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底部：ヘラ描き 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 6/24	6.4 24/24	5.1	R-1379	
7	須恵器・杯	S D1011・2層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	14.0 15/24	6.5 24/24	4.6	R-26	
8	須恵器・杯	S B1010・検出面	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ、ヘラ描き	- (7.5) 11/24	-	-	R-1402	
9	土師器・杯	第I層	【外面】ヘラ描き 【内面】	-	-	-	R-1409	
10	須恵器・杯	第I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	- (7.8) 11/24	-	-	R-1403	
11	須恵器・杯	S D1013	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	- (6.1) 6/24	-	-	R-1407	
12	須恵器・杯	S B1010・検出面	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	- (7.2) 4/24	-	-	R-1406	
13	須恵器・杯	第I層	【外面】ヘラ描き 【内面】	-	-	-	R-1405	
14	土師器・杯	S B1010・抜き穴	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り、ヘラ描き 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	- (4.5) 24/24	-	-	R-1408	

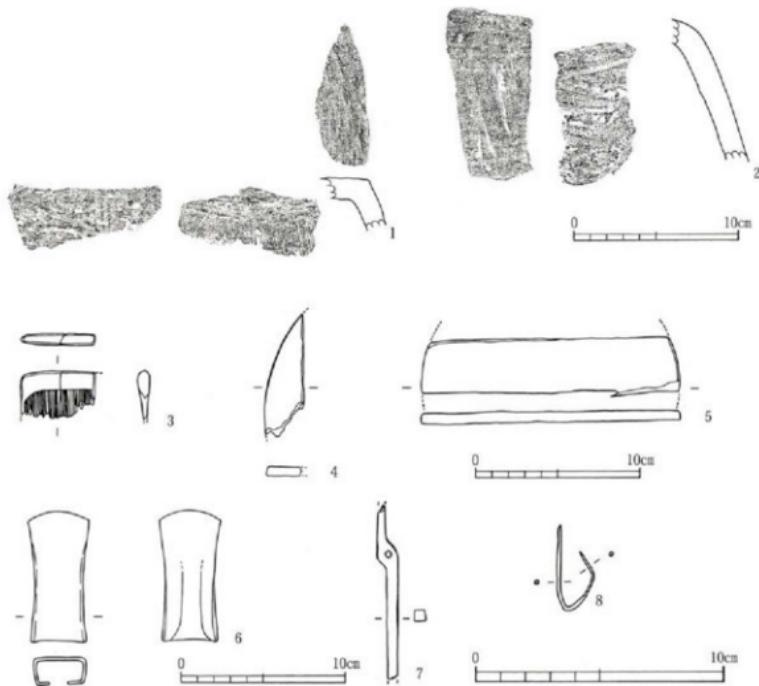
第156図 B51区出土遺物(4)



単位 (cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S B1010・ B期抜き穴	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.3) 4/24	(6.0) 24/24	4.6	R-1289	
2	須恵器・土器 ・高台付瓶	第II層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	— —	(6.4) 6/24	—	R-1314	
3	土師器・甕	S B1010・ B期抜き穴	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】ヘラミガタ・黒色処理	(20.2) 6/24	—	—	R-1305	
4	土師器・甕	S B1010・ B期抜き穴	【外面】ロクロナデ 体部：ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ→ナデ	(17.8) 5/24	(7.3) 9/24	13.5	R-1304	
5	土師器・ 瓶？	S B1010・ B期抜き穴	【外面】ヘラケズリ 【内面】ヘラナデ	—	—	—	R-1316	
6	須恵器・ 長頸瓶	検出面	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	— —	(6.7) 9/24	—	R-1297	
7	須恵器・甕	S B1010・ B期抜き穴	【外面】叩き→カキメ→ヘラケズリ (体部下半) 底部： ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ→カキメ	— —	10.6 24/24	—	R-32	
8	須恵器・ 広口瓶	第I層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	— —	—	—	R-34	

第157図 B50区出土遺物(1)



単位(cm)

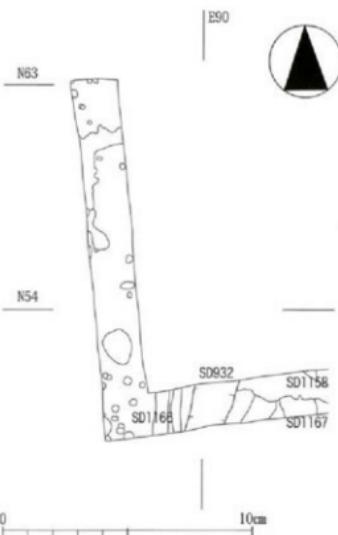
番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	高さ	登録番号	図版番号
1	竈形土器	第Ⅰ層	【外面】ヘラケズリ 【内面】ヨコナデ 体部:ハケメ	-	-	-	R-111	
2	竈形土器	第Ⅱ層	【外面】ヘラナデ 【内面】ナデ	-	-	-	R-110	
3	横櫛	S B1010 B期握り方	4.6以上×3.0以上×0.8 樹種:ミズメ				R-78	
4	曲物底板	S B1010 B期握り方	5.6以上×2.3以上×0.6 樹種:ヒノキ科アスナロ属				R-72	
5	曲物底板	S B1010 B期抜き穴	径8.0×0.8 樹種:ヒノキ科アスナロ属				R-61	
6	鉄矛	檢出面	8.6×3.7×1.7				R-11	
7	鉄鉗	S D1013	10.6以上×0.8				R-51	
8	釣針	S B1010	1.8×0.1				R-19	

第158図 B 50区出土遺物(2)

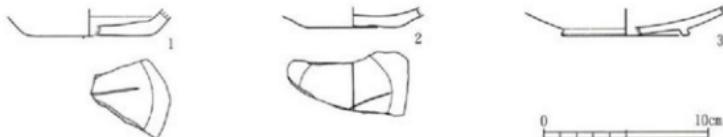
3 B52区

S D932・1165・1166・1167南北溝をはじめ、土壙、小柱穴などを発見した。このうち S D932溝跡は、上幅約1.6mの南北溝であり、方向や規模から見て50・51区のS D1015溝跡と同一の溝と考えられる。50・51区における屈曲部と本区における検出部分から方向を測ると、北で約15度東に偏している。

第162図3は緑釉陶器椀の底部破片である。内外両面を丁寧にヘラミガキし、全面に緑釉を施している。高台はいわゆる貼付高台であり、形態的には幅の狭い「輪高台」と呼ばれるものである。



第159図 B52区平面図



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	第I層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り、ヘラ描き 【内】ロクロナデ	- 5/24	(7.6) 5/24	-	R-1569	
2	土師器・杯	第I層	【外】ロクロナデ 底部: 回転系切り、ヘラ描き 【内】ヘラミガキ→黒色処理	- 8/24	(5.6) 8/24	-	R-1568	
3	緑釉陶器・ 椀or皿	第I層	【外】ヘラミガキ→施釉 底部: 高台貼付→ヘラミガキ→施釉 【内】ヘラミガキ→施釉	- 7/24	(7.8) 7/24	-	R-202	

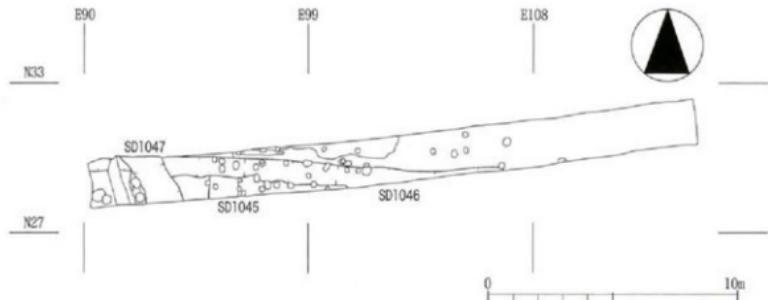
第160図 B52区出土遺物

4 B53区

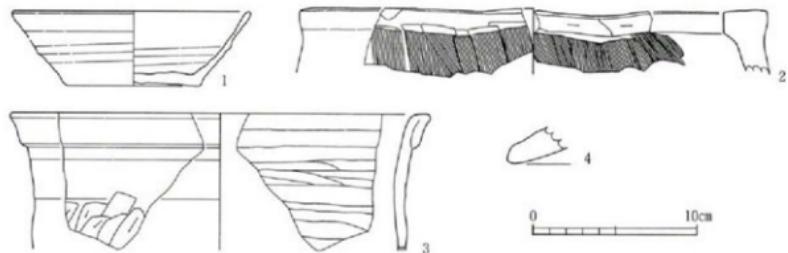
S D1046東西溝、S D1045・1047南北溝、小柱穴などを発見した。新旧関係は古い順に S D1045→S D1046→S D1047である。また、東側に隣接する第9次調査区との層序の対応関係を把握するため南壁際にトレチチを入れた。第I層(表土)下に灰白色火山灰が混入する黒褐色砂質土が堆積しており、遺構を覆っている。この層は、第9次調査で「整地層」としているものと同一の層と考えられる(註)。

S D1046: 約13mにわたって検出した東西溝である。第VII層上面で検出し、灰白色火山灰が混入する層(第VI層に対応する層)によって覆われている。方向は東で約2度南に偏している。規模は、上幅0.6~0.8mである。埋土は3層に細分できるがいずれも黒褐色粘土を主体としたものである。

(註) 第9次調査において整地層としている層は、東西25m、南北16mの調査区の西半部全体に認められるが、その層の上面で古代の遺構は全く認められない(多賀城市埋蔵文化財調査センター:1990)。また、北壁の断面観察ではこの層中に灰白色火山灰の自然堆積層が数ヵ所見られるなど整地層とするとには不自然である。遺物も多量に出土しており、遺構施設後の自然堆積層である可能性が高い。



第161図 B53区角見遺構平面図



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	第I層	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内部】ロクロナデ	(14.5) 3/24	8.1 24/24	4.6	R-1581	
2	竈形土器	第I層	【外面】ヘラナデ 【内部】ハケメ→ヘラケズリ (口縁) 内径(23.0)	(28.4) 3/24	—	—	R-1582	
3	土師器・甕	検出面	【外面】複合口縁→ロクロナデ→ヘラケズリ 【内部】ヨコナデ	(23.5) 3/24	—	—	R-827	
4	竈形土器	第I層	【外面】ヨコナデ 【内部】平行叩き→ヨコナデ	—	—	—	R-1584	

第162図 B53区出土遺物

5 B56区

S D1157東西溝やS D1158、1159、1160、1162南北溝などを発見した。ほとんどの遺構は堆積層第VI層に対応の層に覆われているが、S D1160はその上面で検出している。

S D1157：西側の51区で発見したS D1156溝跡と同一の東西溝である。西端部の断割った箇所で計ると、上幅約2.0m、下幅約1.8m、深さ約22cmである。埋土は2層に細分できるが、いずれも黒褐色粘質土を主体としている。

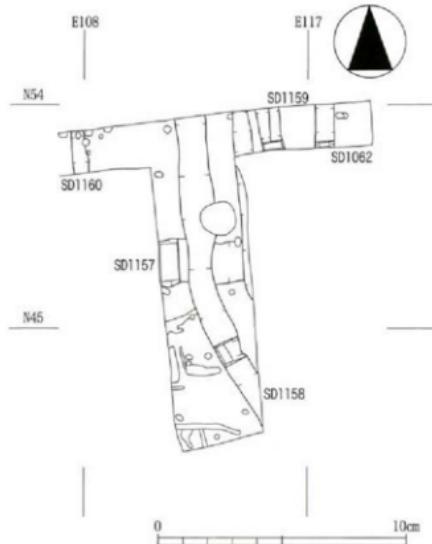
S D1158：中央部で発見した南北溝である。約12mにわたって検出した。北半部は直線的であるが、南半部は東側に緩やかに屈曲している。S D1157と重複しており、それよりも新しい。南半部の断割った箇所でみると、上幅約1.1m、深さ27cmである。埋土は3層に細分でき、1層が黒褐色粘質土、2・3層が黒褐色砂質土である。

S D1159：東半部で発見した南北溝である。ほぼ同位置で2時期の変遷（A→B）があり、B期でみると、上幅約0.6m、深さ約26cmである。

S D1162：東半部で発見した南北溝である。

S D1160：第VI層に対応する層の上面で検出した南北溝である。上幅約0.9m、下幅約0.4m、深さ約40cmである。埋土は3層に細分でき、1・2層が黒褐色土、3層が黄褐色土をブロック状に混入する灰黄褐色砂質土である。

第166図は土師器の小瓶である。底部には低い高台が貼付されており、外面全体をヘラミガキし、黒色処理されている。内面には漆が付着している。



第163図 B56区平面図



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・瓶	第1層	【外面】高台貼付→ヘラミガキ→黒色処理 【内面】ロクロナデ、漆付着	—	6.0 18/24	—	R-35	

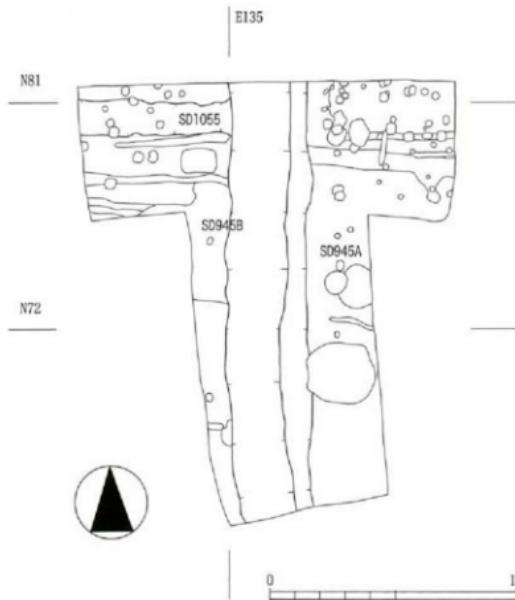
第164図 B56区出土遺物

6 B59・60区

S D885南北溝やS D887東西溝をはじめ、小柱穴、土壤などを発見した。小柱穴のなかには、掘り方に灰白色火山灰が混入しているものも確認できる。

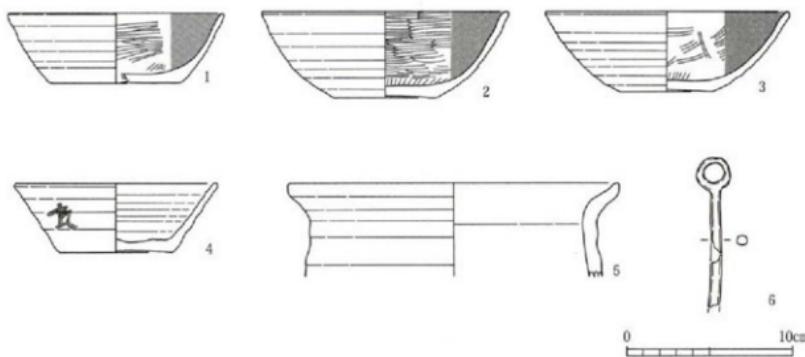
S D945：本調査区においても2時期の重複が確認でき(A→B)、新しいB期の埋土上層には灰白色火山灰が自然堆積している。B期の規模は、上幅2.1~2.5mである。

S D1055：I3(S)区から延びる東西溝である。S D945Bと重複しており、それよりも古い。S D945Bによって分断されているためS D945Aとの新旧関係は不明であるが、その東側には延びていないことから、S D885Aとは「-」状に連結する一連の溝跡である可能性が高い。西端部の断ち割った部分で見ると、規



第165図 B59・60区平面図

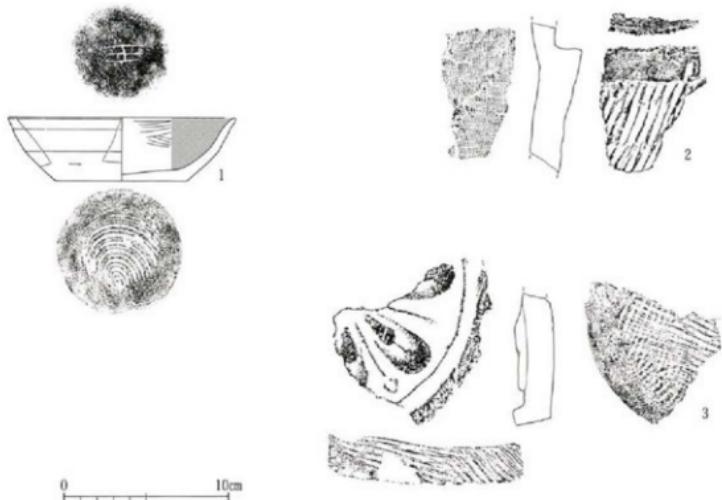
模は上幅約1.2m、深さ35cmであり、埋土は黒褐色土が主体である。体部下半部を回転ヘラケズリ調整した土師器杯が出土している。



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	SD945B・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	13.2 3/24	7.8 11/24	4.3	R-1109	
2	土師器・杯	SD945B・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	15.0 5/24	6.3 14/24	5.3	R-1134	
3	土師器・杯	SD945B・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	14.8 5/24	5.6 19/24	4.9	R-1136	
4	須恵器・杯	確認面	【外面】ロクロナデ、墨書き 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	12.4 6/24	6.8 14/24	4.2	R-1131	
5	土師器・甕	SD945B・1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	20.2 6/24	—	—	R-1140	
6	馬具・轡(側)	SD945B・1層	9.1以上×2.0				R-45	

第166図 B60区出土遺物



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	SD1055・2層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底部：回転 糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理、線刻	(13.7) 4/24	8.0 24/24	3.9	R-76	
2	丸瓦	SD1055・2層	【外面】平行叩き 【内面】布目 多質域分類II B類	-	-	-	R-II19	
3	軒丸瓦	第I層	重弁瀬草文軒丸瓦 多質域分類III 瓦当側面・裏面に線状痕	-	-	-	R-II18	

第167図 B59区出土遺物

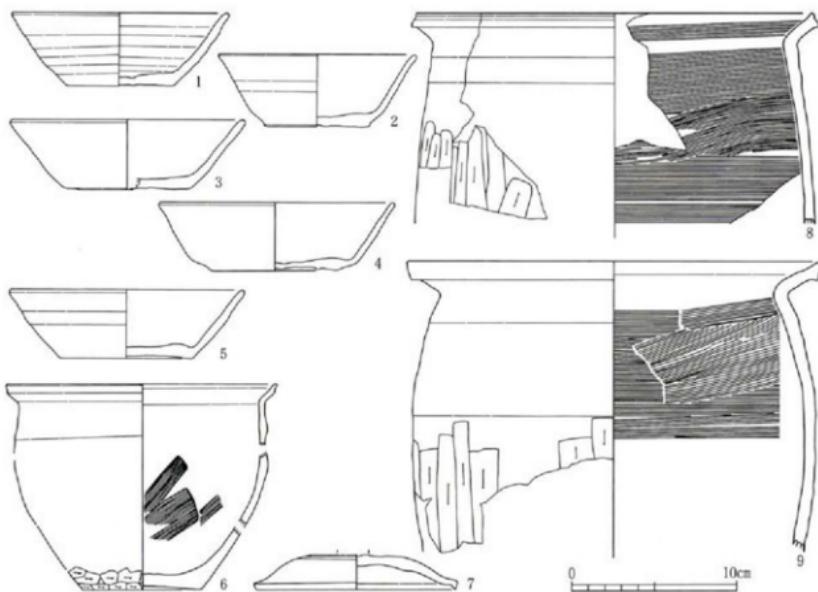
7 B55・57・58・61区

14(Ⅱ)区の南北それぞれに位置する調査区である。61区ではS B991の一部や土壤状の落ち込みを発見し、55区ではS D945南北溝とS D930東西溝、57・58区ではS X990土壙状遺構とそれに伴うS D943・935南北溝、S D987東西溝、S A977柱跡、S B992・993・994・995建物跡の一部などを発見した。

S D930: 51・56区で発見したS D1157と同一の東西溝である。S D945と重複しており、それより古い。規模は、上幅1.6mである。方向は、東西発掘基準線とほぼ一致している。

S D1274: S D930の約2m北側で発見した東西溝である。S D945と重複しており、それより古い。規模は、上幅0.4~1.0mである。方向は、東で約2度北に偏している。

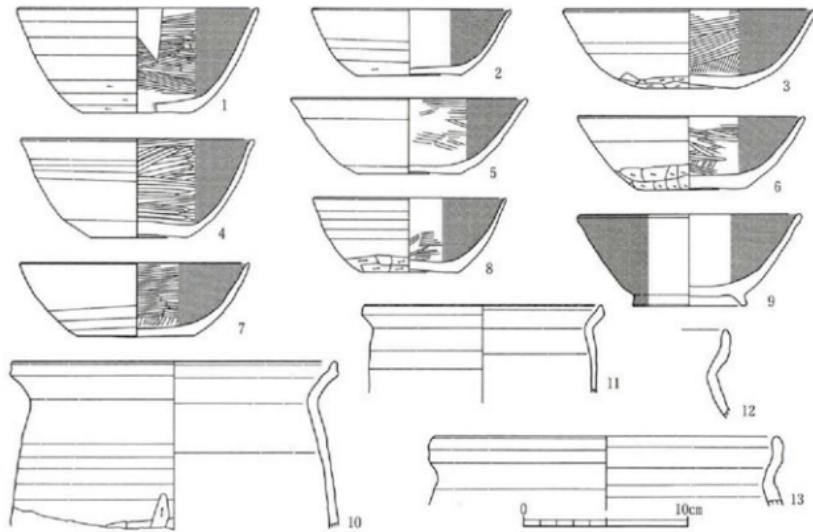
S X980: S X990の下層で発見した落ち込みである。同遺構を断割った幅0.9mのトレンチにおいて、その東壁を確認したに過ぎないため詳細は不明である。



单位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S XI 264・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	13.2 18/24	6.5 24/24	4.5	R-24	
2	須恵器・杯	P-2・埋土	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.0) 4/24	(6.4) 12/24	4.4	R-998	
3	須恵器・杯	P-1・埋土	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.2) 7/24	(7.6) 11/24	4.3	R-1001	
4	須恵器・杯	S D 1270・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.3) 12/24	7.8 24/24	4.2	R-1000	
5	須恵器・杯	P-6・埋土	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.2) 2/24	(8.0) 13/24	4.2	R-999	
6	土師器・甌	S XI 264・I層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 【内面】口縁：ロクロナデ 体部：ヘラナデ	16.4 19/24	7.1 24/24	12.5	R-1067	
7	須恵器・蓋	燒土層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	12.1 21/24	—	—	R-48	
8	土師器・甌	S XI 264・I層	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】回転ハケメ	24.0 4/24	—	—	R-1068	
9	土師器・甌	S XI 264・I層	【外面】ロクロナデ→ヘラナデ 【内面】回転ハケメ	(25.0) 14/24	—	—	R-1069	

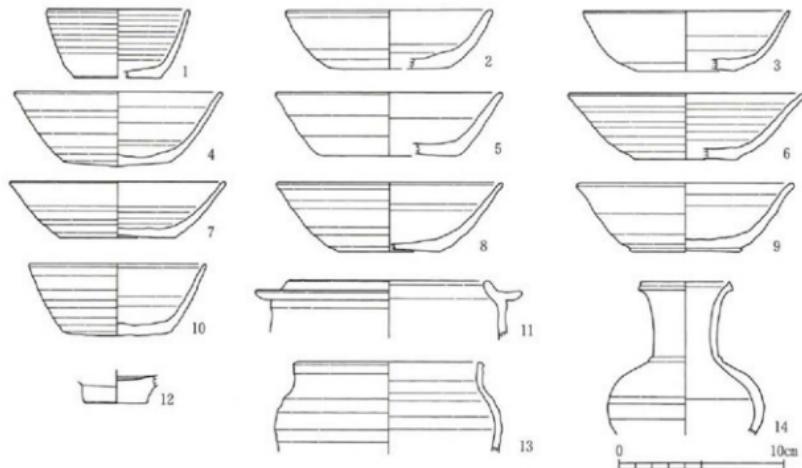
第168図 B61区出土遺物(1)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ (体部下半) 底部:回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.7) 8/24	(6.6) 9/24	6.4	R-986	
2	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ (体部下半) 底部:糸切り→回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	12.1 11/24	6.3 4/24	4.2	R-984	
3	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(15.4) 4/24	6.3 24/24	4.9	R-982	
4	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り	14.2 10/24	6.0 24/24	6.0	R-990	
5	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り	14.4 24/24	6.4 24/24	4.6	R-46	
6	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底部:糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	13.8 18/24	6.6 24/24	4.5	R-985	
7	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ (体部下半) 底部:ヘラ切り→回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.9) 11/24	7.1 24/24	4.5	R-983	
8	土師器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ (体部下端) 底部:回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(11.9) 5/24	(5.9) 12/24	4.6	R-981	
9	土師器・高台付杯	検出面	【外面】黒色処理 底部:回転糸切り→高台貼付 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.6) 3/24	6.9 24/24	5.6	R-991	
10	土師器・甕	検出面	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(19.6) 5/24	-	-	R-1061	
11	土師器・甕	検出面	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(14.5) 7/24	-	-	R-1062	
12	土師器・甕	検出面	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	-	-	-	R-1064	
13	土師器・甕	検出面	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(21.5) 3/24	-	-	R-1065	

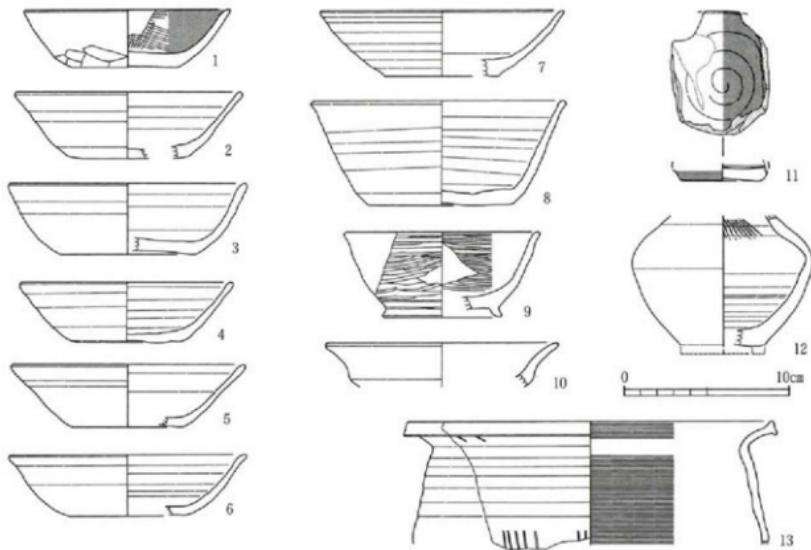
第169図 B61区出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	造構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(8.8) 1/24	(5.2) 6/24	4.2	R-1011	
2	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.6) 5/24	(7.9) 8/24	3.6	R-1010	
3	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: 糸切り 【内面】ロクロナデ	(12.5) 3/24	(6.0) 8/24	3.7	R-997	
4	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り	(12.7) 5/24	6.7 24/24	4.6	R-1007	
5	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(13.6) 1/24	(8.6) 7/24	3.9	R-1012	
6	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: 糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.4) 4/24	(6.4) 9/24	4.0	R-1009	
7	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.2) 3/24	(7.0) 14/24	3.5	R-1008	
8	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: 回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 7/24	(6.3) 8/24	4.2	R-1005	
9	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: 糸切り (補修) 【内面】ロクロナデ	(13.2) 7/24	(6.5) 15/24	4.2	R-1004	
10	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(10.8) 5/24	6.5 24/24	4.4	R-1006	
11	土師器・羽金	検出面	【外面】ロクロナデ 鋼径 (16.2) 【内面】ロクロナデ	(12.2) 9/24	—	—	R-108	
12	土師器・高台付杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部: 回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	—	3.8 24/24	—	R-988	
13	須恵器・知頭壺	検出面	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(11.6) 7/24	—	—	R-1016	
14	須恵器・小型瓶	検出面	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ (体部) 【内面】ロクロナデ	(5.4) 16/24	—	—	R-49	

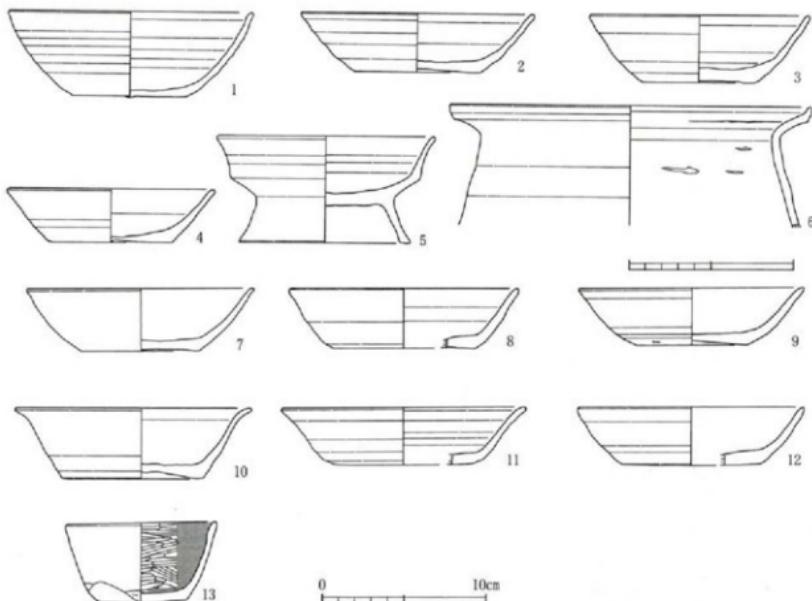
第170図 B61区出土遺物(3)



单位 (cm)

番号	種類	遺構	特 微	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S D989・1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下半)、漆付着 底部:手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→墨色処理、漆付着	12.5 16/24	6.4 24/24	3.5	R-79	
2	須恵器・杯	S D986・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 2/24	7.0 24/24	4.2	R-931	
3	須恵器・杯	S D988・1層	【外面】ロクロナデ 底部:手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(14.4) 6/24	(8.2) 17/24	4.3	R-1002	
4	須恵器・杯	S D987・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	12.9 16/24	6.7 24/24	3.7	R-930	
5	須恵器・杯	S D935D・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.2) 2/24	(6.9) 14/24	3.8	R-832	
6	須恵器・杯	S D935B・1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り、ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	(14.5) 5/24	(7.0) 10/24	3.7	R-879	
7	須恵器・杯	S D989・1層	【外面】ロクロナデ 底部:糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.8) 6/24	(6.9) 4/24	4.0	R-894	
8	須恵器・杯	S D1265・1層	【外面】ロクロナデ 底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	15.4 8/24	8.9 24/24	6.4	R-872	
9	須恵器・杯	S D935C・1層	【外面】ヘラミガキ 底部:高台貼付→ロクロナデ 【内面】ヘラミガキ	(11.8) 4/24	(7.2) 4/24	5.2	R-920	
10	灰釉陶器・三足皿	S D987・1層	【外面】ロクロナデ 【内面】施釉	(14.1) 3/24	-	-	R-967	
11	土師器・耳皿	S D935C・1層	【外面】ロクロナデ→黑色処理 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ→黑色処理	-	4.8 24/24	-	R-885	
12	須恵器・長颈瓶	S D935C・1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	-	(6.0) 3/24	-	R-903	
13	土師器・甕	S D986・1層	【外面】平行叩き→ロクロナデ 【内面】回転ハケメ	(22.2) 7/24	-	-	R-874	

第171図 B58区出土遺物(1)

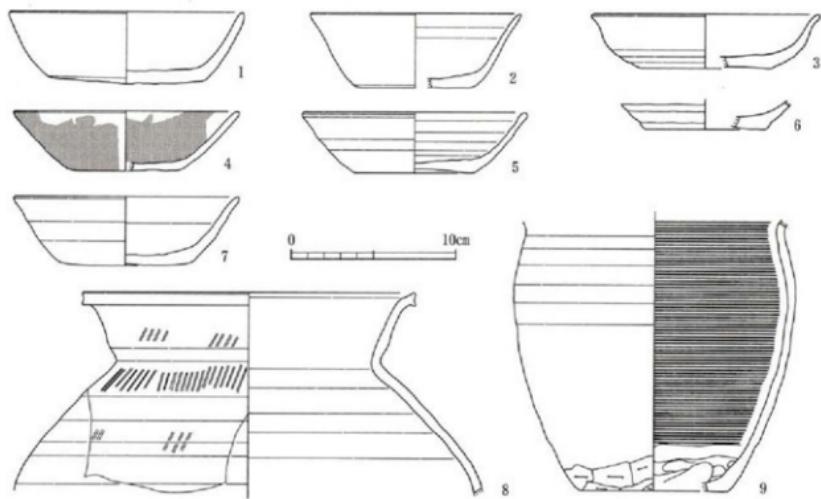


単位 (cm)

番号	種類	造構	特 徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S D945A・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(15.0) 9/24	7.0 15/24	5.3	R-897	
2	須恵器・杯	S D945A・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.7) 7/24	(7.6) 18/24	3.6	R-896	
3	須恵器・杯	S D945A・I層	【外面】ロクロナデ 底部：静止糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.4) 2/24	(6.8) 14/24	4.1	R-899	
4	須恵器・杯	S D945A・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.8) 4/24	(7.6) 14/24	3.3	R-895	
5	須恵器・高台付杯	S D945A・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	(13.4) 3/24	(10.4) 9/24	6.5	R-876	
6	土師器・甕	S D945A・I層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(22.0) 6/24	—	—	R-875	
7	須恵器・杯	整地層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り、ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	(14.0) 10/24	(7.3) 3/24	3.8	R-25	
8	須恵器・杯	整地層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.0) 4/24	(8.6) 7/24	3.7	R-908	
9	須恵器・杯	整地層	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ(体部下端) 底部：糸切り→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(13.7) 6/24	(6.7) 14/24	3.5	R-904	
10	須恵器・杯	整地層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.5) 1/24	(8.7) 12/24	4.3	R-907	
11	須恵器・杯	整地層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(15.0) 1/24	(8.8) 9/24	3.5	R-906	
12	須恵器・杯	整地層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 6/24	(8.4) 10/24	3.6	R-905	
13	土師器・杯	整地層	【外面】ロクロナデ 体部下端～底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	9.2 24/24	5.4 24/24	4.5	R-877	

第172図 B 58区出土遺物(2)

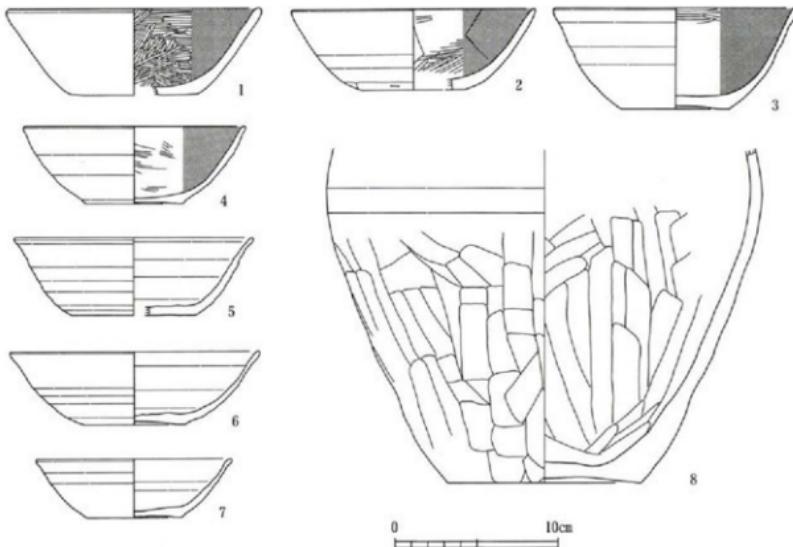
S D987 : 第VII層上面で発見した東西溝である。57区から58区にかけて約19.3m検出した。S A977、S D949、S X990と重複しており、S A977より新しいがその他のものより古い。方向は、東で約5度南に偏している。規模は、上幅約0.6mであるが、西半部では残存状況が悪く、57区では幅約0.3m、55区では検出できなかった。



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S A977・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	14.3 15/24	9.6 20/24	4.4	R-898	
2	須恵器・杯	S X982・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.8) 8/24	(7.5) 15/24	4.5	R-893	
3	須恵器・杯	S D935D・ 検出面	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.8) 7/24	(8.0) 8/24	3.8	R-940	
4	須恵器・杯	S A977・I層	【外面】ロクロナデ、油煙付着 底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ、油煙付着	(13.8) 4/24	(6.6) 13/24	3.7	R-902	
5	須恵器・杯	検出面	【外面】ロクロナデ 底部：回転系切り 【内面】ロクロナデ	(13.7) 10/24	(7.2) 15/24	3.7	R-918	
6	土師器・杯	S D935D・ 検出面	【外面】ロクロナデ、油煙付着 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	—	(7.3) 16/24	—	R-962	
7	須恵器・杯	S X981・I層	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(13.7) 2/24	(7.8) 3/24	4.2	R-900	
8	須恵器・甕	S D935D・ 検出面	【外面】平行叩き→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(20.2) 4/24	—	—	R-892	
9	土師器・甕	S X982・I層	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ（体部下端） 【内面】回転ハケメ、ナデ	— 6/24	(8.8) —	—	R-1820	

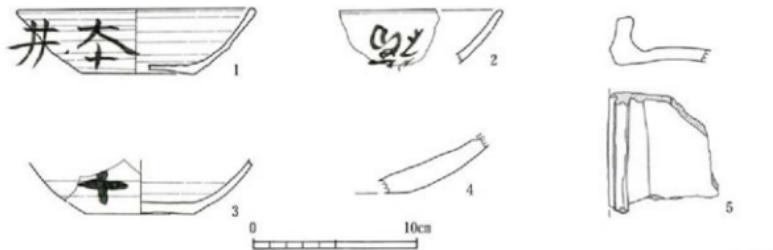
第173図 B 58区出土遺物(3)



単位(cm)

番号	種類	造構	層位	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(15.3) 2/24	(7.8) 7/24	5.3	R-884	
2	土師器・杯	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下端) 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.9) 2/24	(6.4) 7/24	5.0	R-699	
3	土師器・杯	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(14.8) 4/24	(6.5) 13/24	6.2	R-934	
4	土師器・杯	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ 底部:糸切り 【内面】ヘラミガキ→黒色処理	(13.6) 7/24	(6.0) 10/24	4.8	R-886	
5	須恵器・杯	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.6) 7/24	(7.6) 5/24	4.8	R-880	
6	須恵器・杯	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(15.3) 3/24	(6.2) 18/24	4.5	R-878	
7	須恵器・杯	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ 底部:回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(12.0) 4/24	(5.7) 8/24	3.6	R-881	
8	須恵器・甕	S D935 c	1層	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】ナデ	-	(11.8) 16/24	-	R-873	

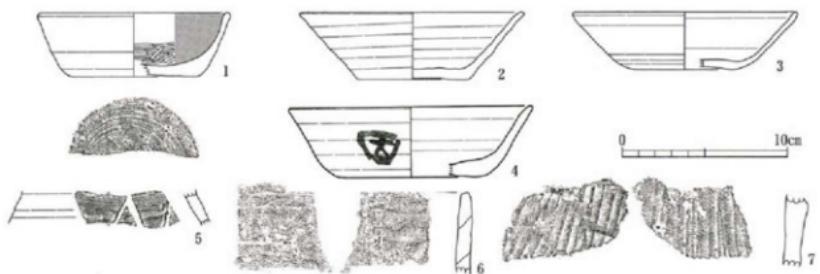
第174図 B58区出土遺物(4)



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	S D945A・1層	【外面】ロクロナデ、墨書 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	14.6 18/24	6.9 21/24	3.9	R-52	
2	須恵器・杯	S D945A・1層	【外面】ロクロナデ、墨書 【内面】ロクロナデ	—	—	—	R-64	
3	須恵器・杯	S D945A・1層	【外面】ロクロナデ、墨書 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	—	6.6 24/24	—	R-69	
4	土師器・甕	檢出面	【外面】手持ちヘラケズリ 【内面】ヘラナデ	—	—	—	R-831	
5	竈形土器	檢出面	【外面】 【内面】	—	—	—	R-823	

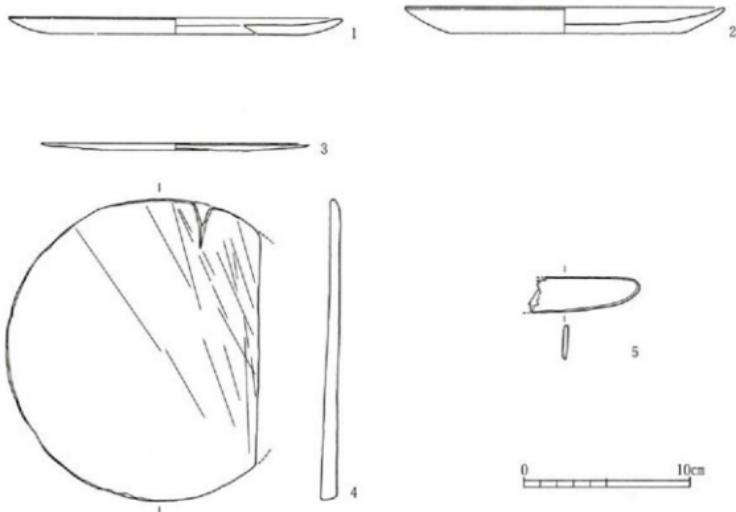
第175図 B55区出土遺物



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S A977・切り取り穴	【外面】ロクロナデ 底部：糸切り 【内面】ヘラミガキ→墨色処理	(11.8) 6/24	(7.8) 12/24	3.9	R-869	
2	須恵器・杯	S K1266・1層	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	13.7 17/24	6.7 24/24	4.1	R-854	
3	須恵器・杯	S K1266・1層	【外面】ロクロナデ 底部：糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.6) 5/24	(6.1) 10/24	3.5	R-867	
4	須恵器・杯	第I層	【外面】ロクロナデ、墨書 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(14.8) 3/24	(8.8) 7/24	4.3	R-56	
5	円面鏡	檢出面	【外面】ロクロナデ→縁刻 【内面】ロクロナデ	—	—	—	R-861	
6	製塙土器	P-13・埋土	【外面】 【内面】	—	—	—	R-1256	
7	竈形土器	S D1257・檢出面	【外面】平行叩き 【内面】	—	—	—	R-1259	

第176図 B57区出土遺物



単位(cm)

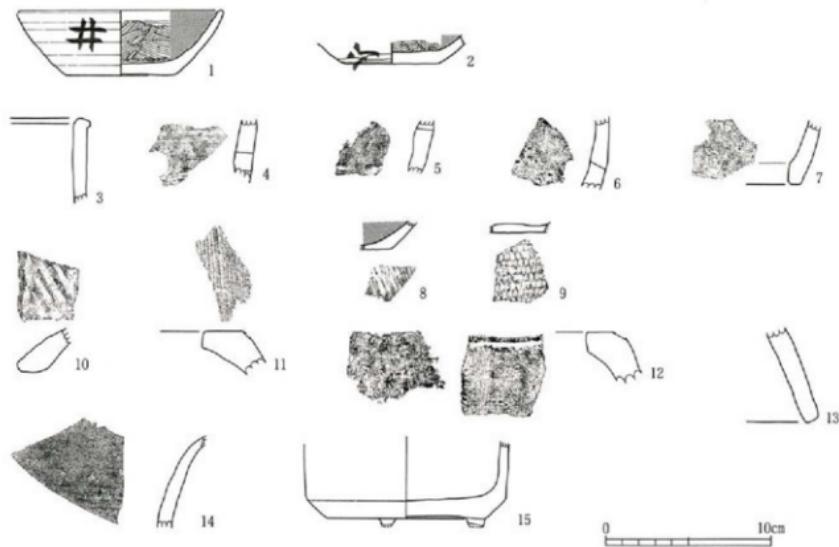
番号	種類	遺構	計測値	樹種	備考	登録番号	図版番号
1	挽物・皿	S D945A	径20.2×0.6	ケヤキ		R-1109	
2	挽物・皿	S D945A	径19.2×0.7	ケヤキ		R-1134	
3	挽物・皿	S D945A	径16.2×0.5	ケヤキ		R-1136	
4	曲物底板	S D935A	径18.1×1.0	スギ	刃物傷	R-1131	
5	刀子形	S D935A	6.8以上×2.1×0.4	ヒノキ科アスナロ属		R-1140	

第177図 B 55・58区出土遺物

8 B54区

S D1161南北溝と小規模な溝を数条発見した。

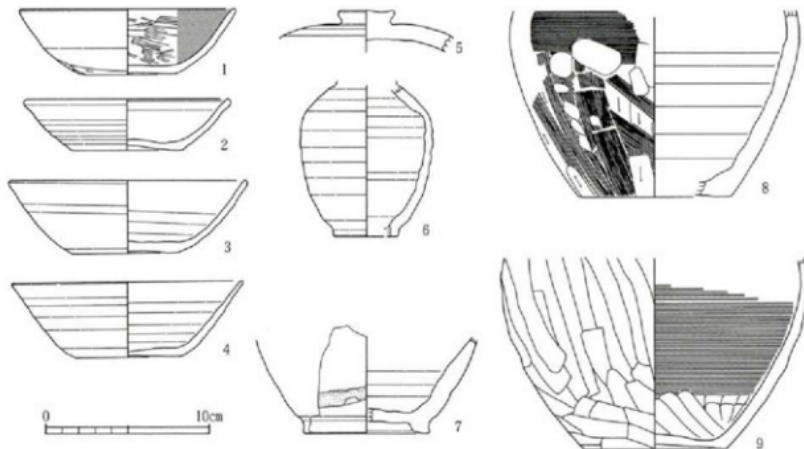
S D1161：東半部で発見した南北溝である。方向は南北発掘基準線とはほぼ一致しており、規模は上幅約0.6mである。規模や方向から、I3(N)区のS D968、56区のS D1062と同一の可能性がある。



単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器・杯	58区 S D935	【外面】ロクロナデ、墨書き 底部: 手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	(12.6) (6.6)	(6.6)	3.9	R-73	
2	土師器・杯	58区 S D935	【外面】ロクロナデーナデ(体部下端)、墨書き 底部: 手持ちヘラケズリ 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	-	(5.6)	-	R-698	
3	土師器・瓶	S D935A・I層	【外面】ヨコナデ 【内部】ヨコナデ	-	-	-	R-959	
4	土師器・瓶	検出面	【外面】 【内部】	-	-	-	R-951	
5	土師器・瓶	S D935B・I層	【外面】 【内部】	-	-	-	R-955	
6	土師器・瓶	S D935B・I層	【外面】 【内部】	-	-	-	R-956	
7	土師器・瓶	検出面	【外面】 【内部】	-	-	-	R-954	
8	土師器・甕	検出面	【外面】底部: ムシロ痕 【内部】ヘラミガキ→黒色処理	-	-	-	R-965	
9	土師器・甕	S D935B・I層	【外面】底部: ムシロ痕 【内部】手持ちヘラケズリ	-	-	-	R-966	
10	龜形土器	検出面	【外面】平行叩き 【内部】ヘラケズリーナデ	-	-	-	R-958	
11	龜形土器	S D935A・I層	【外面】板状の圧痕 【内部】ヨコナデ	-	-	-	R-953	
12	龜形土器	S D935A・I層	【外面】指頭痕→ヘラケズリ 【内部】	-	-	-	R-888	
13	龜形土器	S D935A・I層	【内部】 【外面】	-	-	-	R-889	
14	須恵器・甕	S D935D・ 検出面	【外面】ロクロナデ、ヘラ描き 【内部】ロクロナデ	-	-	-	R-1819	
15	近世施釉陶器	第I層	【外面】施釉 底部: 回転糸切り→高台貼付 【内部】施釉	- (9.6)	-	-	R-970	

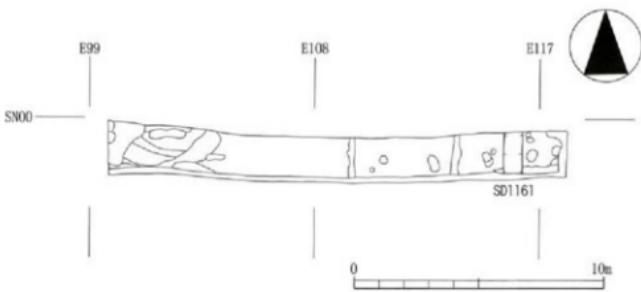
第178図 B58区出土遺物(5)



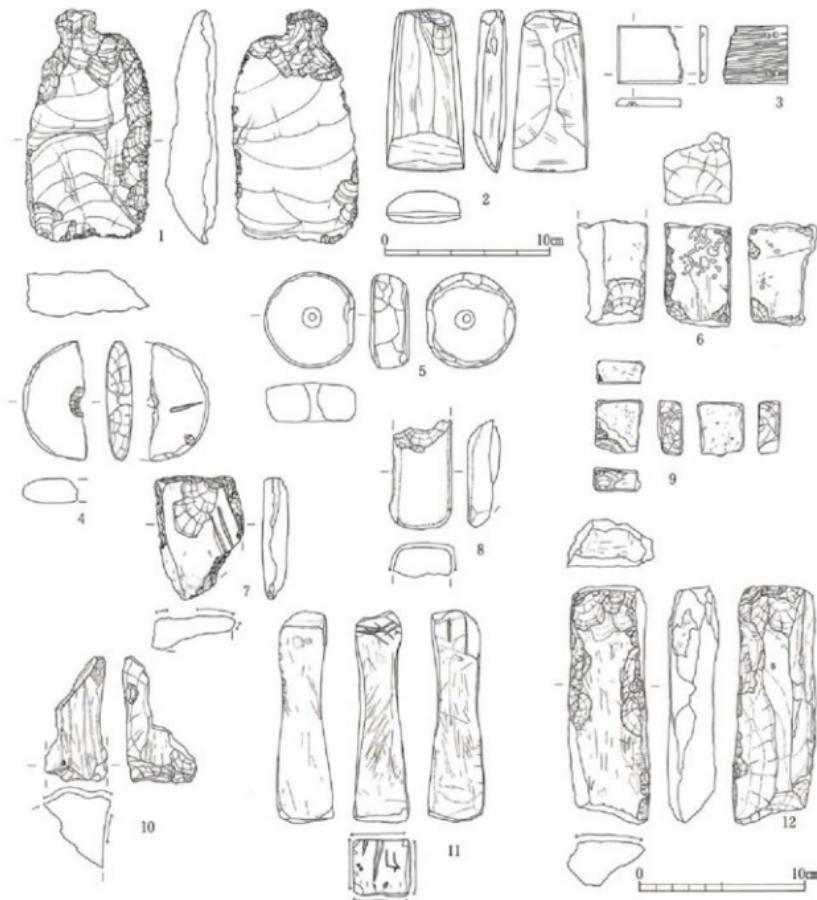
単位(cm)

番号	種類	遺構	特徴	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	S D945B・I層	【外】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ(体部下半) 底部: ヘラ切り→手持ちヘラケズリ 【内】ヘラミガキ→黒色処理	(13.1) 8/24	(5.9) 20/24	4.0	R-813	
2	須恵器・杯	S D945A・I層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り	(12.6) 5/24	(6.8) 10/24	3.2	R-812	
3	須恵器・杯	S D945A・I層	【外】ロクロナデ 底部: ヘラ切り 【内】ロクロナデ	14.5 13/24	6.4 24/24	4.5	R-816	
4	須恵器・杯	S D945A・I層	【外】ロクロナデ 底部: 回転糸切り 【内】ロクロナデ	(14.0) 7/24	(6.4) 13/24	4.6	R-811	
5	須恵器・蓋	検出面	【外】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内】ロクロナデ	—	—	—	R-828	
6	須恵器・瓶	S D945A・I層	【外】ロクロナデ 【内】ロクロナデ→ケズリ	—	(3.9) 6/24	—	R-815	
7	須恵器・瓶	S D945A・I層	【外】ロクロナデ→高台貼付、焼台痕 【内】ロクロナデ	—	7.6 11/24	—	R-814	
8	須恵器・甕	S D945A・I層	【外】ロクロナデ→ヘラケズリ→カキメ・ハケメ 【内】ロクロナデ	—	(9.2) 6/24	—	R-818	
9	須恵器・甕	S D945A・I層	【外】ヘラケズリ 底部: ヘラケズリ 【内】回転ハケメ	—	(8.5) 16/24	—	R-817	

第179図 B55区出土遺物



第180図 B 54区平面図



No.	調査区	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石材	器種	備考	図版番号	登録番号
1	B51区	検出面	7.10	3.80	1.60	45.1	珪質頁岩	石瓢	自然面有	図版17-10	R-1449
2	B58区	西整地層	5.00	2.30	0.90	17.1	綠泥岩?	扁平片瓦石斧			R-1801
3	B13区	第1層	3.90	3.50	0.45	16.5	花崗岩?	石帶 鮎尾	裏面削切痕		R-1800
4	B59区	検出面	7.20	4.00	1.50	50.4	砂岩	防衛車			R-1127
5	B50区	検出面	5.80	5.50	2.30	95	凝灰岩	防衛車		図版17-11	R-1323
6	B55区	第1層	6.10	4.00	4.20	153.3	砂岩	砾石	砾面 4面		R-852
7	B14区	S K934・1層	7.40	5.20	1.50	64.5	粘板岩	砾石	砾面 4面		R-562
8	B14区	SD943	6.60	3.75	1.95	55.0	砂岩	砾石	砾面 3面		R-1851
9	B58区	検出面	2.90	3.20	1.40	18.5	凝灰岩(細粒)	砾石	砾面 5面		R-975
10	B58区	検出面	7.50	4.10	4.60	69.2	凝灰岩(細粒)	砾石	砾面 3面		R-974
11	B58区	SD935C	12.80	3.50	3.50	172.2	凝灰岩(細粒)	砾石	砾面 5面		R-891
12	B58区	検出面	14.40	5.00	2.85	306.3	粘板岩	砾石	砾面 4面		R-976

第181図 第24・25次調査出土石製品

附章2 市川橋遺跡高平地区出土の墨書き土器

市川橋遺跡高平地区（城南地区B地区）では、これまでの調査によって木簡、漆紙文書、墨書き土器、刻書き土器など多くの文字資料が出土している。本章は、その内の墨書き土器と刻書き土器を集成し、若干の考察を行ったものである。はじめに凡例を示すと次のとおりである。

- 1 多賀城市教育委員会が実施した市川橋遺跡第5・7・9・14・24・25次調査出土資料219点を対象とし、そのうち釈読できそうなもの160点を表13～15、第184～193図に掲げた。ただし多賀城跡第22次調査地区（高平遺跡）出土資料は割愛した。
- 2 表13～15において、遺構・層位に（ ）が付されているものは仮番号である。
- 3 表13～15において、釈文及び備考に使用した符号は以下の通りである。

「□□」	判読できないが記載数が明確なもの。
「□」カ	確定し難いもの。
「□」・「□」	同一の部位の文字について意味を持つ二文字でなく、それぞれ一文字づつで意味を持つと解釈したもの。
- 4 焼成後、文字・記号などを彫り込んだものについて「ヘラ書（描）き」「線刻」「刻書」などの名称みられるが、ここでは「刻書」と呼ぶ。
- 5 漆液による筆書きも含めた。
- 6 集成に際し、既報告書等の実測図・表の記載を一部改めたものがある。

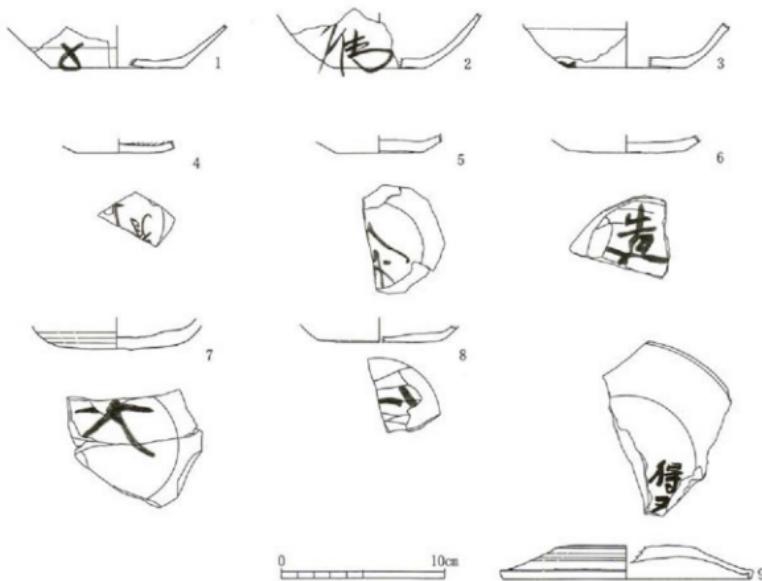
(1) 墨書き土器の概要

分布・出土遺構・種別・器種・製作時期・記載部位・記載方向・記文などについて述べる。分布をみると5次調査区9点、7次調査区89点、9次調査区58点、14次調査区1点、25次調査区14区47点、49区1点、24次調査区16点、55区3点、58区2点、57・59・60区がそれぞれ1点ずつである。7次・9次・14区で全体の89%を占める。出土遺構は溝が104点、堆積層37点、水田跡30点、整地層25点、土壤16点、柱穴2点、井戸・表面採集・攪乱がそれぞれ1点ずつである。なお不明が1点ある。種別は須恵器が179点、土師器38点、瓦1点である。器種は杯208点、甕5点、高台付杯2点、稜碗・蓋がそれぞれ1点ずつである。須恵系土器は出土していない。製作時期は10世紀前葉以前である。8世紀末から9世紀初頭では7次調査区、9世紀前葉から中葉では14区(Ⅱ)と9次調査区に出土が集中する。記載部位は底部外面が52%、体部外面41%、体部内面4%、底部内面3%である。記載方向は正位が49%、横位が11%、倒位が6%である。なお不明が34%である。また体部外面横位で記載される12点のうち8点が7次調査区で出土している。記文は、完形品が少ないという資料の制約があるものの84種127点を確認した。また多賀城内・城外に類例のない記文は40種類43点ある。ただし中には記号か文字か判別できないものもある。一点あたりの記載文字数は一文字182点、二文字32点、四文字4点である。また、二文字と四文字のうち22点が7次調査区で出土している。内容は意味が限定できない「井」「大」「上」「足」「中」「長」などの他に、ある程度意味が推測できる「二」「十」「千」「万」「政所」「厨」「守」「尾張」「宮」「礎上」「泰」「水鉢」「酒」などがある。書体は楷書がある。また「山」「木」などの篆書体もある。ただし字体の崩れた字には行書・草書がある可能性もある。

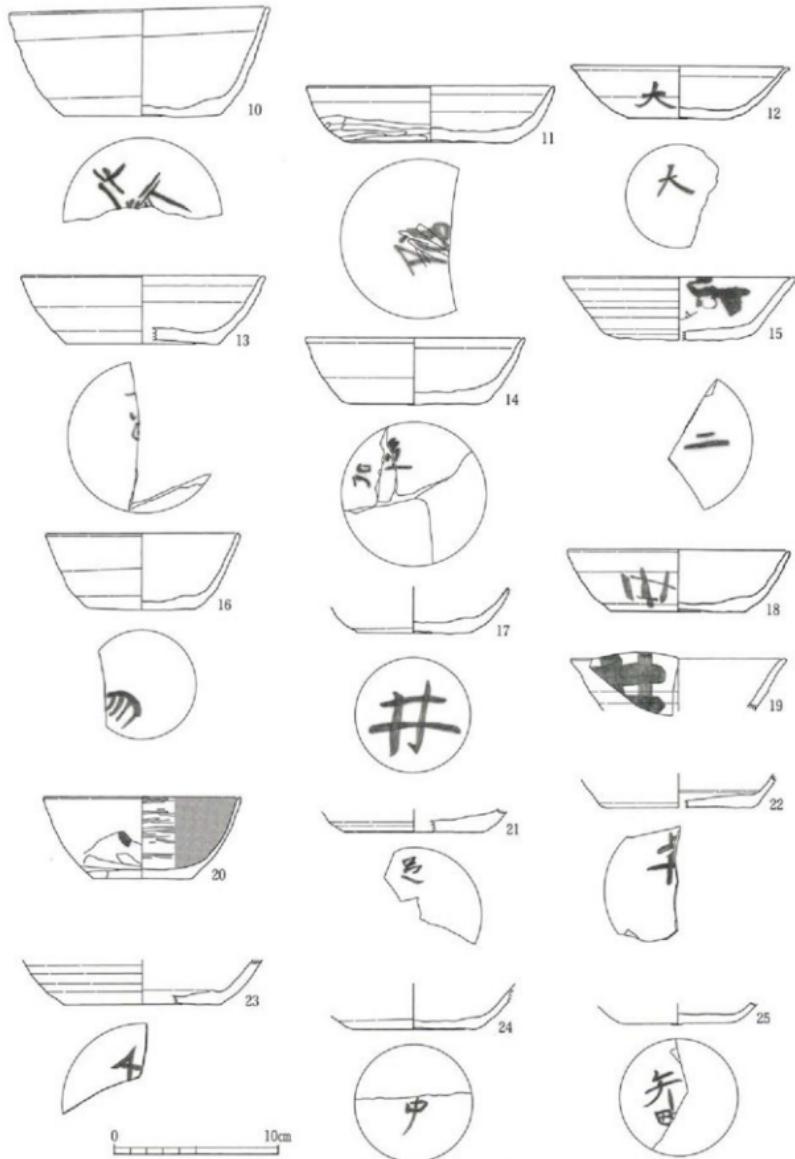
また前述したように、調査区で墨書き土器の出土点数に格差がみられる。これは出土の多い調査区と少ない調査区とで墨書き土器の管理・保管のされ方が異なっていたり、場の性格が異なっていたことを示すであろう。また多賀城域内・城外に類例がない軒文は、B地区の土器を使用する目的に応じて識別するために書かれたものであろう。

(2) 文字資料の時期別検討

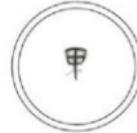
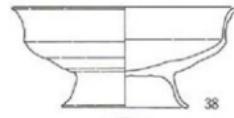
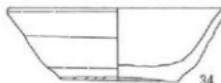
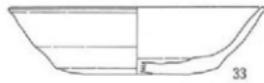
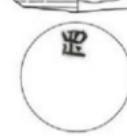
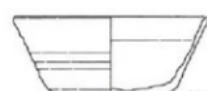
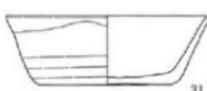
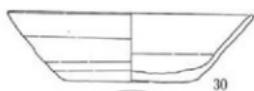
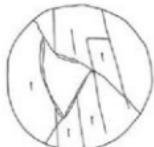
A 8世紀末から9世紀初頭 「磯上」(151)、「口上酒杯」(113)、「尾張」(49)(50)(51)(52)、「宮」(26)(27)、「木口」(37)「厨」(34)などがある。「磯上」(151)は筆慣れた書体で、「磯」に比べて「上」が小さく、「磯」と「上」が接近して書かれる。「口上」(56)「口上酒杯」(113)にも同じ特徴が確認でき、欠損部分は「磯」とみられる。(151)(56)(113)は同筆とみてよからう。「磯上酒杯」は、「磯上」が腰盤の際に使用した「酒杯」を示すであろう。「尾張」は筆慣れた書体で、「尾」の一画目と二画目が一筆で書かれる。また七画目の払いが大きく右に流れる。「張」の特徴は明確でないが旁が類似しているようである。4点とも同筆とみてよからう。「宮」は、山王遺跡多賀前地区で出土した「宮城」「宮郡」が「宮城郡」を省略したとされることから(宮城県教委ほか:1996)「宮」は「宮城郡」を省略した可能性があろう。2点ともやや肉太で縱長に書かれる。同筆とみてよからう。「木口」は高平遺跡に類例がある(宮城県多賀城跡調査研究所:1974)。2点とも肉細で「木」に比べて「口」が小さい。同筆の可能性があろう。また高平遺跡と7次調査区との間は古代の沢が入っており、また遺構・遺物が少ない。従って高平地区と7次調査



第182図 第5次調査出土墨書き土器

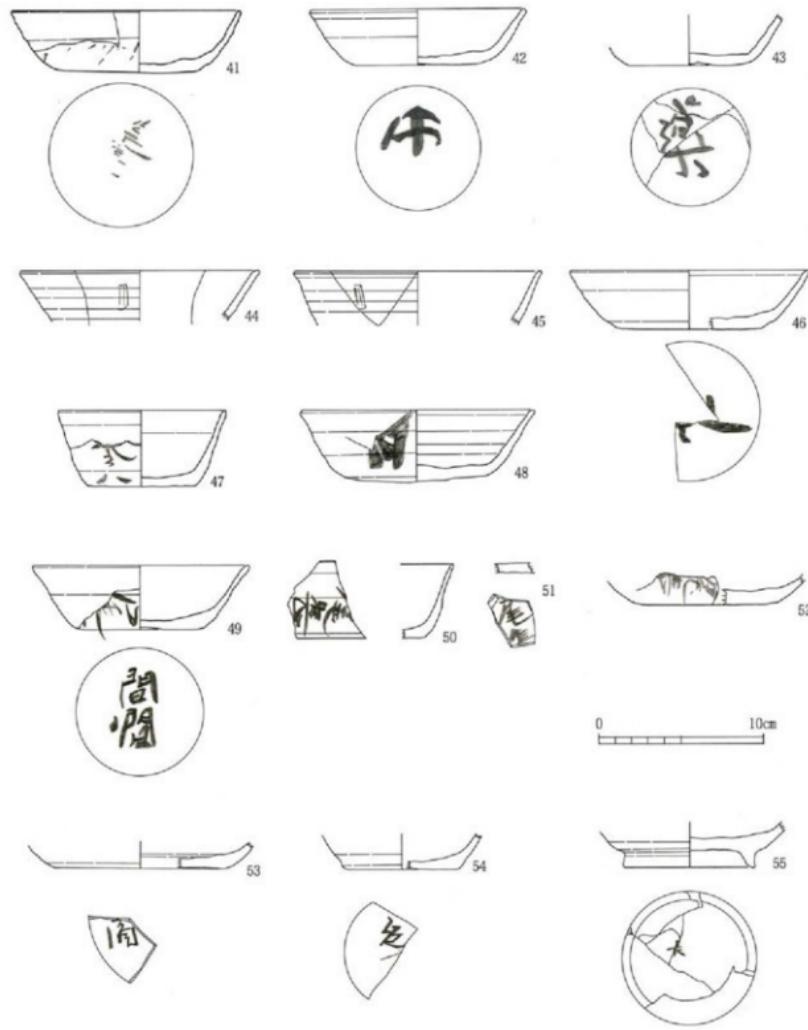


第183図 第7次調査出土墨書土器(1)



0 10cm

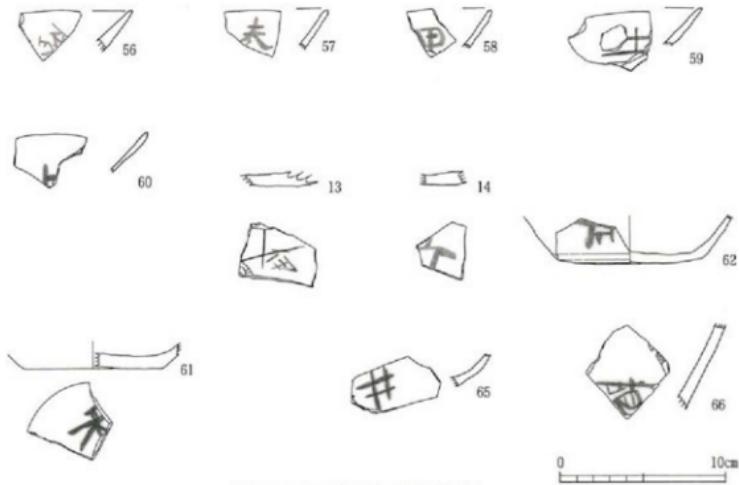
第184図 第7次調査出土墨書土器(2)



第185図 第7次調査出土墨書き器(3)

区は方格地割内の別々の区画だったことが考えられる。そうすると「木口」は7次調査区との間で方格地割の区画を越えて、物品や人の移動があったことを示す可能性があろう。「厨」は5次調査区（5）、多賀城大畠・作貫地区、山王遺跡八幡・多賀前・千刈田地区、館前遺跡に類例がある。「厨」は国・郡の厨施設が管理・保管する意味で記載されたとする（原：1988、津野：1990）。その一方で「基本的には、国府・郡家等の官衙内外における恒例行事や臨時行事あるいは接待等に対して」「饗饌のために『国厨之饌』『郡厨之饌』」の意味において「記録したもの」とし、その出土地点は「饗饌の場における廃棄場所またはそれらの饗饌を弁備する厨施設」であったとされる（平川：1993）。そうすると「厨」の出土地付近には日常的な給食活動に関わる厨施設、饗饌を弁備する厨施設、饗饌の場などがあった可能性を考える必要があろう。またS E948では春米貢進付札木簡「五斗黒春」が出土している。「黒春」は「黒春米」の省略である（本書「附章3」）。春米は「諸司常食」として「官人月料」に充てられたとされる（『国史大辞典』「春米」）。そして「平城宮跡内の各所から出土する春米付札木簡は、米の現物に付属して最終的な消費の場となった中央官司の厨房機関で廃棄されたことを示す」という（『国史大辞典』「年料春米」）。従って「五斗黒春」は、官人が春米を最終的に消費した場である官衙の厨施設で廃棄されたことを示すものであろう。また陸奥国の調庸物は京進されず、すべて当國で消費されたとされる（平川：1976、寺崎：1983）。そうすると厨施設は、陸奥国衙の出先機関を指すことが考えられよう。よって「厨」は陸奥国衙出先の厨施設が管理・保管した土器を示す可能性があろう。

そこでここでは、Ⓐ「厨」を含むSK236の墨書き土器、ⒷSK236の「尾張」（50）と同筆の「尾張」（51）、Ⓒ「尾張」（51）と同じ水田跡194から出土した墨書き土器、Ⓓ水田跡194の「礎上」（56）と同筆の「礎上酒壺」（113）、「礎上」（151）を対象として、厨施設の土器収納のありかたから土器の使用目的や使用者を検討し、厨施設の性格を考えてみたい。ここでは墨書き土器の記載部位に着目する。記載部位は土器の収納の



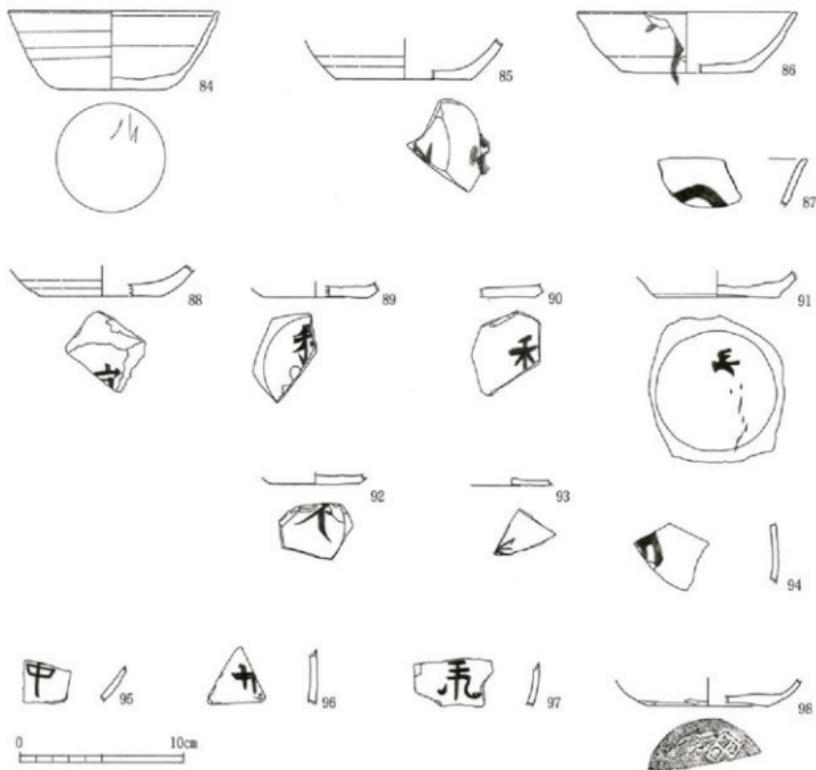
第186図 第7次調査出土墨書き土器(4)



第187図 第9次調査出土墨書土器(1)

されかたを反映しており、それが管理・保管のされかたを示す可能性があるからである。また「記載部位は土器の使用目的によりその位置を決められる」(平川1993)とされるからである。そして検討の対象に(a)(c)(d)を含めたのは、(b)(c)(d)は(a)と同じ時期に収納された可能性が高いからである。

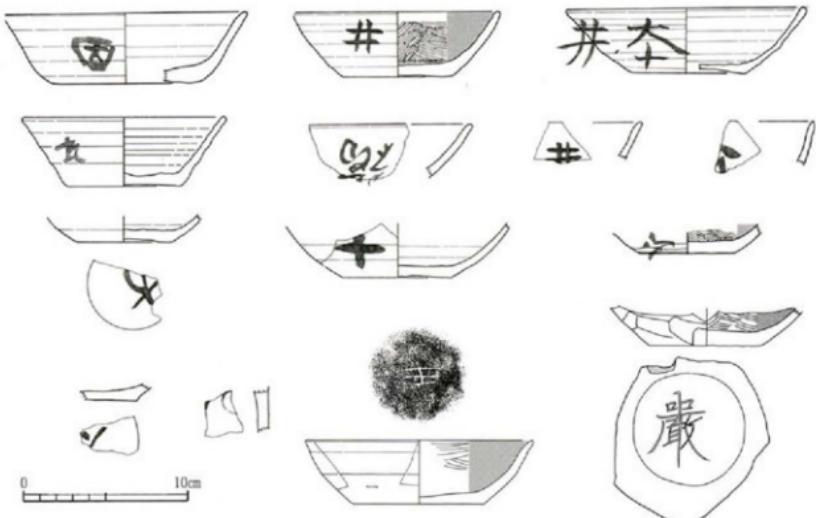
(a)(b)(c)(d)は記載部位の違いで大きく2つに区別できる。(a)底部外面の「厨」「万」「口」「十」「岡」「甲」か「上」「尾張」「加」「足」「礪上酒杯」と、(c)体部外面の「宮」「中」「人」「口」「木口」「尾張」「礪上」「秦」「井」「口」「礪上」である。この(a)と(c)は収納が別々であることを示すであろう。また「宮」「尾張」「礪上(酒杯)」のように、同筆で同じ釘文の土器が別々に収納されることは、同じ人が使った土器でも(a)と(c)では使用する目的が異なり、管理・保管が別々であった可能性があろう。つまり底部外面の「礪上酒杯」(113)を「礪上」が(a)饗饌の際に使用した「酒杯」とすれば、体部外面の「礪上」(56)(151)は「礪上」が饗饌以外の場で使用した土器、すなわち(b)日常的な食事の際に使用した土器の可能性があろう。よって(a)(c)の違いも(a)(b)を反映したとすれば、厨施設は饗饌の際に使用した土器と日常的な食事の際に使用した土器を別々に管理・保管した可能性があろう。そうすると厨施設は恒例行事や臨時行事



第188図 第9次調査出土墨書き土器(2)

あるいは接客等に対する饗饌や、日常的な給食活動に関与したであろう。

また例のうち「中」「人」「口」は正位、「宮」「木口」「尾張」「礎上」は横位を採る。そこで釁文の記載方向と記載数に着目すると、横位を採る4点のうち3点は二字である。多賀城城内・城外出土墨書土器のうち体部外面横位に二字で記載される釁文をみると、多賀城跡大畠地区 S K2106の「信夫」(宮城県多賀城跡調査研究所:1992)、山王遺跡多賀前地区の「宇多」「宇多」カ「多木」カ「多田」カ「口長」「口万」「小田」(宮城県教委ほか:1986)、山王遺跡伏石地区的「山本」カ(宮城県教委ほか:1997)がある。そのうち「信夫」「宇多」「小田」は陸奥国の郡名を指す。「山本」は七ヶ宿町小梁川遺跡に2点類例がある。小梁川遺跡は刈田郡にあり「山本」が刈田郡の「山本」を指すとすれば、伏石地区と刈田郡とで人や物品の移動があったことを示す可能性があろう。「多木」カ「多田」カは同じ多賀前地区の「宇多長」「宇多女」「宇多田」「宇多利」などから、「宇多」を冠する人名を省略した可能性が高いとされる(宮城県教委ほか:1996)。このように体部外面横位に二字で記載される釁文は、陸奥国の地名や陸奥国に居住する人名を指すものが多い。従って「木口」「尾張」「礎上」を陸奥国内のものとすれば、陸奥国の地名にないことから、陸奥国に居住する人名を指すであろう。一方で(A) S K236では平城宮分類の壺Gが出土しており(多賀城市教委1990)、B地区と陸奥国外とで物品や人が移動した可能性がある。よって陸奥国の地名にない「木口」「尾張」「礎上」は、陸奥国外の地名や陸奥国外に居住する人々を指した可能性もある。そこで「尾張」「礎上」が地名を指すとすれば「尾張」は尾張國、上野國綿野郡尾張郷、河内国安宿郡尾張郷、信濃國水内郡尾張郷、備前國邑久郡尾張郷、「礎上」は美野國席田郡礎上郷、下野國那須郡石上郷、常陸國那珂郡石上郷、大和國山邊郡石上郷(『後名類聚抄』)に関わるものであろう。そのうち上野国・信濃国・美濃国・下野国・常陸国は柵戸・鎮兵・兵士の出身国とされ、また延暦晩年から弘仁初年において他国からの鎮兵の派遣が行われたとされる(佐々木:1985)。そうすると「木口」「尾張」「礎上」は柵戸・鎮兵・



第189図 第24次調査出土墨書土器

兵士のいずれかを指す可能性もある。

このように9世紀初頭のB地区には、陸奥国衙出先の調施設があったとみられ、日常的な給食活動ばかりでなく、多賀城城外の恒例行事や臨時行事あるいは接客等に対する饗饌を弁備したことが考えられよう。またこの給食や饗饌には、B地区の人々や方格地割内の別区画の人々ばかりでなく、陸奥国内あるいは陸奥国外に居住する人々が参加していた可能性がある。

B 9世紀前葉から中葉 14区のS D935(A)と55区 S D945(A)から貢進物の荷札木簡が出土している（本書「附章3」）。この木簡は、貢進物が最終的に消費された場で廃棄されることを示すとみられる。この貢進物が官人に供給されたとすれば、B区には陸奥国衙の出先機関や官人の家政機関があった可能性がある。そこでこれらの活動を反映した可能性のある「守」（140）、「政所」（141）について述べてみたい。

「守」は山王遺跡多賀前地区南1西2区に5点類例がある。多賀前地区的「守」は、B2期（9世紀中葉）「國守」館の周辺に集中することから、「守」が官職を指す可能性が指摘されている。（宮城県教委ほか：1996）従って「守」は官職名を指す可能性があろう。そうすると「守」は「守」か陸奥国衙の出先施設で国衙行政の活動を行った可能性や、家政機関で家政を行ったことを示すであろう。また「守」が多賀前地区的「守」を指すとすれば、多賀前地区的「守」は、陸奥国衙の出先施設で国衙行政の活動を行った可能性や、「國守」館の出先施設で家政を行ったことを示すであろう。「政所」はA地区1区河川跡1（多賀城市教育委員会：1999）、多賀城跡大畠地区S K2106（9世紀前半から後葉）の「政所」カに類例がある（宮城県多賀城跡調査研究所：1993）。「所」は『『一区画が高く平らになっている場所が原義』であり、『転じて、周囲よりも際だっている区域、特に區別すべき箇所の意』で広く用いられる』とされる（吉田：1987）。そうすると「政所」は「所管の庶政を執る事務所」（『国史大辞典』『政所』）およびその施設を含む区域を指すであろう。従って「政所」は陸奥国衙の出先施設およびその施設を含む区域や、官人の居宅のうち「所管の庶政を執る事務所」およびその施設を含む区域を指す可能性があろう。さらに「所」の出現を9世紀以降に求める見解があることから（佐藤：1977）、「政所」は陸奥国衙から独立した曹司が多賀城城外にあったことを示す可能性もある。また「政所」が多賀城大畠地区的「政所」を指すとすれば、B地区は陸奥国衙の出先機関が「庶政を執る活動」を行ったことを示すであろう。さらに「政所」がAブロックの「政所」を指すとすれば、B地区は陸奥国衙の出先機関または官人の家政機関が「庶政を執る活動」を行ったことを示すであろう。そしてその官人が前述した「守」であるとすれば「政所」は「守」の家政機関を示した可能性もある。

	出土点数	面積 掲載分
5次	9	9
7次	89	57
9次	58	32
14次	1	0
24次	47	47
49区	1	1
51区	6	6
55区	3	3
57区	1	1
58区	2	2
59区	1	1
60区	1	1
計	219	160

表16 墨書き土器調査区別集計表

	須 恵 器					土師器		瓦 平瓦	計
	杯	高台付杯	縁模	蓋	甕	杯	甕		
5次	6			1		2			9
7次	81	1	1			4	2		89
9次	39				2	16		1	58
14次							1		1
24次	39	1				7			47
49区	1								1
51区	3					2	1		6
55区	3								3
57区	1								1
58区						2			2
59区						1			1
60区	1								1
計	173	2	1	1	2	35	3	1	219

表17 墨書き土器器種別集計表

このように9世紀前葉から中葉のB区は、陸奥国衙の曹司、陸奥国衙の出先機関、あるいは国司クラスの家政機関があったことが考えられよう。そしてこれらの活動は方格地割内の区画を越えるばかりでなく、多賀城城内にも及んだであろう。

C 時期が特定できない新文 時期は特定できないが、9世紀代の新文に「厨」(5)、「酒」(53)、「夫」(81)、「巣」(112)「山」(150)などがある。「厨」は前述のように、出土土地付近に日常的な給食に関わる厨施設、饗饌を弁備する厨施設、饗饌の場などがあったと考えられよう。「酒」は山王遺跡多賀前地区に「口酒」の類例がある(宮城県教委ほか:1996)。饗饌の際に使用されたものであろう。「夫」は「役夫」の省略であり、「役夫」の差発が行われたところで何らかの機会に使用されたとされる(鬼頭1995)。ただし8世紀末から9世紀中葉には陸奥国衙の曹司、陸奥国衙の出先機関、あるいは国司クラスの家政機関があった可能性があり、これらに所属する「役夫」が使用した可能性もある。「巣」は市川橋遺跡第6次調査区に類例がある。(多賀城市教育委員会:1986) いずれも同じ筆順、同じ大きさで刻書される。同筆とみてよかろう。そうすると「巣」は6次調査区と高平遺跡とで方格地割の区画を越えて物品や人が移動していたことを示す可能性がある。「山」(150)は高平遺跡に類例がある(宮城県多賀城跡調査研究所:1974)。「山」が高平遺跡の「山」を指すとすれば、「山」はI4区と高平遺跡とで方格地割の区画を越えて物品や人が移動していたことを示す可能性がある。

△	須 恵 器						土 師 器						計	
	杯			盞			杯			盞				
	体部内面		体部外面		体部内面		体部外面		体部外面		体部外面			
	正位	不明	正位	横位	倒位	不明	正位	横位	倒位	不明	正位	不明		
5次						1		1	1				3	
7次	1	2	16	7	8				2	1		1	1	39
9次	1	4	1	4	1	1	1	6			7	1	1	26
14区	1		8	1	3	4		3	1		1			22
51区			2									1		3
55区			2		1									3
57区			1											1
58区									1	1				2
59区														0
60区			1											1
計	2	3	35	9	17	6	1	12	2	1	8	2	2	100※

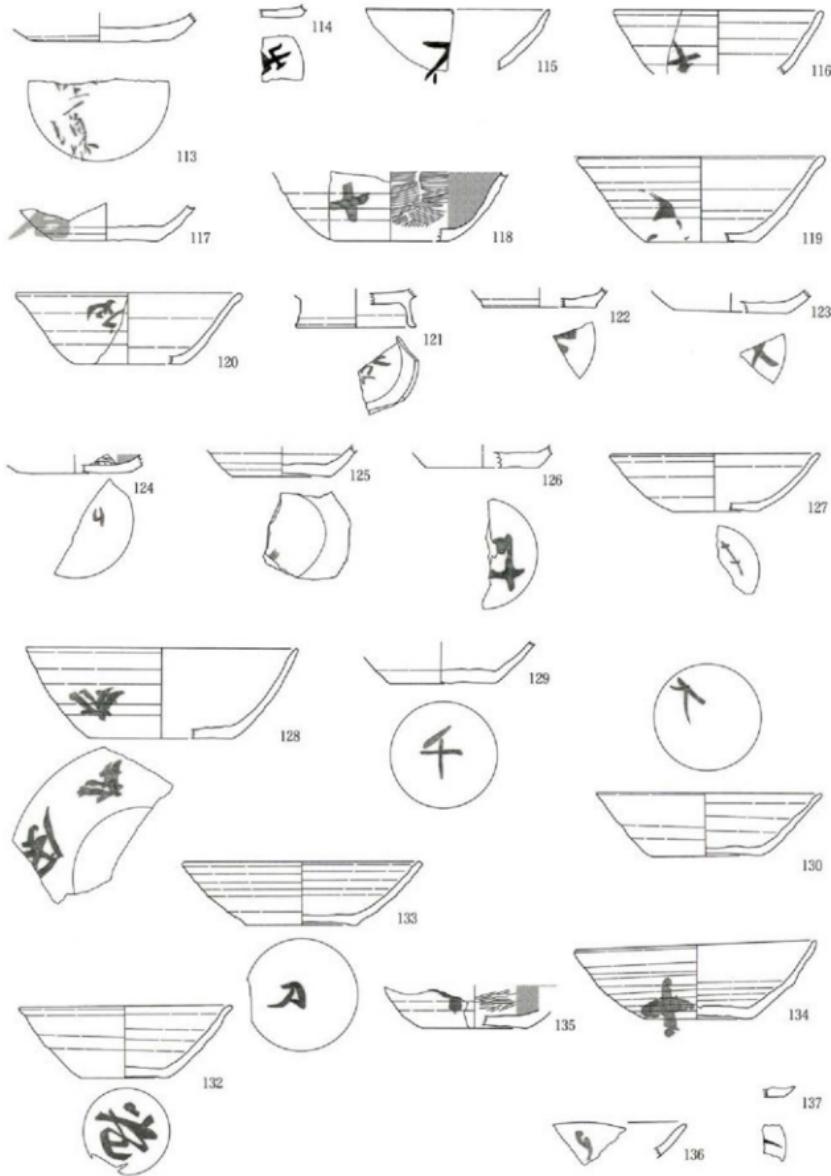
*同一個体において2つの部位に記載されたものは2つとも表に含めた。

表18 墨書き土器記載部位・方向別集計表

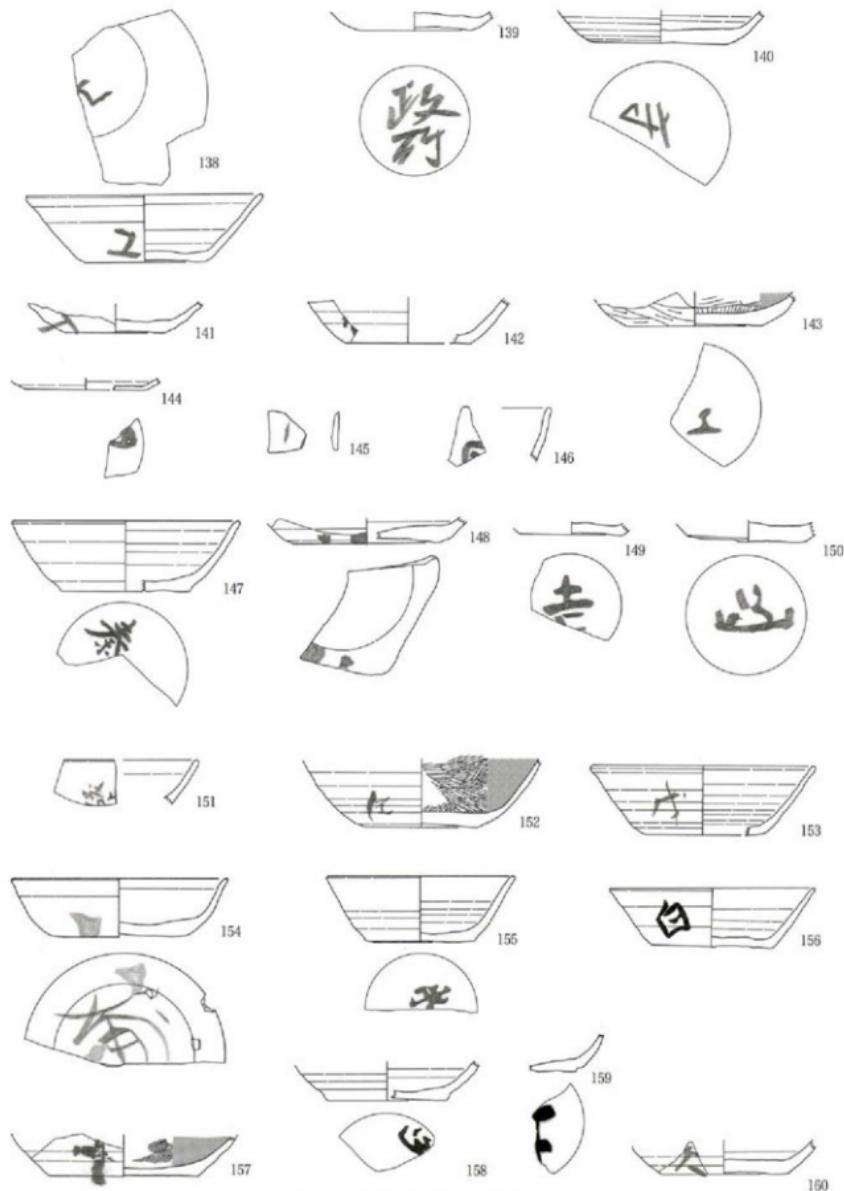
(3) まとめ

- ①B地区の中で墨書き土器の出土点数に格差がある。これは出土の多い調査区と少ない調査区とで墨書き土器の管理・保管のされ方が異なっていたり、場の性格が異なっていたことを示すとみられる。
- ②多賀城城内・城外に類例がない新文が40種類43点ある。これはB地区的土器を使用する目的に応じて識別するために書かれたものとみられる。
- ③9世紀初頭のB地区には陸奥国衙出先の厨施設があったとみられ、日常的な給食活動ばかりでなく、多賀城城外の恒例行事や臨時行事あるいは接待等に対する饗饌を弁備した可能性がある。
- ④9世紀前葉から中葉のB地区は陸奥国衙の曹司、陸奥国衙の出先機関、あるいは国司クラスの家政機関があつたことが考えられる。

本章を作成するにあたり、奈良国立文化財研究所の山中敏史氏にご教示を得た。



第190圖 第25次調查出土墨書土器(1)



第191図 第25次調査出土墨書土器(2)

番号	次数	区	遺構・層位	種別	器種	訛文	記載部位	記載方向	備考	登録
1	5		第V-a層・水田跡	須恵器	杯	「文」	体部外面	側位		43
2	5		第V層・水田跡	須恵器	杯	「雁」	体部外面	正位		21
3	5		S D130・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	不明		140
4	5		第V-a層・水田跡	土師器	杯	「前」	底部外面	—		230
5	5		第III層・水田跡	須恵器	杯	「崩」	底部外面	—		41
6	5		S D122・1層	土師器	杯	「造」	底部外面	—		42
7	5		S D136・6層	須恵器	杯	「大」	底部外面	—	内面底部刻書「×」	229
8	5		第III層・水田跡	須恵器	杯	「イ」	底部外面	—	人頭カ	131
9	5		S D125・2層	須恵器	蓋	「壺口」	天井部外面部	—	転用硯カ	6
10	7		第II層	須恵器	杯	「水鉢」	底部外面	—		79
11	7		第II層	須恵器	杯	「福」カ	底部外面	—		68
12	7		第I層	須恵器	杯	「大」	体部外面	正位		67
13	7		第II層	須恵器	杯	「大」	底部外面	—		70
14	7		水田跡194・1層	須恵器	杯	「加・足」	底部外面	—		45
15	7		第II層	須恵器	杯	「二」	底部外面	—		72
16	7		水田跡195・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	記号カ	48
17	7		水田跡194・3層	須恵器	杯	「井」	底部外面	—		36
18	7		第II層	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位	記号カ	69
19	7		第II層	須恵器	杯	「井」	体部外面	正位		84
20	7		水田跡194・3層	土師器	杯	「口」	体部外面	正位カ		41
21	7		第II層	須恵器	杯	「足」	底部外面	—		73
22	7		水田跡195・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		51
23	7		水田跡196・1層	須恵器	杯	「千」	底部外面	—		60
24	7		水田跡195・1層	須恵器	杯	「中」	底部外面	—		52
25	7		水田跡196・1層	須恵器	杯	「矢田」	底部外面	—		59
26	7		S K236・1層	土師器	杯	「宮」カ	底部外面	—		33
27	7		S K236・2層	土師器	杯	「宮」	体部外面	横位		38
28	7		S K236・4層	土師器	杯	「中」	体部外面	正位		22
29	7		S K236・2層	須恵器	杯	「人」	体部外面	正位		30
30	7		S K236・2層	須恵器	杯	「万・口」	体部外面	—		27
31	7		S K236・3層	須恵器	杯	「十」カ	底部外面	—		26
32	7		S K236・1層	須恵器	杯	「両」	底部外面	—		31
33	7		整地層③	須恵器	杯	「長」	底部外面	—		65
34	7		S K236・2層	須恵器	杯	「崩」	底部外面	—		29
35	7		整地層③	須恵器	杯	「丈」	底部外面	—		62
36	7		S K236・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位カ		32
37	7		S K236・4層	須恵器	杯	「木口」	体部外面	横位	底面ヘラ書き「×」	23
38	7		S K236・1層	須恵器	稜腕	「甲」	底部外面	—		89
39	7		整地層①	須恵器	杯	「井槽」	底部外面	—		63
40	7		S K236・4層	須恵器	杯	「上」	底部外面	—		25
41	7		S D201・2層	須恵器	杯	「筆口」カ	体部外面	横位	「筆」は異体字	1
42	7		S D203・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		6
43	7		S D209・1層	須恵器	杯	「漢」	底部外面	—		13
44	7		S D205・2層	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位	記号カ	8
45	7		S D206・2層	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位	記号カ	9
46	7		S D211・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	—		18
47	7		S D203・1層	須恵器	杯	「會八」	体部外面	正位		5
48	7		S D203・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	不明		3
49	7		S D203・1層	須恵器	杯	「尾口」	体部外面	横位		4
50	7		S K236・4層	須恵器	杯	「間間」	体部外面	—		24
51	7		水田跡194・1層	須恵器	杯	「尾張」	体部外面	横位		53
52	7		S D211・1層	須恵器	杯	「尾張」	体部外面	横位		19
53	7		S D204(a)・1層	須恵器	杯	「酒」	底部外面	—		10

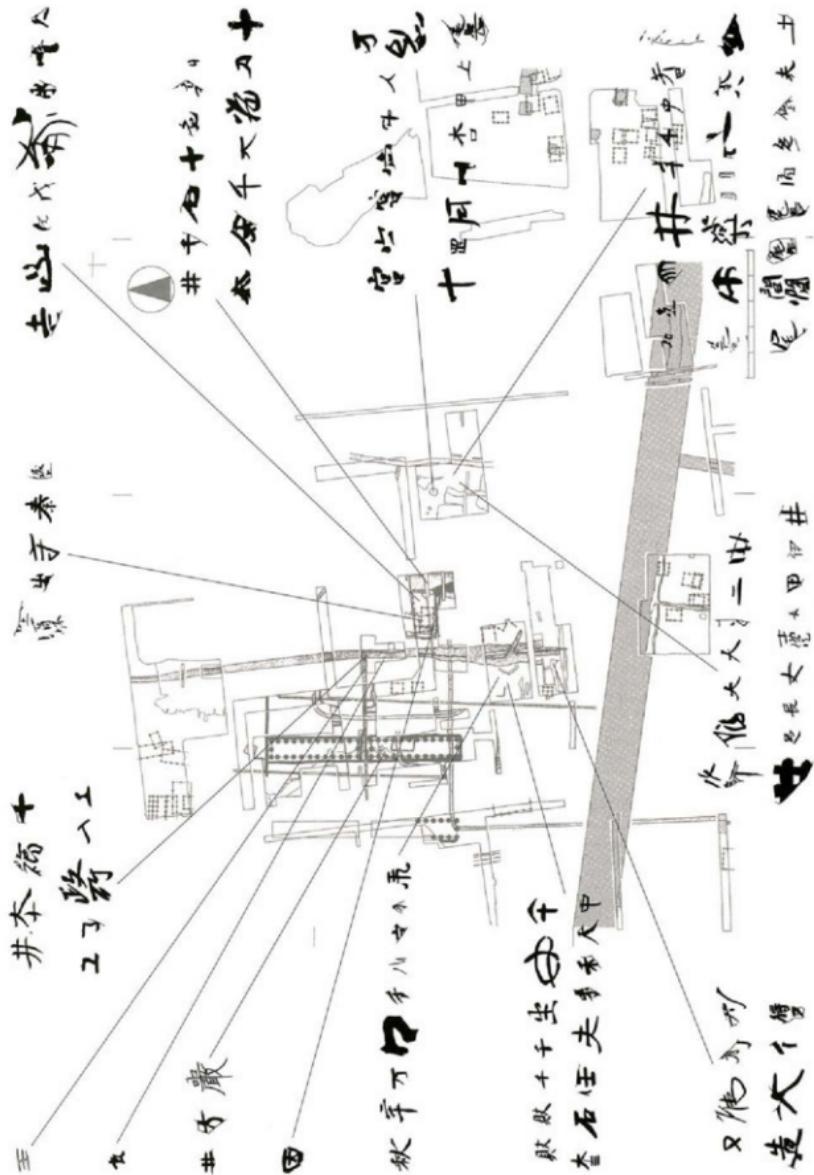
表13 市川橋遺跡高平地区出土墨書き土器一覧(1)

番号	次数	区	遺構・層位	種別	器種	訛文	記載部位	記載方向	備考	登録
54	7		(S D12)・I層	須恵器	杯	「足」カ	底部外面	—		16
55	7		第II層	須恵器	杯	「長」	底部外面	—		71
56	7		水田跡194・3層	須恵器	杯	「口上」	体部外面	横位		38
57	7		水田跡194・1層	須恵器	杯	「秦」カ	体部外面	正位		46
58	7		第II層	須恵器	杯	「甲」カ	体部外面	正位		76
59	7		水田跡195・1層	須恵器	杯	「土」カ	体部外面	正位		49
60	7		第II層	須恵器	杯	「上」カ	体部外面	正位		77
61	7		第II層	須恵器	杯	「禾」カ	底部外面	—		75
62	7		水田跡195・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	横位		50
63	7		第II層	須恵器	杯	「伊」	底部外面	—	底部刻書「X」	88
64	7		S D204(b)・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		11
65	7		第II層	須恵器	杯	「井」	体部外面	正位カ		78
66	7		(S D19)・I層	土師器	甕	「口」	体部外面	正位カ	人面墨書き	21
67	9		整地層E	土師器	杯	「財」	体部外面	正位		349
68	9		整地層E	土師器	杯	「千」	体部外面	正位		348
69	9		整地層	須恵器	杯	「生」	底部外面	—		163
70	9		整地層E	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位	記号カ	356
71	9		灰黃褐色土層	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位	記号カ	374
72	9		S D271・2層	須恵器	杯	「口」	体部外面	横位		18
73	9		S D315・2層	須恵器	杯	「秋」	底部外面	—		99
74	9		S D287・2層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	「牛」カ	43
75	9		S D315・1層	土師器	杯	「万」	底部外面	—		86
76	9		整地層E	須恵器	杯	「木主」カ	底部外面	—		358
77	9		整地層	須恵器	杯	「石」	底部外面	—		165
78	9		整地層	須恵器	杯	「任」カ	底部外面	—		162
79	9		S D274・I層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		389
80	9		(S X02)・1層	須恵器	杯	「千」	底部外面	—		21
81	9		灰黃褐色土層	須恵器	杯	「夫」	底部内面	—		367
82	9		S D315・2層	須恵器	杯	「須」カ	底部内面	正位カ		98
83	9		S D315・1層	須恵器	甕	「新」、「口」	体部内面	—	筆慣らしか	84
84	9		S D278・2層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	記号カ	39
85	9		S D277・2層	須恵器	杯	「口」	体部外面	不明		38
86	9		S D315・3層	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位カ		108
87	9		第I層	土師器	杯	「口」	体部外面	不明		130
88	9		S D315・2層	須恵器	杯	「官」カ「宮」	底部外面	—		100
89	9		整地層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	「秋」の禾編カ	359
90	9		整地層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	「秋」の禾編カ	350
91	9		S D314・I層	須恵器	杯	「長」	底部外面	—		61
92	9		整地層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	「秋」のつくりカ	544
93	9		S D314・2層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	「秋」の禾編カ	124
94	9		S D310・I層	土師器	杯カ	「口」	体部外面	不明		58
95	9		整地層	須恵器	杯	「中」	体部外面	正位		491
96	9		整地層	土師器	杯カ	「口」	体部外面	正位カ		509
97	9		S D314・I層	土師器	杯カ	「志」カ	体部外面	正位		60
98	9		S D315・2層	須恵器	杯	「田」	底部外面	—		97
99	24	57	第I層	須恵器	杯	「田」	体部外面	正位	三画目筆削れ	56
100	24	58	S D935	土師器	杯	「井」	体部外面	正位	A期以降	73
101	24	55	S D945・I層	須恵器	杯	「井本」	体部外面	正位		52
102	24	60	検出面	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位		1131
103	24	55	S D945・I層	須恵器	杯	「福」	体部外面	側位		64
104	24	51	S D1015・2層	須恵器	杯	「井」	体部外面	正位		1599
105	24	51	P.16柱穴	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位カ		1600
106	24	51	P.13抜き取り穴	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		1416
107	24	55	S D945・I層	須恵器	杯	「十」カ	体部外面	正位		69

表14 市川橋遺跡高平地区出土墨書き土器一覧(2)

番号	次数	区	遺構・層位	種別	器種	訛文	記載部位	記載方向	備考	登録
108	24	58	S D935	土師器	杯	「千」カ	体部外面	側位	(b)期以降	698
109	24	51	S D1015・3層	土師器	杯	「大」	底部外面	—		1417
110	24	51	S D1015・1層	土師器	甕	「口」	体部外面	正位カ	人面墨書き	1418
111	24	59	S D1055・2層	土師器	杯	「王」	底部外面	—	刻書	76
112	24	51	黒色土	土師器	杯	「厥」	底部外面	—	刻書	75
113	25	14	SE948・3層	須恵器	杯	「口上酒坏」	底部外面	—	「口」は「礎」カ	60
114	25	14	S D943・1層	須恵器	杯	「木」	底部外面	—	篆書体	280
115	25	14	S D943・2層	須恵器	杯	「口」	体部外面	正位		375
116	25	14	S D935A・2層	須恵器	杯	「手」	体部外面	側位		512
117	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「石」カ	体部外面	正位		65
118	25	14	S D935A・1層	土師器	杯	「十」	体部外面	横位カ		66
119	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	不明		543
120	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「亥」カ	体部外面	側位		55
121	25	14	S D935A・1層	須恵器	高台付杯	「真」カ	底部外面	—		273
122	25	14	S D935A・2層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		267
123	25	14	S D935A・2層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		510
124	25	14	S D935A・1層	土師器	杯	「口」	底部外面	—		1846
125	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		279
126	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		275
127	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		544
128	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「太」、「太」	体部外面	側位	合わせ文字	62
129	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「手」	底部外面	—		61
130	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「大」	底部外面	—		68
131	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「〇」	底部外面	—	記号カ	573
132	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—	記号カ	70
133	25	14	S D935A・2層	須恵器	杯	「刀」	底部外面	—		63
134	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「十」	体部外面	正位	漆書き	72
135	25	14	S D935A・1層	土師器	杯	「口」	体部外面	正位カ		276
136	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	横位カ		282
137	25	14	S D935A・1層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		277
138	25	14	S D945A・1層	須恵器	杯	「」	体部外面	正位カ		1845
139	25	14	S D945A・1層	須恵器	杯	「」	底部外面	—		71
140	25	14	S D949・2層	須恵器	杯	「守」	底部外面	—		263
141	25	14	S D945A・1層	須恵器	杯	「入」カ	体部外面	正位		377
142	25	14	S D945A・2層	須恵器	杯	「口」	体部外面	不明		268
143	25	14	S D945B・2層	土師器	杯	「上」カ	底部外面	—		1736
144	25	14	S D945A・2層	須恵器	杯	「口」	底部外面	—		271
145	25	14	S D945A・2層	土師器	杯	「口」	体部外面	正位カ		278
146	25	14	S D945A・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	不明	144と類似	272
147	25	14	S D944・1層	須恵器	杯	「秦」	底部外面	—		53
148	25	14	攢乱	須恵器	杯	「口」	体部外面	不明		372
149	24	14	第I層	須恵器	杯	「吉」	底部外面	—		58
150	25	14	表面採集	須恵器	杯	「山」	底部外面	—	篆書体	59
151	25	14	S D951・2層	須恵器	杯	「礎上」	体部外面	横位		57
152	25	14	第I層	土師器	杯	「口」	体部外面	不明		347
153	24	14	第II層	須恵器	杯	「戊」	体部外面	正位		267
154	24	14	第I層	須恵器	杯	「蜀」カ	体部外面	—		374
155	25	14	第I層	須恵器	杯	「木」	体部外面	—	篆書体	54
156	25	14	S D945A・2層	須恵器	杯	「白」	体部外面	正位		261
157	24	14	第II層	土師器	杯	「十」カ	体部外面	正位	漆書き	74
158	25	49	S D945B・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	—		266
159	25	14	S D945B・1層	須恵器	杯	「口」	体部外面	—		1173
160	25	14	第I層	須恵器	杯	「大」	体部外面	正位		265

表15 市川橋遺跡高平地区出土墨書き土器一覧(3)



第182図 磐吾土器の出土地点

参考文献

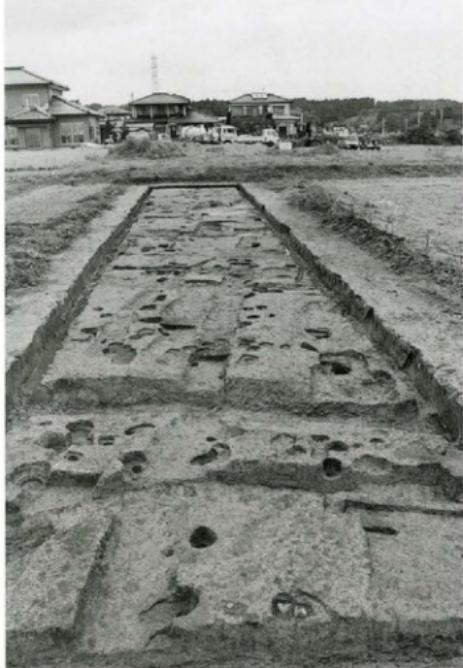
- 秋田市教育委員会『昭和50年度秋田城跡発掘調査概報』 1976
秋田市教育委員会『平成元年度秋田城跡発掘調査概報』 1990
船田孝司「忌の竈と王權」『考古学研究』第25巻第1号 1978
大野左千夫「有溝土鍤について」『古代学研究』86号 1978
小田原昭嗣「草戸千軒町遺跡出土の円板状土製品」『草戸千軒町No.142』 1985
兼康保明「中・近世の小型円板とその用途」『考古学叢考 中巻』 1988
鬼頭清明「墨書き土器の一考察」門脇貞二編『日本古代国家の展開。(下) 惠文閣出版 1995
京都大学文学部国語学国文学研究室『諸本集成優名類抄』臨川書店 1968
小林博昭「バイボーラーテクニックについて」『考古学ジャーナル』No.78 P 8-13 1973
佐々木常人「鎮兵小考」『東北歴史資料館 研究紀要』II 東北歴史資料館 1985
佐藤宗源「律令的地方支配機構の変質」『平安前期政治史序説』東大出版会 1977
下津間康夫「土製品」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書I - 北部地域北半部の調査』1993
下津間康夫「土製品」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書II - 北部地域南半部の調査』1994
瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内地方出土土器調査報告書(1)』1992
瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内地方出土土器調査報告書(II)』1993
瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第7号』1994
多賀城市教育委員会「高崎・市川橋遺跡-昭和56年度発掘調査報告書一」多賀城市文化財調査報告書第3集 1982
多賀城市教育委員会「市川橋遺跡-昭和61年度発掘調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第13集 1986
多賀城市埋蔵文化財調査センター「市川橋遺跡-平成元年度発掘調査報告書一」多賀城市文化財調査報告書第21集 1990
多賀城市埋蔵文化財調査センター「市川橋遺跡-平成元年度発掘調査報告書一」多賀城市文化財調査報告書第24集 1990
多賀城市教育委員会「市川橋遺跡-第23・24次調査報告書一」多賀城市文化財調査報告書第55集 1999
多賀城市教育委員会「市川橋遺跡-城南土地区画整理事業に伴う発掘調査略報書」多賀城市文化財調査報告書第57集 1999
多賀城市「多賀城廢寺跡」「多賀城市史 第4巻 考古資料」1991
千葉季亦・菅原弘樹「多賀城周辺遺跡の様相(城外の道路と方格地割・方格地割と遺跡の性格)」『第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料 シンポジウム 古代地方都市の成立とその様相-多賀城外の方格地割りについて-』1994
篠町教育委員会「伊治城跡-平成11年度: 第26次発掘調査報告書」篠町文化財調査報告書第13集 2000
津野 仁「地方官衙跡の出土の墨書き土器-所管名墨書き土器からみた土器の供給・管理・消費をめぐって-」『古代』89 1990
寺崎保広「陸奥・出羽の貢進物」渡辺信夫編『宮城の研究』2 清文堂 1983
原 秀三郎「土器に書かれた文字」岸井男編『日本の古代 第14巻 言葉と文字』中央公論社 1988
平川 南「陸奥・出羽官衙財政について-いわゆる「征夷」との関連を中心として-」『歴史』48 東北史学会 1976
平川 南「「崩」墨書き土器」『山梨県史研究』創刊号 山梨県教育庁学術文化課 1993
平川 南「古代地方都市論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集 1999
松本秀明「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」日本地理学会『地理学評論』Vol.54 No.2 1981
宮城県多賀城跡調査研究所「第22次調査」『多賀城跡調査研究所年報1973』1974
宮城県多賀城跡調査研究所「第36次調査」『第37次調査』『多賀城跡調査研究所年報1980』1981
宮城県多賀城跡調査研究所「第36次調査」『多賀城跡調査研究所年報1981』1982
宮城県多賀城跡調査研究所「第41次調査」「第42次調査」『多賀城跡調査研究所年報1982』1983
宮城県多賀城跡調査研究所「第43次調査」「多賀城跡調査研究所年報1983』1984
宮城県多賀城跡調査研究所「第50次調査」「多賀城跡調査研究所年報1991」1992
宮城県多賀城跡調査研究所「第61次調査」「多賀城跡調査研究所年報1991」1992
宮城県多賀城跡調査研究所「第58・60次調査資料の追加報告」『多賀城跡調査研究所年報1993』1994
宮城県多賀城跡調査研究所「第65次調査」「多賀城跡調査研究所年報1994』1995
宮城県多賀城跡調査研究所「第66次調査」「多賀城跡調査研究所年報1995』1996
宮城県多賀城跡調査研究所「第67次調査」「多賀城跡調査研究所年報1996』1997
宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡 政庁跡 本文編」1982
宮城県教育委員会「山王遺跡仙塙道路建設関係遺跡八幡地区調査概報」宮城県文化財調査報告書第138集 1990
宮城県教育委員会「山王遺跡 八幡地区的調査-県道泉塙釜線関連調査報告書I」宮城県文化財調査報告書第162集 1994
宮城県教育委員会「山王遺跡III 仙塙道路建設関係遺跡発掘調査報告書 多賀前地区遺物編」宮城県文化財調査報告書第170集 1996
宮城県教育委員会「山王遺跡IV 多賀前地区考察編」宮城県文化財調査報告書第171集 1996
宮城県教育委員会「山王遺跡V 第1分冊(八幡地区)」宮城県文化財調査報告書第174集 1997
宮城県教育委員会「山王遺跡V 第2分冊(伏石地区・考察)」宮城県文化財調査報告書第174集 1997
吉田 孝「トコロ覚書」青木和夫先生還暦記念会編『日本古代の政治と文化』1987



市川橋遺跡航空写真

B區航空影真





B13(N)区

上左：調査区全景（南より）
上右：SK969・1036・1037（北より）
中： SK1036・1037
下： SK983



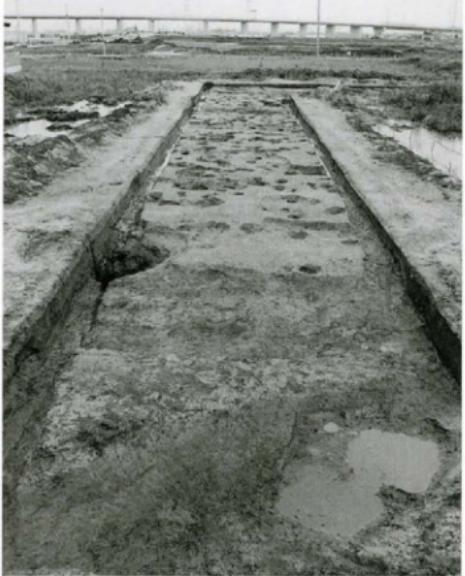
B13(S)区

上左：調査区全景（南より）

上右：遺構検出状況（南より）

中： S X1205検出状況

下： S X1263須恵系土器高台付皿出土状況



B14(Ⅲ)区

上左：調査区全景（東より）

上右：遺構検出状況（西より）

中： S E948土層堆積状況

下： S D945A・B



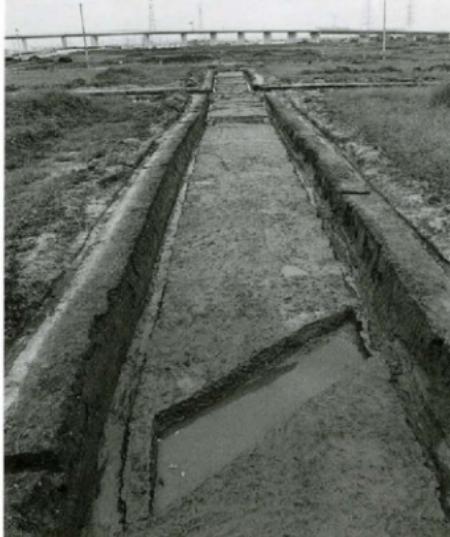


B14(南)区

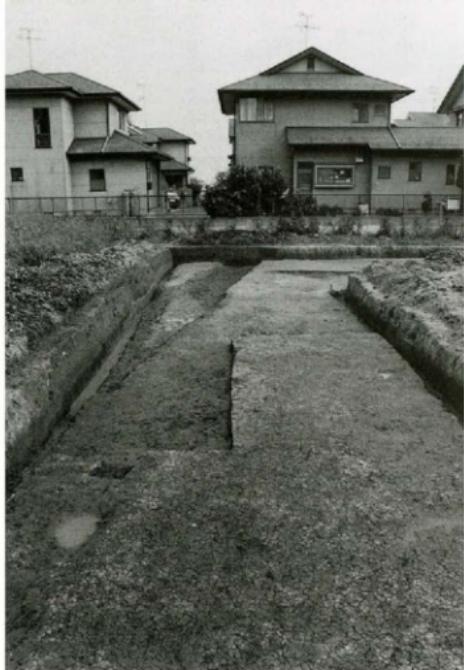
上： S D949 (南より)

下左： S D935A・B・C・D (南より)

下右： S D943枕列 (南より)



上左：B49区 調査区全景（西より）
上右：B49区 S D1052（東より）
下： B63区 調査区全景（東より）

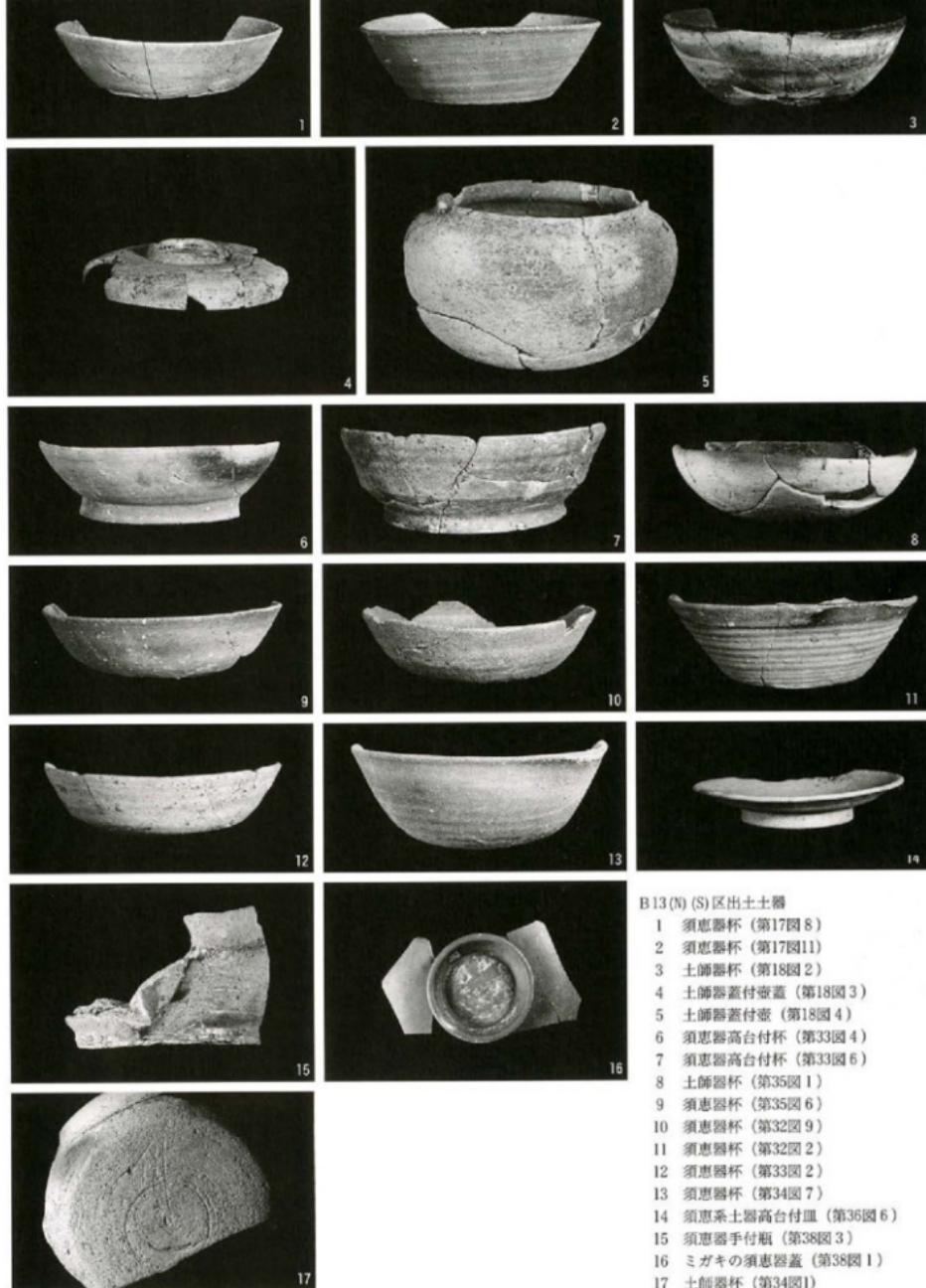


上左：B15区 SD1050・1051検出状況（南より）

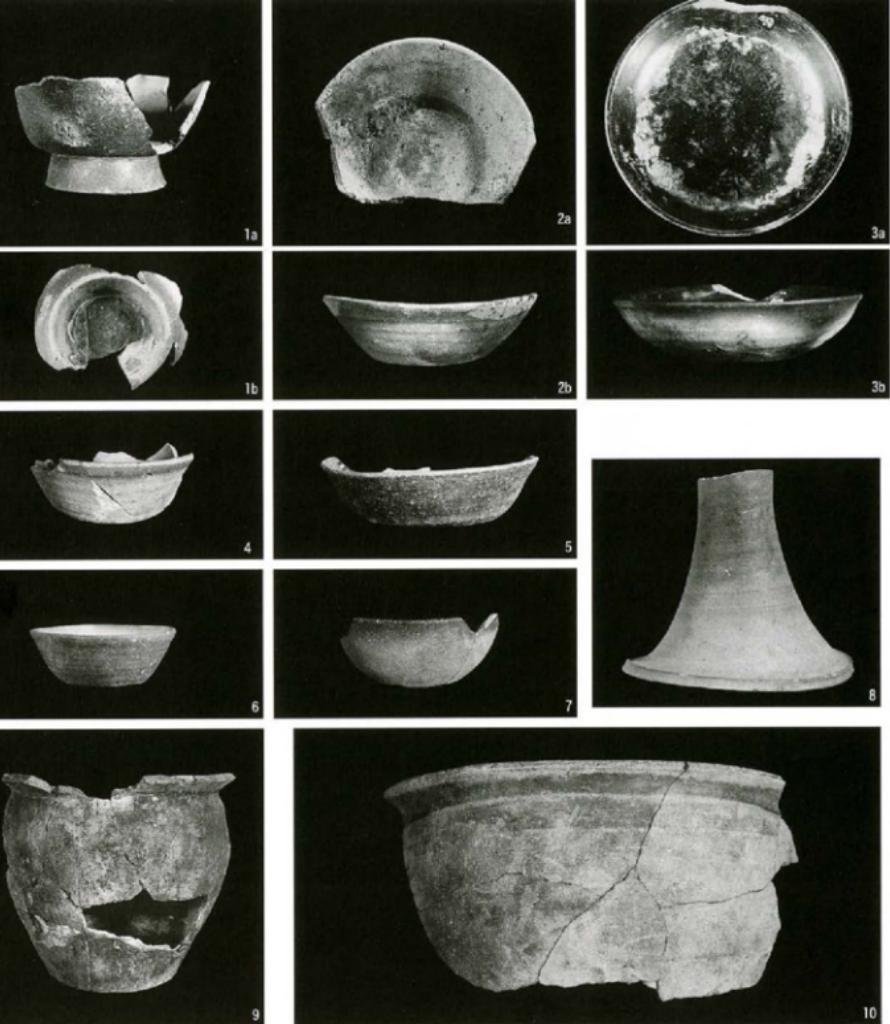
上右：B15区 調査区全景

下左：B14(E)区 調査区全景（西より）

下右：B15区 SD1050田下駄出土状況

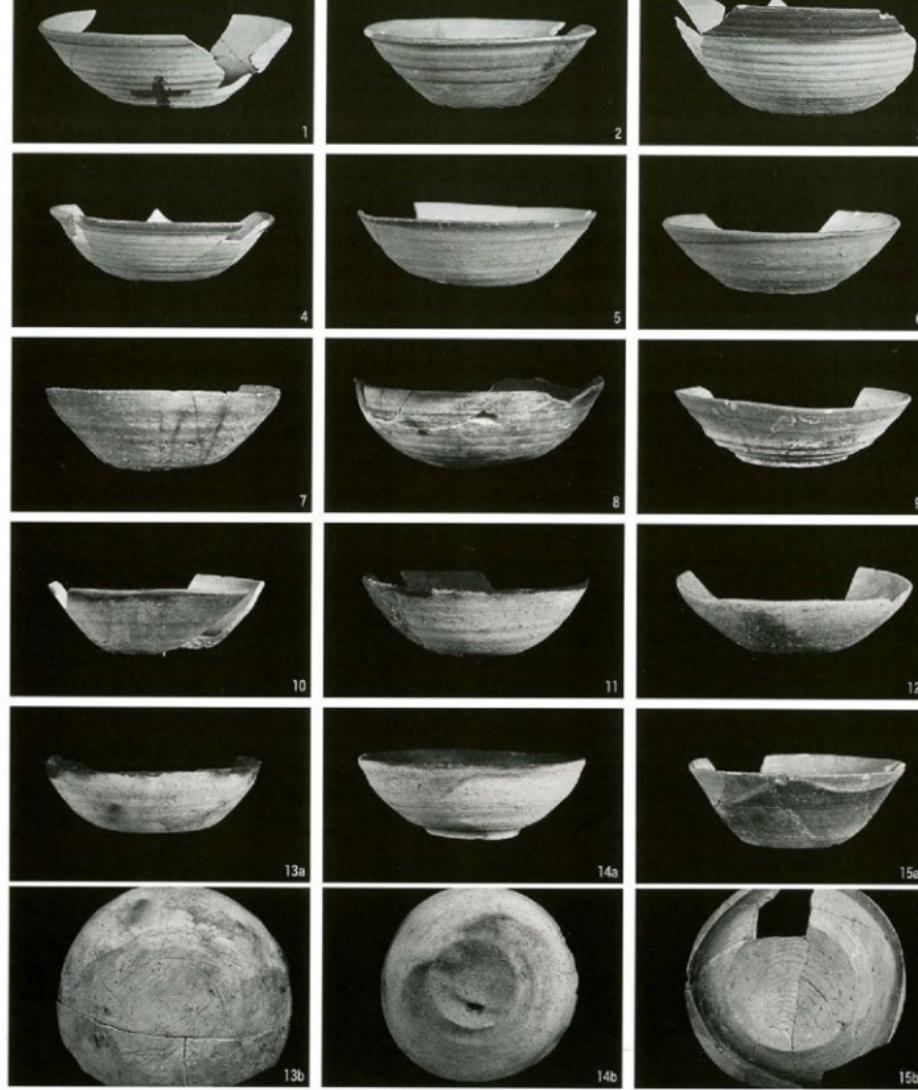


- B13(N) (S)区出土土器
- 1 須恵器杯 (第17図8)
 - 2 須恵器杯 (第17図11)
 - 3 土師器杯 (第18図2)
 - 4 土師器蓋付壺 (第18図4)
 - 5 土師器蓋付壺 (第18図4)
 - 6 須恵器高台付杯 (第33図4)
 - 7 須恵器高台付杯 (第33図6)
 - 8 土師器杯 (第35図1)
 - 9 須恵器杯 (第35図6)
 - 10 須恵器杯 (第32図9)
 - 11 須恵器杯 (第32図2)
 - 12 須恵器杯 (第33図2)
 - 13 須恵器杯 (第34図7)
 - 14 須恵系土器高台付皿 (第36図6)
 - 15 須恵器手付瓶 (第38図3)
 - 16 ミガキの須恵器蓋 (第38図1)
 - 17 土師器杯 (第34図1)



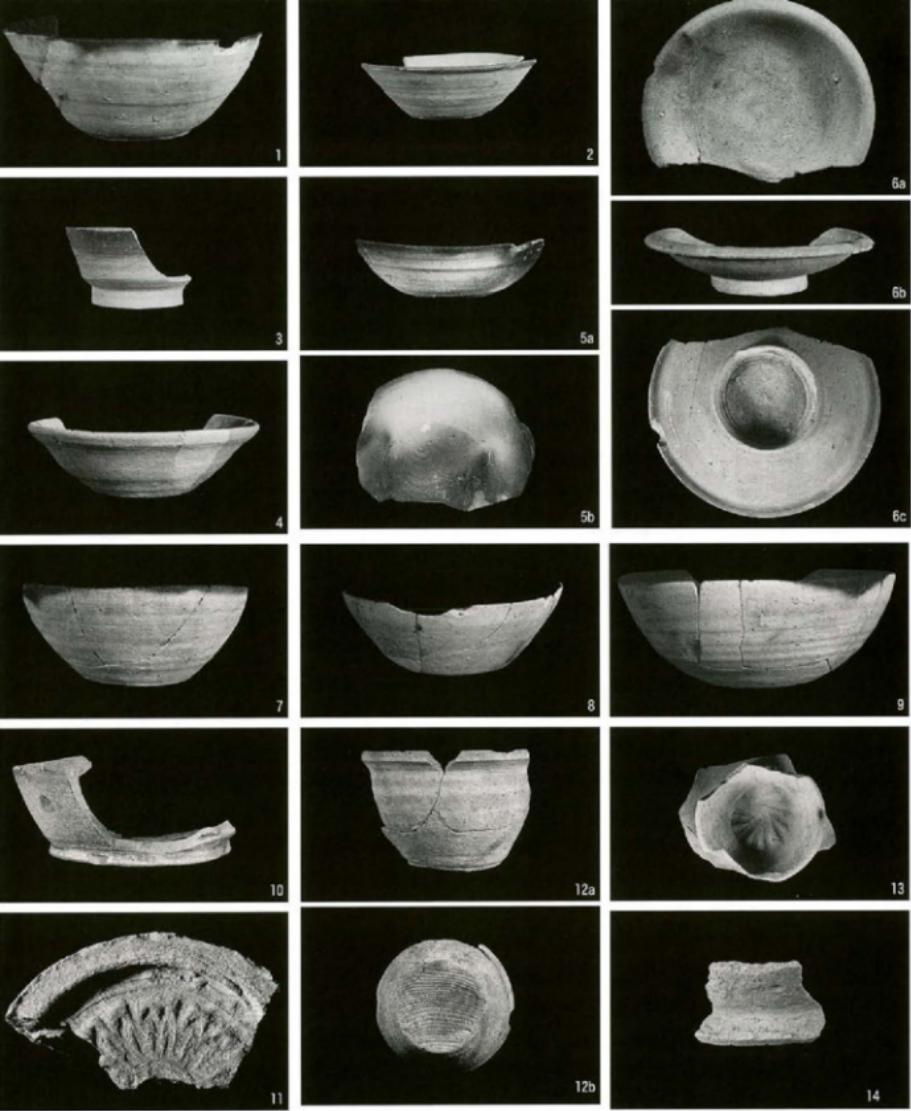
B14(Ⅱ)区出土遺物(1)

- 1 須恵器双耳杯・軒用鏡(第44図1)
- 2 須恵器杯(第43図4)
- 3 土師器杯(第43図1)
- 4 須恵器杯(第43図10)
- 5 須恵器杯(第43図5)
- 6 須恵器杯(第43図9)
- 7 須恵器杯(第44図2)
- 8 須恵器高杯(第44図6)
- 9 土師器甕(第44図4)
- 10 須恵器甕(第44図7)



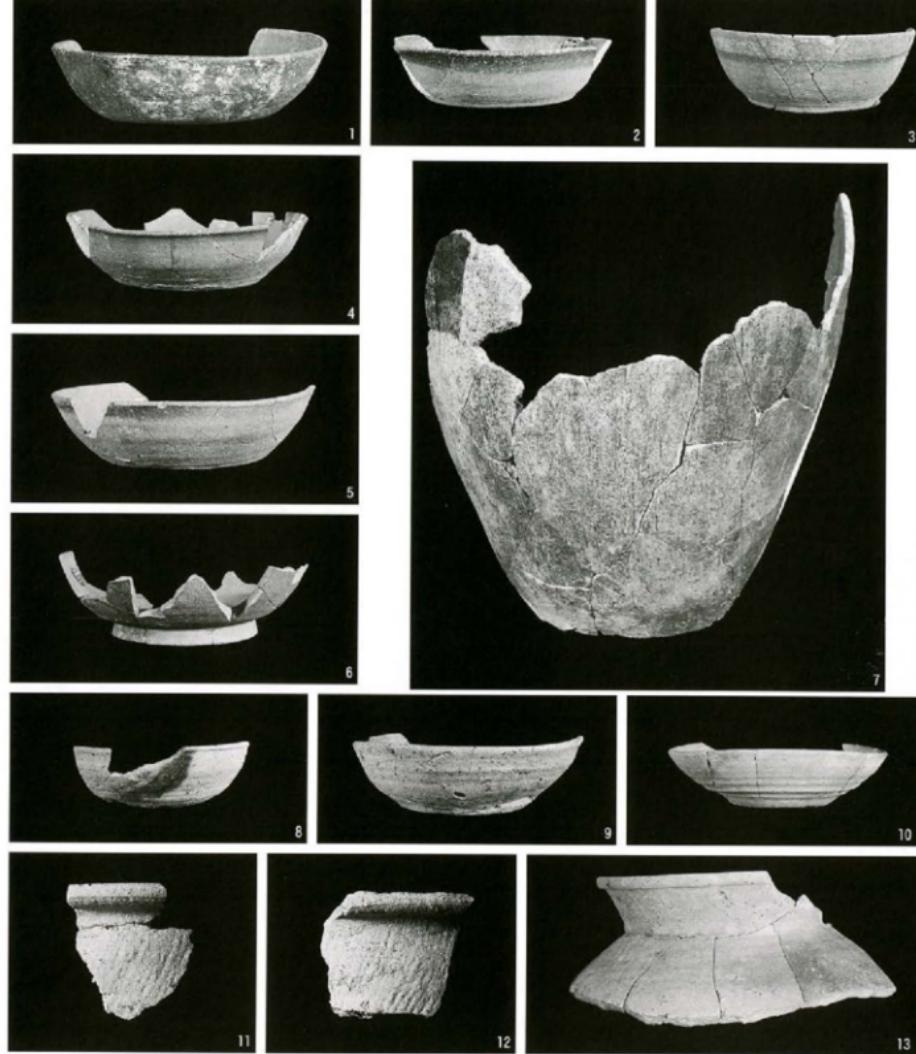
B14(西)区出土遗物②

- 1 须惠器杯 (第55图7)
- 2 须惠器杯 (第58图5)
- 3 须惠器杯 (第55图11)
- 4 须惠器杯 (第55图6)
- 5 须惠器杯 (第54图1)
- 6 须惠器杯 (第55图8)
- 7 须惠器杯 (第54图9)
- 8 土师器杯 (第52图9)
- 9 须惠器杯 (第55图4)
- 10 须惠器杯 (第55图5)
- 11 土师器杯 (第52图2)
- 12 须惠器杯 (第55图2)
- 13 土师器杯 (第52图4)
- 14 土师器杯 (第53图4)
- 15 须惠器杯 (第55图1)



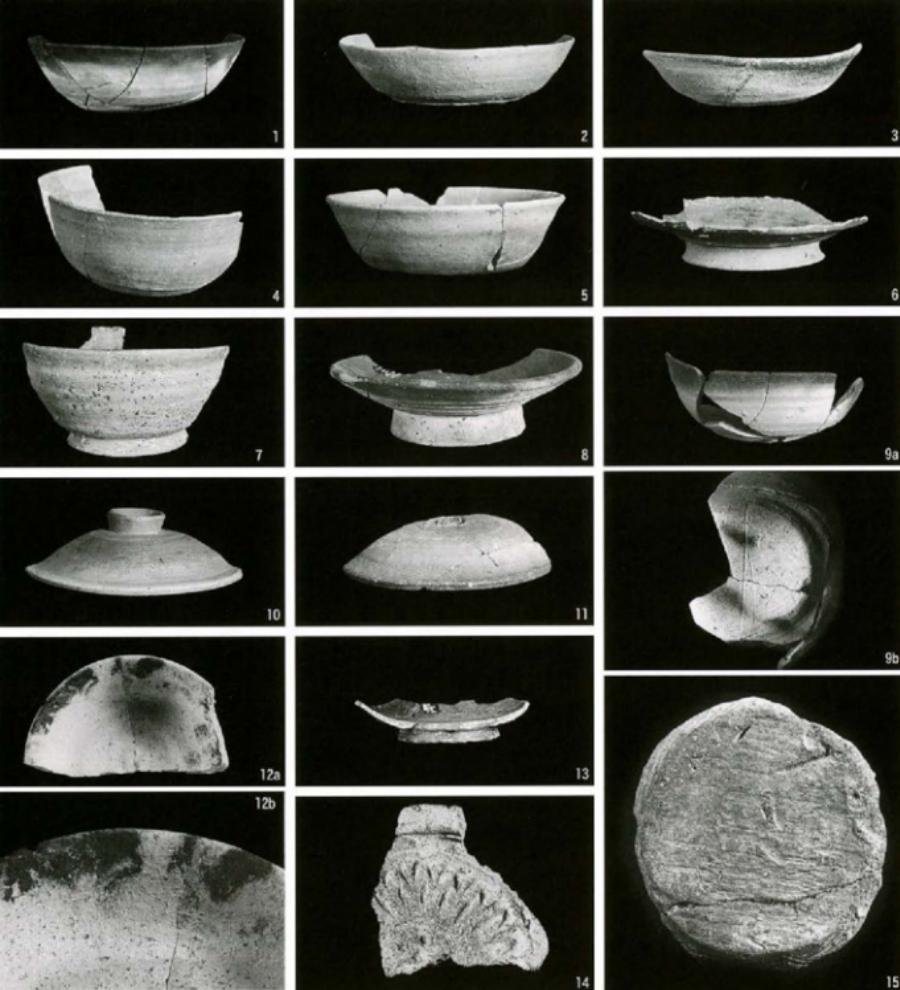
B I4 (W) 区出土遺物②

- 1 土師器杯 (第53図3)
- 2 須恵器杯 (第55図3)
- 3 須恵器高台付杯 (第54図12)
- 4 須恵器杯 (第59図6)
- 5 土師器杯 (第53図1)
- 6 須恵器高台付杯 (第56図1)
- 7 土師器杯 (第59図3)
- 8 土師器杯 (第59図5)
- 9 土師器杯 (第59図2)
- 10 須恵器平瓶 (第56図8)
- 11 軒丸瓦 (第56図11)
- 12 土師器甕 (第57図2)
- 13 土師器高台付杯 (第53図9)
- 14 土師器甕 (第59図12)



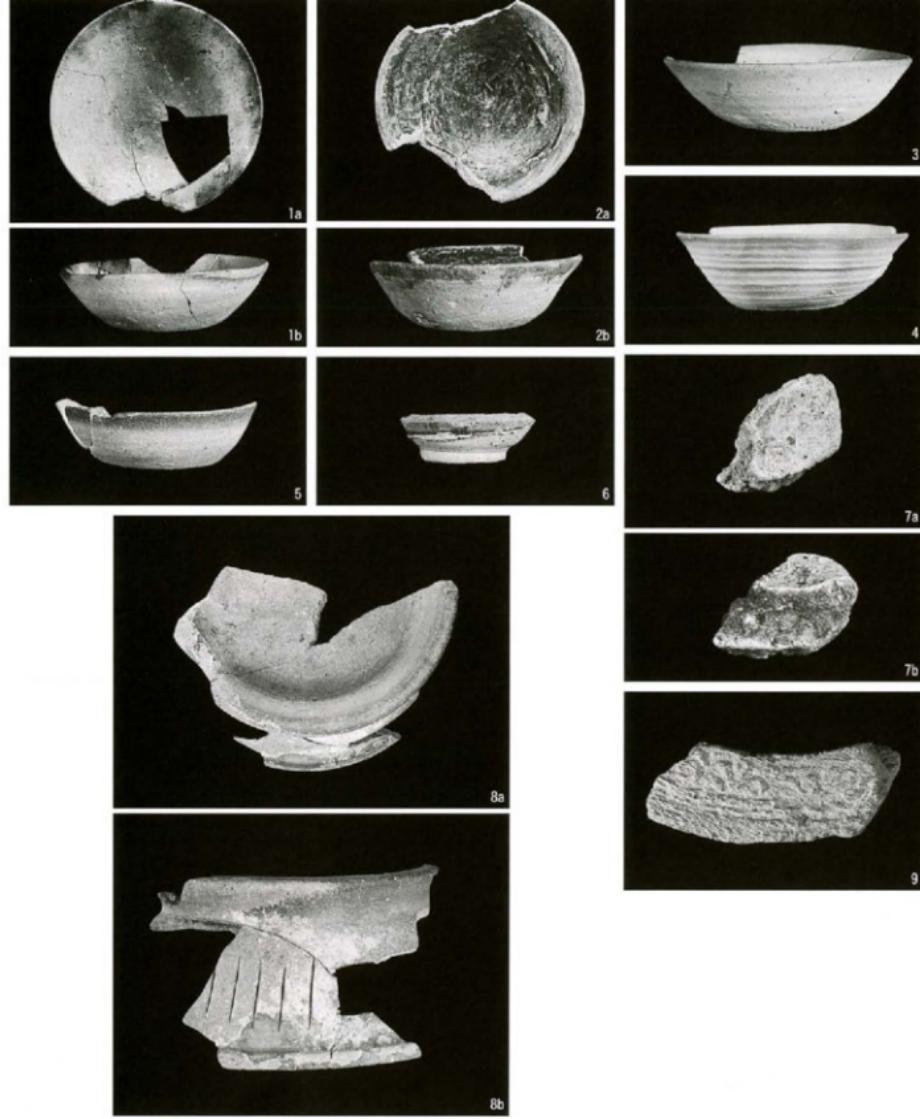
B14(Ⅲ) 出土遺物(4)

- 1 須恵器杯 (第77図9)
- 2 須恵器杯 (第78図2)
- 3 須恵器杯 (第77図3)
- 4 須恵器杯 (第77図4)
- 5 須恵器杯 (第78図3)
- 6 須恵器高台付杯 (第78図5)
- 7 土師器壺 (第79図6)
- 8 須恵器杯 (第86図5)
- 9 須恵器杯 (第86図11)
- 10 須恵器杯 (第86図2)
- 11 土師器壺 (第88図2)
- 12 土師器壺 (第88図3)
- 13 須恵器壺 (第85図3)



B14(W)区出土遺物⑤

- 1 土師器杯（第97図5）
- 2 須恵器杯（第96図5）
- 3 須恵器杯（B14(W)第I層）
- 4 須恵器杯（B14(W)第I層）
- 5 須恵器杯（B14(W)第II層）
- 6 須恵器接柄・転用硯（第109図7）
- 7 須恵器高台付杯（第71図10）
- 8 土師器高台付硯（B14(W)第II層）
- 9 土師器杯（第98図4）
- 10 須恵器蓋（R18）
- 11 須恵器蓋（B14(W)第II層）
- 12 須恵器杯・油煙付着（B14(W)第I層）
- 13 土師器高台付杯（第97図3）
- 14 穀丸瓦（第96図10）
- 15 土師器甕・ムシロ状圧痕（B14(W)第II層）
- 16 土師器甕・ムシロ状圧痕（第98図8）



B14(W)区出土遺物⑤

- 1 須恵器杯・油煙付着 (第48図6)
- 2 須恵器杯・漆付着 (第48図4)
- 3 須恵器杯 (第48図1)
- 4 須恵器杯 (第62図4)
- 5 須恵器杯 (第64図2)
- 6 須恵器瓶 (第65図2)
- 7 増輪 (第65図4)
- 8 円面鏡 (第95図12)
- 9 軒平瓦 (第67図3)



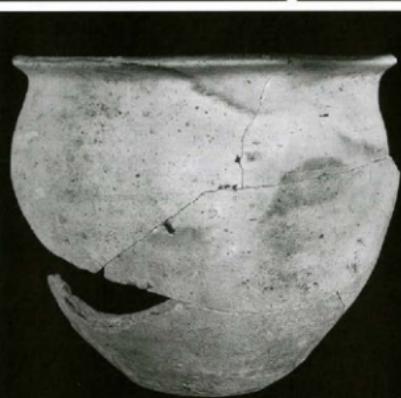
1



2



3



4



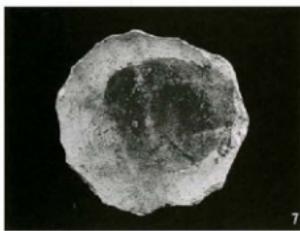
5a



5b



6a



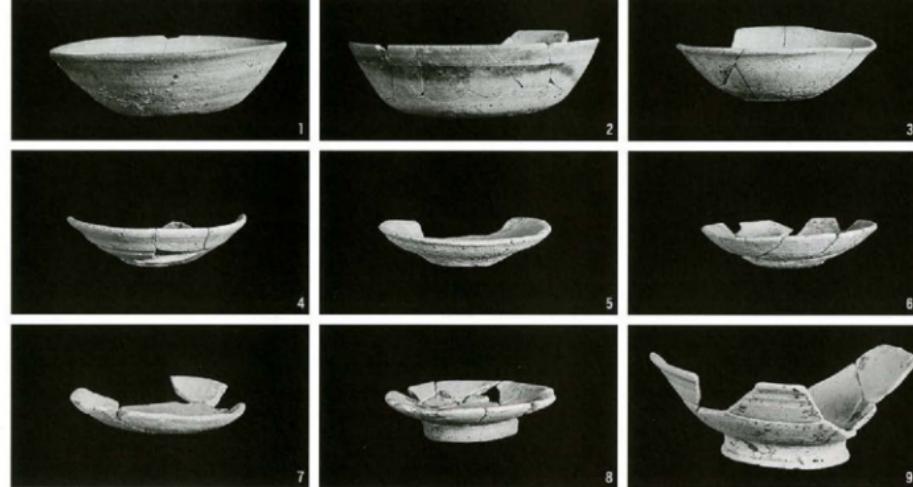
7



6b

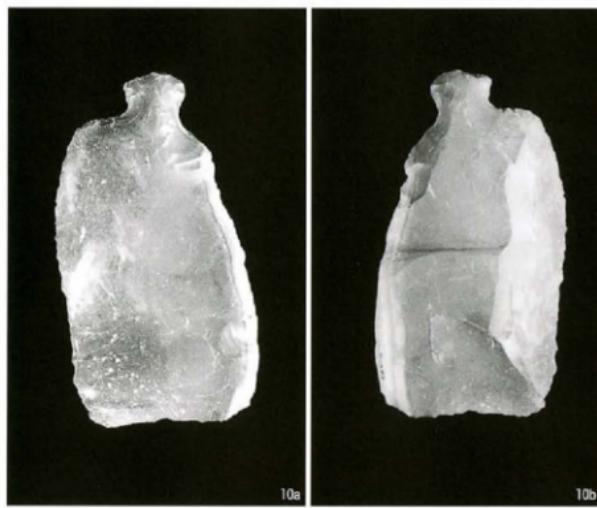
B14(W)出土遺物(7)

- 1 土師器杯 (第73図1)
- 2 須恵器杯 (第71図5)
- 3 須恵器双耳杯 (B14(W)第II層)
- 4 土師器甕 (第73図9)
- 5 土師器杯 (第95図2)
- 6 製塙土器 (上段左より第104図2・1・3
下段左より第104図7・5・4)
- 7 転用甌 (第71図4 R101)



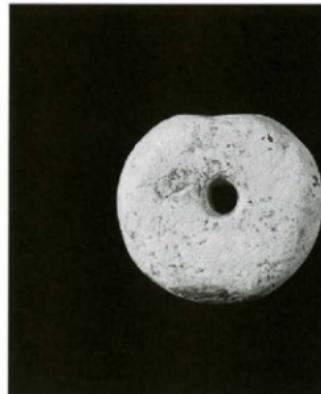
图版17 B49-63区出土遗物

- 1 須恵器杯（第125図1）
- 2 須恵器杯（第126図3）
- 3 須恵系土器杯（第125図3）
- 4 須恵系土器小型杯（第129図8）
- 5 須恵系土器小型杯（第129図3）
- 6 須恵系土器小型杯（第129図6）
- 7 須恵系土器小型杯（第129図1）
- 8 須恵系土器高台付杯（第129図9）
- 9 須恵系土器高台付杯（第129図15）
- 10 石匙（第181図1）
- 11 紗錐車（第181図4）

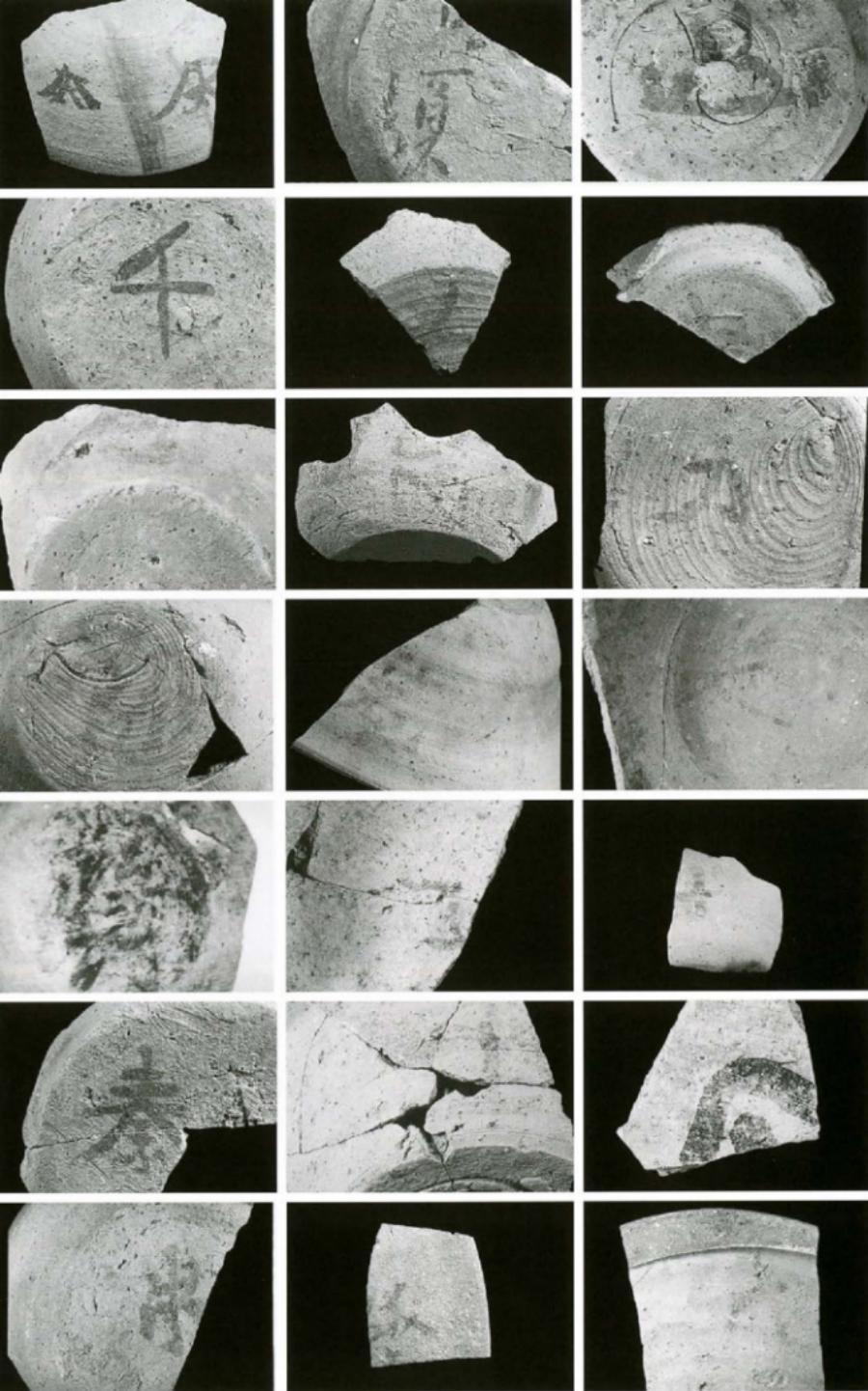


图版18 墓書土器

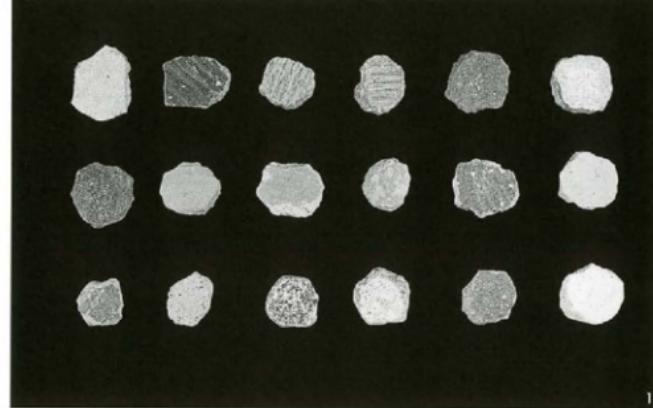
- | | | |
|--------|---------|--------|
| 第54図5 | 第43図7 | 第98図12 |
| 第54図7 | 第56図3 | 第54図13 |
| 第54図11 | S D945A | 第59図10 |
| 第58図5 | 第58図2 | 第58図4 |
| 第70図5 | 第70図4 | 第70図10 |
| 第95図4 | | 第70図6 |
| 第98図2 | 第95図7 | 第98図1 |



图版19



図版18



円板状土製品

上段左より 第143図52 53 61 62 63 65

中段左より 第143図66 71 第144図72 73 75 77

下段左より 第144図79 80 81 82 85 90

拡大：R1528第144図73

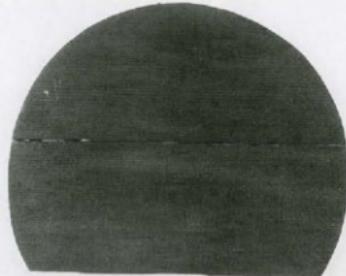
土鍤

上段左より 第101図6 11 2 3 4 1

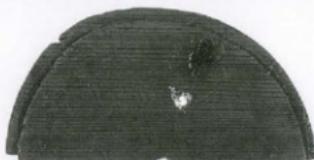
中段左より 第102図7 3 9 10 第101図9 5

下段左より 第101図8 10 第102図6 8 4 5

拡大（上）：第102図8 （下）：第101図3



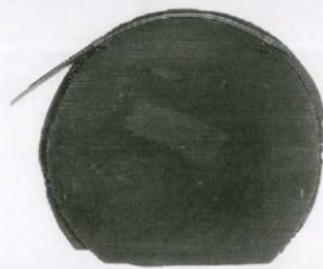
1



2



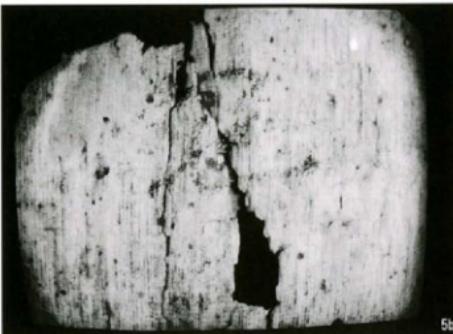
3



4



5a



5b

木製品(1)

- 1 曲物底板 (第46図1)
- 2 曲物蓋板 (第45図2)
- 3 曲物蓋板 (第72図5)
- 4 曲物蓋板 (第45図1)
- 5 挽物皿・墨書「宅」(B14(W) S D935A)



1a



1b



2a



2b



3



4



5

木製品②

- 1 挽物皿（第177図3）
- 2 挽物高台付皿（第60図1）
- 3 挽物皿（第72図2）
- 4 挽物皿（第177図1）
- 5 挽物皿（B51区S B1010A）



1



2



3



4



5



6

木製品③

- 1 馬形（第III図1）
- 2 馬形（第III図3）
- 3 馬形（第III図2）
- 4 横櫛（第158図3）
- 5 刀子形（第177図5）
- 6 田下駄（第III図4）

附章3

多賀城市市川橋遺跡

（第二十四・二十五次）出土木簡

國立歴史民俗博物館

平川

南

第5号木簡

二 内容

「黒春」は「黒春米」の略で、初から黒米（玄米）に春いたものを意味すると考えられ、通常は黒米と表記されている。本木簡は黒春米五斗॥一俵に付けたものである。

なお、「黒春米」の例としては、多賀城跡第六〇次（大畠地区）調査の井戸SE一二〇一出土の次の木簡が知られている。

・「黒春米一斗

〔維力〕

・「二月十六日丈マ子」

〔木簡研究 第一四号 一九九一年〕

一 形状

一一六×一三三×五

□□□人部□人□

・「

天長六年二月六日

・「

天長六年二月六日

・「

材の上部の左右に切り込みを入れ、頭部をやや圭頭状にしている。才モテ面はほとんど墨痕が失われている。才

二 内容

貢進物荷札と考えられる。「天長六年」は八二九年。おそらくは才モテに貢進者と物品名などを記し、裏面に年月日と貢進責任者名が記されていたと推測される。

第六号木簡

- ・「五斗黒春」
- ・「七月廿八日」
- 一一四×一四×七×一〇
- 一 形状
- 材の上部の左右に切り込みを入れ、頭部をやや圭頭状にしている。

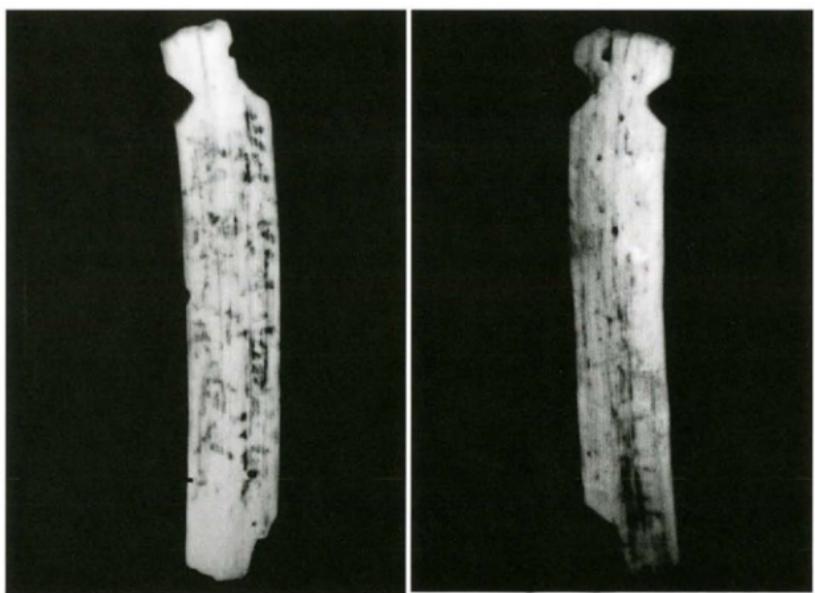


第1図 第5号木簡実測図

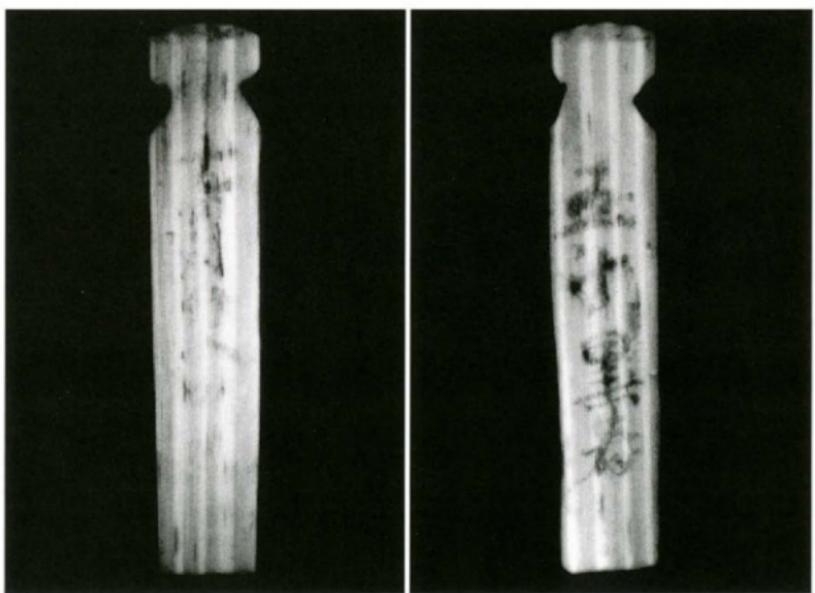


第2図 第6号木簡実測図

第5号木簡



第6号木簡



報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき							
書名	市川橋遺跡							
副書名	城南地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第60集							
編著者名	千葉孝弥・石川俊英・鈴木孝行・武田健市・菊池豊・車田敦・堀口和代・相澤正信・生田和宏 平川南							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134							
発行年月日	西暦2001年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
市川橋遺跡	多賀城市浮島字高平	市町村	遺跡番号	37度 17分 35秒	140度 59分 50秒	19980422 ～19981030	2,650m ²	土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市川橋遺跡	古代都市	奈良・平安時代	掘立柱建物 竪穴住居 溝 土壤	土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、綠釉陶器、製埴土器、龜形土器、土鍤、土器片製円板、鉄斧、鉄鉗、木製品			城外の幹線道路に面した区画を調査した	

多賀城市文化財調査報告書第60集

市川橋遺跡

城南地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ

平成13年3月26日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁目の目西町4-5

電話 (022) 288-6123